兵庫県文化財調査報告　第303冊

丹波市所在

横田遺跡・横田北古墳群

発掘調査報告書

２００６年３月

兵庫県教育委員会

丹波市所在

横田遺跡・横田北古墳群
発掘調査報告書

２００６年３月

兵庫県教育委員会

横田遺跡遠景（西から　平成10年12月17日撮影）

氷上市街地から加古川上流部を望む（平成11年７月14日撮影）
中央山地左側の谷が加古川上流部　同右側の谷は水分かれを経て由良川水系に至る

平成10年度調査区（西から　平成11年２月10日撮影）

平成11年度調査区（西から　平成11年10月15日撮影）

例　　言

1．本書は、兵庫県丹波市氷上町横田に所在する横田遺跡の本発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、一般国道483号北近畿自動車道（春日～和田山）建設事業に伴い、国土交通省近畿地方建設局の委託により兵庫県教育委員会が平成９（1997）年度～平成11（1999）年度にかけて実施した。また整理業務は同課の委託により、平成11（2001）年度～平成17（2005）年度にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

3．本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の久保弘幸、山本　誠、鐵　英記、阿部泰之、日野祥子、守岡克倫が担当した。また、分布調査・確認調査の担当者は本文中に記載している。

4．本発掘調査において、平成10年度は㈱ジオテクノ関西、平成11年度は㈱カイヤマグチに委託し、空中写真撮影を実施した。

5．本書の執筆は、久保・鐵がおこなった。

6．本書で示した標高は、東京湾平均海水準を用い、方位は国土座標Ⅴ系で示している。

7．本書で使用した地図は、兵庫県遺跡地図（兵庫県教育委員会　平成12年）に基づき国土地理院刊行の１／25,000「柏原」に加筆したものである。

8．本発掘調査および本書に関する図面、写真および出土遺物は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および兵庫県教育委員会魚住分館において保管している。

9．本発掘調査の期間および本書の執筆・編集にあたっては、下記の方々よりさまざまなご教示を頂戴した。記して謝意を表するものである（順不同）。
伊藤隆夫（京都大学）・青木哲哉（立命館大学）・國井和哉（丹波市教育委員会）・岡田章一（兵庫県教育委員会）・森内秀造（兵庫県教育委員会）・藤田　淳（兵庫県教育委員会）

本文目次

第1章　遺跡をめぐる環境
第1節　地理的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 2

第2章　調査の概要
第1節　調査に至る経緯 …… 4
第2節　発掘調査の概要 …… 4
1．確認調査
2．本発掘調査（1998年度（平成10年度））
(1)　調査の体制
(2)　調査の方法と成果の概要
3．本発掘調査（1999年度（平成11年度））
(1)　調査の体制
(2)　調査の方法と成果の概要
第3節　整理事業の概要 …… 6

第3章　横田遺跡の調査
第1節　調査区周辺の地形と調査区内の堆積物 …… 8
1．地形
2．調査区内の堆積物
第2節　遺構と遺物 …… 9
1．概要
2．竪穴住居跡
3．掘立柱建物跡
4．柵
5．土坑
6．溝
7．木棺墓
8．柱穴
9．その他の遺構
第3節　包含層・旧河道出土の遺物 …… 51
1．概要
2．扇状地斜面部包含層および低湿地部包含層出土の遺物
3．旧河道出土の遺物
4．低湿地・旧河道出土の自然遺物

第４章　横田北古墳群の調査
第１節　概要 …… 68
第２節　遺構と遺物 …… 68
１．１号墳
２．２号墳
３．３号墳
４．４号墳
５．６号墳
６．遊離遺物
第３節　その他の遺物 …… 72
第４節　小結 …… 73

第５章　自然科学的分析
第１節　横田遺跡とその周辺の地形環境（青木哲哉） …… 74
第２節　火山灰・土壌中花粉および出土種実の自然科学分析
（パリノ・サーヴェイ株式会社） …… 86
第３節　横田遺跡出土木材の樹種同定（伊藤隆夫） …… 96
第４節　横田遺跡における放射性炭素年代測定（(株) パレオ・ラボ） … 103

第６章　総括 …… 108

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 3
第３図　包含層・確認調査時出土の銅銭 …… 64
第４図　氷上盆地南半部の地形分類図 …… 75
第５図　調査地区付近の微地形分類図 …… 77
第６図　調査地区付近のボーリング資料とＡ－Ａ'地質断面図 …… 78
第７図　Ａ地区西部～中央部のＢ－Ｂ'地質断面図 …… 80
第８図　Ａ地区東部のＣ－Ｃ'地質断面図 …… 82
第９図　Ｂ地区西部のＤ－Ｄ'地質断面図 …… 83
第10図　Ｂ地区東部のＥ－Ｅ'地質断面図 …… 83
第11図　重鉱物組成および火山ガラス比 …… 87
第12図　火山ガラスの屈折率測定結果 …… 87
第13図　花粉化石群集の層位分布 …… 90
第14図　暦年代較正グラフ（１） …… 106
第15図　暦年代較正グラフ（２） …… 107

写　真　目　次

写真１　横田遺跡火山灰の重鉱物・火山ガラス …… 93
写真２　横田遺跡Ａ地区湿地部堆積物中の花粉 …… 94
写真３　横田遺跡Ａ地区湿地部出土の種実 …… 95
写真４　横田遺跡木製品組織顕微鏡写真（１）…… 101
写真５　横田遺跡木製品組織顕微鏡写真（２）…… 102

表　目　次

第１表　周辺の遺跡 …… 2
第２表　横田遺跡・横田北古墳群分布調査・確認調査一覧 …… 4
第３表　整理事業の工程 …… 7
第４表　重鉱物および火山ガラス比分析結果 …… 87
第５表　火山ガラスの屈折率 …… 87
第６表　花粉分析結果 …… 89
第７表　種実同定結果 …… 91
第８表　横田遺跡　樹種同定一覧表 …… 98
第９表　用材の傾向について …… 100
第10表　製品別の用材 …… 100
第11表　測定試料及び処理 …… 104
第12表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果 …… 105
第13表　掲載土器・土製品 …… 112
第14表　掲載木器・木製品 …… 137
第15表　掲載金属器 …… 138
第16表　掲載石器・石製品 …… 138

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版１　上　横田遺跡遠景（西から　平成10年12月17日撮影）
　　下　氷上市街地から加古川上流部を望む（平成11年７月14日撮影）
巻頭図版２　上　平成10年度調査区（西から　平成11年２月10日撮影）
　　下　平成11年度調査区（西から　平成11年10月15日撮影）

写真図版

写真図版１　上　平成10年度調査区（北から　平成10年12月17日撮影）
　　下　平成10年度調査区（南から　平成11年２月10日撮影）
写真図版２　上　平成11年度調査区（西から　平成11年７月14日撮影）
　　下　平成11年度調査区（西から　平成11年10月15日撮影）
写真図版３　上　平成11年度調査区（東から　平成11年10月15日撮影）
　　下　平成11年度調査区（東から　平成11年８月12日撮影）
写真図版４　横田遺跡（１）　上　Ａ地区全景（西から）
　　中　Ａ地区全景（北西から）
　　下　SH1001・1002（西から）
写真図版５　横田遺跡（２）　上　SH1005（西から）
　　中　SB1001～3（北から）
　　下　SB1004（北から）
写真図版６　横田遺跡（３）　左上　SH1001 断面
　　右上　SH1001 中央土坑断面
　　左中上　SH1003・1004付近
　　右中上　SH1005・SD1004・1003付近
　　左中下　SH1007付近
　　右中下　SH1007付近
　　左下　SB1005 断ち割り状況
　　右下　SB1005内P1211断面
写真図版７　横田遺跡（４）　上　SK1004
　　下　Ａ地区中央部（北から）
写真図版８　横田遺跡（５）　左上　SK1004　遺物出土状況
　　右上　SK1004　断面
　　左中上　SK1012
　　右中　SK1004　遺物出土状況
　　左中下　SD1004 あぜ1（南から）
　　下　SK1008　遺物出土状況
写真図版９　横田遺跡（６）　上　包含層　土器・木器だまり
　　中上　包含層　木鍬出土状況
　　中下　SD1014・1015土層断面
　　下　Ａ地区　断ち割り・トレンチ①北壁
写真図版10　横田遺跡（７）　上　Ｂ地区　南半（西から）
　　中　SH2001・2002付近（南から）
　　下　SH2008・2009・2010付近（南から）
写真図版11　横田遺跡（８）　上　Ｂ地区東半（北西から）
　　中　Ｂ地区東半・SH2007周辺（北西から）

下　B地区南半（北から）
写真図版12　横田遺跡（9）　上　SH2001・2002（北から）
中　SH2001（西から）
下　SH2002（西から）
写真図版13　横田遺跡（10）　上　SH2003（東から）
中　SH2004（西から）
下　SH2005（西から）
写真図版14　横田遺跡（11）　上　SH2008（西から）
中　SH2009（西から）
下　SH2010（西から）
写真図版15　横田遺跡（12）　左上　SH2001内P2214
右上　SH2002 中央土坑（SK2012）
左中上　SH2003 中央土坑（SK2013）
右中上　SH2004 中央土坑（SK2026）
中下　SH2005内SK2027
下　SH2005　壁土坑（SK2027）
写真図版16　横田遺跡（13）　上　SH2006 付近
左中上　SH2006 断面
右中　SH2008 中央土坑
左下　SH2010内SK2068
右下　SH2009・2区
写真図版17　横田遺跡（14）　上　SB2001・2003（南から）
中　SB2001（南から）
下　SB2003（南から）
写真図版18　横田遺跡（15）　上　SB2004（北から）
下　SA2002（西から）
写真図版19　横田遺跡（16）　左上　SK2045
右上　SK2045　断面
左中上　SK2047　遺物出土状況
右中上　SK2047　断面
左中下　SK2048
右中下　SK2053
左下　SK2055
右下　P2599
写真図版20　横田遺跡（17）　上　木棺墓　遺物出土状況（西から）
下　木棺墓　土器・鉄刀出土状況
写真図版21　横田遺跡（18）　上　SD2010～2013付近
左中　SD2027

右中　SD2026
左下　SD2028
右下　SD2030
写真図版22　横田遺跡（19）　上　あさねの森地区
下　調査風景
写真図版23　横田北古墳群（1）　上　横田北古墳群（南西から）
中　横田北古墳群（北東から）
下　横田北古墳群（北東から）
写真図版24　横田北古墳群（2）　左上　1号墳　堀切断面
右上　2号墳　主体部遺存状況
左中上　2号墳　堀切断面
左中下　4号墳　堀切断面
右中　6号墳　堀切断面
下　1号墳　調査状況
写真図版25　横田北古墳群（3）　上　3号墳　石棺蓋石検出状況（西から）
下　3号墳　全掘状況（西から）
写真図版26　横田北古墳群（4）　左上　3号墳　堀切断面
右上　3号墳　蓋石検出時
左中　3号墳　墓壙内　紡錘車出土状況
右中　3号墳　蓋石検出状況
左下　3号墳　蓋石検出状況
右下　3号墳　蓋石除去後
写真図版27　横田北古墳群（5）　上　3号墳　石棺全掘状況（南から）
下　3号墳　石棺材除去後（南から）
写真図版28　横田北古墳群（6）　上　3号墳　石棺内断面
中　3号墳　須恵器　枕
下　3号墳　墳丘断面
写真図版29　横田北古墳群（7）　左上　6号墳　検出時の状況
右上　6号墳　主体部検出状況
左中　6号墳　須恵器出土状況
右中　6号墳　須恵器出土状況
左下　6号墳　須恵器出土状況
右下　6号墳　墳丘全景（北から）
写真図版30　横田遺跡出土遺物（1）　竪穴住居跡出土土器（1）
写真図版31　横田遺跡出土遺物（2）　竪穴住居跡出土土器（2）
写真図版32　横田遺跡出土遺物（3）　竪穴住居跡出土土器（3）
写真図版33　横田遺跡出土遺物（4）　竪穴住居跡出土土器（4）
写真図版34　横田遺跡出土遺物（5）　掘立柱建物跡・土坑等出土土器（1）

写真図版35　横田遺跡出土遺物（6）　土坑出土土器（2）
写真図版36　横田遺跡出土遺物（7）　土坑・柱穴出土土器（1）
写真図版37　横田遺跡出土遺物（8）　柱穴出土土器（2）
写真図版38　横田遺跡出土遺物（9）　柱穴出土土器（3）
写真図版39　横田遺跡出土遺物（10）　柱穴出土土器（4）
写真図版40　横田遺跡出土遺物（11）　溝出土土器（1）
写真図版41　横田遺跡出土遺物（12）　溝出土土器（2）
写真図版42　横田遺跡出土遺物（13）　溝出土土器（3）
写真図版43　横田遺跡出土遺物（14）　溝出土土器（4）
写真図版44　横田遺跡出土遺物（15）　溝出土土器（5）
写真図版45　横田遺跡出土遺物（16）　溝出土土器（6）
写真図版46　横田遺跡出土遺物（17）　流路・不明遺構出土土器
写真図版47　横田遺跡出土遺物（18）　不明遺構・土坑出土土器
写真図版48　横田遺跡出土遺物（19）　不明遺構出土土器
写真図版49　横田遺跡出土遺物（20）　木棺墓出土土器
写真図版50　横田遺跡出土遺物（21）　包含層出土土器（1）
写真図版51　横田遺跡出土遺物（22）　包含層出土土器（2）
写真図版52　横田遺跡出土遺物（23）　包含層出土土器（3）
写真図版53　横田遺跡出土遺物（24）　包含層出土土器（4）
写真図版54　横田遺跡出土遺物（25）　包含層出土土器（5）
写真図版55　横田遺跡出土遺物（26）　包含層出土土器（6）
写真図版56　横田遺跡出土遺物（27）　包含層出土土器（7）
写真図版57　横田遺跡出土遺物（28）　包含層出土土器（8）
写真図版58　横田遺跡出土遺物（29）　包含層出土土器（9）
写真図版59　横田遺跡出土遺物（30）　包含層出土土器（10）
写真図版60　横田遺跡出土遺物（31）　包含層出土土器（11）
写真図版61　横田遺跡出土遺物（32）　包含層出土土器（12）
写真図版62　横田遺跡出土遺物（33）　包含層出土土器（13）
写真図版63　横田遺跡出土遺物（34）　包含層出土土器（14）
写真図版64　横田遺跡出土遺物（35）　包含層出土土器（15）
写真図版65　横田遺跡出土遺物（36）　包含層出土土器（16）
写真図版66　横田遺跡出土遺物（37）　出土木製品（1）
写真図版67　横田遺跡出土遺物（38）　出土木製品（2）
写真図版68　横田遺跡出土遺物（39）　出土木製品（3）
写真図版69　横田遺跡出土遺物（40）　出土木製品（4）
写真図版70　横田遺跡出土遺物（41）　出土木製品（5）
写真図版71　横田遺跡出土遺物（42）　出土木製品（6）
写真図版72　横田遺跡出土遺物（43）　出土木製品（7）

写真図版73　横田遺跡出土遺物（44）　出土木製品（8）
写真図版74　横田遺跡出土遺物（45）　出土木製品（9）
写真図版75　横田遺跡出土遺物（46）　出土金属製品
写真図版76　横田遺跡出土遺物（47）　出土古銭
写真図版77　横田遺跡出土遺物（48）　出土石器（1）
写真図版78　横田遺跡出土遺物（49）　出土石器（2）
写真図版79　横田遺跡出土遺物（50）　出土石器（3）
写真図版80　横田遺跡出土遺物（51）　出土石器（4）
写真図版81　横田北古墳群出土遺物（1）　3・4・6号墳出土土器
写真図版82　横田北古墳群出土遺物（2）　遊離遺物・紡錘車・金属器・土製品

図　版　目　次

図版1　確認調査トレンチ配置図
図版2　A地区地層断面図
図版3　B地区地層断面図
図版4　竪穴住居跡配置図
図版5　掘立柱建物跡位置図
図版6　土坑位置図
図版7　溝位置図
図版8　竪穴住居跡（1）
図版9　竪穴住居跡（2）
図版10　竪穴住居跡（3）
図版11　竪穴住居跡（4）
図版12　竪穴住居跡（5）
図版13　竪穴住居跡（6）
図版14　竪穴住居跡（7）
図版15　竪穴住居跡（8）
図版16　竪穴住居跡（9）
図版17　竪穴住居跡（10）
図版18　竪穴住居跡（11）
図版19　竪穴住居跡（12）
図版20　竪穴住居跡（13）
図版21　掘立柱建物跡（1）
図版22　掘立柱建物跡（2）
図版23　掘立柱建物跡（3）
図版24　掘立柱建物跡（4）
図版25　掘立柱建物跡（5）

図版26　柵・不明遺構
図版27　土坑（1）
図版28　土坑（2）
図版29　土坑（3）
図版30　土坑（4）
図版31　土坑（5）
図版32　土坑（6）
図版33　土坑（7）
図版34　土坑（8）
図版35　溝（1）
図版36　溝（2）
図版37　溝（3）
図版38　溝（4）
図版39　溝（5）
図版40　横田北古墳群全体図
図版41　1号墳・4号墳
図版42　2号墳
図版43　3号墳（1）　墳丘平面図・断面図
図版44　3号墳（2）　石棺平面図・立面図
図版45　6号墳
図版46　横田遺跡出土遺物（1）　竪穴住居跡出土土器（1）
図版47　横田遺跡出土遺物（2）　竪穴住居跡出土土器（2）
図版48　横田遺跡出土遺物（3）　竪穴住居跡出土土器（3）
図版49　横田遺跡出土遺物（4）　掘立柱建物跡・土坑等出土土器（1）
図版50　横田遺跡出土遺物（5）　土坑出土土器（2）
図版51　横田遺跡出土遺物（6）　土坑・柱穴出土土器（1）
図版52　横田遺跡出土遺物（7）　柱穴出土土器（2）
図版53　横田遺跡出土遺物（8）　柱穴出土土器（3）
図版54　横田遺跡出土遺物（9）　溝出土土器（1）
図版55　横田遺跡出土遺物（10）　溝出土土器（2）
図版56　横田遺跡出土遺物（11）　溝出土土器（3）
図版57　横田遺跡出土遺物（12）　溝出土土器（4）
図版58　横田遺跡出土遺物（13）　溝出土土器（5）
図版59　横田遺跡出土遺物（14）　溝出土土器（6）
図版60　横田遺跡出土遺物（15）　流路・不明遺構出土土器
図版61　横田遺跡出土遺物（16）　不明遺構・中世墓出土土器
図版62　横田遺跡出土遺物（17）　包含層出土土器（1）
図版63　横田遺跡出土遺物（18）　包含層出土土器（2）

図版64　横田遺跡出土遺物（19）　包含層出土土器（3）
図版65　横田遺跡出土遺物（20）　包含層出土土器（4）
図版66　横田遺跡出土遺物（21）　包含層出土土器（5）
図版67　横田遺跡出土遺物（22）　包含層出土土器（6）
図版68　横田遺跡出土遺物（23）　包含層出土土器（7）
図版69　横田遺跡出土遺物（24）　包含層出土土器（8）
図版70　横田遺跡出土遺物（25）　包含層出土土器（9）
図版71　横田遺跡出土遺物（26）　包含層出土土器（10）
図版72　横田遺跡出土遺物（27）　包含層出土土器（11）
図版73　横田遺跡出土遺物（28）　包含層出土土器（12）
図版74　横田遺跡出土遺物（29）　包含層出土土器（13）
図版75　横田遺跡出土遺物（30）　包含層出土土器（14）
図版76　横田遺跡出土遺物（31）　出土木製品（1）
図版77　横田遺跡出土遺物（32）　出土木製品（2）
図版78　横田遺跡出土遺物（33）　出土木製品（3）
図版79　横田遺跡出土遺物（34）　出土木製品（4）
図版80　横田遺跡出土遺物（35）　出土木製品（5）
図版81　横田遺跡出土遺物（36）　出土木製品（6）
図版82　横田遺跡出土遺物（37）　出土木製品（7）
図版83　横田遺跡出土遺物（38）　出土金属製品
図版84　横田遺跡出土遺物（39）　出土石器（1）
図版85　横田遺跡出土遺物（40）　出土石器（2）
図版86　横田遺跡出土遺物（41）　出土石器（3）
図版87　横田北古墳群出土遺物（1）　1～6号墳出土土器
図版88　横田北古墳群出土遺物（2）　遊離遺物・紡錘車・金属器・土製品

第１章　遺跡をめぐる環境

第１節　地理的環境

長さ86.5kmを測る兵庫県最長の河川である加古川は、丹波市氷上町域で分岐し、その一支流である水分かれ川は、東に延びて氷上町「水分かれ」にある谷中分水界に至る。「水分かれ」は、本州で最も低標高の中央分水界であり、北東方向へ延びる由良川水系を経由して、日本海に至る。峠を経由しないこの経路は、「加古川－由良川の道」と呼称され、古代からの重要な交通路の一つであったとされている。

一方北へ延びる本流は、佐治川と名を変えて源流部に至る。源流部は、標高960mの粟鹿山を主峰とする急峻な山地であり、丹波・但馬の旧国境をなしている。

横田遺跡は、丹波市氷上町横田に所在する。遺跡は、加古川左岸に位置する、山裾に形成された扇状地頂部から沖積平地にいたる緩斜面上に立地しており、西に加古川（佐治川）、南に加古川・水分かれ川の分岐を望むが、この分岐部付近は、加古川上流部で最も広い沖積平地となっている。律令期に設けられた「但馬道」は、水分かれを経由してこの平地の東端をたどっており、遺跡はこうした経路に面して営まれていたと考えられる。

第１図　遺跡の位置

第２節　歴史的環境

丹波市の氷上町域に残される遺跡は、後期旧石器時代に遡る。これは氷上町市辺遺跡における1999年度の調査で出土したもので、原位置を遊離した資料ではあるが、チャート製ナイフ形石器１点が見出されている。

縄文時代の遺跡としては、後期の遺物を出土した鴨内遺跡がある。明瞭な遺構は検出されていないが、桑飼下式・北白川上層式などの土器群が出土しており、本報告書で記載する横田遺跡出土の縄文時代晩期の土器が２例目となる。

旧石器時代～縄文時代の遺跡は検出例が少ないが、前項でも記したように、加古川－由良川の道という地理的環境からみるならば、今後当該期の遺跡が見いだされる可能性は高いだろう。

弥生時代前期の遺跡は、氷上町域では知られていなかったが、今回、遺構には伴わないものの横田遺跡で当該期の土器が出土した。中期の遺跡としては、犬岡遺跡、稲畑遺跡が知られている。両遺跡とも、住居跡などは検出されていないが、豊富な出土遺物から集落の存在を推定することができる。後期の遺跡としては、犬岡遺跡の他、鴨内遺跡が知られている。

古墳時代の集落遺跡には、弥生時代の項で取り上げた前述の３遺跡がある。犬岡遺跡は、弥生時代から古墳時代初頭までの遺物を出土している。また、稲畑遺跡は５世紀中葉から古代まで継続する遺跡である。

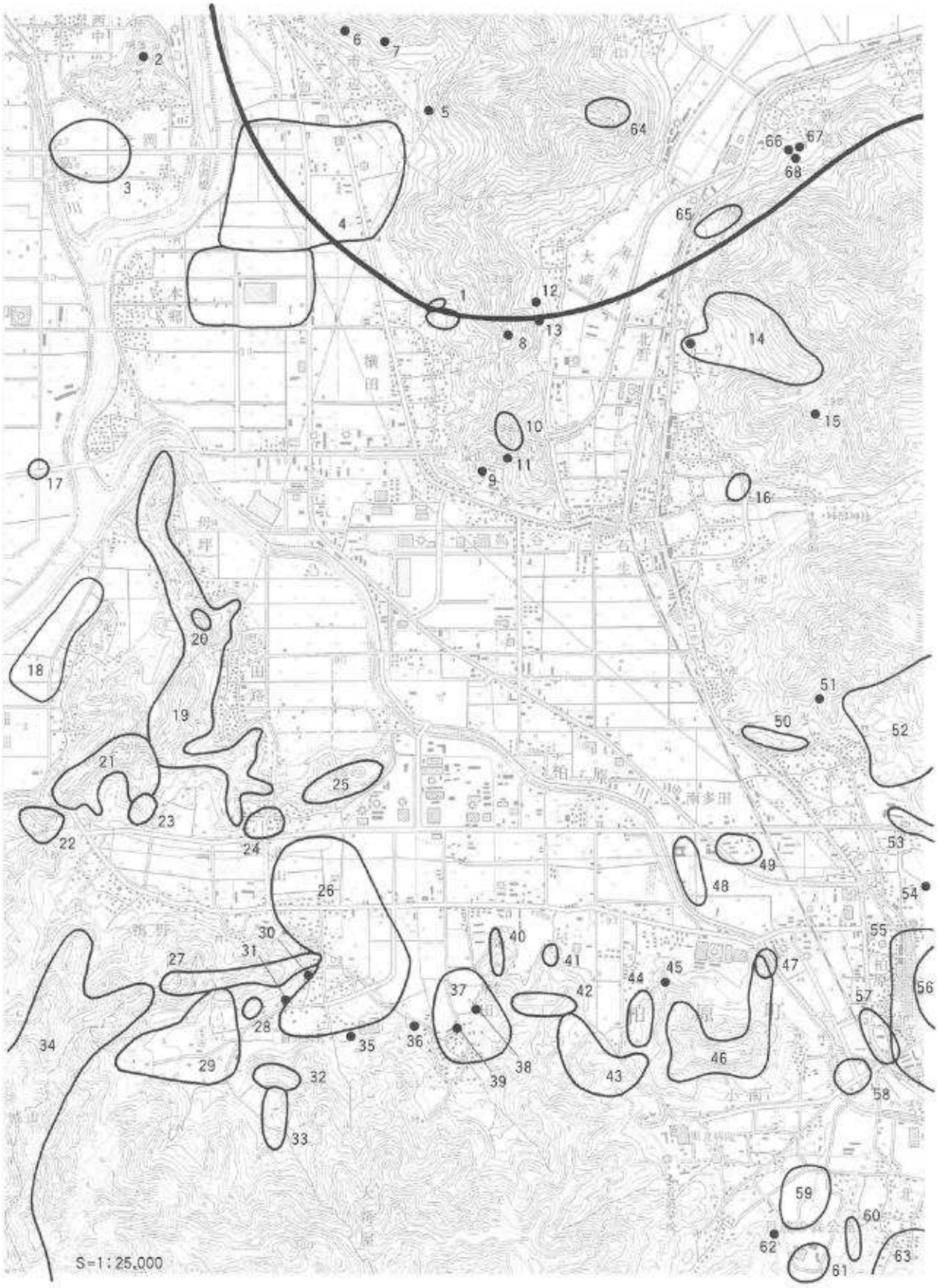
前期古墳には、氷上町域からは外れるものの、丹波市内最大の円墳である親王塚古墳がある。直径42mを測る親王塚古墳は、三角縁神獣鏡を出土したことで知られ、「水分かれ」近くに立地するという立地の特殊性からも重要なものであるが、1991年にほぼ完全に削平された。前期古墳としては、他に長野木戸古墳群、横田山古墳、瓜谷山古墳などが知られている。

古墳時代後期には、加古川支流の各水系に、多数の古墳（群）が形成される。

律令期の遺跡には、横田遺跡をはじめ、氷上郡衙とされる市辺遺跡、鴨内遺跡、稲畑遺跡、石生遺跡などが知られている。特に、市辺遺跡は、兵庫県教育委員会が実施した発掘調査によって、郡衙と考えられる建物群の全容が明らかにされており、注目される。

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	横田遺跡・横田北古墳群	18	稲畑遺跡	35	大新屋古墳	52	大歳神社古墳群
2	明治山古墳	19	穂壺城跡	36	池田池古墳	53	昭和池古墳群
3	犬岡遺跡	20	母坪古墳群	37	挙田遺跡	54	昭和池南古墳
4	市辺遺跡	21	鴨野城跡	38	地神塚古墳	55	柏原旧城下町
5	市辺１号墳	22	萱刈坂古墳群	39	挙田塚	56	柏原・本町遺跡
6	市辺２号墳	23	弁財天古墳群	40	挙田A古墳群	57	本町遺跡
7	市辺３号墳	24	北山・西池遺跡	41	挙田B古墳群	58	畑田遺跡
8	横田山古墳	25	山ヶ端古墳群	42	おさんの森古墳群	59	三原西遺跡
9	横田古墳	26	大新屋遺跡	43	沖田古墳群	60	北中古墳群
10	横田城跡	27	東鴨野城跡	44	清蔵谷遺跡	61	三原遺跡
11	石生１号墳	28	山根古墳群	45	清蔵谷古墳	62	室谷古墳
12	石生２号墳	29	七ツ塚古墳群	46	小南山城跡	63	北中遺跡
13	石生３号墳	30	大新屋北古墳	47	向山遺跡	64	野山城跡
14	親王塚北野古墳群	31	大新屋西古墳	48	南多田・切戸遺跡	65	坂古墳群
15	滝山古墳	32	山の神城跡	49	大井田遺跡	66	歓道谷古墳
16	石生・杉ノ本遺跡	33	山の神池古墳群	50	南多田西１号墳・２号墳	67	歓道寺跡
17	新郷遺跡	34	高見城跡	51	明源寺古墳	68	慶徳寺跡

第１表　周辺の遺跡



第２図　周辺の遺跡

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

調査対象範囲は、丹波山地の一部をなす低山地の稜線から、その麓の扇状地およびその末端部と沖積地の接点に形成された低湿地にわたる。

横田遺跡、横田北古墳群は、一般国道483号（春日和田山道路Ⅰ）建設に先立ち、兵庫県教育委員会が、1991年度（平成３年度）に実施した分布調査により発見され、No16・17地点の名称を与えられた。その後、1996・97年度（平成８・９年度）に確認調査、1997年度（平成９年度）に再度の分布調査を実施した結果、No16・17地点が、弥生時代～中世にかけての集落遺跡および古墳時代後期の古墳群であることが明らかとなった。No16地点が横田北古墳群、No17地点が横田遺跡に相当する。

この成果に基づき、兵庫県教育委員会では、1998・99年度（平成10・11年度）に建設省近畿地方建設局兵庫国道工事事務所（当時）の依頼を受けて、横田遺跡、横田北古墳群の本発掘調査を実施した。本報告書は、この成果を報告するものである。

第２節　発掘調査の概要

１．確認調査（図版１）

確認調査は、1996年度（平成８年度）～1998年度（平成10年度）にかけて、４回にわたって実施された。その概要は表のとおりである。

年　度	調査期間	調査地点	担当者	調　査　方　法	調査面積	調　査　の　成　果
1991（平成３）	1991年 4月15日～ 4月19日		水口富夫 ほか	分布調査		No16・17地点を確認
1996（平成８）	1997年 2月25日	No17・18 地点	山下史朗 多賀茂治	グリッド（２ｍ×２ｍ）20か所。	80㎡	横田遺跡の湿地部・旧河道を確認
1997（平成９）	1997年 4月17日	No17地点	多賀茂治	樹木移植に必要な範囲のみ調査	4㎡	基壇状隆起は近世の遺構
1997（平成９）	1997年 6月２日	No16・17 地点	山下史朗 中川　渉 多賀茂治	分布調査	10,000㎡	No16地点の古墳、No17地点の遺物散布範囲を確認
1997（平成９）	1997年 10月13日～ 11月13日	No16・17 地点	中川　渉 多賀茂治	トレンチ（幅２ｍ）18本	470㎡	横田北古墳群の確認。横田遺跡で弥生時代後期～中世の遺構を確認
1998（平成10）	1998年 10月27日	No17地点	山本　誠	トレンチ（幅２ｍ）１本	10㎡	基壇状隆起は古墳ではない

第２表　横田遺跡・横田北古墳群分布調査・確認調査一覧

2．本発掘調査（1998年度（平成10年度））

(1) 調査の体制

1998年度の調査は、横田遺跡の西半部2,837㎡を対象として、1998年12月７日に開始し、1999年３月23日に終了した。調査体制等は下記のとおりである。

【調査の体制】

1　発掘調査主体　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

2　発掘調査担当者　　調査第１班　　久保　弘幸　・　山本　　誠　・　守岡　克倫

(2) 調査の方法と成果の概要（図版１）

1998年度調査地は、Ａ地区と呼称する。調査対象地は、緩やかな傾斜をもつ扇状地下部から、低湿地に至る範囲を占めていた。調査前には段差の小さい棚田状に開墾されており、等高線に平行してのびる地割が見受けられた。確認調査の成果から、現表土層の下位には遺物包含層が存在し、低地部ほど層厚を増すことが知られていたことから、調査に先立ち、主として包含層出土遺物の取り上げを目的として、概ね地割りに即した形で20m方眼のグリッドを設定した。

発掘調査は、調査範囲の高位部分（東側）より順次重機による表土掘削を実施し、その後、人力による包含層掘削、遺構面精査、遺構調査という段階を踏んでおこなった。また調査に当たっては、調査区内を横切る生活道路を確保するため、調査区北側（Ａ１・３・６区）および南西部（Ａ２区）の調査を先行し、道路の切り替えをおこなった後に、残る部分（Ａ４・５・７・８区）の調査を実施した。

検出された遺構の平面図化は、㈱ジオテクノ関西に委託し、空中写真測量によっておこなった。また、個別の遺構、および遺物の出土状況図、遺構断面図等は、調査担当者および調査補助員がこれを作成した。また調査に際して、立命館大学講師青木哲哉氏（地理学）の現地指導を仰ぎ、調査地付近の地形形成史を明らかにするための調査を実施した。

調査の結果、平成10年度調査区は、東部の扇状地と西部の低湿地・旧河道に分けられることが明らかになった。検出された遺構のほとんどは、扇状地側に位置している。遺構群は、弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものと、中世前半期（平安時代末～鎌倉時代）に属するものの二時期に大別される。低湿地・旧河道部では、構造物の一部をなすと思われる杭が見出されたほかに、遺構は見られなかったが、3層に大別される遺物包含層が検出され、弥生時代～中世前半期にわたる多数の土器・木器が出土した。

3．本発掘調査（1999年度（平成11年度））

(1) 調査の体制

1999年度（平成11年度）の調査は、横田遺跡の東半部5,520㎡および横田北古墳群を対象として、1999年６月１日に開始し、11月12日に終了した。調査体制等は下記のとおりである。

【調査の体制】

1　発掘調査主体　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

2　発掘調査担当者　　調査第1班　　久保　弘幸・鐵　　英記・阿部　泰之・日野　祥子

(2) 調査の方法と成果の概要

1999年度調査対象地は、扇状地中部から頂部にかけて広がる横田遺跡東半部（B地区と呼称）、および、扇状地北側を東西に延びる尾根上に立地する横田北古墳群である。

横田遺跡の調査対象範囲は、農地および住宅地として段状に造成されていたため、現地形段差に即してB1～B5区に分割し、これを大略の基準として包含層等の出土遺物を分別した。

発掘調査は、調査区内を横切る生活道路を確保するため調査区西側のB1区の調査を先行し、道路の切り替えをおこなった後に残る部分（B2～5区）の調査を実施した。表土掘削は重機によって実施し、その後、人力による包含層掘削、遺構面精査、遺構調査という段階を踏んでおこなった。

検出された遺構の平面図化は、㈱カイヤマグチに委託し、空中写真測量によっておこなった。また、個別の遺構、および遺物の出土状況図、遺構断面図等は、調査担当者および調査補助員がこれを作成した。

調査の結果、横田遺跡の1999年度調査区は、扇状地上の緩斜面に位置し、削平の影響を受けて古土壌層（遺物包含層）の遺存状況こそ劣悪であるものの、多くの遺構が残されていることが明らかとなった。弥生時代の遺構としては、前年度に引き続いて竪穴住居跡を中心とする遺構群が検出されたほか、前年度出土を見なかった縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土した。また、前年度調査では明瞭にできなかった、奈良時代～平安時代の建物群が検出された。さらに、鎌倉時代の木棺墓1基が検出された。横田北古墳群は、確認調査の成果をもとに6基の古墳から成ると考えられていたが、本発掘調査の結果5基の古墳によって構成されていることが判明した。古墳が立地する稜線上の削平が顕著であったため、1号墳・4号墳では主体部は遺存していなかったが、2号墳・6号墳で木棺直葬の埋葬主体部を、3号墳で組合式石棺を各1基検出した。

さらに前年度に引き続いて、立命館大学講師青木哲哉氏（地理学）の現地指導を仰ぎ、調査地付近の地形形成史を明らかにするための深掘調査を実施した。

なお、青木氏の2年度にわたる調査結果については、本報告書に玉稿を頂戴している。

第3節　整理事業の概要

整理事業は、2001年度（平成13年度）より、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および同事務所魚住分館において実施した。その工程は第3表の通りである。整理事業は、調査担当者（久保・鐵）の下で埋蔵文化財調査事務所整理保存班がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。金属器の保存処理については、すべて埋蔵文化財調査事務所において実施した。また本報告書に収録した遺物写真については、委託事業として撮影を実施した。

また、1998・99年度調査を通じて、調査区内で採取した火山灰・土壌・種実等の試料については、その分析・同定を㈱パリノサーベイ、加速器を用いた放射性炭素年代測定については㈱パレオ・ラボにおいて、それぞれ委託事業として実施し、本報告書第5章にその成果を収録している。主としてA地区より出土した木製品の樹種同定については、京都大学生存圏研究所教授伊藤隆夫氏に依頼し、本報告書に玉稿を頂戴している。

整理作業に参画した非常勤嘱託員は、下記の通りである（順不同）。

【主任技術員】　友久伸子　長谷川洋子　吉田優子　栗山美奈　眞子ふさ恵　増田麻子

【企画技術員】　喜多山好子　大前篤子　西口由紀　今村直子

【図化技術員】　伊藤ミネ子　家光和子　川上啓子　衣笠雅美　江口初美　石野照代　中田明美

歳　幾子　大仁克子　西野淳子　藤井光代　三島重美　川上　緑　小林俊子

渡辺二三代　小野潤子　津田友子　又江立子　加藤裕美　岡田祥子　藤川紀子

【図化補助技術員】　高橋朋子

【日々雇用職員】　豊田貞代　久保昭夫

第3表　整理事業の工程

年次	水洗い	ネーミング	接合・補強	実測・拓本	復元	写真撮影	写真整理	図面補正	トレース	レイアウト	分析鑑定	保存処理	報告書刊行
2001	━	━											
2002			━	━									
2003				━	━						━		
2004				━		━	━	━	━		━	━	
2005							━		━	━			━

第３章　横田遺跡の調査

第１節　調査区周辺の地形と調査区内の堆積物

１．地形（図版１）

横田遺跡は、低い山地稜線から西に向かって広がる扇状地の頂部から末端部にかけての、緩斜面上に立地している。２年度にわたる調査区は、この扇状地中央部の最高所から末端部、およびその西側に広がる低湿地部までを占めており、最高所での遺構検出面の標高は106.5m、低湿地部旧河道の検出面は標高90mを測る。旧河道を除く遺構はすべて扇状地斜面上に立地しており、低湿地部では検出されなかった。

横田遺跡の北側には、横田北古墳群が立地する支尾根が東西に延びており、その先端は、急傾斜となって横田遺跡の遺構検出面に至る。この支尾根の北には小規模な谷が認められることから、今回の調査区は、横田遺跡が立地する地形面の北端を包摂するものと考えてよかろう。

調査着手前まで、この扇状地緩斜面は耕地として利用されており、雛壇状に開墾されていた。このため、遺跡内は相当程度の攪乱を受けており、各遺構においては雛壇状の造成によって喪失した部分が多く見られた。特にＢ地区中央部北半には、ほとんど遺構が分布しない領域が広がっているが、これはＢ地区中央部に民家、およびこれに付随する池・井戸・倉庫等が設けられていた影響が大きいものと思われる。

２．調査区内の堆積物

扇状地斜面部（図版３）

調査範囲内のうち扇状地斜面部では、本来遺構面を被覆していた堆積物は著しい削平を受け、部分的に遺存しているにすぎなかった。特にＡ地区東部南半からＢ地区中央部にかけては、現地表を構成する耕作土直下で遺構が検出され、古土壌（遺物包含層）はほとんど遺存していなかった。削平が及ばなかった一部に古土壌層が遺存する場合も見られたが、本報告書で報告する各時期の古土壌層が、安定して遺存する部分は存在しなかった。

扇状地斜面部を被覆する基本的堆積物は、現地表下に上位から、褐色砂ないしはシルト層、黒色砂ないしはシルト層という堆積物が認められ、その下位が遺構検出面となる。遺物は、褐色シルト・黒色シルトともに包含しているが、層相によって遺物の所属時期を截然と分離しうるものではなく、これらの堆積物の層相も、調査区内全域において必ずしも均一ではない。

低湿地部（図版２）

調査区西部の扇状地末端付近からは、旧河道（SD1009・1014・1015）を含む湿地部となる。調査に当たっては、まず湿地部の層序を確認するためのトレンチを設定し、断面観察を実施した（図版２・３）。その結果、湿地部の堆積物中には多数の遺物が包含されており、堆積物は厚く複雑な堆積状況を呈することが明らかとなった。

低湿地部の堆積物のうち、最も顕著であったものが腐植質をまじえる黒色シルト層（7層）であった。局所的に砂・礫をまじえつつ低湿地部全域を覆っており、多くの遺物が包含されていた。調査過程では、広範囲に分布し識別しやすい黒色シルト層（7層）を基準に、これより上位（1～6層）を一括して包含層A、7層を包含層B、7層より下位（8～20層）を包含層Cと呼称した。また、色調の差によって7層が上下に区分可能な範囲では、これを包含層B上部・下部として遺物の取り上げをおこなった。

出土遺物を検討した結果、包含層Cには、中世の遺物は包含されず、同層の堆積はこれ以前であったことが確認された。包含層Bについては、多数の弥生土器とともに、少数ながら古墳時代～中世の遺物も含まれていた。腐植質シルトという堆積物の性質上、長期間にわたる堆積を考慮すべきかもしれない。

最上位の包含層Aは、各時期の遺物が混在して出土し、細片化したものが多いことから、中世以降の二次的な堆積物と考えられる。

旧河道SD1014・1015は、包含層B・Cを除去した時点で検出されており、弥生時代～古墳時代初頭にかけて埋没したものと思われる。また包含層Cの下部は、旧河道内の埋没の最終段階に相当する堆積物と考えられる。断面観察からはSD1014・1015の先後関係を把握することはできず、出土遺物等にも明瞭な新旧は認められない。SD1009は、堆積の上部に古墳時代後期の須恵器を含んでおり、最終的な埋没はSD1014・1015よりやや遅れるものと思われる。

調査終了後に実施した深掘調査では、これらの旧河道が、扇状地末端部に形成されたより規模の大きな河道が埋没する過程の最終段階に相当することが明らかとなっている。

第2節　遺構と遺物

1．概要

今回の調査では、主として弥生時代後期～終末期、奈良～平安時代、平安時代末～鎌倉時代の三時期に大別される遺構・遺物が検出された。このほかに、古墳時代後期、室町時代に属すると思われる遺構も少数ながら検出されている。検出された遺構には、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・木棺墓・土坑・溝・柱穴などがある。本節では、遺構種別ごとに遺構・遺物の記載をおこなう。なお、弥生時代に属する遺物の編年的位置づけに関しては多賀茂治氏の分析（多賀　2000・2002）に準拠し、丹波弥生時代Ⅴ期を弥生時代後期、Ⅵ期を弥生時代終末期と呼称している。

2．竪穴住居跡（図版4）

竪穴住居跡は、合計19棟が検出された。緩斜面に構築されているため、開墾などの影響によりいずれも斜面下方側を喪失している。扇状地先端に近い、A地区東部からB地区西部にかけての領域で密度が高く、扇状地頂部にあたるB地区東部に4棟が位置している。しかしこれは見かけ上の分布であり、B地区中央部付近が、近代以降、著しい削平を受けていることを考慮するならば、現状のまま理解することには慎重であるべきだろう。

住居跡の形態には、円形（楕円形を含む）・隅丸方形・方形が見られるが、重複例（2例）は、いずれも方形住居跡が新しいことを示している。

主柱穴は、円形住居の場合、多角形の頂点に柱穴を配置する型、方形・隅丸方形住居の場合2本ない

し４本柱型を基本とする。また円形住居の場合、中央ないしはやや斜面上位側に寄った位置に土坑をもつ例が大半を占めるが、方形・隅丸方形住居では、住居一辺中央の、周壁溝に接する位置に土坑が設けられる例が主体を占める。

なお、SH1003については、調査途上で住居跡と考えて遺構番号を与えたが、その後住居跡ではないことが判明したため、欠番としている。このほか、調査途上で柱穴としていたものが住居跡の中央土坑と認識された場合については、当初に与えた柱穴番号をそのまま遺構番号として記載している。

SH1001

遺構（図版８・写真図版４・６）

【検出状況】　Ａ地区北東部隅に位置する。斜面下方側を大きく削平され、1/2以上を喪失していた。住居跡床面上は暗褐色の極細砂～細砂で埋没していたが、埋土上層は巨礫を含む砂礫層に覆われており、住居廃絶後、遺跡内洪水流が生じたと思われる。検出面からの深さは最大で0.4mを測る。

【規模・形態】　直径10.6m前後の円形ないしは楕円形住居跡と思われる。

【屋内施設】　斜面上位側の周壁溝と主柱穴４基が検出されたほか、中央からやや東に寄った位置で土坑1基が検出されている。

【周壁溝】　住居跡東側の掘方に沿って巡り、南東側の一部では２条となる。途中、住居内に向けて溝１条が分岐する。

【住居内土坑】　SK1022が床面中央よりやや東寄りに位置する。一辺が0.8m前後、深さ0.18mを測る、隅円方形の土坑である。土坑西半に見られる柱穴は、上層からの重複で、本来住居跡に伴うものではない。土坑下底は、わずかに傾斜をもつものの比較的平坦な面をなす。

【柱穴】　床面には多数の柱穴が検出されたが、うち４基が主柱穴の可能性がある。柱間は3.0～3.2mを測る。推定が正しければ、主柱穴は６基以上である。

出土遺物（図版46・47；１～38・図版84；Ｓ３）

壺、甕、鉢、椀、高杯、器台、蓋、底部および混入と考えられる須恵器の坏蓋が出土している。残存状況が悪いため、器形全体がわかる資料は少ない。

１～６、37は壺である。１は外反して大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を上下に肥厚させて面を作り、そこに擬凹線をめぐらせる。外面は縦方向、内面は横方向のヘラミガキを施している。２は受口状を呈していたと考えられる壺の口縁部で、外面に雲形の浮文を貼り付ける。３は筒状の頸部から大きく開く口縁部を持つ。内外面にハケ目が残っている。４は直線的に開く口縁を持つ。５はしっかりした平底を呈するもので、６は小さな平底を持つ。37は平底の底部である。外面にハケ、内面にはヘラケズリを施している。

７～17は甕である。「く」の字状に屈曲した頸部から粘土帯を継ぎ足し、外反気味に延びる複合口縁を持つものがほとんどを占める。７は口縁端部を上方に肥厚させる。８は端部を直立気味に立ち上げる複合口縁を持ち、擬凹線を施している。９は頸部の屈曲がやや鈍く、８と同様に直立気味の複合口縁を持つが、擬凹線は施さない。体部外面にタタキの痕跡が残る。10は大きく開く複合口縁を持つ。11は体部最大径がほぼ体部中位にくる。屈曲した頸部から外反する口縁を持ち、口縁端部は上方に肥厚させる。12・13は屈曲した頸部から外反気味に延びる複合口縁を持ち、端部は斜め上方に短く立ち上がる。13は張りの小さな体部を持ち、内外面にハケを施す。14は外反する口縁を持ち、口縁端部は外側に面を持つ。

16は体部最大径が中位より上方にある倒卵形の体部である。外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。17は胴の張らない体部から屈曲して斜め上方に延びる口縁部を持つ。

15・18・19・21・22は鉢である。15は丸みを帯びたやや扁平な体部から大きく開く口縁部を持つ鉢である。口縁端部はやや上方に肥厚し、擬凹線をめぐらせる。体部外面はタタキ、内面にはヘラケズリを施す。18は突出気味で内部にくぼみを持つ底部と椀状の体部を持つ。19は脚台様の底部を持ち、斜め上方に延びる体部を持つ。21は少し窪んだ平底に椀状の体部がつく。22は砲弾状の体部と穿孔された底部を持つ。23は椀状の体部に短い脚部がつく台付鉢である。体部は剥離が著しく調整は不明であるが、脚台部の内面はヘラケズリ、外面はナデで仕上げている。24から26は台付鉢の脚台部と考えられる。24は外面にハケとナデを施し、25・26はナデで仕上げている。

20は丸みを帯びた平底の底部と直立した体部を持つ椀である。外面にハケ目が残っている。

27～29は高杯である。いずれも複合口縁を持ち、擬凹線をめぐらせる。27は口縁直下に波状文をめぐらせる。

30～34は器台である。31・32は大きく開く受け部で、口縁端部を上下に拡張し擬凹線をめぐらせている。内外面ともヘラミガキを行っている。33は口縁端部を下方に拡張する。30は筒状で中空の脚柱部である。外面に丁寧なヘラミガキを施している。34は脚裾部である。円孔が穿たれている。

35・36は蓋である。35は外面にヘラミガキ、内面にはヘラケズリの後ナデを施している。36は外面にヘラミガキを施し、内面はナデで仕上げている。

これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものと考えられる。

38は水平な天井部を持ち、体部と口縁部との稜が明瞭に突出する須恵器の坏蓋である。口縁端部は内傾する。天井部は回転ヘラケズリ、そのほかは回転ナデを施す。

Ｓ３は、打面部を折損した剥片である。図上縁辺に、数枚の不規則な剥離痕が認められるが、二次加工とは断じがたい。

SH1002

遺構（図版９・写真図版４）

【検出状況】　SH1001の下方斜面に位置する。両者の位置関係からは重複していたと考えられるが、削平の影響により、これを確認することはできなかった。また、住居内の埋土もほとんど遺存していなかった。

【規模・形態】　隅丸方形ないしは方形の住居跡と考えられるが、わずかに周壁溝を含む掘方の一部をとどめていたのみであり、規模の推定は困難である。

【屋内施設】　斜面上方（東）側周壁溝の一部を検出したのみで、住居内土坑・主柱穴とも明らかにできなかった。周壁溝に接するSK1003はきわめて浅い掘込みであり、住居内土坑とは見なしがたい。

【周壁溝】　最大幅約70cm、深さ30cmを測る。その規模から、複数の溝が接していた可能性もあるが、平面・断面観察では確認できなかった。

出土遺物

弥生土器の細片が出土したほかに、図示可能な遺物は出土していない。

SH1004

遺構（図版９・写真図版６）

【検出状況】　Ａ地区中央北寄りの、扇状地先端付近に位置する。北西側約2/3の周壁溝を喪失している。住居内埋土は遺存していなかった。

【規模・形態】　隅丸方形の住居跡で、二重の周壁溝をもち、内側周壁溝は一辺4.0mを測る。

【屋内施設】　周壁溝および柱穴４基を検出した。

【周壁溝】　二重の周壁溝が検出されている。外側周壁溝は、内側周壁溝から約0.5m外側の位置にあり隅円方形状に巡るが、削平によりＬ字形に遺存するのみであったため、形態・外周規模については不明である。内側周壁溝の斜面上位側中央から、直角に分岐して住居中心に向かう溝が、延長約1.5mまで遺存していた。

【主柱穴】　ほぼ正方形に配置された４基。円形を呈し、掘方は直径20～28cm、深さ16～20cmを測る。柱間は2.6～2.7mである

出土遺物

周壁溝埋土および主柱穴P1263より弥生土器の細片が出土したが、図示可能なものはない。

SH1005

遺構（図版10・写真図版５・６）

【検出状況】　Ａ地区東端に位置する。斜面下方約1/2を喪失しているほか、住居北半の床面に大規模な撹乱を受けている。住居内はシルト質砂を主体とする堆積物で埋没していた。

【規模・形態】　方形住居跡で、斜面上方（東）側の一辺は約6.9mを測る。検出面からの深さは、最大で0.1m前後を測る。

【屋内施設】　周壁溝および住居内土坑が検出された。

【周壁溝】　斜面上位側のみ遺存しており、幅15～30cm、深さ10cm前後を測る。

【住居内土坑】　斜面上位側（東側）の周壁溝中央部に接する位置と、住居跡中央部に、楕円形の土坑が設けられていた。

SK1025　住居東辺中央の、周壁溝に接する位置に設けられた幅広の楕円形を呈する土坑である。長径70cm、短径58cm、深さ32cmを測る。やはり、シルト質砂で埋没していた。

SK1026　住居中央に設けられた、歪んだ楕円形の土坑で、長径62cm、短径40cm、深さ８cmを測る。土坑内はシルト質砂で埋没していたが、その上面に直径30cm、厚さ5cmほどの粘土塊が認められた。

【柱穴】　主柱穴は4基で、歪んだ円形を呈する。直径は30～40cm、柱間は4.2～4.8mである。

出土遺物（図版47；39～43）

壺、甕、高杯、器台、混入と考えられる瓦器椀が出土している。

39は直立気味に立ち上がる口縁部を持つ壺である。体部内面にはヘラケズリを施し、口縁部はヨコナデで仕上げる。

40は「く」の字形に屈曲した頸部から外反気味に開く口縁部を持ち、口縁端部を肥厚させて外側に面をつくる甕である。

41は椀形の杯部を持つ高杯である。口縁端部は直立気味に薄く作る。杯部内面にハケ目が残り、外面はヨコナデで仕上げる。脚柱部外面にはヘラミガキを施している。

42は器台の脚部である。受部内面にはハケが残り、脚部内面にはヘラケズリを施している。外面はナデ調整で仕上げている。

これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－２）のものと考えられる。

43は瓦器椀の底部である。

SH1006

遺構（図版11）

【検出状況】　SH1005の斜面下方に位置する、SH1005と重複する位置にあり、削平のため十分に重複関係を確認することはできなかったが、SH1005を切って構築された可能性が高い。

【規模・形態】　隅円方形の住居跡で、一辺8.4ｍを測る。

【屋内施設】　住居の位置が階段状に造成された部分にあたるため、わずかに斜面上位側（東側）周壁溝を検出しえたのみである。住居の領域内には多数の柱穴が認められたが、主柱穴・住居内土坑については確定できなかった。

出土遺物

住居領域内にある複数の柱穴より、弥生土器の細片が出土しているが、図示可能なものはない。

SH1007

遺構（図版11・写真図版６）

【検出状況】　Ａ地区中央部に位置する。削平が著しく、住居内埋土は遺存していなかった。

【規模・形態】　主柱穴が６本柱であることから、円形住居跡であったと考えられる。

【屋内施設】　主柱穴６基が検出されたほか、柱穴列に近い位置に土坑状のＰ1194が検出された。

【住居内土坑】　Ｐ1194が住居内土坑であった可能性がある。柱穴列の南外側に接する位置にある。不整円形を呈し、土坑底は概ね平坦である。直径75㎝、深さ25㎝を測る。

【柱穴】　やや歪んだ六角形の頂点に位置し、相対する柱間の距離は、最大で4.4ｍ、最小で3.6ｍであることから、後述するSH2002に近い規模であったと推定される。

出土遺物

図示できる遺物は出土していないが、住居内土坑Ｐ1194より、弥生土器の細片が出土している。

SH1008

遺構（図版12）

【検出状況】　Ａ地区東部に位置する。周辺部の削平は著しく、住居内埋土は遺存していなかった。

【規模・形態】　円形住居と推定されるが、規模の推定は困難である。直径６ｍ前後であろうか。

【屋内施設】　周壁溝・柱穴・中央土坑が検出された。

【周壁溝】　全体の1/8程度が遺存していた。最大幅80㎝を測ることから、住居跡に関連しない遺構である可能性も考慮される。ただしその場合でも、主柱穴・中央土坑の存在から、SH1008の認定そのものには影響しない。

【中央土坑】　Ｐ1032　住居中央に位置する円形の土坑である。調査時点で柱穴と認識されたため、柱穴番号を踏襲する。直径44㎝、深さ40㎝を測り、急斜度の掘込みを見せる。

【柱穴】　六角形の頂点に配置された主柱穴が検出された。いずれも円形ないしは歪んだ円形を呈し、直径20～35㎝を測る。相対する柱間の距離は、4.3ｍ～4.6ｍを測る。

出土遺物

図示できる遺物は出土していないが、柱穴P1022・1025・1031および住居内土坑（P1032）より、弥生土器の細片が出土している。

SH1009

遺構（図版12）

【検出状況】　A地区中央に位置する。撹乱の著しい部分であったため、住居内埋土は遺存していなかった。

【規模・形態】　円形ないしは楕円形住居と考えられるが、周壁溝の遺存状況が全体の1/4に満たず、規模の推定は困難である。直径７m前後であろうか。

【屋内施設】　柱穴・周壁溝・中央土坑が検出された。

【周壁溝】　全体の1/6程度が遺存する。最大幅28cmを測る。

【中央土坑】　住居内やや東寄りの位置に、歪んだ円形の土坑１基が検出された。

【柱穴】　４基を検出したが、それらの位置から主柱穴は６基ないしそれ以上と考えられる。柱穴はいずれも円形を呈し、直径20～40cmを測る。柱間は、1.8～2.3mを測るにとどまる。

【中央土坑】　P1191　住居中心からやや東寄りに設けられた土坑で、隅丸方形を呈する。一辺60cm、深さ24cmを測る。

出土遺物

柱穴P1195・1281より弥生土器の細片が出土している。また、中央土坑（P1191）埋土より弥生土器細片に加えて、混入と思われる須恵器細片が出土している。図示可能なものはない。

SH2001

遺構（図版13・写真図版10・12・15）

【検出状況】　B地区の西端、遺構が集中する地点に位置する。SH2002を切っている。南西側1/3程度を開墾により喪失している。住居内は、黒褐色～褐色の細砂を主体とする堆積物で埋没していた。

【規模・形態】　平面形は方形を呈し、南北5.3m、東西4.9mを測る。

【屋内施設】　周壁溝と柱穴を検出した。

【周壁溝】　北・東壁と南壁の一部で検出した。西辺は削平されてほとんど遺存していない。幅は22cm程度で深さは４cmと残存状況は悪い。周壁溝北西隅から、住居外側に向けて溝が分岐している。

【中央土坑】　確認できなかった。

【柱穴】　住居址のほぼ中央で２基を検出した。掘方はいずれも円形で、直径は40cmと38cm、検出面からの深さは14cmと30cmである。西側のものだけに柱痕が認められ、直径18cmであった。

出土遺物（図版48；53・図版84；Ｓ２・Ｓ４）

埋土中より弥生土器および石器が出土している。

高杯（53）は、深い椀形の杯部を持ち、内外面にヘラミガキを施している。弥生時代終末期（Ⅵ－２段階）のものと考えられる。

Ｓ２は、石核の断片であろう。右図の右側縁は、著しく潰れており、剥離作業面の縁辺であったと思われる。

Ｓ４は、横長剥片である。打面部は、剥離の際に破砕した可能性があろう。

SH2002

遺構（図版14・写真図版10・12・15）

【検出状況】　B地区の西端、遺構が集中する地点に位置する。SH2001に切られている。

【規模・形態】　平面形は円形を呈すると思われ、直径は13.1m以上である。

【屋内施設】　周壁溝と中央土坑を検出した。

【周壁溝】　1/4周程度が遺存する。幅24cm程度で検出面からの深さは16cmである。

【中央土坑】　SK2012　直径1.4mの円形を呈する。2段掘りで検出面からの深さは40cmである。土坑内は、地山ブロックを含む細粒の砂で埋没していた。住居北半に、隅丸長方形を呈する大型の土坑（SK2004）が検出されたが、これはSH2002廃絶後の遺構である。

【柱穴】　6本柱ないしはそれ以上と考えられるが、確定できなかった。

出土遺物（図版48；54・図版83；M1・図版84；S8）

弥生土器の甕（54）が出土している。54は、「く」の字状に屈曲した頸部から外反して延びる複合口縁を持つ。体部外面にはタタキの痕跡があり、内面は横方向のヘラケズリを施している。弥生時代終末期（Ⅵ－1段階）のものと考えられる。

M1は上下両端を損した鉄製品である。器種は判断し難い。

S8は、砥石である。研磨により長方形に整形し、一面を砥面として用いている。裏面には、整形痕をとどめる。

SH2003

遺構（図版15・写真図版13・15）

【検出状況】　B地区の北西隅、A地区との境界付近に位置する。一部が調査範囲外にあるが、大きく削平を受け、残存状況は2/3程度である。住居内は、暗褐色～黒褐色の極細砂を主体とする堆積物で埋没していた。

【規模・形態】　隅丸方形気味の円形住居を楕円気味の円形に拡張したと考えられる。当初の規模は南北6.56m以上、東西5.6mを測り、拡張後は南北8.32m以上、東西6.64m以上となる。

【屋内施設】　中央土坑および周壁溝を検出した。

【周壁溝】　内側の周壁溝は幅20cm、検出面からの深さが8cm、外側の周壁溝は幅40cm、検出面からの深さは12cmを測る。

【中央土坑】　SK2013　住居中央に位置し、平面形は隅丸の長方形を呈する。長辺が1.12m、短辺が0.56m、2段掘りで検出面からの深さは28cmである。

【柱穴】　4本柱の可能性があるが、確定できなかった。

出土遺物（図版47；44～52）

弥生時代終末期の壺（44）、鉢（45・48・49）、高杯（46・47・50）、脚台（51）、底部（52）が出土している。

44は円形の体部から「く」の字状に屈曲した頸部を持ち、内傾気味に立ち上がる複合口縁を持つ小型の土器で、丸みを帯びた平底を持つ。外面はヘラミガキ、内面はナデを施す。形態的には甕とも考えられるが壺としておく。

45は複合口縁を持つ大型鉢で、外面にはハケ、内面にはヘラケズリとハケを施す。48は複合口縁を持

つ鉢と考えられる。49は台付鉢の破片と思われ、体部外面にはハケ、脚部外面にはヘラミガキを施している。

46・47・50は高杯である。46は外反して大きく開く口縁部を持つ。47は複合口縁を持ち、内外面ともハケの後ヘラミガキを施している。50は脚部で、外面はヘラミガキ、内面はナデを施している。

51は脚台の裾部で、外面にはハケの後ヘラミガキを、内面はナデを施している。

52は突出した平底の底部である。

弥生時代終末期（Ⅵ－２段階）のものと考えられる。

SH2004

遺構（図版16・写真図版13・15）

【検出状況】　B地区の南東隅にかかる形で検出された。後世の削平により、残存状況は1/2程度である。住居内は、細粒の砂を主体とした堆積物で埋没していた。

【規模・形態】　平面形は隅丸方形あるいは方形を呈すると考えられる。南北8.32m以上、東西5.76m以上を測る。

【屋内施設】　北辺と東辺の一部で周壁溝を確認し、中央土坑を検出した。

【周壁溝】　幅が32～40cm、検出面からの深さは20cmである。また周壁溝から住居内に延びる溝1条が検出され、中央土坑につながる。

【中央土坑】　SK2026　南北96cm、東西80cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは40cmである。

【柱穴】　住居内および周辺に、非常に多くの柱穴が存在したこと、段状の造成による撹乱が著しいことから、主柱穴を確定することはできなかった。

出土遺物（図版48；55～59）

弥生時代終末期の壺（55）、器台（56）、甕（57・58）、蓋（59）が出土した。なお、上層では中世前半期の土師器（60～69）、瓦器（70～74）、須恵器（75～78）が出土しているため、これについてもあわせて記載する。

55は球形の体部に筒状の頸部が付き、口縁端部を外反させる壺である。

56は大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を上下に肥厚させて面を作る器台である。擬凹線を施している。外面にハケの痕跡がある。

57・58は甕である。57は球形の胴部から「く」の字状に屈曲した頸部を持ち、口縁は外反する。口縁端部は外側に面を持つ。体部外面にタタキを施している。58は球形の体部から屈曲して外反する口縁部を持つ。

59は蓋である。外面調整は剥離して不明で、内面はナデで仕上げている。

これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１段階）のものと考えられる。

SH2004上層出土の遺物（図版48；60～78）

SH2004の上層では、中世の遺物が顕著なまとまりを示した。特に当該期に属する遺構は検出されなかったが、竪穴住居跡埋没後の凹地において、土器類の廃棄がおこなわれた可能性が考慮される。

60～69は土師器皿である。小型の一群（60～64）と、大型の一群（65～69）とに分離される。69の底部に回転糸切りが認められる他は、いずれも非轆轤整形の製品である。

70～72は瓦器皿、73・74は瓦器椀である。瓦器椀はいずれも丁寧に成形された高台を付けている。73

の口縁部内面には、一条の沈線が巡る。

76～78は須恵器椀である。いずれも高台が形骸化して、体部から直ちに平底に至る。

SH2005

遺構（図版17・写真図版13・15）

【検出状況】　B地区の南東隅、SH2004の北隣に位置する。後世の攪乱により、残存状況は1/3程度である。また住居北側は、大型の土坑によって切られている。住居内は、細粒のシルト質砂を主体とした堆積物で埋没していた。

【規模・形態】　平面形は方形を呈し、南北4.2m、東西1.5m以上を測る小型の住居である。

【屋内施設】　北辺・南辺の一部および東辺に沿って周壁溝があり、東辺中央には住居内土坑がある。

【周壁溝】　幅24～42cm、検出面からの深さ16cmを測る。

【住居内土坑】　平面形は長方形で、長辺75cm、短辺40cm、２段掘りで検出面からの深さ36cmを測る。土坑内からは細片化した土器・礫等が多数出土している。

【柱穴】　確定できなかった。攪乱の影響と、床面に多数の柱穴が重複していたことから、主柱穴を確認し得なかったが、方形住居でありながら、斜面上方側の隅部に柱穴が認められないことから、2本柱であった可能性がある。

出土遺物

図化できる遺物は出土していない。

SH2006

遺構（図版17・写真図版16）

【検出状況】　B地区の東半部、SH2007の東に位置する。後世の攪乱により、約1/2を欠損する。

【規模・形態】　平面形は方形を呈し、南北4.38m、東西2.9m以上を測る。

【屋内施設】　確認されなかったが、検出面からの深度が60cmある点と平面形から住居跡と判断した。

出土遺物（図版48；79）

79は脚台である。外面はナデ、内面はハケとナデを施している。

SH2007

遺構（図版18・写真図版14）

【検出状況】　B地区の東半部、SH2006の西に位置する。後世の攪乱により、約1/2を検出した。

【規模・形態】　平面形は方形で南北4.3m、東西2.7m以上を測る。

【屋内施設】　床面に複数の柱穴が検出された。

【中央土坑】　確認できなかった。

【柱穴】　確定できなかった。攪乱の影響と床面に複数の柱穴が重複していたことから、主柱穴を確認し得なかったが、方形住居でありながら斜面上方側の隅部に柱穴が認められないことから、2本柱であった可能性がある。

出土遺物

柱穴内から弥生土器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

SH2008

遺構（図版19・写真図版16）

【検出状況】　B地区の西半部、遺構集中地点に位置し、SB2001に切られている。西側1/2は削平されて検出できなかった。

【規模・形態】　平面形は円形で、直径5.9m以上を測る。

【屋内施設】　周壁溝、排水溝、中央土坑を確認した。

【周壁溝】　東側1/2周程度のみ残存する。幅18cm、検出面からの深さは13cmである。

【排水溝】　中央土坑と周壁溝を結ぶように「Y」字状に排水溝と考えられる溝が掘削されている。幅は12cm～22cmで、検出面からの深さは6～8cmである。

【中央土坑】　P2943　調査当初、土坑と認識されず柱穴として遺構番号が付された。南北58cm、東西40cmで、検出面からの深さは18cmである。

【柱穴】　床面には複数の柱穴が検出され、主柱穴は4ないし5本と思われる。平面形は円形で、直径は30～40cm、検出面からの深さは15～26cmである。なお、P2941は奈良時代の柱穴である。

出土遺物

柱穴内から弥生土器の細片が出土しているが、図化できるものはない。

SH2009

遺構（図版20・写真図版14・16）

【検出状況】　B地区の西半部、遺構集中地点に位置し、西半分は削平されており、南西隅をSH2010によって切られている。住居内は、細礫を含む砂を主体とする堆積物によって埋没していた。

【規模・形態】　平面形は円形で、一度目の建て替えでは規模はほとんど変わらないが、二度目の建て替えによる拡張が考えられる。当初は直径5.6m程度のものが、拡張後は直径7.9m以上をはかる。

【屋内施設】　周壁溝、中央土坑を確認した。

【周壁溝】　内側の周壁溝は極めて残存状況が悪く、幅8～24cmで検出面からの深さは4cmほどである。外側の周壁溝は幅16～32cmで、検出面からの深さは8cmである。

【中央土坑】　SK2065　平面形は円形で、断面形は逆台形である。直径60cm、検出面からの深さ44cmを測る。土坑上部は、緩やかに掘り込まれているが、深さの半ばから急斜度の掘り込みとなり、ほぼ平坦な下底面に至る。埋土下半には炭化物が多く含まれていた。

【柱穴】　床面では多数の柱穴が検出されたが、この住居に伴う柱穴を確定できなかった。

出土遺物（図版48；80・81）

床面直上から弥生時代の高杯（81）が出土しているほか、装飾壺の一部（80）も出土している。

80は装飾壺と思われる破片である。ヘラ描きの鋸歯文を施し、貼り付け突帯の上には半截竹管によるスタンプ文を配する。

81は浅い杯部から外反して立ち上がる口縁を持つ高杯である。杯部の内外面に丁寧なヘラミガキを施す。

弥生時代後期（V期後半）のものと考えられる。

SH2010

遺構（図版18・写真図版14・16）

【検出状況】　B地区の西半部、遺構集中地点に位置し、SH2009の南西隅を切っており、SB2004に切られている。西側2/3は削平されている。攪乱のため、住居内埋土は遺存していなかった。

【規模・形態】　平面形は方形を呈し、南北4.1m、東西1.5m以上を測る。

【屋内施設】　周壁溝および住居内土坑を確認した。

【周壁溝】　幅12～20cm、検出面からの深さは12cmである。

【住居内土坑】　SK2068　住居西辺のほぼ中央に、周壁溝を拡張するようにして設けられている。南北96cm、東西70cmで、検出面からの深さは16cmである。

【柱穴】　攪乱の影響で主柱穴を確認し得なかったが、方形住居でありながら、斜面上方側の隅部に柱穴が認められないことから、2本柱であった可能性がある。

出土遺物（図版51；127）

SK2068より高杯1点が出土している。127は、口縁の屈曲部に明瞭な段を形成する深い杯部を持つ高杯である。緩やかに広がる脚柱部から屈曲して大きく開く裾部を持つ。表面の剥離が著しいため明瞭ではないが、脚柱部外面にはヘラミガキを施していると思われ、内面にはシボリ痕が認められる。古墳時代中期のものと考えられる。

3．掘立柱建物跡（図版5）

A・B両地区合わせて、9棟の掘立柱建物跡を検出した。このほかにも多数の柱穴が見られることから、掘立柱建物跡の数はさらに多かった可能性が高いが、復元には至らなかった。掘立柱建物跡の所属時期は、弥生時代、奈良～平安時代、鎌倉時代に大別される。

SB1001

遺構（図版21・写真図版5）

【検出状況】　A地区東部に位置する。1間×3間まで確認し得たが、特に建物跡西側における開墾による削平の可能性を考慮する必要があろう。

【規模・形態】　1間×3間まで確認されており、建物の長軸はほぼ南北方向を示す。東側の柱列で図上計測した方位は、N0.5°Eである。柱間は南北（桁行）2.3m～2.5m、東西（梁行）2.5mを測る。南北の柱間のうち、中央の1間は、南北の1間よりも柱間がやや広い。柱穴の中心をもとに計測するならば、建物の規模は、南北7.3m×東西2.5m、床面積は18.25㎡である。

【柱穴】　柱穴は概ね不整円形を呈し、その規模にも、長径35cm前後から一辺60cmまでの幅が認められる。柱穴の深さは10～30cmを測る。

出土遺物（図版51；141・144）

141は、柱穴P1192より出土した、須恵器皿である。平坦な底部から、厚みをもった口縁部が引き出されている。底部は糸切りである。

144は、柱穴P1222より出土した、土師器皿である。平坦な底部から、ゆるやかに屈曲して立ち上がる体部を見せる。表裏とも風化により調整は不明である。

SB1002

遺構（図版21・写真図版５）

【検出状況】　Ａ地区東部に位置する。

【規模・形態】　２間×３間の側柱式建物跡である。建物の長軸は、ほぼ正しく南北方向に沿う。東辺の柱列で図上計測した方位は、N3°Eである。南北（桁行）の柱間は、中央の1間が1.8m、南北では2.5m～2.9mと、大きく異なっている。東西（梁行）の柱間は1.85m～2.1mを測る。柱穴の中心をもとに計測した建物の規模は、南北7.0m×東西4.0m、床面積は28.0㎡である。

【柱穴】　柱穴は不整円形を呈し、その規模は、長径20～40cmと、ややばらつきが大きい。深さは10～30cmを測る。

出土遺物（図版51；140・142）

140は柱穴Ｐ1175より出土した須恵器椀である。膨らみに乏しい体部を見せ、口縁部は丸くおさめている。

142は柱穴Ｐ1196より出土した須恵器皿口縁部の破片である。

このほかに図示可能な遺物は出土していないが、柱穴Ｐ1156より12～13世紀代に属すると思われる須恵器椀の破片が出土しているほか、柱穴Ｐ1149・1150・1264から須恵器・土師器の細片が出土している。

SB1003

遺構（図版21・写真図版５）

【検出状況】　Ａ地区東部に位置する。

【規模・形態】　側柱式の建物跡である。わずかに１間×１間を復元し得たのみであるが、削平による柱穴の喪失を考慮せねばならないだろう。建物の長軸は、北西－南東方向の傾きを見せており、東の柱列で図上計測した方位は、N11°Wである。柱間は南北3.0m・3.2m、東西3.0mを測る。南北の柱間のうち、柱穴の中心をもとに計測した、建物の床面積は9.0㎡である。

【柱穴】　柱穴は不整円形～不整楕円形を呈し、規模は、長径42～60cm、深さは10～40cmを測る。

出土遺物

図示可能な遺物は出土していない。柱穴Ｐ1172より須恵器の細片が出土しているが、時期の判断は困難である。他の柱穴からは、弥生土器の細片のみが出土している。

SB1004

遺構（図版22・写真図版５）

【検出状況】　SB1004は、Ａ地区東部に位置する。２間×４間まで確認できたが、削平によって北西角の柱穴を喪失しており、さらに規模が大きかった可能性が考慮される。

【規模・形態】　総柱式の建物跡で、２間×４間まで検出された。建物の長軸は、ほぼ南北方向に沿っており、東辺の柱列で図上計測した方位は、N1.5°Wである。南北（桁行）の柱間は、2.6m～2.9m前後、東西（梁行）は2.2m～2.6mを測る。柱穴の中心をもとに計測した建物の規模は、南北10.6m×東西5.0m、床面積は53.0㎡である。

【柱穴】　柱穴は不整円形を呈し、その規模は長径20～40cm、深さは15～35cmを測る。

出土遺物（図版51；130・132）

130は、柱穴Ｐ1054より出土した須恵器椀である。平坦な底部から、ほぼ直線的に立ち上がる体部を

見せる。口縁端部は、わずかに肥厚気味に丸くおさめられる。底部と体部の境界はやや不鮮明で、底径・口径ともに拡大し器高が低い点は、同器種の中では後出的要素と言えよう。

132は、柱穴P1064より出土した瓦器椀である。底部を欠損する。体部中央で屈曲し、やや肥厚気味に口縁端部に至る。

その他の柱穴からは、図示可能な遺物は出土していない。柱穴P1059で平高台をもつ須恵器椀、P1048・1050では須恵器椀のそれぞれ細片が出土しているほか、P1068で瓦器椀、P1071・1045・1050で土師器皿の細片が出土している。

SB1005

遺構（図版22・写真図版6）

【検出状況】　A地区の西部、湿地部に隣接する位置にある。

【規模・形態】　1間×2間の南北棟で、主軸方向はN33°Eを測る。西側柱列はすべて単独で構成されるが、東側柱列に接して複数の柱穴が不規則に設けられており、柱の補強であった可能性がある。

【柱穴】　直径20～40cm、深さ10～40cmを測る。一部の柱穴には、柱根が遺存していた。

出土遺物（図版51；143）

建物跡の主柱穴のうち、P1212からは細片の弥生土器が出土している。また建物跡に附設されたと思われるP1211からは、高杯脚が出土している。

143は高杯の脚部である。外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリを施している。古墳時代前期（布留式併行）のものと思われる。

SB2001

遺構（図版23・写真図版17）

【検出状況】　SB2001は、B地区西部に位置する。現地表面に見られる段差に伴う溝が建物跡内を縦断しているため、一部の柱穴の上部が削平されている。

【規模・形態】　側柱式2間×4間の南北棟である。建物の長軸は、わずかに北西－南東方向の傾きを見せており、東の柱列で図上計測した方位は、N1.5°Wである。柱間は南北（桁行）1.00m～1.40m、東西（梁行）1.10m～1.20mを測る。南北の柱間のうち、北側の2間で柱間が1.4m前後を測るのに対し、南側2間では1.0m前後と、建物の南半と北半で明瞭な違いが認められる。柱穴の中心をもとに計測するならば、建物の規模は、南北4.7m×東西2.3m、床面積は10.8㎡である。

【柱穴】　柱穴は不整円形・隅丸方形・方形など、ばらつきの多い形態を示し、その規模にも、長径35cm前後から一辺52cmまでの幅が認められる。柱痕の直径は、15～20cmを測る。深さは10～30cmを測り、柱穴規模から推察して相当程度の削平を受けているものと思われる。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。各柱穴内の遺物のほとんどが、細片化した弥生土器ないしは須恵器であった。P3003より、須恵器杯B底部が出土している。

SB2002

遺構（図版23）

【検出状況】　SB2002は、B地区西部に位置する建物跡である。現地表面に見られる段差に伴う溝が建物跡内を縦断しており、西側および北側の柱列が削平されている。

【規模・形態】　側柱式と考えられるが、削平によって西辺・北辺の柱穴を喪失しており、検出されたのは1間×4間までである。建物の長軸は、ほぼ正しく南北方向に沿う。東辺の柱列で図上計測した方位は、N2.0°Eである。南北（桁行）の柱間は、1.00m・1.40m・0.95m・1.00mと、ばらつきを見せ、東西（梁行）は1.00mを測る。

【柱穴】　柱穴は不整円形ないしは隅丸方形を呈し、その規模は、長径28～44cmを測る。柱痕の直径は、15～20cmを測る。深さは5～15cmを測り、柱穴規模から推察して相当程度の削平を受けているものと思われる。

出土遺物（図版49；82～85・図版53；724）

82・83は、須恵器杯B底部である。82ではやや外方に張り出した高台を付している。いずれも底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。P3018より出土。

84・85はP3019より出土した。

84は白磁合子の身である。外面は型抜きにより細かな花弁状を呈する。体部外面下部から底面は無釉である。本資料はP3019の柱痕埋土上部より出土しており、他の柱穴内出土遺物とは隔絶した時期差をもつ遺物であるため、柱穴埋没後、何らかの二次的な要因で混入した可能性を排除できない。

85は須恵器杯Aである。平坦な底部から、屈折して急斜度に立ち上がる口縁部を見せる。底部はヘラ切り無調整である。

724は、P3011から出土した須恵器杯Aである。底部を欠くが、直線的に延びる口縁部を見せる。

SB2003

遺構（図版24・写真図版17）

【検出状況】　SB2003は、B地区西部に位置する。削平によって北西部の柱穴を喪失している。

【規模・形態】　側柱式の建物跡である。2間×5間の南北棟であろう。建物の長軸は、北西－南東方向の傾きを見せており、東の柱列で図上計測した方位は、N6°Wである。柱間は南北（桁行）1.05m～1.15m、東西（梁行）1.24m・1.36mを測る。南北の柱間のうち、柱穴の中心をもとに計測した建物の規模は、南北5.55m×東西2.55m、床面積は14.1㎡である。

【柵・溝】　SB2003の東側には、SD2027および4基の柱穴からなる柵SA2001が接している。

SD2027は、延長5.4m、幅0.4mを測り、SB2003の東側柱列南半に接するように、南北に延びる。ごく浅いことから、雨落ち溝状の遺構と判断した。

SA2001は4基の柱穴からなり、柱間は、1.5m・2.2m・2.7mとばらつきが大きい。延長は6.4mを測る。SB2003の東側柱列とはわずかに方位がずれており、むしろSB2002の方位に近い感もあるが、SB2002に対応するとすれば柱穴列の位置に問題を残すこと、他に対応する柱列を検出できなかったこと等から、SB2003の付属的施設の可能性を考慮している。

【柱穴】　柱穴はおおむね不整円形～不整楕円形を呈し、規模は、長径34～50cmまでの幅が認められる。柱痕の直径は15cm前後を測る。深さは5～20cmを測り、相当程度の削平を受けているものと思われる。

出土遺物（図版53；725～728・図版49；734）

725は、須恵器壺の底部であろう。逆三角形状に、やや外方へ張り出した高台を付している。P3031より出土。

726は、須恵器杯Aである。平坦な底部から、屈折して直線的に立ち上がる口縁部を見せる。底部は

ヘラ切り後ナデ調整を施す。P3034出土。

727は、土師器杯である。内外面ともに丁寧なヘラミガキを施している。P3034より出土。

728は内彎気味に上方にのびる口縁部を持つ複合口縁の甕である。体部外面はハケ、内面はナデで仕上げている。弥生時代後期末の所産であろう。P3042より出土。

図示した遺物の他に、P3031より9世紀末～10世紀代の所産と推定される椀底部が出土している。

SB2004

遺構（図版25・写真図版18）

【検出状況】SB2004は、B地区西部に位置する。

【規模・形態】側柱式の建物跡である。溝（SD2001）との重複および削平によって、南西側の柱穴を一部喪失しているが、2間×5間の建物跡と考えられる。建物の長軸は、わずかに北西－南東方向の傾きを見せており、北辺の柱列で図上計測した方位は、N89°Eである。

東西（桁行）の柱間は、1.50m前後、南北（梁行）は1.30m～1.40mを測る。柱穴の中心をもとに計測した建物の規模は、南北7.45m×東西2.70m、床面積は20.1㎡である。

【柱穴】柱穴は不整円形ないしは隅丸方形を呈し、その規模は、長径40～62cmを測る。柱痕の直径は、15～20cm前後を測る。深さは15～30cmを測り、相当程度の削平を受けているものと思われる。

出土遺物（図版49；86～88・734・736）

86は、須恵器杯Bである。底部から屈折して、急斜度に立ち上がる口縁部を見せる。口縁端部を欠く。SK2059より出土。

87は、須恵器杯Aである。やや膨らみをもつ底部から、屈折して直線的に立ち上がる、開きの大きな口縁部を見せる。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。SK2002より出土。

88は、須恵器椀である。削り出しによる平高台をもち、底部は回転糸切りである。体部は膨らみをもちつつ立ち上がり、口縁部は外反気味に終わる。SK2001より出土。

734は緑釉陶器皿である。直線的な体部は、下半でわずかに肥厚して体部外面に弱い稜を形成する。P3204より出土。

736は外反して開く口縁を持ち、口縁端部を上方に肥厚させる壺である。残存状況が悪いため、器面調整は不明である。弥生時代後期（V期後半）と考えられる。P3217より出土。

4．柵（図版5）

B地区北西部の2か所で柱穴列を検出し、柵と判断した。SA2001については、すでにSB2003の項で記載しているため、ここではSA2002について記載をおこなう。

SA2002

遺構（図版26・写真図版18）

【検出状況】　B地区北西部に位置する。

【規模・形態】　4基からなる柱穴列で、柱間は1.8m～2.0m、延長は5.7mを測る。図上計測した方位は、N87.5°Wである。

【柱穴】　隅丸方形ないしは不整円形を呈し、長径50～70cmを測る。深さは20cm前後と浅く、削平の影響が考慮される。柱痕は直径25cm前後を測る。P2229・2195では、掘方内に複数の大型礫が埋置されて

いた。

出土遺物

P2208より須恵器の細片が出土しているが、図示できる遺物は出土していない。

5．土坑（図版6）

調査時点では、A地区25基、B地区68基の合計93基を土坑として認識し、SK番号を付したが、調査途上で大型掘立柱建物跡の柱穴であることが確認されたもの、ないしは遺構ではないことが確認されたものについては、これを除外して欠番とした。以下では、これらの記載をおこなうが、竪穴住居跡に伴う土坑については、住居跡の項で記載しているため、本項では除外する。

SK1001

遺構（図版27）

A地区北東端に位置する長楕円形の土坑で、北半は調査区外へ延びる調査範囲での長径1.23m、短径0.58m、深さ0.16mを測る。土坑底面は、わずかに皿状の凹面をなす。

出土遺物

弥生土器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SK1002

遺構（図版27）

A地区北東部のSH1001の範囲内に位置する、楕円形の土坑である。長径1.43m、短径92cm、深さ17cmを測る。土坑中央やや南寄りの位置に、歪んだ楕円形の小穴（長径44cm、短径36cm、深さ6cm）が掘り込まれている。土坑底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物（図版49；89）

89は、杯部が椀状を呈する高杯（あるいは鉢か）である。

SK1003

遺構（図版27）

A地区北東部に位置する、不整形な土坑である。土坑南側は削平のため喪失しており、遺存部分では長径1.46m、短径1.08m、深さ4cmを測る。土坑底面は、遺跡地形面の傾斜と同様、東から西へ大きな傾斜を見せる。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1004

遺構（図版29・写真図版7・8）

A地区南東部に位置する土坑である。楕円形を呈する西半部から不整形な東半部が突出した、瓢箪形を呈する。長径2.42m、短径1.50m、深さ30cmを測る。土坑底は皿状を呈する。土坑東半部の深さは、西半部の半分以下であり、中央部でさらに浅くなって西半部の掘込みに至るため、複数の土坑が重複していた可能性も考慮されたが、平面・断面における精査検討では、重複を確認することができなかった。土坑内下底は、シルト、上部は砂ないしは礫混じりの砂によって埋没しており、土坑掘削後、ある程度の時間的間隙を経て急速に自然埋没したものと判断される。

西半部の北西側からは、一括して廃棄された様相を示す多数の角礫とともに、土師器・須恵器・瓦器等が出土している。SK1004は、SB1004の南西部に重複した位置にあり、出土遺物からもほぼ同時期の所産であることが確認できる。土器を含む礫の廃棄が土坑の北西側（SB1004の屋内側）から行われている点もふまえるならば、両者の有機的関連が想起される。

出土遺物（図版49；90～101）

90～97は、土師器皿である。口径８cm、器高1.5cm前後を測る小型の一群（90～95）と、口径13cm前後、器高３cm強前後を測る大型の一群（96・97）に分けられる。

90～95は、いずれも粘土板から成形されたものと考えられ、やや不整形な底部から口縁部に至る境界は不明瞭なものが多数を占める。内外面ともナデ調整が施されるが、90・93などでは指頭圧痕が顕著に観察される。また、94の口縁部内面には煤の付着が認められる。

96は、丸みをおびた底部から、屈折して立ち上がる口縁部を見せる。内外面ともにナデ調整が施されており、屈曲部の外面には指頭圧痕が残される。

97は、ほぼ平坦な底部から、丸みをもって立ち上がる口縁部を見せる。内外面ともにナデ調整が施される。

98～101は瓦器である。

98・99は皿である。98は中央部がやや盛り上がる底部から屈曲して立ち上がる口縁部を見せる。内外面ともにナデ調整が施される。99は平坦な底部から屈曲して立ち上がる口縁部を見せる。外面はナデ、内面はハケ調整が施される。

100・101は椀である。100は、底部から体部まで膨らみをもった形態を示す。底部には断面三角形の高台が貼付けられており、口縁部にかけてわずかに器壁の厚みを増しながら丸くおさめている。内面には横方向の暗文（ヘラミガキ）が施されているが、内底面については器表面の摩耗のため不明である。101も、100と同様の形態を示す。器面調整は摩耗のため不明である。

SK1005

遺構（図版27）

Ａ地区南東部に位置する、不整楕円形の土坑である。長径80cm、短径62cm、深さ８cmを測る。土坑底は、ほぼ平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1006

遺構（図版27）

Ａ地区のSK1004西に隣接する 不整形な土坑である。長径1.10m、短径55cm、深さ29cmを測る。土坑底は平坦である。土坑西側は、削平により著しく深さを減じている。

出土遺物

土坑内からは、中世の所産と思われる須恵器椀細片が出土しているが、図示できるものはない。

SK1008

遺構（図版27・写真図版８）

Ａ地区中央部やや南寄りに位置する不整長楕円形の土坑である。長径1.41m、短径82cm、深さ17cmを

測る。土坑底面は、不整形な船底形を呈する。土坑は、小礫を含むシルト質の細砂で自然埋没していた。

出土遺物（図版49；102～107）

102は製塩土器である。内外面とも指頭圧痕が認められる。

104は複合口縁を持つ甕である。弥生時代終末期（Ⅵ－１期）のものと思われる

103・105は土師器の鍋である。103は外面にナデを施し、何らかの擦痕が認められる。口縁部を強いヨコナデで仕上げる。105は外面にハケ目を施し、内面は板ナデを施す。

106は高杯の脚柱部である。外面にはヘラミガキを施し、内面にはシボリ痕が残る。

107は須恵器高杯の脚部である。裾部に突帯をめぐらせ、長方形のスカシを四方に穿つ。

SK1009

遺構（図版27）

Ａ地区南東部に位置する、不整長楕円形の土坑である。長径1.20m、短径40cm、深さ14cmを測る。土坑底面は、ほぼ平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1010

遺構（図版27）

Ａ地区南東部に位置する、溝状を呈する土坑である。長さ2.90m、短径54cm、深さ21cmを測る。土坑底は船底形を呈し、下層は細砂、上層は礫混じりのシルト質細砂で自然埋没しており、やはり溝的な様相を示す。

出土遺物（図版50；108・109）

108は土師器鍋である。口縁部付近のみの破片であるが、直線的に延びる体部と、内面側に肥厚する口縁部を見せる。体部外面は、横方向のタタキが施される。岡田・長谷川の分類によれば（岡田章一・長谷川眞　2003）、鍋形タイプ鉄かぶと形Ｉ類に相当し、15世紀代に成立したものとされている。

109は丹波焼擂鉢の底部である。平坦な底部から、急斜度に立ち上がる体部を見せる。内面にはヘラ描きのおろし目が認められる。口縁部を欠くため詳細は不明であるが、概ね16世紀代中葉以降の所産と思われる。

SK1011

遺構（図版27）

Ａ地区東部に位置する、不整長方形の土坑である。長辺2.04m、短辺1.38m、深さ28cmを測る。土坑の北西隅と南西隅は、掘方が明瞭ではなく、土坑外に向けて溝状に延びるように見える。土坑底面は、ほぼ平坦である。土坑は、シルト質の細砂～粗砂で自然埋没している。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1012

遺構（図版28・写真図版８）

Ａ地区東部に位置する、不整楕円形を呈する土坑である。長径2.35m、短径1.69m、深さ45cmを測る。土坑底は２段の船底形を呈する。土坑は、主として砂礫からなる堆積物によって埋没しており、その堆

積状況から急速に自然埋没したものと考えられる。

出土遺物（図版50；110～113）

埋土中より弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等が出土している。上述のような土坑内の堆積状況から、これらすべてについて本来土坑に伴ったものと判断することはできない。

110は、土師器羽釜である。口縁部付近のみの細片であり、鍔端部も欠損する。外面は横方向のタタキ、内面は横方向のハケにより調整される。

111は、瓦器椀である。膨らみをもった体部は、器高2/3付近でわずかに屈曲し口縁部に至る。断面三角形の高台が貼付けられる。器面調整は風化のため不明である。

112・113は須恵器椀である。いずれも、糸切りによる平坦な底部から、膨らみに乏しい体部が立ち上がる。底部・口径の大型化、器高の扁平化の傾向を見せる。

114は甕である。「く」の字形に屈曲した頸部から外反気味に延びる口縁部を持つ。外面にハケ目が残り、内面頸部下には指頭圧痕が認められる。古墳時代前期（布留式併行）のものと思われる。

SK1013

遺構（図版27）

A地区中央部東寄りに位置する、不整隅丸長方形の土坑である。長辺1.36m、短辺93cm、深さ12cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1014

遺構（図版28）

A地区中央部東寄りに位置する、隅丸長方形の土坑である。長辺1.24m、短辺93cm、深さ10cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。また、磁器の細片も出土したが、混入の疑いがある。

SK1015

遺構（図版28）

A地区中央部北寄りに位置する、隅丸長方形の土坑である。長辺1.15m、短辺82cm、深さ11cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1017

遺構（図版28）

A地区中央部に位置する、不整楕円形の土坑である。長径1.32m、短径58cm、深さ15cmを測る。土坑南端は、重複する柱穴によって切られている。また西側の土坑上端が、大幅に削平されている。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1019

遺構（図版28）

A地区中央部北寄りに位置する、不整形な土坑である。長径1.33m、短径1.05m、深さ22cmを測る。土坑底は比較的平坦である。

出土遺物

埋土中より須恵器椀の細片、弥生土器等が出土しているが、図示できるものはない。

SK1020

遺構（図版28）

A地区中央部に位置する、不整楕円形の土坑である。長径98cm、短径57cm、深さ12cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1021

遺構（図版28）

A地区中央部北寄りに位置する、不整形な土坑である。長径1.82m、短径93cm、深さ28cmを測る。土坑底面には、不規則な柱穴状の掘込み3か所が認められる。

出土遺物（図版84；S1）

埋土中より剥片1点が出土した。他に弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

S1は、白色半透明のチャート剥片である。背面の剥離痕から、打面転移を繰り返す石核から剥離されたものと考えられる。打面は折損している。縄文時代以前の所産である可能性が高い。

SK1023

遺構（図版28）

A地区北東部のSH1001内に位置する、不整楕円形の土坑である。長径88cm、短径50cm、深さ9cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK1024

遺構（図版28）

A地区中央部に位置する、瓢子形の土坑である。長径1.38m、短径1.29m、深さ57cmを測る。土坑内南東側は、段状に掘り込まれている。土坑底は不規則な深い掘込みを見せる。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2003（SK2064と同一）

遺構（図版30）

B地区西部に位置する、不整方形の土坑である。調査区設定の関係上東西に分断して調査されたため、

後半に調査した部分がSK2064と呼称されている。長辺1.34m、短辺1.20m、深さ21cmを測る。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2004

遺構（図版30）

B地区西部のSH2002北半に位置する、大型の不整隅丸方形の土坑である。長辺3.70m、短辺1.96m、深さ57cmを測る。住居埋没後に掘り込まれた土坑で、細礫を含むシルト質細砂を主体とする堆積物によって自然埋没している。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物（図版50；115～120）

壺と甕が出土している。115は球形の体部から短い頸部が直立気味に立ち上がり、外反する口縁部から端部が斜め上方に拡張される二重口縁壺である。底部は突出気味の平底であったと思われる。外面はハケの後ヘラミガキを施し、内面は底部付近にはヘラケズリを施し、体部にはハケ目調整を行う。口縁部内外面にもヘラミガキを施す。116は丸みを帯びた体部から口縁部が外反気味に開いたのち、斜め上方に立ち上がる口縁端部を持つ二重口縁壺である。口縁部外面には半截竹管による波状文と竹管文をあしらい、頸部に刻み目を入れた断面三角形の突帯をめぐらせている。117は球形の体部に突出した小さな平底がつく壺である。内面は下半部にハケ、頸部下にはヘラケズリを施し、外面にはヘラミガキを施しているようである。

118は「く」の字形に屈曲した頸部から外反してのびる口縁を持ち、口縁端部を斜め上方に肥厚させる甕である。外面はハケの後ナデ、内面は板ナデを施している。119は頸部の屈曲が緩く、単純に外反する口縁部を持つ甕である。外面にはハケ、内面は口縁から頸部にかけてハケ、体部はヘラケズリを施している。120は丸みを帯びた体部から、「く」の字形に屈曲した頸部から斜め上方にのびる口縁を持つ。口縁端部は外傾して面を持つ。口縁部を含め、内外面にハケを施す。

以上の土器は弥生時代終末期（Ⅵ－２古段階）のものと考えられる。

SK2009

遺構（図版30）

B地区西部に位置する、不整卵形の土坑である。長径91cm、短辺70cm、深さ24cmを測る。北側が急斜度の掘込みを見せるのに対し、南側は緩やかである。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2011

遺構（図版30）

B地区西部に位置する、楕円形の土坑である。長径92cm、短径45cm、深さ17cmを測る。土坑は地山ブロックを含む極細砂～細砂によって埋没しており、堆積物の状況から、人為埋没の可能性を考慮しうる。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2014

遺構（図版30）

B区最東端に位置する、楕円形の土坑である。長径1.02m、短径70cm、深さ46cmを測る。掘方中位以下はほぼ垂直に掘り込まれる。土坑内は粗砂または砂礫によって埋没している。

出土遺物

埋土中より中世の須恵器椀の細片、弥生土器等が出土しているが、図示できるものはない。

SK2016

遺構（図版30）

B地区南東隅、SH2004の西に位置する、楕円形の土坑である。長径1.35m、短径1.08m、深さ43cmを測る。土坑内は炭化物を含む細砂によって埋没していた。土坑底面は、緩やかな船底状をなす。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2017

遺構（図版30）

B地区南東隅に位置する、不整隅丸方形の土坑である。長辺1.85m、短辺1.13m、深さ23cmを測る。土坑内は細砂～粗砂によって埋没していた。土坑底面は、波状の凹凸を見せる。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2018

遺構（図版31）

B地区南東隅に位置する、不整楕円形の土坑である。長径1.65m、短径1.05m、深さ31cmを測る。土坑内は極細砂～細砂によって埋没していた。土坑底面は、緩やかな船底状をなす。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2019

遺構（図版31）

B地区南東隅に位置する、浅い皿状の掘方を見せるほぼ円形の土坑である。長径1.50m、短径1.40m、深さ16cmを測る。土坑内は極細砂～細砂によって埋没していたが、これに多くの角礫をまじえる。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2022

遺構（図版31）

B地区南東隅に位置する、不整円形の土坑である。長径1.21m、短径1.18m、深さ38cmを測る。土坑底は船底形を呈する。土坑内はシルト～粗砂によって埋没しており、大型の角礫をまじえる。

出土遺物（図版50；121）

121は美濃天目椀である。膨らみをもつ体部から、外反する口縁部に至る。中世後半期以降の所産で

あろう。

SK2023

遺構（図版31）

Ｂ地区南東部に位置する、不整円形の土坑である。SH2005を切って掘り込まれている。長径1.69m、短径1.63m、深さ13cmを測る。土坑内は細礫を含む細砂によって埋没していた。また、土坑中央付近から、ボルダー級の角礫１点が出土した。土坑底面には、緩やかな凹凸が見られる。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2024

遺構（図版31）

Ｂ地区南東部に位置する、不整楕円形の土坑である。長径2.98m、短径1.55m、深さ12cmを測る。土坑底面には、３基の柱穴とともに緩やかな凹凸が見られる。

出土遺物

須恵器・弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2028

遺構（図版31）

Ｂ地区東部に位置する、不整円形の土坑である。長径69cm、短径66cm、深さ15cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2029

遺構（図版31）

Ｂ地区東部に位置する、不整円形の土坑である。長径1.02m、短径86cm、深さ12cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2031

遺構（図版31）

Ｂ地区中央部に位置する、長方形の土坑である。長辺1.23m、短辺76cm、深さ16cmを測る。土坑内は細礫を含む細砂によって埋没していた。土坑底面は平坦である。

出土遺物（図版51；122・123）

122は土師器椀底部である。底部には回転糸切り痕が認められる。

123は土師器鍋である。大きく開く口縁部から、緩やかに屈曲して比較的浅い体部に至る。頸部は肥厚し、内面に稜線を形成する。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施される。

SK2032

遺構（図版31）

Ｂ地区中央部に位置する、不整円形の土坑である。長径76cm、短径65cm、深さ36cmを測る。

出土遺物

須恵器・弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2033

遺構（図版32）

B地区中央部に位置する、不整楕円形の土坑である。長径1.08m、短径86cm、深さ41cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2034

遺構（図版32）

B地区中央部に位置する、不整卵形の土坑である。長径1.32m、短径94cm、深さ25cmを測る。土坑底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土している。

SK2035

遺構（図版32）

B地区中央部南寄りに位置する、円形の土坑である。斜面下方側（西側）上端は、東側に比べ約半分ほどの高さにまで削平されている。直径72cm、深さ34cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物

弥生土器の細片が多数出土しているが、図示できるものはない。

SK2036

遺構（図版32）

B地区中央部南半に位置する、不整円形の土坑である。長径66cm、短径60cm、深さ12cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物

須恵器・土師器が出土しているが、図示できるものはない。須恵器には、杯B底部の細片が含まれる。

SK2037

遺構（図版32）

B地区中央部南半に位置する、楕円形の土坑である。著しい削平のため、斜面下方側（西側）上端は僅かな高さを保つにすぎない。長径87cm、短径68cm、深さ38cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2038

遺構（図版32）

B地区中央部南半のSH2007内に位置する、円形と考えられる土坑である。削平により、西半を喪失している。直径62cm、深さ16cmを測る。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2039

遺構（図版32）

B地区中央部南半に位置する、平行四辺形の土坑である。長辺1.20m、短辺90cm、深さ34cmを測る。土坑底面は、平坦である。

出土遺物

近代以降の陶器片が出土している。

SK2041

遺構（図版32）

B地区中央部南半に位置する、羽子板形の土坑である。長辺4.39m、短辺1.34m、深さ14cmを測る。土坑内は粘性の強いシルトによって埋没していた。底面は凹凸が顕著で、柱穴2基が検出された。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2042

遺構（図版32）

B地区中央部南半に位置する、隅丸長方形の土坑である。長辺1.15m、短辺71cm、深さ39cmを測る。土坑内は粘性の強いシルトによって埋没していた。底面は平坦である。

出土遺物

須恵器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SK2043

遺構（図版32）

B地区中央部南半に位置する、不整円形の土坑である。長径1.03m、短径1.02m、深さ31cmを測る。底面は緩やかな凹面をなす。

出土遺物

弥生土器のほかに近代の磁器が出土しているが、図示できるものはない。磁器は混入の疑いが強い。

SK2044

遺構（図版33）

B地区中央部南半に位置する、不整楕円形の土坑である。長径1.08m、短径63cm、深さ26cmを測る。北側の掘込みは垂直に近く、南側では緩やかとなる。土坑底面は、北側に下がる傾斜を見せる。土坑内は礫を含む細砂によって埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2045

遺構（図版33・写真図版19）

B地区中央部南端に位置する、不整円形の土坑である。長径1.09m、短径98cm、深さ43cmを測る。土坑底面は、北側に下がる傾斜を見せる。土坑内はコブル級の礫を含むシルト質砂（上層）と、ペブル級

以下の礫を主体とする砂礫によって埋没していた。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2046

遺構（図版33）

B地区南西部に位置する、不整円形の土坑である。長径58cm、短径53cm、深さ11cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2047

遺構（図版33・写真図版19）

B地区南西部に位置する、不整長方形の大型土坑である。長径4.81m、短径1.96m、深さ59cmを測る。土坑西側3/4は、一段深く掘り込まれている。東側の土坑底面に、柱穴状の掘り込み3か所が認められる。土坑底面は、西側では不規則な凹凸を見せる。土坑内は細礫を含む細砂～粗砂によって埋没していた。

出土遺物（図版51；124・125・図版86；S20）

124は土製の玉である。

125は高杯の脚部である。外面にはヘラミガキ、内面にはハケとヘラケズリを施す。円形の穿孔が4カ所に認められる。弥生時代終末期のものと思われる。

S20は、SK2047上面より出土した叩石である。形状が石斧の身部に類似しており、あるいはその破損品を転用したものかもしれない。

SK2048

遺構（図版33・写真図版19）

B地区南西部に位置する、楕円形の大型土坑である。長径3.06m、短径1.45m、深さ29cmを測る。土坑底面は、緩やかな船底状をなす。土坑内は細礫を含む細砂によって埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2049

遺構（図版33）

B地区南西部に位置する、長方形の土坑である。長辺2.33m、短辺1.18m、深さ28cmを測る。斜面下方側（西側）上端は、東側に比べ約半分ほどの高さにまで削平されている。土坑底面は、平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2050

遺構（図版33）

B地区南西部に位置する、「ノ」の字形の土坑である。長径2.00m、短径90cm、深さ21cmを測る。底面は緩やかなV字形を呈する。土坑内は、コブル級の礫を含む砂礫によって埋没していた。自然為によ

り形成された可能性も捨象できない。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2051

遺構（図版34）

B地区南西部に位置する、不整「T」字形の土坑である。土坑底面は、平坦ないしは緩やかな船底状を呈する。長辺1.67m、短辺1.35m、深さ41cmを測る。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2052

遺構（図版34）

B地区西部に位置する、隅丸長方形の土坑である。長辺80cm、短辺58cm、深さ10cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。土坑内は細砂によって埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2053

遺構（図版34・写真図版19）

B地区西部のSH2008西に隣接して位置する、長楕円形の土坑である。長径2.00m、短径92cm、深さ16cmを測る。土坑底面は、緩やかな凹面をなす。土坑内は細礫混じりの細砂によって埋没していた。

出土遺物（図版51；126）

126は小型の甕、あるいは鉢の底部である。内外面ともナデで仕上げる。

SK2054

遺構（図版34）

B地区西部に位置する、溝状の土坑である。長さ4.08m、幅1.03m、深さ30cmを測る。土坑底面は、平坦である。土坑内は細砂によって自然埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2055

遺構（図版34・写真図版19）

B地区西部に位置する、楕円形の土坑である。長径1.37m、短径87cm、深さ21cmを測る。土坑中央に、柱穴状の掘込み（長径40cm、短径32cm、深さ10cm）を設ける。土坑内は、細礫を多量に含む細砂によって埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2058

遺構（図版34）

B地区西部に位置する隅丸方形の土坑である。長辺95cm、短辺88cm、深さ17cmを測る。

出土遺物

遺物は出土していない。

SK2061

遺構（図版34）

B地区の西部に位置する、不整台形を呈する土坑である。長径1.46m、短径1.14m、深さ10cmを測る。土坑底は比較的平坦である。

出土遺物

埋土中より糸切り底の平高台をもつ須恵器椀の細片、弥生土器等が出土しているが、図示できるものはない。

SK2062

遺構（図版34）

B地区の西部に位置する、不整楕円形を呈する土坑である。長径1.41m、短.86cm、深さ48cmを測る。土坑底は比較的平坦である。

出土遺物

須恵器・弥生土器等が出土しているが、図示できるものはない。

SK2066

遺構（図版34）

B地区西部、SH2009内に位置する、楕円形の土坑である。長径70cm、短径38cm、深さ11cmを測る。土坑内は極細砂によって埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SK2067

遺構（図版34）

B地区中央部北寄りに位置する、不整円形の土坑である。長径1.15m、短径1.07m、深さ25cmを測る。垂直に近い急斜度の掘り込みを見せ、土坑底面は平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

6．溝（図版7）

調査の過程において、A・B両地区を合わせて50基の遺構を溝と認識して遺構番号を付与したが、その後、遺構ではないことが判明したもの、竪穴住居の周溝等であったもの、A・B両地区にかかるため遺構番号が重複したもの等が20条存在する。また、A地区の低湿地部で検出されたSD1009・1014・1015については、旧河道として第4節で低湿地部の状況とともに記載をおこなう。

SD1003

遺構（図版35）

A地区南部に位置する。直線的に南北に延び、長さ16.6m、幅60cm、深さ16cmを測る。南端部でほぼ直角に東へ折れるが、ここで溝は消滅する。溝底は船底形を呈し、内部は細礫まじりの砂で埋没してい

た。

その形態から、掘立柱建物跡を巡る溝の可能性も考慮したが、溝周辺で建物跡を復元することはできなかった。

出土遺物

いずれも細片で図示できるものはない。土師器托と見られる細片のほか、鎌倉時代に属すると思われる須恵器が出土している。

SD1004・SD2001

遺構（図版35・写真図版８）

Ａ・Ｂ両地区にわたって延びる溝である。不規則に曲がりながらほぼ東西の延びを見せ、約26ｍにわたって検出された。幅0.5～1.5m、深さ15～50cmを測る。溝内は大礫を含む砂礫によって充填されており、極めて短期的な洪水流により形成されたものと判断される。Ａ・Ｂ両地区を通じて、溝下層の出土遺物は弥生土器に限定されていることから、溝の形成時期は弥生時代の間であった可能性が高い。しかしＢ地区では、少数ながら溝上層より中世～近世の遺物が出土していることから、その埋没時期について問題を残している。一方、Ｂ地区は近世後半期以降屋敷地となっていることから、SD1004（SD2001）上面付近に何らかの局所的攪乱が及んでいた可能性も否定できない。

遺物（図版54；146～156・図版57；223～229）

壺、甕、高杯、器台、蓋が出土している。

146は外反気味に大きく上方にのびる口縁を持つ直口壺である。外面は体部にタタキ、口縁部にハケを施し、内面はナデで仕上げる。

147～152は口縁が「く」の字形に屈曲する甕である。147は口縁端部を外傾させ、外側に面を作る。器面の傷みが著しく調整不明。148・149は口縁を上方に肥厚させ、そこに擬凹線をめぐらせている。148は体部外面にハケ、内面にはヘラケズリとナデを施す。149は外面の調整は不明で、体部内面にはヘラケズリを施している。150から152は口縁端部を下方に肥厚させる。

153は大型の高杯の杯部と考えられる。内外面にヘラミガキの痕跡がある。154は浅い椀状の杯部に中空で裾広がりの脚部がつく。内外面にヘラミガキを施す。脚部には２個一対の円孔を３方向から穿つ。

155は器台である。現状では８カ所であるが、上下２個一組の円孔が５対穿たれていたと思われる。裾端部を上方に肥厚し、擬凹線をめぐらせる。内面にはハケの痕跡が残る。

156はつまみ部が窪み、裾端部が水平になる蓋である。

225は短頸直口壺である。体部外面にハケ、内面にはヘラケズリを施す。226は長頸壺の口縁である。外面にはハケの後ヘラミガキ、内面にはハケを施している。

227から229は甕である。227は頸部の屈曲が弱く、口縁端部は僅かに肥厚して外側に面を持つ。体部外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施す。228は鋭く屈曲した頸部から直線的に開く口縁部を持ち、口縁端部は下方に肥厚して外側に面を作る。体部外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施し、口縁部内面にハケの痕跡が残る。229は鋭く屈曲した頸部から直線的に開く口縁部を持ち、口縁端部を上下に肥厚させて面を作り、そこに擬凹線をめぐらせる。体部外面はハケ、内面にはヘラケズリを施す。

これらの弥生土器は弥生時代後期（Ⅴ－３段階）のものと考えられる。

223・224は、上層より出土した遺物である。

223は丹波焼の甕である。外面は全面に鉄釉を施した後、灰釉を流しかけている。224は丹波焼の鉢である。口縁部を内面に拡張している。外面は無釉、内面は全面に灰釉を施す。ともに19世紀前半の所産と思われる。

SD1005

遺構（図版36）

A地区東端にあり、SH1001・SH1005の東に位置する。やや不規則な弧状を呈する溝で、延長3.5m、幅20cm、深さ4cmを測る。溝底は船底形を呈する。溝内は砂によって埋没していた。

出土遺物

土師器皿の細片が出土しているが、図示できるものはない。

SD1006

遺構（図版36）

A地区中央部に位置する、SH1009の周溝南端から南に延びる溝である。SH1009の周溝との重複関係は識別できなかった。延長約5mにわたって弧状に延びることから、竪穴住居跡の周溝であった可能性も考慮されるが、他にこれを検証しうる遺構が存在しないことから、溝として記載する。幅20cm、深さ10cm前後を測り、底面は船底形を呈する。SD1007がほぼ直交して重複し、SD1006を切っている。

遺物

遺物は出土していない。

SD1007

遺構（図版36）

A地区東部に位置し、SD1006と直交方向に重複する。ほぼ直線的に東西に延び、東側1/4ほどが北西方向に屈曲する。延長6.5m、幅70cm、深さ10cmを測る。溝底は歪んだ船底形を呈する。溝内は、細粒の砂で埋没していた。

出土遺物（図版54；157～161）

土師器鍋、瓦器椀、須恵器鉢等が出土している。

157～159は、土師器鍋である。

157は、比較的膨らみに乏しい体部を推定させる鍋である。口縁部は、体部から屈曲して開き、端部は方形に終わる。体部外面に横方向のタタキ目、内面にハケ？が観察される。

158は口縁部のみの破片である。口縁端部は方形に終わるが、端面をわずかに凹ませる。

159は、やや膨らみをもつ体部を見せる。体部外面には横方向のタタキ目が観察される。

160は瓦器椀である。高台は逆三角形を呈する。内外面ともに風化が著しく、器面調整は不明である。

161は須恵器鉢である。直線的に延びる体部と、肥厚する口縁部を見せる。口縁端部外側には、直立する面が形成され、その上端は厚みを減じつつ丸みをもって終わる。

SD1007出土の遺物は、12世紀後半から13世紀前半に属するものと思われる。

SD1010

遺構（図版36）

A地区東部に位置し、SH1001とSD1011の間に接する。直線的に東に延びるが、B地区では検出できなかった。延長約4.3m、最大幅90cm、深さ10cm前後を測る。底面は船底形である。溝内は、細砂～粗砂

により埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SD1011

遺構（図版36）

A地区東部に位置し、SH1001の南東に隣接する。ゆるやかに曲がりながら北西－南東に延び、延長約6.0m、幅45cm、深さ5cmを測る。底面は平坦である。溝内は細砂～粗砂により埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SD1012

遺構（図版36）

A地区東部に位置し、SH1001とSD1010に挟まれたごく短い溝である。直線的に東西に延び、延長1.5m、幅20cm、深さ10cmを測る。底面は船底形を呈する。溝内は、細礫をまじえた極細砂で埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SD2003（SD2028）

遺構（図版37）

B地区西部に位置する。わずかに曲がりながらほぼ南北に延び、延長8.5m、幅45cm、深さ12cmを測る。細礫をまじえた極細砂で埋没していた。底面は平坦である。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SD2004

遺構（図版37・写真図版21）

B地区西部に位置する。ほぼ直線的に北東－南西に延び、延長4.8m、幅20cm、深さ50cmを測る。幅に対して著しく深い特異な溝で、断面形は逆台形を呈する。溝内は極細砂により埋没していた。弥生土器のみが出土しているため、弥生時代の遺構として記載するが、形態の特異性から異なる時期に所属する可能性が捨象できない。

出土遺物

弥生土器の細片が出土しているが図示できるものはない。

SD2005

遺構（図版38）

B地区南東隅に位置し、調査区南壁から外へ延びる。L字形に屈折しており、延長9.0m、幅0.5～1.0m、深さ15cmを測る。底面は船底形を呈する。溝内は、礫混じりの砂により埋没していた。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2008

遺構（図版７）

Ｂ地区中央部～東部には、現地表に大きな段差が見られるが、表土除去後この段差の一部に、溝状に下がる部分が認められた。この溝状部分は、現地表の段差とほぼ同一方向の延びを見せつつ、南北両端と西側を段差によって喪失している。このため、この溝状部分が遺構として取り扱い得る溝であるのか、何らかの攪乱の結果であるのか判断し難い面があったが、堆積物中より中世の遺物多数を出土し、近世以降の遺物をまじえないことから、溝として取り扱い記載をおこなっておく。

出土遺物（図版57・58；230～278）

土師器皿・椀・鍋、瓦器皿・椀、須恵器皿・椀・鉢、白磁皿・椀などが出土している。

230～241は、口径８cm前後、器高１～1.5cmを測る、小型の土師器皿である。底部が回転糸切りのもの（230・231・234）と、ヘラ切りのもの（232・233・235～239・241）とが見られる。口縁部と底部の境界は、明瞭な稜をなすものが多数を占め、境界が丸みをおびたもの（234・239・240・241）は少数である。口縁部は外反気味に開きつつ立ち上がるものが主体を占める。器面調整は回転ナデを主体としている。

242・243は、口径15cm前後を測る大型の皿である。底部はやや丸みをおび、そこからなめらかに屈曲して口縁部に至る。242では底部外面に指頭圧痕が認められる。

244～254は、通常土師器杯と分類される形態であるが、須恵器椀に近い形態を見せるもの（251・252）を含む。口径14～15cm、器高３～４cmの間に含まれるものが主体を占める。いずれも底部は回転糸切りで、器面調整は回転ナデによる。強いナデによって、体部外面に数条の顕著な稜線をつける例（244・247・248・251）と、稜のない器面、あるいはごく緩やかな器面の凹凸を見せる例とに分離できる。

253・254は底部のみの資料であるが、回転糸切りであることと、その直径から、杯に含まれるものと判断された。

255は土師器鍋である。弱い膨らみを見せる体部から、緩やかに屈曲して外反する口縁部を見せる。口縁端部外側には、凹んだ面を形成する。体部外面は縦横のタタキ目、内面は横方向のハケにより調整される。小破片のため、立ち上がり及び口径の復元にやや問題を残す可能性がある。

256・257は瓦器皿である。全体にナデ調整が施され、ヘラミガキは認められない。257は指頭圧痕が顕著である。

258～262は瓦器椀である。底部をとどめる例（259・261・262）では、断面逆三角形の、やや外方に張り出した高台を見せる。いずれも内面には横方向のヘラミガキ（暗文）が認められ、259では内底面に放射状の暗文を施している。

263は須恵器皿である。平坦な底部からやや膨らみを見せつつ口縁部に至る。底部は回転糸切りである。

264～272は須恵器椀である。平坦な底部から、概ね直線的な体部が立ち上がり、口縁部に至る。体部と底部の境界は、丸みを帯びるものによって占められる。底部はいずれも回転糸切りである。

273は須恵器鉢である。直線的に延びる体部と、わずかに上方へつまみ上げられた口縁端部を見せる。

274は白磁皿である。底部から膨らみをもちつつ口縁部に至る。底部は無釉である。275も同様の資料であろうか。

276は白磁碗である。膨らみをもつ体部から、緩やかに外反しつつ口縁部に至る。体部外面下半は無釉である。

277・278は、溝より古い時期の遺物である。277は須恵器直口壺の口縁部である。278は、土師器甕である。膨らみをもつ体部から「く」の字形に屈折した頸部と、直線的に開く口縁部を見せる。体部外面は細かなタタキ目が施される。体部内面はハケとヘラケズリが施され、頸部内面に顕著な稜を形成する。古墳時代初頭の資料であろう。

SD2008出土の遺物は、12世紀後半から13世紀代に属するものと考えられる。

SD2009

遺構（図38）

B地区中央部に位置する、L字形に屈折した溝である。延長4.8m、幅30～60cm、深さ10cmを測る。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2010

遺構（図版38・写真図版21）

B地区中央部に位置し、SD2011・2012・2013と隣接する。ほぼ直線的に南北方向に延び、延長7.5m、幅40cm、深さ10cmを測る。底面は平坦である。溝内は細砂により埋没していた。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2011

遺構（図版38・写真図版21）

B地区中央部に位置し、SD2010・2012・2013と隣接する。ほぼ直線的に南北方向に延び、延長3.5m、幅50cm、深さ10cmを測る。底面は平坦である。溝内は細砂により埋没していた。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2012

遺構（図版38・写真図版21）

B地区中央部に位置し、SD2010・2011・2013と隣接する。緩やかな弧状に東西に延び、延長2.5m、幅20cmを測る。溝内は細砂により埋没していた。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2013

遺構（図版38・写真図版21）

B地区中央部に位置し、SD2010～2012と隣接する。緩やかな弧状で南北に延び、途中西側への短い分岐を見せる。底面は平坦である。延長4.5m、幅50cm、深さ10cmを測る。溝内は細砂により埋没していた。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2014

遺構（図版39）

B地区西部南寄りに位置する、自然河道状の溝である。緩やかに蛇行しながら北東～南西に延び調査区外に至る。延長約24m、最大幅２mを測る。溝内は細礫～巨礫を多量に含み、淘汰の悪い砂を基質とした堆積物により埋没していた。短期的な洪水流によって形成されたものと考えられ、SD1004（SD2001）と同様の性格のものであろう。

出土遺物（図版59；279～310）

弥生土器・須恵器・土師器が多数出土している。

279は土師器皿である。粘土板から成形される。280は瓦器の壺体部である。表裏ともに回転ナデ調整の痕跡をとどめる。ともに中世の所産であろう。

281～300は須恵器である。

281は杯E蓋である。扁平な天井部に輪状のつまみを付ける。

282～286は杯Aである。底部と口縁部の境界が丸みを帯び、口縁部が外反気味に立ち上がるもの（282～284）、底部から屈折して口縁部が立ち上がるもの（285）、口縁部の立ち上がりが緩斜度で口径が大きいもの（286）が見られる。285の体部外面には、ヘラ描きで「×」が記される。

287～289は杯Bである。

290は甕口縁部である。口縁端部はやや傾斜した凹面をなす。

291は壺体部である。緩やかに張り出した肩部に、二条の沈線を巡らせ、その間に櫛の刺突による列点文を飾る。体部下半は回転ヘラケズリが施される。

292～296は蓋として図化しているが、古い形態の杯Aないしは杯Gの可能性がある。天井部は、293・294がヘラ切り無調整である他は、ヘラ切りナデ調整が施されている。

297～300は古墳時代型の須恵器杯身・蓋（杯H）である。杯身297・298では、口縁部の立ち上がりが内傾して短く、口縁端部内面に段をもたない。300は、口縁部が急斜度に立ち上がる。299は蓋である。膨らみをもった天井部と、断面三角形の稜、垂直に近い口縁部を見せる。口縁端部内面には、傾斜した凹面を形成している。297・298がTK209型式、299・300がTK10型式に相当する。

301は直線的にのびる口縁部を持ち、端部近くで外側に屈曲させ、端部を下方に肥厚させる大型長頸壺である。302は外反する短い口縁部を持つ短頸壺である。

304は短く屈曲する口縁部を持ち、端部は外側に面を作る。甕の口縁部と考える。

303は体部片で、外面にはハケを施し、ヘラ描き沈線による弧線を配する。306は脚台である。

305・307～310は高杯である。305は浅い椀状の杯部である。307は中実の短い脚柱部から裾が開くもの、308は中実の高い脚柱部から裾が開くもの、309は短い脚柱部から大きく裾が開くものである。310は皿状の杯部と高い中空の脚柱部を持つ。杯部内外面にヘラミガキ、脚部外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリとシボリの痕跡がある。

これらの弥生土器は器形全体が分かる資料はないが、弥生時代終末期（Ⅵ期）のものと思われる。

SD2015

遺構（図版38）

B地区中央部、SD2010～2013の西に位置する、ごく小規模な溝である。ほぼ直線的に南北に延び、延

長1.5m、幅30cmを測る。溝内は細砂により埋没していた。

出土遺物

図示できる遺物は出土していない。

SD2017

遺構（図版39）

B地区南西部に位置しSD2014と重複するが、先後関係は確定できなかった。直線的に延びる溝であり、延長4.0m、幅70cmを測る。

出土遺物

須恵器・土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。鎌倉時代に属する。

SD2018

遺構（図版39）

B地区中央部西寄りに位置し、SH2008を切っている。ほぼ東西に直線的な延びを見せ、東端は現代の溝によって失われている。

出土遺物

須恵器・土師器等が出土しているが、図示できるものはない。鎌倉時代に属する。

SD2025

遺構（図版39）

B地区中央部に位置し、SD2030を切っている。ほぼ東西に直線的な延びを見せ、西端は現代の溝によって失われている。

出土遺物

図示できる遺物はないが、須恵器、青磁椀破片等が出土している。

SD2026

遺構（図版37・写真図版21）

B地区西部に位置する。SD2003の東にあって、これとほぼ平行しながら南北に延びる。延長5.0m、幅20cm、深さ10cmを測る。細礫をまじえた極細砂で埋没いた。底面は船底形を呈する。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SD2029

遺構（図版37）

B地区中央部北寄りに位置する、ごく小規模な溝である。延長1.0m、幅20cmを測る。

遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

SD2030

遺構（図版39・写真図版21）

B地区中央部、SH2008の東に位置する、緩やかな弧状の溝である。SD2025に切られている。溝底は船底形を呈し、溝内は礫を含む砂によって埋没していた。

出土遺物

須恵器、土師器、瓦器等が出土しているが、図示可能なものはない。

SD2031

遺構（図版39）

B地区中央部西寄りに位置し、SH2008の南東に隣接する。ほぼ東西に延び、延長2.5m、幅70cm、深さ10cmを測る。底面は緩やかな船底形を呈し、溝内は砂ないしは砂礫で埋没していた。

出土遺物

弥生土器が出土しているが、図示できるものはない。

7．木棺墓（図版6）

B地区西部で、木棺墓1基が検出された。他に同時期の木棺墓は検出されず、単独存在の墓と考えられる。

遺構（図版29・写真図版20）

【検出状況】　木棺墓は、B地区西部中央に位置する。現表土を除去した直下で検出されたが、遺構上部は著しい削平の影響を受けており、検出面から最大で深さ10cmほどが遺存していたにすぎない。また西端部は、かろうじて検出可能な程度まで、削平を受けていた。

【規模・形態】　東西方向に長軸をもつ、ほぼ長方形の掘方内に、箱形の木棺を埋設したものと思われるが、平面と横断面の精査をおこなった結果、埋土によって木棺部分を識別することはできなかった。木棺墓の規模は、長さ1.4m、幅74cm、長軸の方位はW3.7°Nである。

出土遺物（図版61；355～358・図版83；M2・M3）

木棺内東隅に、青磁碗1点、青磁皿2点、土師器1点が置かれていたことから、東側が頭位であったものと思われる。また、木棺内中央から、長軸に沿う形で置かれた鉄刀1振り、鉄刀の北側に接して、火打ち金が出土した。

355は、龍泉窯系の青磁皿である。平坦な底部から、体部途中で屈曲して立ち上がる形態を見せる。内面見込み部に、椀357と類似したモチーフの草花文を彫りこむ。

356は、同安窯系の青磁皿である。平坦な底部から、体部途中で屈曲して立ち上がり、外反しつつ口縁部に至る。内面見込み部中央に、緩やかな曲線を彫り込み、周囲に櫛描による「Z」字形の文様を配している。

357は、龍泉窯系の青磁碗である。厚みのある底部から、屈曲して内湾気味に立ち上がる体部を見せる。高台は輪状を呈し、高台端部と高台内面は無釉である。内面には、相対する草花文を配し、見込み部にも簡略化された草花文を彫りこんでいる。横田・森田による分類（横田賢次郎・森田勉　1978）のⅠ－2類に属する。

358は、土師器皿である。粘土板から成形し、厚みをもった口縁部が引き出されている。

M2は、棺内中央のやや北寄りに副葬されていた、火打ち金である。山形を呈する中央に最大幅があり、そこに1孔を設けている。器身は幅を減じつつ端部に至り、両端ともに上方へ反る。孔に相対する機能部の縁辺は、やや不整形な凹みを見せており、使用の結果と考えられる。

M3は、棺内中央に副葬されていた、鉄刀である。錆による劣化で先端部と刃部の一部を欠くが、全

長は32cm、幅が4cm、束部の長さ6cm、幅は2.6cm前後であったものと推定される。刀身部には、表裏とも広い範囲に、木製鞘の痕跡が認められる。

M2・M3ともに出土位置が木棺のほぼ中央であったことから、被葬者の胸部上に副葬された可能性が高い。

8．柱穴（付図）

A・B両地区ともに多数の柱穴が検出され、弥生時代の遺物を出土したものも少なくない。しかしその多くは細片化しており、図化・記載ができないものである。以下で、図化可能であった遺物を出土した柱穴について記載をおこなう。柱穴の位置については、付図を参照。

P1053（図版51；129）

129は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部の間には、弱い沈線が巡る。口縁端部は弱く外反し、内面に稜を形成している。MT15型式に相当するであろうか。

P1055（図版51；131）

131は急須の底部であろう。強い上げ底を見せる。近世後半以降の所産である。

P1081（図版51；133）

133は須恵器椀である。体部は、上位で屈折して口縁部に至る。口縁端部は、外方へ玉縁状につまみ出される。

P1085（図版53；134）

134は口縁が明瞭な稜を持たずに屈曲し、平たい底を持つ高杯の杯部である。表面の傷みが著しく調整は不明である。古墳時代前期（布留式併行）のものと思われる。

P1098（図版51；135）

135は須恵器杯蓋である。膨らみをもつ天井部と、やや鈍い断面三角形の稜を見せる。口縁端部内面には、内傾する面を形成している。

P1131（図版51；136）

136は須恵器杯身である。ほぼ直立する口縁部を見せ、端部内面には内傾する面を形成している。受け部はほぼ水平に延びる。135・136はTK47型式、ないしはこれをやや遡るであろうか。

P1148（図版51；137・138）

137は瓦器椀である。膨らみをもつ体部を見せる。高台は断面逆三角形を呈し、やや外方へ張り出す。

138は須恵器椀である。体部は、底部から緩やかに屈曲して立ち上がり口縁部に至る。底部と体部の境界は不鮮明である。

P1165（図版51；139）

139は須恵器鉢である。直線的に延びる体部と、方形に終わる口縁端部を見せる。

P1225（図版51；145）

145は古墳時代後期の須恵器高杯である。杯部中位に2条の沈線を巡らせて、断面三角形の弱い稜を形成する。

P2058（図版52；682）

682は口縁が明瞭な稜を持たずに屈曲し、平たい底を持つ高杯の杯部である。内外面にヘラミガキを

施している。古墳時代前期（布留式併行）のものと思われる。

P 2063（図版52；683）

683は平底の小型鉢である。表面の剥離が著しく、調整は不明である。

P 2077（図版52；684）

684は高杯の脚裾部である。外面はハケの後ミガキ、内面はハケを施している。

P 2218（図版52；685・686）

口縁が明瞭な稜を持たずに屈曲し、平たい底を持つ高杯が2点出土している。685は内外面ともナデで仕上げており、686は外面にはハケの後ナデ、内面はナデを施している。古墳時代中期のものと考えられる。

P 2561（図版52；687）

687は須恵器椀である。わずかに平高台状を呈する底部から、直線的な体部が立ち上がり口縁部に至る。

P 2582（図版52；688・689）

688・689は、土師器皿である。688は全体に指頭圧痕をとどめる。底部と口縁部の境界は不鮮明で、丸みを帯びる。689も内面に指頭圧痕をとどめる。底部と口縁部の境界は丸みを帯びる。

P 2596（図版52；690・691）

690は土師器皿である。わずかに上げ底状を呈する底部と、屈曲して外反する口縁部を見せる。底部は回転糸切りである。内面には輪状に炭化物が付着しており、灯明皿の芯と考えられる。

691は瓦器椀である。断面が長方形を呈する高台は、ほぼ直立している。風化が顕著で、器面調整は観察できない。

P 2597（図版52；695・696）

695は、須恵器杯蓋である。平坦な天井部から、ゆるやかに屈曲して端部に至る。端部はわずかに下方へつまみ出され、内面に弱い段を形成している。696は杯B底部である。平坦な底部に、断面が逆台形状を呈する高台底面は、わずかに外方へ傾斜している。奈良時代後半以降に属する遺物であろう。

P 2598（図版52；697・698）

697は、平坦な底部に断面が正方形に近い高台を付した杯Bである。698は、底部から膨らみをもちつつ立ち上がる口縁部を見せる。高台端部は内傾する凹面をなし、内側端部がわずかに突出する。口縁端部を欠き全体の形態は不明であるが、むしろ杯Fとすべき資料であろうか。

P 2599（図版52；692～694・写真図版19）

692は杯Aである。ほぼ平坦化した底部から、口縁部が急斜度に立ち上がる。口縁部と底部の境界は丸みをもつ。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。

693・694は杯Bである。693は、平坦な底部からなめらかに立ち上がる口縁部を見せる。口縁部はわずかに外反し、端部は薄く仕上げられている。高台は台形を呈し、底面はわずかに内傾している。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。694はやや丸みをおびた底部から、屈曲して急斜度に立ち上がる口縁部を見せる。高台はやや外方へ張り出す。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。

P 2601（図版52；699）

699は須恵器鉢である。直線的に延びる体部を見せる。口縁部外側に、わずかに内傾する面を形成し

ており、口縁端部は、厚みを減じつつ上方へ延びて三角形状に終わる。

P 2605（図版52；700）

700は土師器皿である。平坦な底部とわずかに膨らみをもつ体部を見せ、底部と体部の境界は明瞭である。底部は回転糸切りである。

P 2609（図版52；701）

701は土師器皿である。丸みを帯びた底部から緩やかに開いて口縁部に至る。底部外面には指頭圧痕が観察される。

P 2650（図版52；702・703）

702は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で、天井部と口縁部の境界は丸みをもつ。口縁端部は厚みを減じつつ薄く終わっている。TK209型式に相当すると思われる。

703は「く」の字形の頸部から外反する口縁を持つ甕である。内面にヘラケズリを施す。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものと思われる。

P 2652（図版54；704・705）

704は「く」の字形の頸部から外反する口縁を持つ甕である。外面にタタキの痕跡がある。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものと思われる。

705は体部が直立に近い傾きを持つ鉢である。外面にはハケを施し、内面はナデで仕上げる。口縁部直下に円孔を穿つ。

P 2661（図版52；706）

706は小型の須恵器底部である。断面が長方形のやや高い高台を付している。底部はヘラ切り後無調整である。

P 2680（図版52；707～709）

707は須恵器蓋である。天井部から端部へはゆるやかな屈曲を見せる。端部は外側に直立する面を形成し、内面の段は極めて微弱である。

708は須恵器杯B底部である。平坦な底部に、やや外方へ張り出す高台を付す。

709は小型の須恵器壺底部であろうか。

P 2681（図版52；710）

710は扁平化の著しい須恵器蓋である。天井部から端部へは、わずかな厚みの変化を見せるのみである。端部はわずかに下方へつまみ出され、外側に面を形成する。

P 2725（図版53；711）

711は平底の鉢である。把手がついていたと思われる。表面の剥離のため、調整は不明である。

P 2728（図版53；712～715）

712～715は土師器皿である。いずれも粘土板からユビオサエによって成形されており、不整形な底部から、短い口縁部に至る境界は不鮮明である。指頭圧痕とナデの痕跡が顕著である。

P 2733（図版53；716）

716は土師器鍋である。強いナデによって口縁下外面を外反状に作る。内面には横方向のハケ調整が観察される。16世紀代の所産と思われる。

P 2735（図版53；717）

717は底部に穿孔を持つ鉢である。内面はナデで仕上げているが、外面調整は不明である。

P 2854（図版53；719）

719は鉢の脚台部だと思われる。表面の傷みが著しいため、調整不明である。

P 2902（図版53；720）

720は平底を持つ甕の体部と考えられる。内外面にナデを施している。

P 2918（図版53；721）

721は「く」の字形に屈曲した頸部から外反して開く口縁を持つ大型の甕である。口縁端部は外側に面を持つ。表面の傷みが著しいため調整は不明であるが、内面にはハケの痕跡が認められる。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものと思われる。

P 2933（図版53；722）

722は低い脚台を持つ鉢の底部である。外面はナデで仕上げている。

P 2986（図版53；723）

723は須恵器椀である。わずかに平高台状を呈する底部から、膨らみをもつ体部が立ち上がる。体部中位からはやや外反気味に口縁部に至る。

P 3053（図版53；729）

729は頸部のしまりが弱い甕である。外面はナデ、内面にはヘラケズリを施している。

P 3138（図版53；730～733）

高杯と鉢が出土している。730は複合口縁を呈する高杯である。外面はナデ、内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が認められる。731・732は高杯の脚部である。731は中実の短い脚柱部から裾広がりになる。外面はナデ、内面はナデ・ヘラケズリを施している。円孔を穿った痕跡がある。732は中空で裾が傘状に広がる。外面はハケ・ナデ、内面はナデ・ヘラケズリを施している。円孔が1カ所残存している。

733は斜め上方に開く体部と短い脚台も持つ鉢である。表面剥離が著しく、調整は不明である。

弥生時代終末期（Ⅵ－2期）のものと思われる。

P 3216（図版53；735）

735は平底で倒卵形の体部を持つ甕である。口縁部は失われている。外面にはハケを施し、内面はナデで仕上げる。弥生時代終末期（Ⅵ期）のものと思われる。

9．その他の遺構

B地区南部において、極めて不規則な平面形・底面の状況を呈し、比較的面積が広く浅い「遺構」数か所が検出された。これらを一括して不明遺構（SX）としているが、その形態から人為的に掘削された遺構とは考え難く、地形面の凹部に堆積した古土壌（遺物包含層）が、平面精査によって取り残された部分であったと推定された。このため、巻末付図（調査区全体図）には記録していない。

こうした局所的な包含層から出土した遺物は、一括性が保証されるものではないが、ここではひとまず取り上げ単位（SX）ごとに記載をおこなっておく。

SX2002（図版60；317～335）

SX2002では、中世を中心とした遺物が出土した。

317～320は土師器皿である。平坦な底部から、やや外反気味に立ち上がる口縁部を見せる。いずれも底部にはヘラ切りの痕跡をとどめる。319の内面には、灯明皿として用いられた芯の痕跡をとどめる。

321・322は土師器杯である。いずれも、平坦な底部と外反気味に立ち上がる口縁部を見せ、体部外面には回転ナデにより複数の稜を形成している。底部は、321ではヘラ切り後ナデ調整、322では回転糸切りがおこなわれている。

323土師器鍋である。屈折して開く口縁部を見せ、口縁端部は方形に終わる。体部外面には、横方向のタタキが施される。

324は瓦器皿である。指頭圧痕を残す底部から、丸みをもちつつ口縁部に至る。

325～329は瓦器椀である。体部がやや直線的に延び、上方へ緩やかに屈折して口縁部に至るもの（326～328）と、膨らみを帯びた体部をもち、口縁部下の外面に強いヨコナデによる凹部を巡らせるもの（329）が見られる。高台は、断面が逆台形を呈しやや外方へ張り出すもの（325・328・329）と、逆三角形を呈するもの（326・327）とがある。内面に施されるヘラミガキ（暗文）は、体部においてはいずれも横方向に巡る。内底面では、ジグザグに施されるもの（327・329）が認められる。

330～334は須恵器椀である。いずれも、平坦な底部から大きく開く体部を見せ、底部と体部の境界は丸みを帯びて不明瞭である。口径は16.0～16.6cm、器高は5cm前後を測る。

335は白磁皿である。底部をわずかに平高台状に削り出す。口縁部は膨らみをもちつつ立ち上がる。底部外面は無釉である。

336はⅡ類白磁碗（横田・森田　1978）である。口縁端部を折り返して小さな玉縁を形成する。底部を欠く。

337はⅣ類白磁碗（横田・森田　前掲）である。口縁部を玉縁に作る。底部を欠いている。

SX2004（図版61；338・339）

弥生・奈良時代の遺物が出土している。

338は外反して開く口縁部を持ち、口縁端部を上下に肥厚させる壺である。内面はナデとヘラケズリ、外面はハケの後ナデを施す。弥生時代後期（Ⅴ期後半）のものと考える。

339は須恵器杯Bの底部である。断面がほぼ正方形の高台を付す。

SX2005（図版61；340～354・図版86；S19）

上層で古代・中世の須恵器、下層では弥生土器および石器が出土している。

340は口縁部が内傾して立ち上がる複合口縁の大型壺である。341は大型壺の底部である。342は肩の張った体部から直線的に開く口縁部を持つ直口壺である。体部外面はハケ、内面にはヘラケズリを施している。

343～346は甕である。343は受口状口縁を持つ。口縁端部は垂直にのび、そこに擬凹線をめぐらせる。体部外面はハケ、内面にはヘラケズリを施す。344は鋭く屈曲する頸部を持ち、口縁端部を上下に肥厚させ、そこに擬凹線をめぐらせる。体部外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施す。345も344と同様の形態を持つ。346は底部が丸みを帯びた小さな平底で、倒卵形の体部から「く」の字状の頸部を経て短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は僅かに肥厚して外側に面を持つ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。

347・348は手づくねのミニチュア土器である。349は平底で、大きく開く口縁を持つミニチュアの甕

である。350は脚台で、内外面にハケを施している。

351は砲弾型の体部を持つ鉢である。底部には焼成前穿孔を行う。外面にはタタキの後ハケ、内面にはハケの後ナデを施す。

352は中空の脚柱部から裾が広がる形態の脚部である。裾部には穿孔が4カ所残存し、裾端部は僅かに上方に肥厚し、外側に面を作る。外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。

これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－1期）のものと考える。

345・356は上層出土の須恵器である。345は杯Aで、356は椀である。

353・354は上層出土の須恵器である。

353は須恵器杯Aである。底部にはヘラケズリが施される。

354は椀である。平坦な底部はわずかに平高台状に成形される。底部は糸切りである。

S19は石斧である。刃部を含むほぼ1/2を欠損しているが、形状から、太形蛤刃石斧と思われる。

自然流路（付図・図版60；311～316）

B地区東端部は遺跡後背山地の谷間に位置しており、扇状地頂上部に相当する。現地表面においても谷の中央であることが明らかであったが、発掘調査によって、扇状地上に形成された、複数の小規模な自然流路が検出された。各自然流路からは多数の土器が出土しているが、その性質上、自然流路そのものの形成時期は明瞭ではない。

流路は、近代以降の開墾によって削平を受けており、途中で消失する。その位置関係から順に「北側流路」・「中央流路」・「南側流路」と呼称した。

各流路内は、淘汰の悪い角礫層を主体とした堆積物によって埋積されており、その間に各時期の遺物が混在した状況で出土した。これは、調査範囲よりさらに谷奥部に、遺跡が広がることを示唆するものであろう。311～315は南側流路、316は北側流路より出土した。

311は脚台を持ち、底部に焼成前穿孔が施された鉢である。

312は複合口縁を持つ高杯である。外面にはヘラミガキを施している。313・314は高杯脚部である。313は短い中実の脚柱部から裾が開くもので、穿孔が3カ所認められる。外面にはヘラミガキを施し、内面はヘラケズリ、ハケの後にナデを施している。314は中空の脚柱部から大きく裾が開くもので、穿孔は4カ所認められる。

315は器台の脚部である。円孔を5方向から3段にわたって穿つ。外面には縦方向のヘラミガキを施している。

311～315は弥生時代終末期（Ⅵ－1段階）のものと考えられる。

316は須恵器杯B蓋である。平坦な天井部と、そこから屈曲して延びる口縁部を見せる。

第3節　包含層・旧河道出土の遺物

1．概要

第1節で述べたように、横田遺跡の扇状地斜面部では、開墾の影響により遺物包含層の遺存状況は不連続である。遺構検出面の一部が小規模な凹地を形成している部分でのみ、やや良好な遺存状況を呈しており若干の遺物出土が見られた。ここでは、扇状地斜面部包含層出土遺物、および低湿地部包含層出土遺物について、時期別の記載をおこなう。

また、低湿地部を縦断する旧河道から出土した遺物については、河道単位で取り扱い、その中で時期別に記載する。

2．扇状地斜面部包含層および低湿地部包含層出土の遺物

(1)　土器・陶磁器

a．縄文土器（図版53；718）

718は、貼り付け突帯文を有する縄文土器である。表裏の器面調整は、風化により明らかではない。P2810より出土したものであるが、二次的な混入と考えられる。他に当該期の遺物は出土していない。

b．弥生時代前期の遺物（図版62；359～362）

包含層出土の遺物は、前期に属するものが少量存在するものの、ほとんどが弥生時代後期から古墳時代前期のものである。前期のものとそれ以外に分け、器種ごとにその概要を記述していきたい。

前期の遺物はいずれも甕である。359・360は口唇部に刻み目を入れ、口縁直下にヘラ描きの多条沈線を施す。体部外面はハケを施している。361と362は無文で、361は口縁部の断面が「逆L」字形を呈し、頸部下に僅かな段を持つ。362は胴がやや張った体部と軽く外反する口縁部を持つ。体部外面にはハケを施している。これらの土器は弥生時代前期新段階に位置づけていいものと考える。

c．弥生時代後期～古墳時代初頭の土器（図版62～71；363～563）

壺（363～413）

363～365・371は外反して開く口縁部に外反して立ち上がる二次口縁が付く二重口縁壺である。371以外は二次口縁部のみ残存している。363は外面に櫛描コンパス文と円形浮文を施す。364はやや粗い櫛描波状文を施し、365は口縁の屈曲部に刻み目を施している。371は無文で、口頸部内外面にはハケとヘラミガキを施している。

366～370・376・377は短く直立する頸部に、一度外反してから直立する複合口縁の広口壺である。366は複合口縁が発達し、そこに擬凹線を巡らせている。焼成前穿孔が1ケ所に認められる。山陰系土器の影響を受けていると思われる。367は複合口縁が短く、無文であるが、同様に焼成前穿孔が1ケ所認められる。368～370・377の複合口縁部は無文であり、376には擬凹線を施している。

372～374は短く直立する頸部から大きく開く口縁部を持つ広口壺である。残存状況が悪いが、外面にはハケ、内面にはハケあるいはケズリ調整を施している。372・373は口縁端部を上方に少し拡張し、374は端部を上下に拡張している。

375・382・383は直立あるいは外反気味に立ち上がる頸部に、大きく開く口縁部がつく。375・382は口縁端部を上方に拡張し、そこに擬凹線を巡らせている。頸部外面から体部外面と頸部内面にはヘラミガキ、体部内面には横方向のヘラケズリとハケを施している。375は、口縁部内面に3個一組の刺突文を施す、また、体部上半には籠目の痕跡が認められる。383はしっかりした平底を持ち、扁平な球形の体部を持つ。口縁部は外反して開き、端部を下方に拡張している。

378～380は筒状の頸部から外反して開く口縁部が伸びる広口壺である。378は口縁端部を上方に拡張している。379は口縁端部を下方に垂下させ、そこに櫛描波状文を施している。380は口縁部の途中に僅かな屈曲があり、二重口縁状を呈している。

381・384～390は丸みを帯びた体部から屈曲して直立あるいは斜め上方に伸びる口頸部を持つ直口壺である。外面にタタキ・ハケ調整を施すものと387のように外面に丁寧なヘラミガキ調整を施すものがある。389は球形の体部から短く直立する口頸部を持つ。ほとんどものが体部を欠くが、387と同様の形態を持つと思われる。390は緩やかに外反して伸びる口頸部を持つ。体部を欠くため、全体のプロポーションが不明であるが、直口壺に含めておく。

391は丸みを帯びた体部から緩やかに屈曲して立ち上がる口頸部を持つ。口縁端部は僅かに内傾する。392は胴の張った体部に内彎気味に伸びる口頸部を持つ。頸部から体部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラケズリの後ハケ、一部にヘラミガキを施している。

393は鋭く屈曲した頸部から短い受部を経て口縁が立ち上がる大型の壺である。

394は丸みを帯びた体部から直立して立ち上がる口頸部を持つ長頸壺である。口縁部および体部外面は縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ、体部内面は横方向のヘラケズリを施している。

395は斜め上方に伸びる口頸部を持つ細頸壺と考えられる。口縁部直下と思われる場所に半截竹管・竹管の連続刺突と沈線を組み合わせた幅広の文様帯を持つ。山陰系土器の影響を受けていると思われる。

396は最大径が体部下半のかなり低い位置にあり、短く直立する口縁部を持つ無頸壺である。口縁部内面はハケ、体部外面はハケの後ヘラミガキ、体部内面はヘラケズリのあとナデを施している。

397～413は体部および底部である。397・398はしっかりとした平底と球形の体部を持ち、体部外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリを主に施している。399は底部付近に焼成前穿孔が1ケ所施されている。外面にヘラミガキを行う。406・409・412は底部内側にくぼみを持つ。407・410・413は突出気味の平底である。

甕（414～468）

414～432・435・439は口縁端部を拡張し、外側に面を作るもので、複合口縁になるものも含めている。拡張された口縁端部は無文のものと擬凹線を施すものがある。外面の主な調整は縦方向のハケで、内面は横方向のヘラケズリを施すものが多い。器形全体が判る資料は少ないが、426はプロポーションが判明する例で、体部は倒卵形を呈し、底部は狭小化が始まった平底となっている。

434・436～438・441～443も口縁端部を拡張し、複合口縁になるものである。拡張された口縁部には擬凹線を施すもののほか、無文のものもある。体部は倒卵形を呈すると思われる。ただし、外面の調整はタタキを基調としており、内面調整は横方向のハケ調整が多く、横方向のヘラケズリを施すものが少ない。

433・440・444～452・457は口縁が単純に外反して開くものである。頸部の屈曲には440のように緩い

ものから、447のように鋭いものまである。体部外面の主要な調整がタタキで、内面調整に関しては、445・451のように横方向のハケ調整のものや446・449のように横方向のヘラケズリ調整のほか、指頭圧痕や縦方向のヘラケズリ調整が認められるものがある。433は口頸部が極端に短いものである。体部は倒卵形で、しっかりした平底を持ち、底部中央は僅かに凹んでいる。442は最大径がやや下がるものの倒卵形の体部で、底部の狭小化が始まっている。

461・462は単純に外反する口縁部を持つ小型の甕である。外面調整はタタキの後ハケ、内面には縦から斜めのヘラケズリを施す。461は大きく開く口縁部を持つが、462は口頸部が短いものある。

453・454・458は鋭く屈曲する頸部から直線的にのびる口縁を持つ。体部外面にはタタキの後ハケ調整、内面はヘラケズリ調整を施しているようである。庄内式甕の影響を受けたものと思われる。

455・456は鋭く屈曲する頸部から内彎気味に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部を内側に肥厚させている。外面にはハケ、内面にはヘラケズリ調整を施しており、布留式甕の系統であると考える。

459・460は他地域からの搬入品と思われる甕である。倒卵形の体部を持ち、水平気味に開く口縁部には強いヨコナデを施し、口縁端部を上方に拡張している。459は外面調整が縦方向のハケの後ヘラミガキ、内面上半には指頭圧痕、下半にはヘラケズリを施す。460は口縁部に強いヨコナデを施し、内面の指頭圧痕が明瞭である。459・460ともに、胎土も他の土器と異なり、器形や調整技法の上でも「下川津B類土器」の範疇に含めて良いものと考えられる。

463～468は甕のものと思われる底部である。463・464は底部の小型化が進んでいる。465は底部が丸みを帯びており、体部との境界が不明瞭である。466・467は平底の形態を残すもので、468は尖底気味の丸底を呈している。

鉢（469～504）

469は丸底で扁平な球形の体部に短く開く口縁部を持つ。

470～472は単純に開く口縁部を持つ。470は口縁端部を上方に拡張し、外側に面を持つ。471は端部を上下に拡張し、そこに擬凹線文を施している。472は単純に外反する口縁部を持ち、端部も丸く収めている。

473は狭い平底に丸みを帯びた体部を持ち、複合口縁を持つ。体部内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施している。474・475は複合口縁を持ち、底部に大きく開く低い脚台が付く。476は内彎する複合口縁を持つ。体部内外面にヘラミガキを施す。

477・478はしっかりとした平底から内彎気味に立ち上がる体部を持つ小型の鉢である。479は平底から内彎して立ち上がった後、口縁部にかけて内傾する体部を持ち、内外面に丁寧なヘラミガキを施している。480は直線的に開く低い体部に高台状の脚台が付く。481は椀状の体部に低い脚台が付く。

482～495は鉢の底部・脚台と考えられる。482は直線的に開く体部に低い脚台が付く。483・488は内側に凹みがある平底を持つ鉢である。492は脚台の端部に凹線をめぐらせる。495は中実の脚台部である。

496・498は浅い皿形の体部に低い脚台が付く。内外面にヘラミガキ調整を施す。497は胴の張る体部に脚台が付くと思われる。

底部に穿孔のある鉢には、砲弾形の体部で尖底のもの（499～502）と平底のもの（503・504）が見られる。尖底のものは、体部外面にタタキが施されるもの（500～502）とハケ調整を施すもの（499）が見られる。内面は502がヘラケズリを施される他は、ハケ調整が施されている。平底のものは、503の外

面にタタキ、504がハケ調整を施している。

高杯（505～526）

505～526は高杯およびその脚部である。505・506は複合口縁を持つタイプである。口縁端部を上方に拡張し、そこに擬凹線を巡らせている。

507～510は浅い皿状の体部に短く開く口縁部を持つ。507・508は口縁部が直立気味に立ち上がるもので、508は杯部がやや深く小型のものである。509・510は大きく外反して開く口縁部を持ち、510はそこに中実の脚柱部と低い位置で大きく開く裾部を持ち、裾部には円孔を穿っている。杯部内外面および、脚部外面に丁寧なヘラミガキを施している。

511は杯体部が扁平になり、そこに外反して立ち上がる長い口縁部がつくもので、脚柱部は中空であると思われる。512は胴の張る扁平な鉢状の杯部を持つ。

513・514は浅い皿状の杯部を持つものである。513は杯部内外面および脚部外面にヘラミガキを施し、脚裾部には4方向から円孔を穿っている。

515～524は高杯の脚部である。515～518は長い筒状の脚柱部を持つもので、515・516のように沈線で区画するものと文様を持たないものがある。裾部を欠くが、低い位置で大きく広がるものと思われる。

519～526は斜めに広がる裾部を持つタイプで、外面にヘラミガキを施し、内面には削りおよびハケ調整を施している。裾部に円孔を穿つ例が多い。523は中実の脚柱部に大きく広がる裾部がつく。524は短い筒形の脚柱に小さく開く裾部がつく小型の高杯と考えられる。

器台（527～545）

527～545は器台である。527・528は水平に近い角度で開く受部を持ち、内外面にヘラミガキを施している。528は端部を垂下させ、そこに擬凹線を巡らせるとともに円形浮文を貼付する。534は屈曲部に刻み目、上下にコンパス波状文を施し、その直下に円孔を穿つ。536は小型の個体で、受部の口縁端部を上方に少し拡張している。

529～535・543は複合口縁を持つものである。529・530は端部を上下に拡張し、そこに擬凹線を施している。531では擬凹線は施されておらず、小型ではあるがほぼ同様の形態を持つ535も同じである。533・543は漏斗状の受部に直立気味に立ち上がる短い口縁部を持っている。532は受部の開き方が浅く、口縁部もあまり外反しない個体である。

537は脚部と裾部が直結した形の小型器台である。口縁端部を僅かにつまみ上げ、直立させている。538は裾部だけしか残っていないが、537と同様の形態を持つと考えられる。裾部に円孔が穿たれる。

539～545は器台の脚部である。540には裾部に円孔が穿たれている。

蓋（546～553）

直径が6cm前後のものと12～14cm程度のものがある。546はつまみの頂部にくぼみを持ち、直線的に開く体部を持つ。548・550もほぼ同様の形態を持っていたと思われる。553はつまみ頂部の端部を若干上部に拡張し、結果としてくぼみが深くなっている。

547・551はつまみ部がやや長い形態で、頂部にくぼみを持つ。体部の形態については、残存状況が悪く不明である。

549はつまみ部の中央に体部まで貫通する円孔が穿たれている。体部外面には丁寧なヘラミガキを施している。552はつまみ部の頂部が平坦なもので、体部は内彎気味に開く。

ミニチュア土器（554～560）

554～556は内外面ともナデで仕上げる手づくねの土器である。554は平底に直線的に立ち上がる体部を持つ。555は丸底で緩やかに開く体部を持つ。556は丸底で、体部も球形を呈する。

557はしっかりとした平底で、体部は内傾気味に立ち上がり、調整は内外面ともナデである。口縁部が欠落しているが小型の壺と思われる。

558は平底、559は丸底の底部で残存状況が悪いため、形状は不明である。560は平底から体部が丸みを帯びて立ち上がる。

手焙り形土器（561・562）

561は丸みを帯びた底部から直線的に立ち上がる鉢形の体部を持つ。蔽部は接合の角度から見てあまり高さがない。体部下半に刻み目を施した突帯を貼付する。体部内面にはハケ調整が明瞭に残り、外面もハケおよびナデ調整で仕上げる。562は561に比べて扁平で小型の体部を持つ。体部と蔽部との境界はやや不明瞭となるが、蔽部は高い。残存状況が悪いため明確ではないが、突帯も貼付されていない。

注口土器（563）

平底で肩の張った体部に注口が付く。残存状況が悪く、注口部・口縁部の形状は不明である。

d．古墳時代後期の土器（図版72；564～581）

須恵器杯身・蓋、高杯、甕、壷および土師器杯が出土している。

564・565は、須恵器杯蓋である。564は、天井部外面をヘラケズリし、口縁端部内面に面を形成する。天井部と口縁部の境界には、弱い沈線を巡らせる。TK10型式に相当すると思われる。565は、径が大型化している。天井部外面にはヘラケズリを施す。

566～574は、須恵器杯身である。572が底部ヘラ切り後ナデ調整が施されるほかは、いずれも底部に回転ヘラケズリが施される。571では、ヘラケズリ後さらにナデ調整をおこなう。573の底部中央には、編物状の圧痕が残る。TK10型式～TK209型式に至る時期に相当する。

575は須恵器長脚二段三方透かし付高杯の脚である。透かしは形骸化し、脚柱部に縦方向の深い刻みを施しているにすぎない。

576は須恵器脚端部のみの小破片である。外面に回転カキ目調整が施されている。

577は須恵器壷頸部である。外面に４条の突帯を巡らせ、その間に櫛描波状文を施す。

578は須恵器甕頸部である。外面に２条の突帯を巡らせ、その間に櫛描波状文を施す。

579は須恵器壷である。体部外面に回転カキ目調整を施す。

581は、大型の須恵器甕口縁部である。３条の突帯を巡らせ、その間に櫛描波状文を施す。口縁端部外側には直立する面が形成されており、その上端は細く終わる。

580は土師器椀である。風化剥落が顕著で、器表面の調整は明らかではない。

e．奈良～平安時代の土器・陶器（図版72・73；582～630・677）

須恵器

582～585は杯Ａである。丸みを帯びた平底と、内彎気味に立ち上がる口縁部を見せる。口縁端部は直立するもの（582・583）と、わずかに外反するもの（584・585）とが見られる。底部は、584がヘラ切

り後ナデ調整を施す他は、いずれも無調整である。口径が小さい（9.6cm）583は、井守徳男（兵庫県教育委員会　1991）による杯Gに分類すべきかもしれない。

597・598は杯Aであるが、ともに口縁部を欠く。582～585より底部が平坦化し、口縁部との境がより明瞭である。597の内面には、墨書が見られるが判読には至っていない。

586～588は杯B蓋である。586・587では扁平な宝珠形つまみ、588では輪状に近い形態を有する。589・590は杯F蓋であろう。589は輪状のつまみをもつ。590は天井部中央を欠くが、平坦な天井部と、大きく屈曲する端部を見せる。

591～596・599～610は杯Bである。平坦な底部から、屈折して直線的に立ち上がる口縁部を見せるものと、底部との境界が丸みを帯びるもの（605）が見られる。口径は13cm前後を測るもの（591・594・599・607・608）、16cm前後を測るもの（609・610）、17cmを超えるもの（603）があり、器高は3.3cm～4.4cmを測るもの（591・594・599・603・607）と、5cm前後のもの（608・609）、6cmを超えるもの（610）が見られる。底部はいずれもヘラ切り無調整である。593ではヘラ描き沈線が、596では多数の爪形圧痕が観察される。

611は椀である。丸みをもった底部から、直線的に開いて口縁部に至る。体部外面には、強いナデによる6条の稜線が形成されている。高台は断面が逆台形を呈し、外方へ張り出す。高台端部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後、ナデ調整が施される。

612～614は、立ち上がりの斜度が緩やかとなり、扁平化した様相を見せる杯Aである。底部の平坦化が進行し、口縁部の立ち上がりとの境界は明瞭である。口縁部の立ち上がりは直線的である。底部はヘラ切り後無調整である。

615・616は壺の底部であろう。615は扁平な平高台を見せ、底面はヘラ切り後ナデ調整を施す。616は断面逆台形の高台をもち、高台付け根部分から急斜度に立ち上がる体部を見せる。体部下部に、1条の突帯を巡らせる。

622は鉢である。平坦な底部から屈折して直線的な口縁部の立ち上がりを見せる。口縁部はやや波状を呈しており、あるいは片口状のものであったのかもしれない。

623は壺である。球形の肩部から、外反しつつ口縁部に至る。口縁端部は上下に拡張され、外側にはほ直立する面を形成する。

624～626は壺底部であろう。624は外方に張り出した高台を付す。625・626は平底である。

617は、器種不明の破片である。外面に粘土紐を貼り付けている。図下方は破断面であるが、上方には土器端部が認められ、粘土紐端部も遺存している。

土師器・黒色土器（618～621）

618～621は土師器・黒色土器である。

618・619は、土師器椀もしくは托であろう。平坦な底部から大きく屈曲して立ち上がる体部を見せる。いずれも底部は回転糸切りである。

620は黒色土器である。内面にはヘラミガキ（暗文）が施される。底部は回転糸切りである。

621は土師器皿である。平坦な底部と、外反する口縁部を見せる。底部は回転糸切りである。

緑釉陶器（図版73；627～630・677）

627～630・677は緑釉陶器である。

627は口縁部を欠く。断面長方形の輪高台をもつ。628・630は皿である。ともに削り出しの平高台をもち、高台中央がわずかに凹む。628では、口縁部がわずかに膨らみをもちつつ立ち上がる。

629は椀である。やや外方へ張り出した高い貼付高台をもち、体部は高台付け根部分から丸みをもって立ち上がる。口縁端部はわずかに外反気味に終わる。

677はB地区表面採集の皿である。削り出しによりやや幅の広い輪高台を作り、高台付け根部分まで施釉される。口縁部は膨らみをもちつつ立ち上がる。

f．中世の土器・陶磁器（図版73～75；631～666）

中世の遺物は、低湿地部では包含層B上部とその上位で出土しており、包含層B下部以下からは出土していない。

須恵器

631・632は皿である。回転糸切りの底部と、わずかに外反気味の口縁部を見せる。

633～644は椀である。いずれも底部は回転糸切りであるが、明確な平高台を作るもの（633～635）、扁平化した平高台をもつもの（636～638）、高台が識別できなくなり底部と体部の境界が不明瞭なもの（639～644）が見られる。特に644では、ほとんど丸底といって差し支えないまでになる。器高は636と641で4cm台であるほかは、5.8cm～6.7cmを測る。

645・646は鉢である。645は急斜度に立ち上がる体部と、方形に終わる口縁端部を見せる。口縁端部内側には、1条の沈線が巡る。小破片のため、立ち上がりの斜度にやや問題を残す。646は、平坦な底部から屈曲して開く体部をもつ。口縁部はやや肥厚し、外側にほぼ直立した面を形成する。

土師器

647～649は非轆轤土師器の皿である。647は厚みのある不整形な底部から、外反する口縁部を作る。648は丸みを帯びた口縁部を見せる。649は前二者よりやや直径が大きく、歪んだ底部と外反する口縁部を見せる。

650～653は鍋である。650・651は羽釜形の鍋で、岡田・長谷川（2003）によりA系列とされたものに相当する。650は、短い断面三角形の鍔をもち、口縁端部は肥厚気味に終わる。体部外面には斜行するタタキ目が見られる。651は、鍔の上下に強いヨコナデ・ユビオサエを施すことによって、断面三角形の短い鍔を表現している。体部外面には斜行するタタキ目が見られる。15世紀代～16世紀初頭の所産と思われる。

652は、いわゆる鉄鍋形の鍋であろう。口縁端部を外方へ拡張して、端部に平坦な面を形成している。

653は、甕形の鍋である。体部外面には、多方向のタタキ目が認められる。

瓦器

654～657は皿である。654・655は、不整形な底部と丸みを帯びた口縁部を見せ、器表面には指頭圧痕が観察される。657は、厚く平坦な底部から外反する薄い口縁部が立ち上がる。

658～660は椀である。658は回転糸切りの平高台、659・660は、断面三角形の高台をもつ。いずれも風化が進行しており、器表面の調整痕は明らかではない。

661は擂鉢である。直線的に延びる体部の内面に、粗い櫛描でおろし目がつけられている。

陶磁器

662・663・669は青磁である。662はその形状から蓋と思われるが、細片のため器種不明である。663は内面に簡略化された草花文を陰刻する。669は、内底面に印花により草花文を施す。

664～666は白磁である。664は玉縁状の口縁部をもつ、第Ⅳ類の碗である。665は小さな玉縁を作る第Ⅱ類の碗である。666は碗底部である。高台内外面は露胎となる。

667は丹波焼擂鉢である。直線的に延びた体部の内面に、ヘラ描きで粗いおろし目をつけている。16世紀後半代に属するものであろう。

668は陶器甕の口縁部である。口縁部は水平に開き、端部に凹面を形成している。

678は備前焼擂鉢の底部である。内面のおろし目は櫛描され、底面には中心で交差する8方向のおろし目がつけられている。

g．近世以降の陶磁器（図版75；670～677・679）

B地区を中心に、近世後半（18世紀後半～19世紀前半）を中心とした時期の陶磁器類が出土している。これはB地区中央部～東部が当該期以降継続して居住地となっていたことによる。

磁器

670～672・674は、肥前系磁器である。

670は青みを帯びた生地に、藍色の染付による格子文を施す端反り碗である。焼継ぎがおこなわれており、高台内底面に「ヨコタ文七□」の漆書きがある。高台端部は露胎となる。

671は濁った青白色の生地に、鈍い藍色の呉須で草花文を染付ける碗である。672は同様に笹文を染付ける。高台端部は露胎となる。ともに波佐見産と思われる。

674は濁った青白色の生地に、藍色の呉須で牡丹唐草文を染付ける皿である。見込み部には印判により五弁花文を施す。高台端部は露胎となる。底部の染付は、「大明年製」の文字を崩したものであろうか。

670は19世紀前半以降、他は18世紀後半代の所産である。

陶器

673はいわゆる肥前系京焼風陶器の筒形碗である。黄褐色の胎土に、鈍い黄色の釉を施し、高台外縁から底部は露胎となる。17世紀後半～18世紀前半に属する。

675は黄褐色の胎土に、淡黄色の釉を施した蓋である。天井部はゆるやかな膨らみを見せ、4条の沈線を巡らせている。天井部内面中央は露胎となる。19世紀前半以降の所産であろう。

676は灰白色を呈する生地に、透明釉を施した碗である。高台周縁から底部は露胎となる。

678は備前焼の擂鉢である。内面には4条一単位のおろし目が認められる。

679は丹波焼の甕である。外面は鉄釉を施した上から、灰釉を流しかける。18世紀末以降に属する。

h．土製品

680・681は、A区湿地部Bより出土した、土師器土錘である。680は算盤玉形を呈し、1孔が貫通する。681は厚みを減じる上端に、1孔が貫通する。下半を折損する。

(2) 木器・木製品

横田遺跡では、湿地部において多数の木器・木製品が出土しているが、器種・形態から所属時期を判断できないものも多い。ここでは、器種分類が可能な木製品と、穿孔・抉りなどの二次的加工が施された部材（角材・板材・棒等）71点について一括して記載をおこない、時期を推定できるものについてのみ、個別にこれを示すこととする。

なお木製品の樹種については、京都大学生存圏研究所教授伊藤隆夫氏に同定を依頼した。その結果については、本報告書第５章に玉稿を頂戴している。また各製品の計測値および樹種については、巻末の第14表に一括して記載している。

a．食事具・容器類

匙（図版76；W１～W５）

合計５点が出土した。

W１は、匙の未製品である。上面は平滑に仕上げられた後、中央部を僅かに加工した痕跡をとどめる。下面には、鮮明な加工痕が残る。柄は基部から折損しており、加工途上で廃棄されたものと考えられる。

W２は、匙の柄である。緩やかに湾曲しており、先端部はやや幅を広げた後、三角形状におさめている。表面には、わずかに加工痕をとどめている。

W３は、匙先端部である。

W４は、先端を失った匙である。匙部から柄にかけて、緩やかに屈曲する。全体に摩耗した観がある。

W５は、ほぼ完形の匙である。匙部から柄にかけて、緩やかな屈曲を見せるが、柄はほぼ直線的に作り出されている。器表面には、多数のこまかな加工痕が認められる。

二脚器（図版76；W６～W７）

W６・W７は、遺存状況が良好とは言えず、全体の形状は明らかではないが、楕円形の杯部を持ち、長径に平行して相対する長方形の二脚を作り出したものであろう。杯部の深さは３cm前後、器高は6.5cm前後と思われる。

四脚器（図版76；W８～W９）

W８・W９ともに二脚とその周辺を残すのみであるため、全体の大きさ、形状については明らかではない。W８の形態からは、長方形容器底面隅の４か所に、一辺８cm前後の方形の脚を設けたものと推測される。W９では脚が一辺５cmを測る。

皿（図版77；W10～W19）

W10～W19は、皿と分類したものであるが、その加工状況から刳物と挽物に大別される。

W11は、板材を整形した後、中央部を刳りこんで皿としたものである。W10も、器表面に不定方向の加工痕を顕著にとどめており、同種の皿またはその未製品と考えられる。

W12～W19は、精緻な円形を呈し、器表面に回転による加工痕をとどめていることから、挽物と考えられる。いずれも平坦に仕上げられた底部から、屈折して立ち上がる短い口縁部をもち、器高は1～2cmを測る。直径はW19で16cm前後、W17では20cmを超えるものと思われる。

底板（図版77；W20～W25）

W20～W25は、曲げ物の底板と考えられるものである。W21は、穿孔部に側板固定のためと思われる樹皮が巻かれている。他の製品には、穿孔は認められず側面に釘の痕跡も見いだせないが、正円形を呈

し平坦・平滑に仕上げられた形状から、いずれも曲物底板と考えて大過ないものと思われる。W23に見られる孔は二次的なものと思われる。完形をとどめるものはないが、W25で直径30cmを超える。

皿？（図版77；W26・W27）

W26・27は、皿の可能性があるものと判断される。W26は、中央部に向かって厚みを増す円形（ないしは楕円形）の素材の一面を平坦に仕上げたものである。中央部が失われているため、底部の形状および刳りこみの有無について不明である。

W27は、中央部がやや凹面をなしているが、明瞭な刳りこみの痕跡を見いだすことができなかった。

猪口？（図版77；W28）

W28は、小型円盤形の素材中央を、素材の厚みの半分強まで刳りこんだ製品である。完形品であるがこれ自体が製品か、何らかの部分品であるか不明である。猪口形の木製品として報告しておく。

槽（図版79；W37～W39・W41）

厚い素材を刳り込んで作られた大型の容器（W37～W39）を、槽と呼称しておく。

W37は、1角のみが遺存している。平坦な底面から屈折して、急斜度・直線的に外上方へ立ち上がる口縁部を作る。角部分は、直角に仕上げられている。

W38は、平坦な底面と厚みのある口縁部を見せる。内側刳りこみの角部分は直角に仕上げられている。外周は、一方の角部分が丸みを持ち、他の一方には外側へ取手が作り出されていたものと思われる。図左上には、口縁部上面から1孔が穿たれている。

W39は、底部と口縁部の一部をとどめるのみの破片であるが、厚みをもった口縁部の痕跡から、本器種に含めた。

W41は、片面に方形の隆起部2か所が設けられていることから、これを鍬の連続製作を示す未製品と考えていたものである。隆起部および側縁の整形が進行していないことから、製作の早い段階で放棄されたものと判断していた。しかし樹種同定の結果、スギ材であることが明らかとなったことから、鍬ではなく大型の脚付き容器と考えたい。

b．農具・農作業関連製品

穂摘具（図版78；W29・W30）

W29・30は穂摘具である。いずれも、片面に断面がV字形の溝を彫り、その中から穿孔をおこなっている。刃部は、W29は片刃で直刃に、W30は両刃で凸刃に作られている。

鍬（図版78；W36）

W36は、平鍬である。僅かに凸形となる刃部と、平行する直線的な側縁を見せる。側縁上部は屈折し、緩やかに内湾して幅を減ずる。身上部の左右には、一枚の素材板から連続して製作された際、切断のために設けられたと思われる抉りが見られる。

片面に逆涙滴形の隆起部を残し、ここに着柄孔が設けられている。着柄角は115°を測る。他の面には、着柄孔上部に、泥よけを装着するための溝が彫りこまれている。

本資料は、『木器集成図録近畿原始篇』（奈良国立文化財研究所　1993）によれば、広鍬V式にあたり、隆起部はA3型に相当する。また泥よけ装着部は、「上部蟻溝型」と呼称される形態を呈する。

錘（図版78；W31・W32）

W31・32は錘である。丸木材の外面と両端を凸形に整形し、その中央に紐かけ用の粗雑な溝を巡らせている。

横槌（図版78；W35）

W35は横槌である。丸木材を整形して、槌部と柄を作り出している。槌部は長さ約17cm、直径8cm、柄部は長さ約19cmを測り、柄端部をやや太く作っている。

田舟（図版78；W33・W34　図版79；W40）

W33・34・40は田舟である。W40では、先端部に縄かけのための突起が設けられている。

籠（図版80；W45）

W45は、植物の蔓を、らせん状に編んだものである。その形状から、籠を製作する際に底部中心となるものと考えられる。

c．紡績具

紡錘車（図版80；W42）

W42は、紡錘車である。円形の板の中央に、細い1孔を穿っている。

紡績具？（図版80；W43）

W43は、中央部にやや膨らみを持った断面形をみせる板の一端を、凸形に加工したものである。下端を欠損しており、全形は不明である。紡績具の一部であろうか。

d．祭祀具

鋸歯縁木製品（図版80；W44）

W44は、断面が三角形を呈する板の1側縁を、鋸歯状に加工した製品である。ヒノキを用い、器表面は平滑に仕上げられている。楽器のササラである可能性も考慮して祭祀具に分類したが、上下両端を欠いており、断定に至らなかった。

武器形木製品（図版80；W46・W47）

W46は、鏃形木製品である。断面形は、凸レンズ状に仕上げられており、緩やかな抉りを施して、茎部を作出している。

W47は、剣形木製品である。両側縁はほぼ平行し、先端部は三角形に薄く尖る。基部は両側縁に抉りを入れ、基端部にかけて再び扇形に広がって柄を表現している。器表面は平滑に仕上げられており、身部中央には、両側縁とほぼ平行する弱い鏑が認められる。

e．板・棒状製品（図版81・82；W53～W65）

板・角材・棒状材は多数出土しているが、本来の用途を推定しうるものは少ない。

W53～56は、穿孔をもつ板である。厚さは1～2cmと、比較的薄い板材であり、W55では、並んで穿孔された2孔の間に板の端部が接合されていた痕跡が、僅かな凹面として観察されることから、箱形製品の一部と考えられる。またW56でも、穿孔された材の端部に木組みを想起させるわずかな抉りが認められる。他の材でも、並んで穿孔された例が認められることから、類同の製品と考えて大過ないだろう。

W57は、まるみをもつように整形された端部に、1孔が穿たれたものである。

W58は、薄く平滑な板の側縁に、1か所の抉りを設けたものである。木製祭祀具を想起させる形態ではあるが、上下両端を欠いていることから、器種を判断できなかった。

W59・60・62は、円形に近い断面形を呈する棒である。W59は下部を折損するが、端部と身部の少なくとも3か所に抉りを入れている。W60は、完形品である。上端に抉りを入れており、下端は切断されて終わっている。W62は、やはり完形品である。上端に抉りを入れる点ではW60と同様であるが、下端に向かって次第に直径を減じ、下端はやや丸みをもつ形状に仕上げられている。

W61は、断面が円形を呈し、細く尖った先端をもつ、箸状の木製品である。

W63は、断面が円形を呈する棒で、上部を折損している。下端から16cmほど上部に最大直径があり、そこから下端に向かって細くなる。

W64は、角材の一部に抉りを入れたものである。下端は二次的な損傷が著しく、ささくれ状に折損している。

W65は、下端を欠く板材の上端に、1孔を設けたものである。

ｆ．部材（図版82；W66～W72）

この項に分類されたものは、建築物の一部と推定されたもので、大型の板材・角材等を含んでいる。全体の形状が不明なものによって占められているため、個々の用途については明らかにし難い。

W66は、板状の身部と、丸みをもった頭部からなる。身部中央には、鍵穴形の孔が設けられている。建築物等で、部材を固定するために用いられたものであろうか。完形品。

W67は、一端に方形の孔を穿った板である。

W68は、板材に穿孔をもつものである。

W69は階段である。丸木を加工して一面を平坦にし、他の面に段を削り出している。

W70は、板材の一部を緩やかに内湾する形に抉ったものである。何らかの部材と考えられるが、全形は定かではない。

W71は、臍をもつ丸材の端部である。

W72は、一端に方形の孔を穿ったものである。器表面の劣化が顕著である。

ｇ．不明木製品（図版80；W48～W52）

以下は、器種分類に至らなかった製品である。

W48は、小型の薄い板を、ヘラ形に加工したものである。一端を丸く、一端を方形に加工している。完形であるが機能は判断しがたい。

W49は、薄い板の側縁に、三角形の突起を作出したものである。上部には、1か所の円孔が穿たれている。ほぼ縦半分に折損しているほか、下部も折損しており、全形も不明である。あるいは「茄子形」を呈する鍬の断片かとも考えられるが、極めて薄いため別の機能を考えるべきだろう。

W50・51は、全長の1/3ほどの、扁平な断面形を見せるヘラ形の部位と、円形の断面を呈する柄状の部位からなる。いわゆる杓子形木製品等の中に、類例が散見される。

W52は、断面が方形を呈する材の一端に、鈎形の部位を作出したものである。自在鈎の可能性を考慮

したが、判断に至らなかった。

湿地部出土の木製品については、既述のように時期を特定できないものも多い。その中で、広鍬（W36）は、型式上、弥生時代の範疇でとらえられる可能性が高い。また、穂摘具は、これまでの他地域における出土例から、弥生時代～古墳時代前期の間で理解できよう。挽物と考えられる皿（W12～19）は、技術的な点から律令期を含めそれ以降の所産と判断され、曲げ物類についても同様と考えられる。その他の木製品については、時期を特定するだけの資料に欠ける。

⑶ 金属器（図版83；M４～M12）

M４は、不明鉄製品である。薄い鉄板を曲げて、袋状とし、丸みをもった形状に仕上げている。錆化が著しい。

M５は、鏃状の鉄製品である。長方形の断面を見せ、ほぼ直角に曲げられている。A地区湿地部包含層出土。

M６は、鋳造鉄製品である。表面には、鳥２羽と青海波文が配され、その中央につまみが設けられている。図左上に、軸の欠損した痕跡が見られること、製品の横断面が弧状を呈することから、何らかの製品の蓋と考えられる。A地区湿地部の包含層上部から出土したものであり、近世以降の所産と思われる。

M７～M10はB地区包含層より出土したものである。

M７は鉄釘である。断面はほぼ正方形を呈し、先端が釣り針状に曲がる。

M８は不明鉄製品である。何らかの、容器の断片の可能性があろうか。

M９は不明鉄製品である。断面は方形を呈し、全体が大きく曲がる。

M10は簪状の銅製品である。火箸などの可能性があろうか。

M11はあさねの森地区出土の不明鉄製品である。断面は円形を呈する。

M12は確認調査時の出土（14トレンチ）鋳造鉄製品である。鍋の取手部分と考えられる。

M16～M21は銅銭である。本発掘調査・確認調査時に出土している。M16は「元豊通寶」、他は「寛永通宝」である。M20は確認調査時にあさねの森地区より出土。他は横田遺跡B地区の出土である。

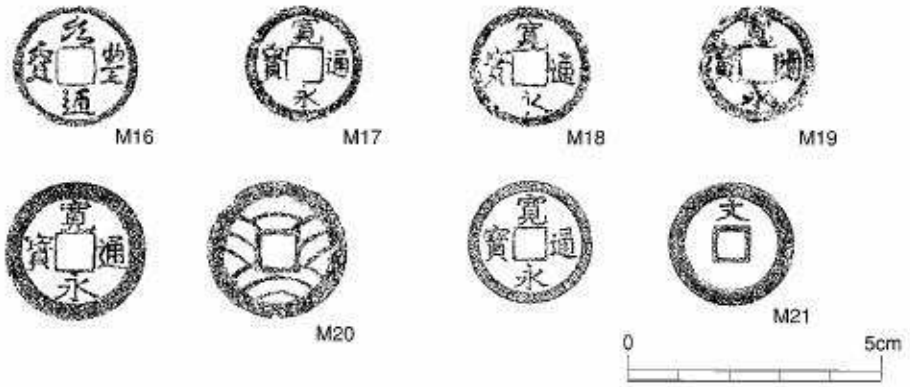
⑷ 石器・石製品（図版84～86；S９～S15・S21～S24）

S９は、湿地部出土の微細剥離痕のある剥片である。寸詰まりの剥片の一側縁に、微細な剥離痕が連続している。素材剥片は、２枚の剥離痕を打面として剥離されている。

S10は、湿地部出土の石核である。小型の礫を素材とし、その表裏から剥離を行っている。石核の上下両端に、平坦な剥離面を形成して打面としている。左図右側縁には、細かな剥離痕が連続していることから、最終段階で削器に転用された可能性があろう。

S11は、湿地部出土の横長剥片石核で、全体に風化が進行している。大型の剥片を素材とし、その腹面側を剥離作業面として、剥離をおこなっている。剥離作業は、素材剥片の打面側から行われており、作業面には、やや寸詰まりな横長剥片の剥離痕が並列している。一見、後期旧石器時代の横長剥片石核を想起させる。

S12は、湿地部出土。粘板岩の扁平な河川礫を素材とし、幅広の一端に表裏から二次加工を施して、



第３図　包含層・確認調査時出土の銅銭

石斧状の刃部を形成したものである。表裏ともに礫表皮を大きく残しているが、礫表皮に僅かながら研磨の痕跡が認められる。また右図中央には、細かな敲打痕が認められる。石斧ないしは楔の機能が推測される。

Ｓ13は、Ｂ区の精査面より出土した。粘板岩を用い、表裏ともに研磨を加えたものである。図左面は極めて平滑に仕上げられている。図右面は、素材を割りとった際の剥離面と、これを研磨した凹面をなす部位が認められる。上端も研磨され、直線的に仕上げられている。図左面が極度に平滑であるため、砥石とは考え難い。

Ｓ14は、Ｂ区の包含層より出土した、叩石である。楕円形の河川礫を用い、その長径の両端にあたる面を打撃に用いており、両端面には細かな潰痕が顕著な重複を見せる。

Ｓ15は、Ａ地区出土の砥石である。細粒の砂岩を用い、長方形に整形して、その表裏を砥面としている。両端は折損面である。

Ｓ21は、湿地部より出土した、穂摘具未製品である。横長剥片の縁辺に二次加工を施し、大略、穂摘具の形状に至っている。素材剥片は、剥離面を打面としており、背面側にも腹面側と同一方向からの剥離痕が認められることから、石核の一端から、連続して剥片剥離を行ったものと考えられる。剥片の末端部は石核底面を取り込んでおり、直線的である。形態上、この部位が刃部になるものと思われる。

Ｓ22は、Ｂ区の包含層より出土した、不明磨製石器である。やや黄灰色を呈する粘板岩の表裏に研磨が認められる。図上面も、研磨によって平坦に仕上げられている。図左面が、極めて平滑に研磨されていることから、砥石とすることは些か躊躇される。極めて緻密な粘板岩の礫をもちいており、あるいは磨製石剣を指向したものであろうか。

Ｓ23・Ｓ24は、ともに湿地部出土の砥石である。いずれも砂岩を用いており、長軸方向に研磨が行われた結果、凹面が形成されている。Ｓ23はやや細粒である。

３．旧河道出土の遺物

第２章で述べたように、Ａ地区西部には低湿地堆積物が広がっており、この範囲で３条（SD1009・1014・1015）の旧河道が検出された。SD1014・1015は調査区内で分岐・合流するもので、本来同一の河道である。いずれも自然河道であり、不規則な縁辺の形状を示しつつ、わずかに蛇行している。

これらの河道を含む低湿地部の堆積物は、A地区断面図（図版２）に示した。この断面図に示される低湿地部の堆積と、河道の埋積過程については、第５章の青木氏論文に詳しく論述されているため、ここでは割愛するが、今回の調査でSD1009・1014・1015とした河道は、扇状地末端部の大きな河道が埋積する最終過程で形成されたものであり、これらが平坦化した後に、低湿地化して遺物包含層（A～C）が形成されている。

SD1009（図版４）

旧河道のうち、最も扇状地末端部に近い位置にあり、扇状地末端の形状に沿ってゆるやかな弧状に延びる。調査区を南北に縦断し、延長44m、最大幅は9m前後を測る。中央付近の東側上端が、一部円形に抉られており、この部分で顕著な遺物の出土が認められた。

河道と認識して掘り下げをおこなったのは、図版2の18・19・20・25層に相当する。河道内は比較的細粒の砂・シルトを主体に埋積されていた。埋土上部では、古墳時代後期の須恵器が出土しており、最終的な埋没が当該期に及ぶことが明らかとなった。埋土下部からは、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかかる遺物が出土している。

弥生土器・須恵器（図版54・55；162～199）

弥生時代の壺・甕・鉢・高杯・器台・ミニチュア土器の他、須恵器の壺・甕が出土している。

162・163は須恵器の壺・甕である。163は頸部に横描波状文をめぐらせる。163は大きく開く口縁部を持ち、口縁部直下に断面三角形の突帯をめぐらせ、その下には櫛描波状文をめぐらせる。

164～169は壺である。164は二重口縁を持つ壺の破片と考えられる。口縁端部は外側に面を持ち、そこに擬凹線をめぐらせている。165は「く」の字形に屈曲した頸部から外反する口縁がのび、端部を短く上方に拡張し、そこに擬凹線をめぐらせている。166は緩やかに外反する短い頸部を持ち、口縁を上部に拡張する広口壺である。口縁部には擬凹線をめぐらせている。167は直線的に開く口縁に断面三角形の突帯を貼り付け、外観を二重口縁壺に似せたものである。169は大きく外側に開く口縁部を持ち、口縁端部は外向きに面を作り、そこに擬凹線をめぐらせる。170～172・179は壺と思われる底部である。

173～176は甕である。173・174・175は複合口縁を持ち、口縁部に擬凹線をめぐらせている。外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施している。176は直線的にのびる口縁部を持つ。体部外面はタタキを施し、内面はナデで仕上げる。

177・178はミニチュア鉢、180～188は鉢である。180・181・183・184は脚台を持つ。182は突出した平底で内彎して立ち上がる体部を持つ。外面はナデを施し、内面にはハケの痕跡がある。185～188は砲弾型の体部を持つもので、底部に穿孔がある。外面にはタタキ、内面にはハケを施すものが多い。

189～192は高杯である。189は浅い椀形の杯部に一対の把手が付くものと考えられる。口縁部直下に凹線をめぐらせ、内面にはヘラミガキを施す。190は短い脚柱部から直線的に開く裾部を持つ。外面にはハケを施し、内面はナデで仕上げる。191は190と同じ形態で、外面にはヘラミガキを施し、内面はナデで仕上げる。192は中空の脚柱部から直線的にのびる裾部を持つ。外面にヘラミガキ、内面にはハケを施し、裾部には円孔を穿つ。

193～195は器台である。193は口縁端部を上下に拡張し、そこに擬凹線をめぐらせる。194は受け部の上に受け部を重ねた装飾器台の一部である。195は受け部の一部で内外面にヘラミガキを施す。

196・197はミニチュア土器である。手づくね成形している。

198・199は蓋である。198は外面にヘラミガキを施し、内面はナデで仕上げている。199は内外面ともナデを施している。

これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１古段階）のものだと思われる。

石器（図版86；Ｓ５～Ｓ７）

Ｓ５は、二次加工のある剥片とした。幅広剥片の一側縁に、表裏から二次加工を施して、内湾する縁辺を形成している。

Ｓ６は、穂摘具であろう。下端に自然面を残し、表裏両面を研磨している。左図左側縁は、研磨により作出された背部である。

Ｓ７は、大型剥片を素材とした二次加工のある剥片である。素材剥片の打面が、複数の剥離痕で構成されていることから、打面と剥離作業面を交替させつつ剥離を進行させた可能性が考慮される。三角形を呈する剥片の背面側二側縁に、腹面側から二次加工を施している。あるいは、削器とすべきであろうか。

SD1014・1015（図版４）

調査区西端、SD1009の西に位置し、調査区内でSD1015と分岐・合流する。両河道は、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。河道と認識して掘り下げをおこなったのは、図版２の13～17層（SD1014）と21層（SD1015）である。SD1014の河道内は比較的細粒の砂・シルトを主体に埋積されていたが、下層にはシルト質砂礫が堆積していた。またSD1015は、概ねシルトによって埋没していた。埋土中からは、弥生時代終末期を中心とした時期の遺物が出土している。

SD1014出土土器（図版56；200～204）

壺・甕・鉢が出土している。

200は口縁部全体を肥厚させ、櫛描波状文を施し、肥厚した口縁の下端に凹線をめぐらせる直口壺である。外面の頸部付近および内面には丁寧なヘラミガキを施す。山陰地方西部の影響を感じさせる土器である。

201～203は甕である。201は口縁端部を上方に肥厚させる。体部外面はナデ、内面にはヘラケズリを施す。202は倒卵形の体部から外反して開く口縁部を持つ。口縁端部は上方にわずかに肥厚させる。外面はナデ、内面はハケの後ナデを施す。203は短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は外向きに面をつくり、そこに擬凹線を１条めぐらせる。

204は斜め上方に開く複合口縁を持つ鉢である。内外面にヘラミガキを施す。

これらの土器は弥生時代終末期（Ⅵ－１段階）のものと考えられる。

SD1015出土土器（図版56；205～222）

205～207・213は壺である。205は鋭く屈曲した頸部から外反して開く口縁部を持ち、口縁端部を上方に肥厚させる。206は大きく開く口縁部を持ち、端部を上方に肥厚させ、そこに擬凹線を配する。207は斜めに開く口縁部全体を肥厚させ、外面に沈線文と半截竹管・竹管の連続刺突による文様帯を配する。内面にはハケを施している。213は楕円形の体部から屈曲して外反する口縁を持ち、口縁端部を上方に肥厚させる。体部外面はハケの後ナデ、内面にはヘラケズリを施す。208・209は壺の底部と思われる。

210・211・214は甕である。210は外反気味に開く口縁から、口縁端部をさらに上方に肥厚させる。外面にはハケ、内面にはヘラケズリを施している。211は外反する口縁を持ち、口縁端部はわずかに肥厚

して外側に面を作る。体部外面にはタタキの後ハケ、内面にはハケを施している。214は「く」の字形に屈曲する頸部から外反してのびる口縁部を持つ。体部外面にはタタキ、内面にはハケを施す。215は甕のものと思われる底部である。

216は鉢の底部と考えられる。217～219は脚部である。219は外面に突帯をめぐらせ、ヘラミガキを施している。

220・221は高杯である。220は複合口縁を持つ杯部と思われ、内外面に丁寧なヘラミガキを施している。221は浅い椀形の杯部に中空の脚柱部が付くもので、杯部内外面にはヘラミガキ、脚部外面にはヘラミガキ、内面にはハケとシボリの痕跡が残る。

222は器台の口縁部である。内外面にヘラミガキを施し、口縁部には擬凹線をめぐらせている。

弥生時代終末期（Ⅵ－２古段階）のものと考えられる。

４．低湿地・旧河道出土の自然遺物

Ａ地区の低湿地部および旧河道からは、堅果類をはじめとする複数の種実が出土した。調査にあたっては、そのすべてを回収することが困難であったため、限られた範囲内で識別の容易な種子類のみを回収している。従って、その種組成にはサンプリングに起因する偏りが存在することは確実である。種子類の詳細な同定は第５章第２節にゆずるが、概略のみ記載しておく。

低湿地部包含層および旧河道から出土した種実のうち、栽培植物に由来するものとしてはモモおよびメロン類があげられる。モモは包含層Ｂ・Ｃより、メロン類はSD1009より出土している。個別の所属時期は言及しがたいが、出土層位からは、モモは弥生時代終末期～中世に属するものと言える。またSD1009は弥生時代終末期に形成された河道であることから、メロン類の種子はこの時期に相当し、当該期において、ウリ科植物の栽培が遺跡内でおこなわれていた可能性を示唆するものと言えよう。

その他の種実としては、オニグルミ・イチイガシ・ツバキ・ブドウ・クマノミズキ・エゴノキ・タデ科などが同定されたが、これらはいずれも周辺の自然植生に伴うものと推定されている。

第４章　横田北古墳群の調査

第１節　概要

横田北古墳群は、加古川左岸を南北に延びる山塊から、西向きに派生した小さな支尾根上に立地している。支尾根は、西南西に主軸をもち、調査区内での最高所は標高127ｍを測る。ここから以下は急傾斜となって、横田遺跡が立地する扇状地に至るが、特に標高110ｍ以下の４号墳下位の斜面は急峻で、岩盤が露呈する部分も見られた（図版40）。

調査前の尾根上は、表土が極めて薄く各所で岩盤ないしは黄褐色の地山が露呈していた。墳丘はかろうじて識別できる程度の高さを残していたが、尾根上には後世の攪乱によると思われる起伏、小規模な崖面が各所に認められ、それらの間で古墳を識別することは困難であった。

５基の古墳のうち１～４号墳は、急峻な支尾根の稜線上に立地しており、６号墳は支尾根最高所の稜線中心からやや南側に外れた、尾根端部に位置している。なお、第２章で述べたように、確認調査の段階で５号墳とされていた地点では、古墳が確認できなかったため古墳番号を削除した。

支尾根上は浸食とともに中世以降の人為的な攪乱が認められ、各古墳の遺存状況は良好とは言い難い。

第２節　遺構と遺物

１．１号墳

遺構（図版41・写真図版23・24）

【検出状況】　１号墳は尾根の最高所に位置しており、墳丘最高所の標高は122.0ｍを測る。墳丘はほぼ全壊状態でほとんど遺存しておらず、かろうじて堀切のみが遺存していた。

【形態・規模】　斜面上方に、弧状の堀切を設けている。堀切から復元される墳丘規模は、直径６ｍ前後と推定される。

【主体部】　主体部は遺存しておらず、不明である。

出土遺物（図版87；737）

737は、１号墳上方斜面の堀切内より出土した須恵器壺である。口縁部を欠くが、体部から頸部への屈折を僅かにとどめており、頸部がほぼ直上方へ立ち上がることから、広口壺と思われる。肩部は丸みをもち、櫛描波状文が施文されている。

１号墳上方斜面では、古墳時代後期に属する数点の須恵器が出土しており、堀切内より出土した737が１号墳に帰属するか否か、問題を残す。

２．２号墳

遺構（図版42・44・写真図版23・24）

【検出状況】　１号墳の下方斜面（西側）に位置しており、墳丘最高所の標高は118.9ｍを測る。墳丘中央部から西半分が土取によってほぼ完全に削平されており、東半分がかろうじて遺存していた。土取

によって破壊された墳丘中央部には、高さ１m内外、延長７mほどの崖が形成されており、この崖面の精査によって、主体部１基を検出することができた。

遺存していた墳丘東半分も盛土の流出が顕著で、主体部はすでに現地表面に露出している状況であった。

【形態・規模】　斜面上方に、弧状の堀切を設けている。堀切から復元される墳丘規模は、長径8.5m前後と推定される。

【主体部】　木棺直葬と考えられる。墓坑の主軸は尾根の稜線に対して直交方向（南北）にあり、土取のため縦断方向にほぼ1/2が完全に破壊されていたほか、遺存していた墓坑内の埋土も相当程度が攪乱を受けていた。このため、正確な主軸方位は不明であるが、墓坑の東縁はおよそN30°Wの方向にあり、主軸方位もこれに近いものと推察される。墓坑は隅丸長方形を呈し、底面は緩やかな起伏を見せながらわずかに北→南に傾斜する。墓坑の長さは約2.3mを測る。

墓坑内の精査では、木棺の痕跡は検出できなかったが、石材は一切検出されなかったことから、埋葬は木棺であった可能性が高い。

出土遺物（図版87；738・739　図版88；765・766）

738・739は、ともに２号墳墳丘の二次的堆積土より出土した。

738は、須恵器杯身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部内面に内傾する段をもつ。立ち上がりの高さは、約1.8cmを測る。

739は、須恵器杯身である。口縁部はほぼ直上に立ち上がるが、その高さは約0.6cmと低い。口縁端部は丸くおさめている。

765・766は、墓坑内より出土した土玉である。ほぼ球形を呈しており、中心に１孔が貫通する。表面は平滑に仕上げられており、鈍い光沢をもつ。焼成はやや脆弱である。

３．３号墳

遺構（図版43・44・写真図版23・25～28）

【検出状況】　２号墳の下方斜面（西側）に位置しており、墳丘最高所の標高は114.5mを測る。墳丘西端部が急傾斜のため流出し、墳形を乱しているほかは比較的良好に遺存していた。

【形態・規模】　斜面上方に、弧状の堀切を設けている。墳丘は歪んだ円形を呈していたものと見られ、墳丘規模は、長径7.0m前後、短径6.5m前後を測る。

【主体部】　推定される墳丘中心よりやや上方（東）で、蓋も完存した組合式石棺１基が検出された。石棺の主軸方向はW11.5°Nで、２号墳の墓坑同様尾根の稜線に直交する方向に設けられている。

石棺の蓋石は４枚で構成され、隙間を拳大の角礫で埋めている。蓋石上面の被覆土は遺存状況が劣悪で、すでに現地表面に蓋の一部が露出している状況であったが、蓋の空隙を充填した粘土は部分的に遺存しており、蓋石上から石製紡錘車１点が出土した。

石棺内には、黄褐色～明褐色の細砂ないしは極細砂を主体とする流入土が充満していたが、斜面上方側の側板が、棺内側へわずかに傾斜していたほかはほぼ完全に遺存していた。

石棺床面の北側小口部には、須恵器杯蓋２点が伏せられた状況で置かれており、埋葬時の枕と判断される。副葬遺物としては、石棺中央および南部の西側側板に沿った位置で鉄製刀子２点、石棺南部の東

寄りで器種不明の鉄器破片が出土している。

石棺を埋置した墓坑は、長さ2.5m、45cmのやや不整な長楕円形を呈する。西側1/3～1/4を削平によって喪失している。石棺の周囲には、側板・小口板の裏込めとして拳大の角礫が多数埋置されていた。墓坑底は風化した基盤岩に達しており、側板および小口板を設置するために、隅丸方形の溝が掘り込まれている。

出土遺物（図版87；740～747　図版88；S25・M13・M14）

741・742は、石棺内に枕として置かれていた須恵器杯蓋である。いずれも膨らみを持つ天井部から、わずかな段を経て、やや外方に開きつつ下降して口縁部に至る。口縁端部内面には内傾する段をもち、742では端面に凹線状のくぼみを有する。

740は、石棺内の流入土中より出土した須恵器杯蓋である。膨らみをもつ高い天井部から、やや鈍い断面三角形の稜を経て、ほぼ垂直に下降して口縁部に至る。口縁端部は内傾する段をもつ。

743は、やはり石棺内流入土中より出土した須恵器杯身である。口縁部は内傾して立ち上がり、端部内面に内傾する段をもつ。立ち上がりの高さは、約1.4cmを測る。

744は墓坑内、745・746は墳丘上より出土した須恵器杯身である。744は、やや内傾して立ち上がる口縁部を見せ、端部内面にやや鈍い段を有する。立ち上がりの高さは、約1.6cmである。745は、やや内傾して立ち上がる口縁部を見せるが、端部は厚みを減じつつ丸くおさめている。立ち上がりの高さは約1.4cmである。746は、前二者よりも口径が大きく、やや扁平な印象を受ける。内傾して立ち上がる口縁部を見せ、端部は厚みを減じつつ、丸くおさめている。

747は、堀切内出土の須恵器甕である。体部外面に平行タタキ、内面に同心円タタキ（当て具痕）を施す。

S25は、石製紡錘車である。石棺蓋石の検出作業中に、蓋石を覆う埋土中より出土した。墓坑内の副葬品と思われる。側面観が台形を呈し、両面ともに極めて細い線刻が放射状に施されている。この種の遺物では、複合鋸歯文が多用されるが、その簡略化されたものであろうか。直径4.1cm、厚さ1.6cm、重量30.8gを測る。

M13・M14は、いずれも石棺内より出土した鉄製刀子である。M13は石棺南部の西側側板際より、M14は石棺中央部のやはり西側側板際より出土した。

M13は柄部と身部の背の間に段差がなく、背部は先端にかけて丸みをおびる。刃部は直線的である。柄部の断面形は長方形をなし、柄の基端部は丸みをおびる。

M14は柄部と身部の間に段差をもち、直線的に延びる背部と、先端にかけて曲線的な刃部を見せる。ともに基部には木質を残し、M13が長さ11.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、M14が長さ6.3cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。

4．4号墳

遺構（図版41・写真図版23・24）

【検出状況】　3号墳の下方斜面（西側）に位置しており、墳丘最高所の標高は111.3mを測る。墳丘は、ほぼ中央部から西が削平によって著しい変形を受けている。墳丘盛土はほとんど遺存していなかった。

【形態・規模】　斜面上方に、弧状の堀切を設けている。墳丘は歪んだ円形を呈していたものと見られ、墳丘規模は、長径7.0m前後、短径5.0m前後を測る。

【主体部】　検出されなかった。

出土遺物（図版87；748）

堀切内より須恵器杯身748が出土した。748は膨らみをもった底部と、急斜度に直線的な立ち上がりの口縁部を見せる。口縁端部には内傾する面を形成している。

5．6号墳

遺構（図版44・写真図版23・24・29）

【検出状況】　1号墳南側の尾根稜線南端に位置しており、墳丘最高所の標高は120.5mを測る。墳丘南半部が崩落ないしは削平により破壊されており、墳丘のおよそ1/2が遺存していた。崩壊した部分は、調査開始時点で延長9m、高さ1mほどの崖面となっており、基盤の風化岩盤がすでに50cm以上露呈した状況であった。

6号墳は、分布調査・確認調査のいずれによっても認知されておらず、上述の崖面を精査していた際に新たに発見されたものである。崖面には、すでに主体部の断面と須恵器が露出していた。

【形態・規模】　斜面上方に、弧状の堀切を設けている。墳丘は歪んだ円形を呈していたものと見られ、墳丘規模は、長径7m前後と推定される。

【主体部】　遺存する墳丘中央より、木棺直葬と考えられる墓坑1基が検出された。墓坑の主軸方向は南北にあったものと考えられ、その南側の大半を喪失していた。墓坑残存部は隅丸長方形を呈し、ほぼ正しく南北に長軸をもつ。残存長0.80m、幅0.76m、深さ0.45mを測る。

墓坑内埋土からは、須恵器有蓋高坏、甕等が出土しているが、その出土状況から、墓坑内に埋置されたものではなく、墓坑上に置かれていたものが木棺の腐朽によって転落した可能性が高い。埋葬主体は木棺であったと推定されるが、木棺の痕跡は検出できなかった。

出土遺物（図版87；749～755）

須恵器有蓋高坏、杯蓋？・甕が出土している。

749～751は、有蓋高杯蓋である。いずれも墓坑内より出土しており、751は高杯753の蓋である。膨らみのある天井部に扁平なつまみをもち、いずれも口縁部との境界には弱い稜と沈線を巡らせる。口縁端部は内傾する凹面をなし、やや肥厚気味に終わる。

752は堀切内出土の蓋である。天井部中央を欠く。天井部と口縁部の境界には、弱い稜と沈線を巡らせ、口縁端部は肥厚気味に終わる。

753・754は有蓋の短脚高杯である。753は杯部口縁がやや外反気味に立ち上がり、口縁端部に内傾する面を形成している。脚には3方向に一段の長方形透かしを作り、脚端部は内湾気味に終わる。754は杯部口縁が内傾しつつ直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。脚には3方向に一段の長方形透かしを作り、脚端部は尖り気味に終わる。脚および杯部下半の外面は、回転カキ目調整が施されている。

755は甕である。丸みを帯びた体部と、広い頸部から大きく開く口縁部を見せる。体部の最大径付近に1孔が穿たれ、櫛描波状文が巡らされており、その上下に各1条の沈線が巡る。頸部にも数段の波状文が巡らされる。頸部と口縁部の境界に段を形成し、そこから直線的に口縁部が開く。口縁端部は外方

へ拡張されて、平坦な面を形成している。

6．遊離遺物（図版88；756・757）

古墳から遊離したと思われる遺物が、1号墳上方などで出土している。

756は、1号墳上方の尾根上で出土した、須恵器杯身である。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部には内傾する凹面を形成する。757は、尾根上で出土した杯身である。いずれかの古墳からの流出と考えられる。ほぼ直立する口縁部を見せる。

第3節　その他の遺物

横田北古墳群が立地する尾根上では、古墳群に関連しない遺物が散漫ではあるが出土している。その所属時期は縄文・弥生時代から近世に至るものであり、当該時期にこの尾根上が利用されていたことを示す。ただし、各時期の遺構は検出されておらず、いずれも遊離遺物である。

1．土器・陶磁器（図版88；758～764）

758は3号墳東方で出土した土師器皿である。底部は回転糸切りで、直線的に立ち上がる口縁部を見せる。

759は1号墳上方尾根上で出土した土師器杯？である。全体に風化が顕著である。

760は3号墳墳丘周辺で出土した須恵器椀である。わずかに平高台状を呈する底部と、膨らみをもちながら立ち上がる体部をもつ。口縁端部は肥厚して終わる。

761は4号墳北側で出土した須恵器椀である。やはり肥厚気味に終わる口縁端部を見せる。

758～761は中世に属する遺物である。

762は3号墳堀切内、763は4号墳墳丘周辺より出土した土師器鍋である。ほぼ直立する口縁部に、762では扁平な底部を、763ではやや深まりをもつ底部を見せる。器表面は風化が顕著で、調整等は明らかではない。いわゆる「焙炮」であり、岡田・長谷川（2003）によれば、17世紀以降の所産と考えられる。

764は陶器の小壷である。白色の生地に透明釉を施す。やはり近世の所産であろう。

2．金属器（図版88；M15）

M15は鉄製片口鉢である。ほぼ半球形を呈し、口縁部の一端を片口に作る。底部は本来、小さな玉状の三足を付していたものと思われ、そのひとつをとどめている。類品が、県下の小野市勝手野古墳群6号墳で出土している。

3．石器（図版85；S16～S18）

S16～S18は、尾根上より出土した石器である。

S16は、北古墳群の立地する稜線頂上部で採集した、幅広のチャート製剥片である。剥離面を打面としている。背面側の剥離痕は腹面に直交する方向と、対向する方向を示す。脈の多い粗質なチャートである。

S17は、やはり横田北古墳群山頂採集の、粗質な粘板岩を用いた縦長剥片である。打面を折損している。

S18は石庖丁（穂摘具）である。粘板岩の両面を研磨し、一側縁を片刃に整形している。図上端には自然面（または節理面）をとどめている。

第4節　小結

横田北古墳群では、今回5基の古墳を調査し、うち3基で主体部が確認された。

本古墳群中、最も古い段階の遺物を出土したのは、2・4・6号墳であり、陶邑編年のTK47型式（田辺昭三　1981）に相当するものと思われる。ただし、2・4号墳は墳丘の削平が著しく、遺物も原位置を遊離した出土状況であり、より上位に存在した古墳からの遺物の流入という可能性を捨象できない。

3号墳は、石棺内で枕とされていた杯蓋2点（741・742）が、いずれもTK10型式の新しい段階に対応すると思われる。また、3号墳の石棺内流入土からTK47型式に相当する杯蓋（740）、墓坑内から、TK10型式の古い段階に対応すると思われる杯身（744）は出土しているが、これらが3号墳により古い埋葬主体が存在していたことを示唆するものであるか、他の古墳からの二次的流入であるかは判断し難い。

また2号墳墳丘からは、TK217型式の古い段階に対応すると考えられる杯身（739）が出土している。これが当該期の埋葬を示すものか否かは、古墳群内で他に同時期を示す遺物が認められないことから、俄に断じがたいものの、横田遺跡との関係を含めた二次的な土地利用の可能性が高いと思われる。

1号墳は資料が僅少で所属時期を判断できないが、他の古墳における出土遺物からは、横田北古墳群はTK47～TK10型式の間（6世紀前半代）に築造されたものと考えて大過なかろう。

1号墳より上位の尾根上における古墳の存否は確認されていないが、今回の調査において1号墳上方斜面から須恵器（756）の出土を見たことから、古墳が存在した可能性は高いものと思われる。

古墳群の築造を遡る時期の遺物としては、チャート剥片・粘板岩製石包丁などが出土している。前者は縄文時代以前、後者は弥生時代に属するものであろうが、当該期からこうした尾根上が利用されていたことを示す。

古墳群築造以降の尾根上の土地利用は、その他の遺物が示すとおりであり、古代以降近世に至る期間にわたって継続したものであろう。

第５章　自然科学的分析

第１節　横田遺跡の地形環境

青木　哲哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

地表は人間の活動舞台であり、そこに現出する地形環境は人間生活に大きな影響をおよぼす。こうした地形環境は過去を通じて変化してきた。人間は時代の流れとともに進展する自らの生活を地形環境に巧みに対応させて活動し、時には地形環境を改変することがあった。地形環境と人間活動とは密接に関わってきたと考えられ、地形環境は人間生活や遺跡の立地を理解する上での重要な要素となる。

人間活動に対応する地形環境は細かいオーダーで考察する必要がある。それには、地形環境を考古遺跡の発掘調査にともなって考察することが有効な手段となる。考古遺跡の発掘調査区では、微地形や堆積物が直接かつ詳細に観察できる。そのため、細かいオーダーでの地形環境を復原することが可能である。復原された地形環境の時期については、発掘調査で検出された考古遺物から知られる。その上、考古学的な調査成果を加味することによって、地形環境と人間活動との関係をも解明できるのである。

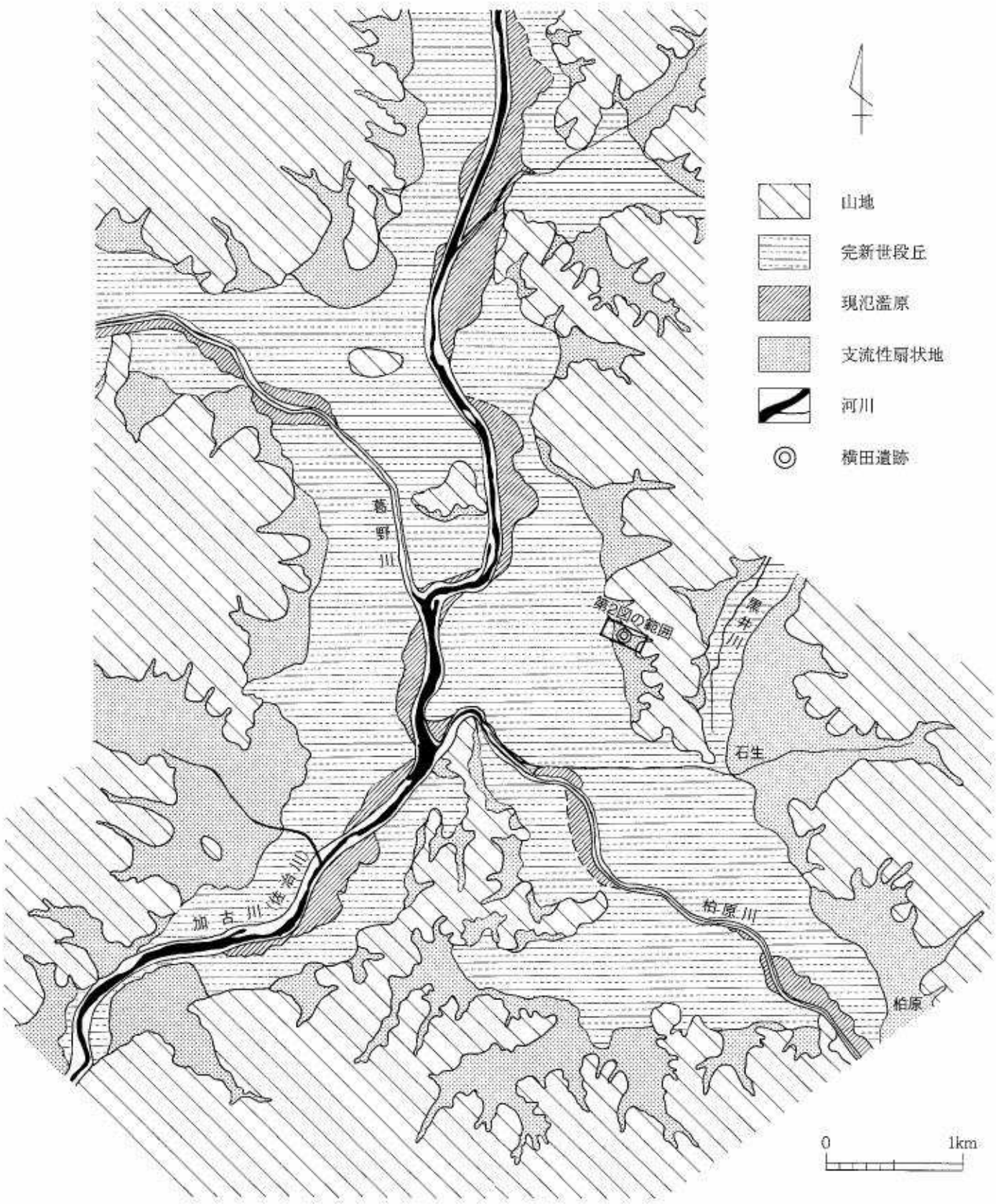
本稿では、氷上盆地に位置する横田遺跡の地形環境について報告したい。調査では、まず5,000分の１空中写真の判読と現地踏査によって氷上盆地南半部の地形分類を行った。次に、400分の１空中写真の判読と現地踏査に基づいて調査地区付近の微地形を把握するとともに、調査地区におけるボーリング資料の解析、および遺構検出面以浅の地質断面とそこから掘削したトレンチ断面の観察を行い、堆積物を確認した。

２．氷上盆地南半部における地形の分布

本遺跡が位置する氷上盆地は加古川の上流部に分布する。加古川（佐治川）はこの盆地に発達する平野を概ね南流し、盆地は川に沿って南北に延びる。それは、幅が１～３kmであるのに比して、南北には約20kmの長さで認められる。氷上盆地南東部に位置する石生付近には、標高約90mの非常に低い谷中分水界が存在する。そこでは、日本海に注ぐ由良川水系の黒井川と瀬戸内海に流れ込む加古川水系とに分かれる。この分水界を通ることによって山地を乗り越えずに日本海側と瀬戸内海側を往来することができるため、氷上盆地南部は古来から交通の要所であったと考えられる。横田遺跡はこのような谷中分水界から約１km離れた氷上盆地の南部に位置する。

氷上盆地の南半部は標高250～550mの山地にほぼ囲まれている。盆地に広がる平野は加古川のみならず葛野川や柏原川などの比較的大きな支流沿いにも認められ、そこには標高50～70mの小規模な独立丘陵が３ヶ所に分布する。氷上盆地南半部の平野は第４図に示したように完新世段丘、現氾濫原、および支流性扇状地に分けられる。各地形の特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕これは、自然堤防帯が段丘化したもので、氷上盆地南半部で最も広範囲に認められる。この段丘は現氾濫原と比高20～50cmの段丘崖で接する。段丘崖は、盆地の南へ行くほど比高を減じ、柏



第4図　氷上盆地南半部の地形分類図

原川沿いではきわめて不明瞭になる。段丘面は一般に洪水の危険性のない安定した環境を有するものの、盆地南部では段丘崖下の現氾濫原がほぼ埋積されているため、完新世段丘面にも洪水のおよぶ可能性があると考えられる。なお、圃場整備前には条里型土地割がこの段丘面に残存していた。

〔現氾濫原〕この地形は、氷上盆地で最も低く、河川の氾濫時には冠水する危険性が高い。これは加古川、葛野川ならびに柏原川の現流路に沿って断続的に存在し、氷上盆地南半部では加古川の上流ほどその発達がよい。そこでは、条里型土地割がほとんどみられず、圃場整備前の土地割は多くの場合乱れていた。加古川や葛野川沿いでは、現氾濫原の周囲に霞堤を築堤し、地形を利用して洪水防止を行ってきた地点が数ヶ所で認められる。

〔支流性扇状地〕これは、麓屑面[1]に該当するもので、氷上盆地では山麓によく発達している。これは背後の山地を刻む谷から堆積物が供給されてつくられた扇状地で、ほとんどが小規模である。地表の傾斜は全体的に急で、急傾斜のものでは20%、緩やかなものでも12.5%である。それは上流部が急で下流に向かって徐々に緩やかになり、完新世段丘面とは傾斜変換線で接する。この扇状地は、1本の小規模な支流によって単独で形成されている場合と、横田遺跡付近や柏原付近のように複合扇状地をなす場合とがみられる。

3．遺跡調査地区における微地形と堆積物

(1) 調査地区付近の微地形について

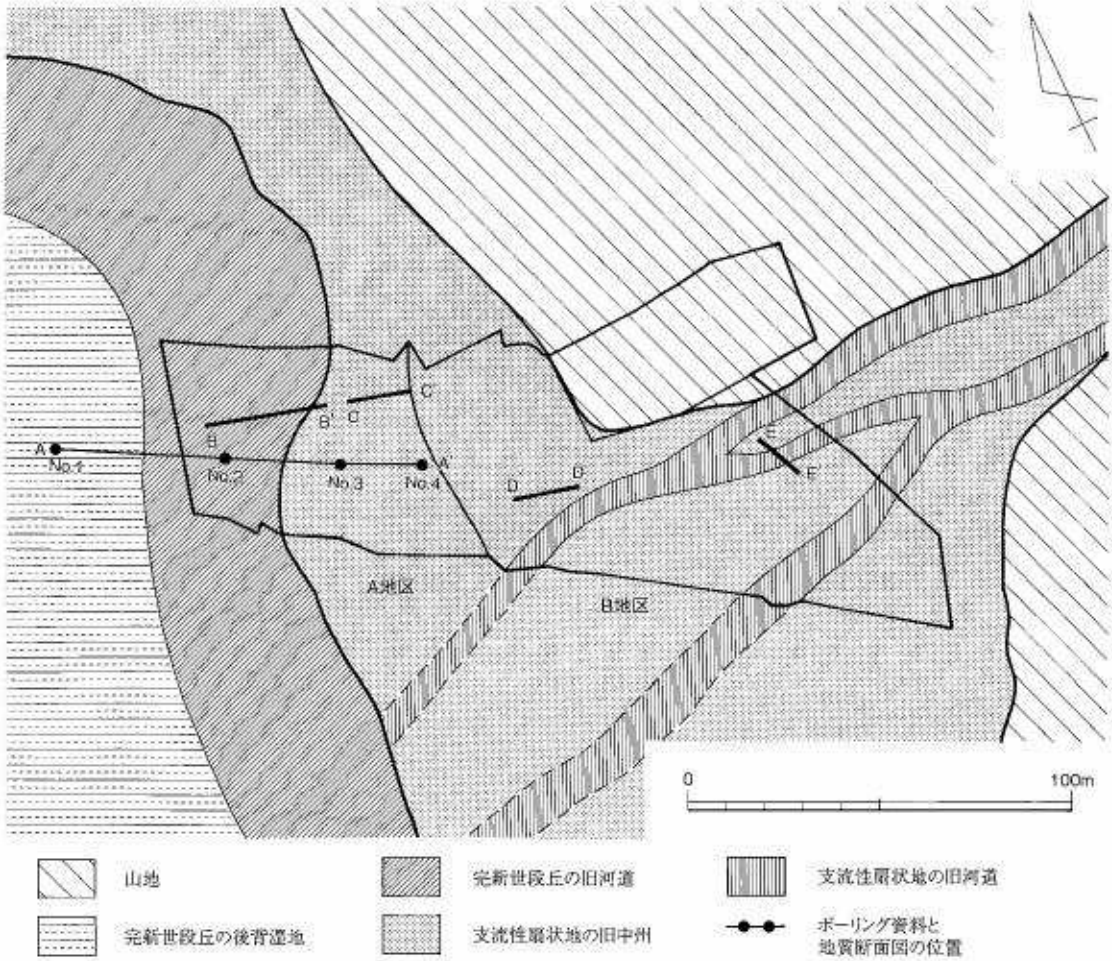
本遺跡の調査地区は氷上盆地南西部の完新世段丘面から支流性扇状地にかけて位置する。第5図は調査地区付近に分布する微地形を示したものである。この図によると、A地区の西部は完新世段丘面、またA地区東部から東隣のB地区は支流性扇状地に位置することが知られる。

A地区西部の完新世段丘面には、北西から南へ曲流する旧河道が存在し、それよりさらに西方には後背湿地が広がる。旧河道は少なくとも30mの幅をもち、加古川の流路跡と考えられる。A地区東部からB地区にかけてはこの旧河道に接するように支流性扇状地が認められる。支流性扇状地の東側には、標高238mの小規模な山地がみられ、扇状地はこの山地を刻む谷から堆積物がもたらされた結果形成されたものである。扇状地の地表は約10.9%の傾斜で東から西へ高度を下げ、山麓からおよそ250mの長さで発達している。

この扇状地には、旧中州と旧河道が認められる。旧中州は、扇状地の微高地に相当し、この扇状地では20～30cmの比高で旧河道よりわずかに高い。調査地区では4ヶ所で確認され、そこでは弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡や奈良・平安時代の掘立柱建物跡、12～13世紀の建物跡などが検出されている。一方、旧河道は、少なくとも2～3つ存在し、概ね東から西へ延びる。その幅は数mで、調査地区東側の谷から流下する小支流の流路跡に該当する。調査地区の西側では、現集落をつくった時の地形改変によって旧河道の位置が不明瞭である。

(2) 調査地区の深層堆積物について

第6図のA－A'地質断面はA地区における既存のボーリング資料に基づいて作成したものである。ボーリング資料のNo.1とNo.2は完新世段丘上、No.3とNo.4は支流性扇状地上から実施されたボーリング調査の成果を表わす。

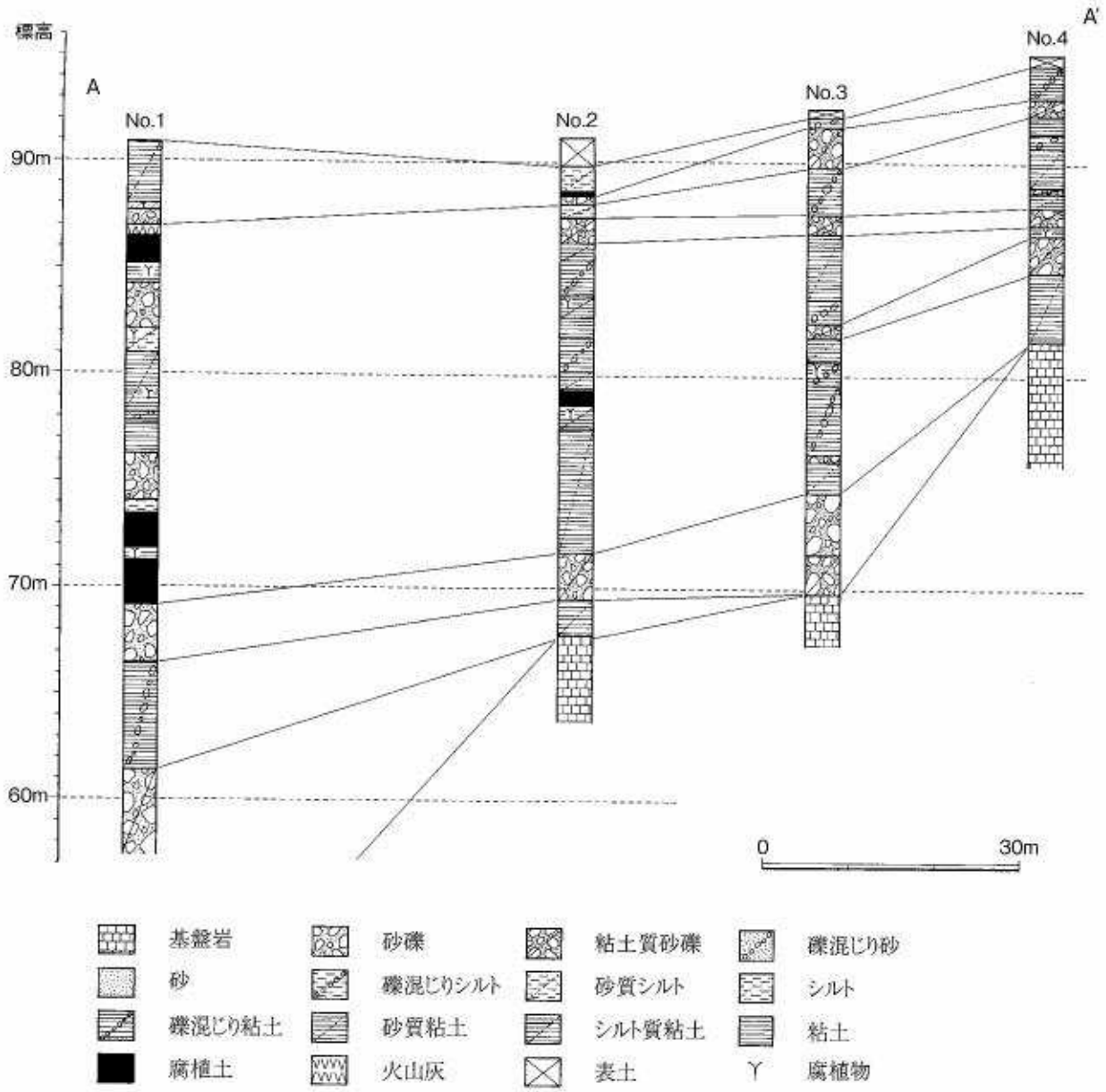


第５図　調査地区付近の微地形分類図

No１によると完新世段丘の地下には、基本的に砂礫、砂質粘土や粘土などの細粒堆積物、および腐植土（泥炭）の互層が認められる。標高74.1～76.3mにみられる砂礫以深の堆積物はよく締まっている。腐植土を含む細粒堆積物のＮ値が９～32で、砂礫は50前後あるいはそれ以上のＮ値となる。これらより上位の堆積物は比較的軟弱で、Ｎ値は砂礫で20、細粒堆積物では６以下を示す。

こうした堆積物の上部にあたる標高86.5～87.0m（現地表下3.9～4.4m）には、火山灰がみられる。Ａ地区の遺構検出面から掘削したトレンチ断面では、現地表下2～2.5mを西方へ傾斜する姶良Tn火山灰（以下、ＡＴ火山灰）[3] が確認されており、ボーリング資料No１の火山灰はそれに該当すると推定される。その場合、この火山灰以深は更新世堆積物であり、さらに深所の堆積物は第三紀のものになる可能性がある。また、少なくとも最上部のシルト質粘土は完新世段丘の堆積物にあたると考えられる。

支流性扇状地の地下には、最下位で西へ急激に傾斜する基盤岩が確認される。これは粘板岩に相当し、調査地区の東側に存在する山地を構成するものである。No３では、基盤岩が標高69.8m以深にみられ、その上位に砂礫と細粒堆積物との互層が約22.5mの厚さで認められる。これらの堆積物は深所ほど締まりがよく、特に標高81.8～82.5mの砂礫より下位の細粒堆積物でＮ値が９～32、それより上位で６以下のＮ値となる。そのうち、少なくとも上部に位置する標高89.8～91.7mのシルト質砂礫は支流性扇状地を構成する堆積物と考えられる。ボーリング資料には記載されていないものの、Ａ地区のトレンチ断面



第６図　調査地区付近のボーリング資料とＡ－Ａ'地質断面図

では、標高89.8～91.7mでみられるシルト質砂礫の下位でＡＴ火山灰が確認される。これは、支流性扇状地がＡＴ火山灰の降灰期頃に形成されたことを示す。

(3) 調査地区の表層堆積物について

Ａ地区西部に分布する完新世段丘の旧河道とその東側にみられる支流性扇状地では、堆積物の様相が大きく異なる。第７～10図は、調査地区における遺構検出面以浅の地質断面とその面から掘削したトレンチ断面で観察した堆積物を示したものである。

① 完新世段丘の旧河道堆積物

第７図に示したＢ－Ｂ'地質断面の西半部は完新世段丘の旧河道堆積物を表している。この図に記さ

れるように、A地区西部では、大規模な旧河道の中に2種類の小規模な旧河道が認められる。

大規模な旧河道は2つ確認され、最初の旧河道堆積物を切ってその西部に2つ目の流路が形成されている。両者は、それぞれ12m以上の幅をもち、深さが2m以上である。これらは加古川の本流またはそれに近い規模の分流跡であり、最初の流路は東隣にみられる支流性扇状地の堆積物を侵食して形成されている。そこには、主に緑灰～褐灰色のシルト質砂や砂質シルト、シルトからなる細粒堆積物（B－B'地質断面の堆積物46～48・50～59・61・62　37～45）が堆積し、下部には褐灰色のシルト質砂礫（B－B'地質断面の堆積物60）が認められる。2つ目の旧河道には、主に灰～灰褐色のシルト質砂とシルト（B－B'地質断面の堆積物37・39・41～44）がみられ、所々に灰～褐灰色の砂礫（B－B'地質断面の堆積物38・40・45）が挟まれる。

これらの堆積は複雑で、一つの堆積物中で層相変化したり、砂やシルトがレンズ状に多数混入する。こうした細粒堆積物には、しばしば植物遺体が含まれる。B－B'地質断面に示される灰褐色シルト（堆積物47）の下底、褐灰色の砂質シルト（堆積物59）ならびに灰色のシルト質砂（堆積物62）に混入する植物遺体（サンプルNo.6～8）からはそれぞれ4,025±40年B.P.と4,030±35年B.P.、4,190±35年B.P.の^{14}C年代測定値が得られている[3]。

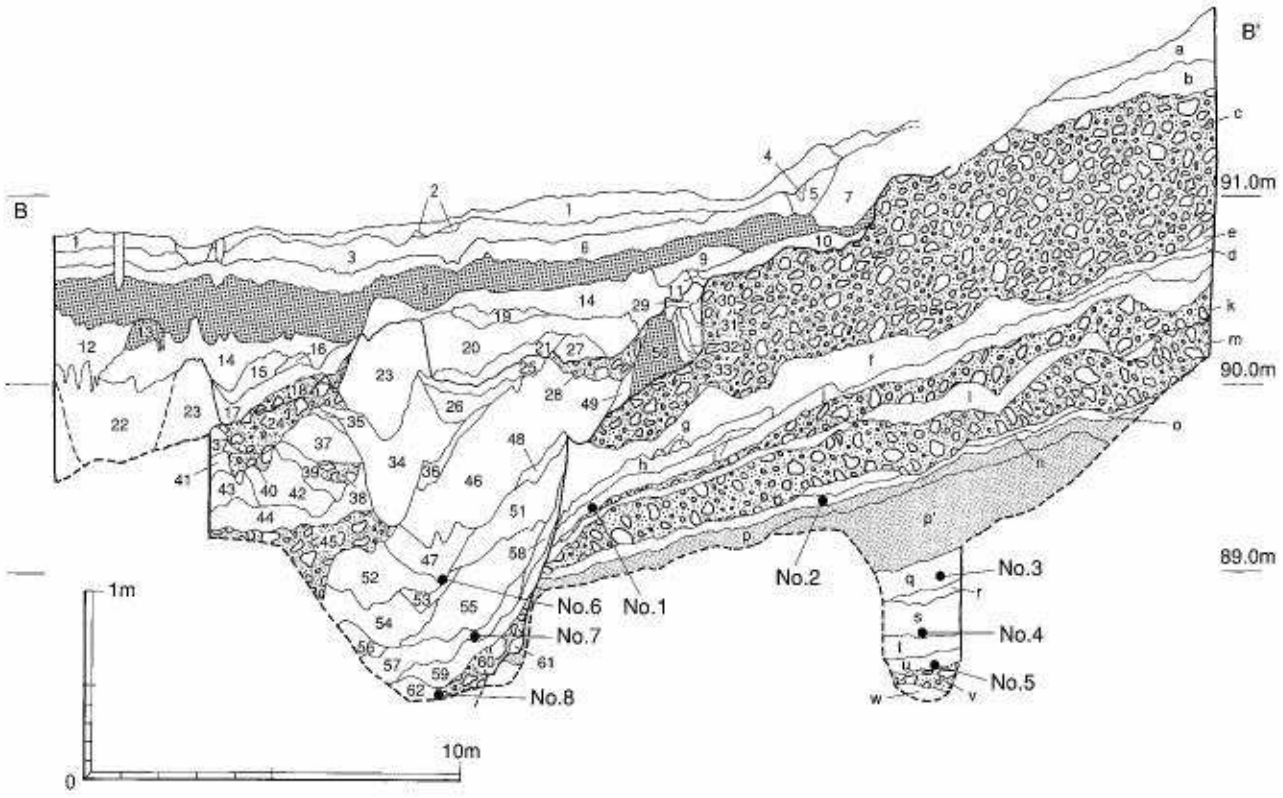
小規模な旧河道は大規模な旧河道の堆積物を切って認められる。これは、幅およそ6mで、深さは約90cmである。旧河道には、主に灰～緑灰色のシルト（B－B'地質断面の堆積物25・26・34～36）がみられ、そこには植物遺体が混入する。

さらに、これらの堆積物を切って小規模な旧河道が3つみられる。各旧河道は、4～6.5mの幅と30～40cmの深さをもち、幅に比べて浅い形態をとる。これらのうち、最も西の旧河道は緑灰色のシルト（B－B'地質断面の堆積物22）、中央のものは灰褐色のシルト質砂礫と褐灰～灰褐色のシルト質砂やシルトなど（B－B'地質断面の堆積物15～18）、また東のそれは褐灰～灰色の砂質シルトとシルト（B－B'地質断面の堆積物20～21）に埋積される。各旧河道堆積物には、弥生時代後期から12～13世紀頃までの遺物が含まれ、最も西の旧河道底にみられる植物遺体（サンプルNo.10）からは2,075±35年B.P.の^{14}C年代測定値が得られている[4]。このような小規模な旧河道は周囲の地表よりわずかに低い大規模な旧河道上に加古川の支流が2度にわたって流れた跡と考えられる。

こうした旧河道堆積物の上位には、下位から順に褐灰色のシルトや暗褐灰色の砂や砂質シルトなどからなる細粒堆積物（B－B'地質断面の堆積物9～14・19）、黒褐色のシルト（B－B'地質断面の堆積物8）、暗褐灰色の砂質シルト（B－B'地質断面の堆積物6）、および暗灰色の砂質シルトとシルト質砂（B－B'地質断面の堆積物1～3）が認められる。中でも黒褐色のシルトは湿地性の堆積物であり、またその上位にみられる暗褐灰色の砂質シルトは土壌化している。それらには、主に12～13世紀の遺物が混入する。以上の堆積物は25～35cmの厚さで認められ、旧河道は洪水によるそれらの堆積によって地下浅所に埋没している。

② 支流性扇状地の堆積物

A地区東部からB地区にかけて分布する支流性扇状地の堆積物はB－B'地質断面の東半部、第8図のC－C'地質断面、第9図のD－D'地質断面、および第10図のE－E'地質断面に示されている。これらの地質断面で確認される堆積物は、大きくみて4つに分けられる。すなわち、下位から順に灰～青灰色の細粒堆積物（B－B'地質断面の堆積物1～w、C－C'地質断面の堆積物21～28、D－D'地質断面



a．黄灰色	礫混じり砂質シルト	礫は径0.5cm以下	m．青灰色	シルト砂礫	径2cm以下の亜角礫が主体
b．黄灰色	シルト		n．灰色	シルト質砂	
c．黄灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の亜角礫が主体	o．暗灰色	シルト	
d．黄灰色	シルト質砂		p．褐灰色	火山灰	
e．灰色	シルト		p'．灰白色	火山灰	
f．青灰色	礫混じりシルト質砂	礫は径1cm以下	q．灰色	シルト	植物遺体混入
g．青灰色	シルト質砂		r．灰色	シルト質砂	
h．暗灰色	シルト		s．暗灰色	砂質シルト	
i．青灰色	シルト質砂		t．灰色	礫混じりシルト質砂	礫は径0.5cm以下
j．暗灰色	シルト		u．暗灰色	シルト	
k．青灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の亜角礫が主体	v．青灰色	シルト質砂礫	径0.2～0.5cmの礫が主体
l．青灰色	砂質シルト		w．灰色	シルト	

第７図　Ａ地区西部～中央部のＢ－Ｂ'地質断面図

1．暗灰色	砂質シルト	
2．暗灰色	シルト質砂	
3．暗灰色	砂質シルト	
4．暗灰色	シルト質砂礫	径2cm以下の亜角礫が主体
5．暗灰色	シルト	
6．暗褐灰色	砂質シルト	
7．黒灰色	砂質シルト	
8．黒褐色	シルト	
9．暗褐灰色	砂質シルト	
10．暗灰褐色	砂	
11．暗灰色	砂質シルト	
12．褐灰色	シルト	
13．黒褐色	シルト	
14．褐灰色	シルト	植物遺体が混入
15．褐灰色	シルト	
16．灰褐色	シルト質砂	
17．褐灰色	砂質シルト	
18．灰褐色	シルト質砂礫	径0.8cm以下の亜角礫が主体
19．褐灰色	砂質シルト	
20．灰色	シルト	
21．灰色	シルト	植物遺体が混入
22．緑灰色	シルト	
23．緑灰色	砂質シルト	植物遺体が混入
24．灰色	砂礫	径1cm以下の亜角・亜円礫が主体
25．灰色	シルト	植物遺体が混入
26．灰色	シルト	植物遺体が混入
27．灰色	砂質シルト	
28．褐灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の亜角・亜円礫が主体
29．灰色	砂質シルト	
30．緑灰色	砂質シルト	
31．灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の亜角礫が主体
32．緑灰色	シルト	
33．暗灰色	砂質シルト	
34．緑灰色	シルト	
35．灰色	砂質シルト	
36．暗灰色	シルト	
37．暗灰色	シルト	
38．灰褐色	砂礫	径2cm以下の亜角・亜円礫が主体
39．灰色	シルト質砂	
40．灰褐色	砂礫	径2cm以下の亜角・亜円礫が主体
41．灰色	シルト質砂	
42．灰色	シルト質砂	
43．灰褐色	シルト	
44．灰褐色	砂質シルト	
45．灰色	砂礫	径2cm以下の亜円礫が主体
46．緑灰色	砂質シルト	シルト質細砂がレンズ状に混入
47．灰褐色	シルト	
48．暗灰色	シルト	
49．褐灰色	シルト質砂礫	径0.5cm以下の亜角礫が主体
50．黒褐色	シルト	
51．緑灰色	砂質シルト	砂がレンズ状に多数混入
52．緑灰色	砂とシルトの互層	
53．灰褐色	シルト	
54．灰色	シルト質砂	
55．灰色	砂とシルトの互層	
56．灰色	礫混じり砂	
57．褐灰色	シルト質砂	砂がレンズ状に多数混入
58．黒灰色	シルト	
59．褐灰色	砂質シルト	植物遺体が混入
60．褐灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の亜角・亜円礫が主体
61．黒灰色	シルト	
62．灰色	シルト質砂	

の11～17、E－E'地質断面の12・13)、黄褐～青灰色の砂礫（B－B'地質断面の堆積物c～k、C－C'地質断面の堆積物14～20、D－D'地質断面の1～10、E－E'地質断面の5～11)、黄灰～暗灰色あるいは黒灰色を呈する細粒堆積物（B－B'地質断面の堆積物a・b・6、C－C'地質断面の堆積物2～5、E－E'地質断面の3・4)、および表土（C－C'地質断面の堆積物1）である。これらは火山灰と表土を除いて洪水堆積物に相当する。

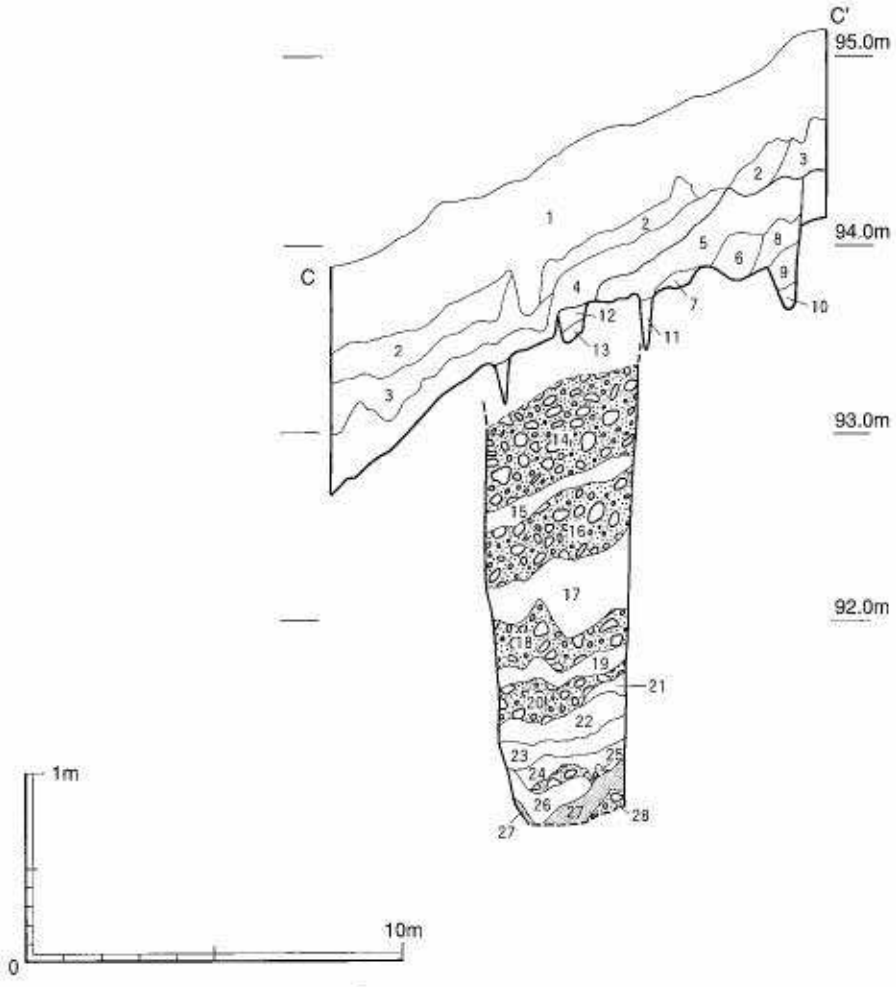
最下位にみられる灰～青灰色の細粒堆積物はシルト質砂とシルトの互層で、厚さ10cm前後の薄い砂礫が1～2つ挟まれる。各堆積物は東から西へ比較的急に傾斜しており、調査地区東側の山地からもたらされたものと考えられる。これら細粒堆積物にはAT火山灰（B－B'地質断面の堆積物p・p'、C－C'地質断面の堆積物27）が15～50cmの厚さで挟在する。また、B－B'地質断面に示される暗灰色のシルト（堆積物o・サンプルNo.2)、灰色のシルト（堆積物q・サンプルNo.3)、暗灰色の砂質シルト（堆積物s・サンプルNo.4）および暗灰色のシルト（堆積物u・サンプルNo.5）からはそれぞれ23,680±140年B.P.、25,110±160年B.P.、 26,030±170年B.P.ならびに25,620±180年B.P.の^{14}C年代測定値が得られ、D－D'地質断面の暗褐色シルト（堆積物14・サンプルNo.9）に関する^{14}C年代測定値は28,460±200年B.P.である[5]。これらは、細粒堆積物が29,000年前から23,000年前にかけて堆積したことを示す。

その上位にみられる黄褐～青灰色の砂礫は、旧中州を構成する堆積物で、調査区東側の山地から供給されたものである。シルトを含むことがあり、西方へ著しく傾斜する。堆積物中の礫は、B－B'地質断面で径0.5～3cmであるのに対してE－E'地質断面では1～15cmの径となり、上流（東）ほど大きくなる。また、砂礫の厚さは、B－B'地質断面で約1.2m、それより上流のD－D'地質断面とE－E'地質断面では2.1m前後である。この砂礫はシルト質砂やシルトなどの細粒堆積物を挟むことがある。これらは5～40cmの厚さで2～4つ認められる。このような細粒堆積物のうち、B－B'地質断面の暗灰色シルト（堆積物j・サンプルNo.1）に関する^{14}C年代測定値は22,470±140年B.P.である[6]。このことから砂礫の堆積は22,500年前前後になされたと考えられる。

砂礫を覆う細粒堆積物は、砂質シルトやシルトからなる。これらは、さらに3つに細分され、下位から黄灰色の砂質シルトとシルト、黒灰～黒色の砂質シルト、ならびに褐色のシルトである。黒灰～黒色の砂質シルトは下位の細粒堆積物が土壌化した旧表土に該当し、その上面が長期間にわたって旧地表であったと考えられる。この砂質シルトには、弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良・平安時代および中世の遺物が混入し、それはA地区西部の旧河道を覆う暗褐灰色の砂質シルト（B－B'地質断面の堆積物5）に連続する。これらの細粒堆積物は50cm前後の厚さで下位の砂礫を被覆しており、それによって旧中州は埋もれている。

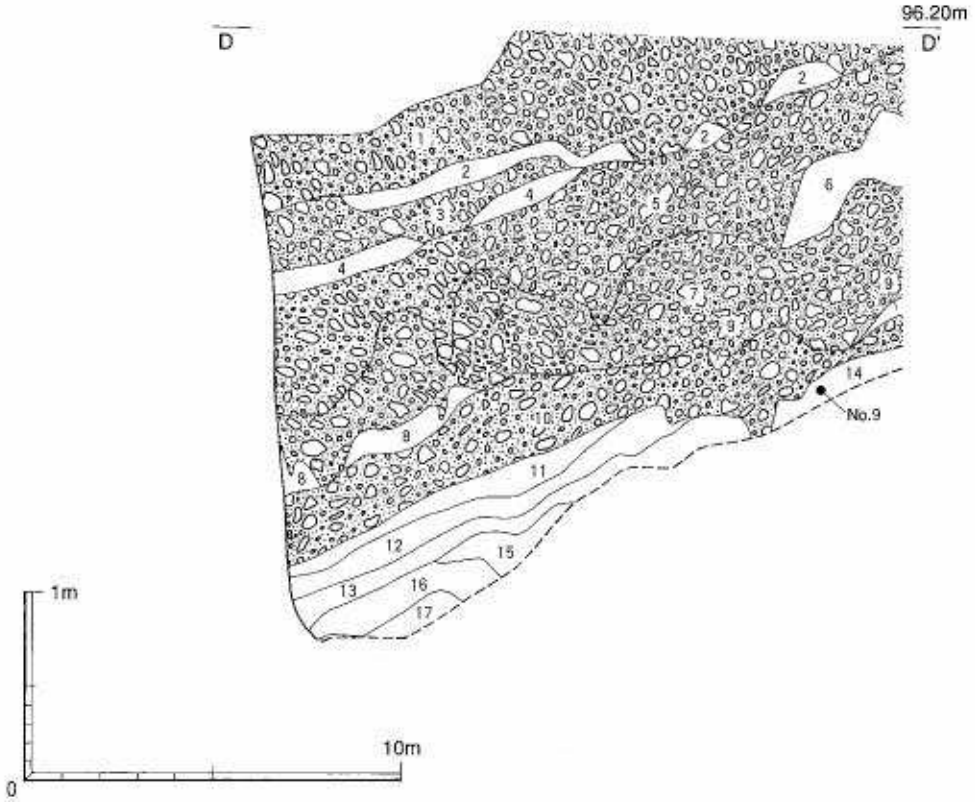
黒灰～黒色の砂質シルトの上位に位置する褐色のシルトは、支流性扇状地の扇端にあたるA地区中央部にみられ、それより東側には分布しない。これはA地区西部の旧河道上にみられる砂質シルト（B－B'地質断面の堆積物1・3）に連続する。調査地区では、このような砂礫の上位にみられる細粒堆積物がしばしば支流性扇状地での耕地開発にともなって削り取られている。

なお、E－E'地質断面では、黄灰色を呈する砂質シルトとシルトを切って旧河道が認められる。これは幅が約5m、深さがおよそ60cmの小規模なもので、支流性扇状地でみられる旧河道の1つにあたる。旧河道は青灰色の砂礫とその上にのる暗灰色のシルト質砂礫（E－E'地質断面の堆積物1・2）によって埋積されている。



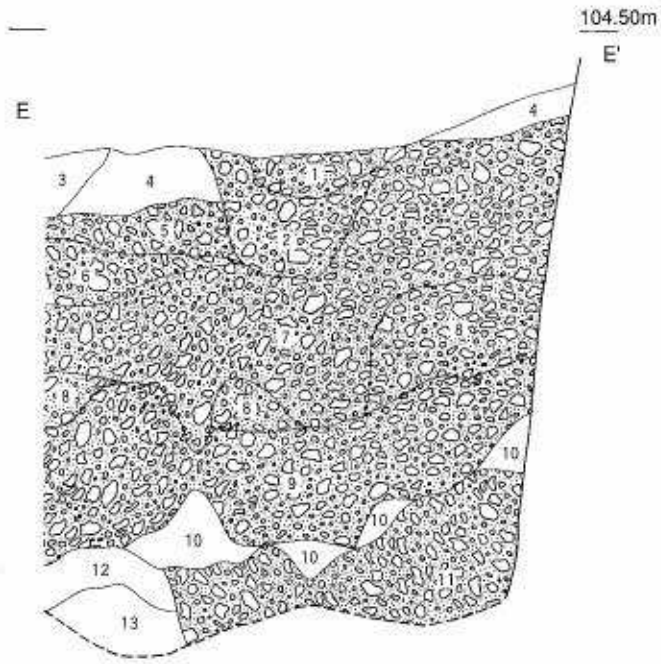
1.	盛土		
2.	褐色	シルト	
3.	褐色	シルト	
4.	黒色	砂質シルト	
5.	黒色	砂質シルト	
6.	黒色	砂質シルト	
7.	暗褐色	砂質シルト	
8.	黒色	砂質シルト	
9.	黒色	砂質シルト	
10.	褐色	砂質シルト	
11.	褐色	砂	
12.	黒色	シルト	
13.	暗褐色	シルト質砂	
14.	橙褐色	シルト質砂礫	径1cm以下の角・亜角礫が主体
15.	橙灰色	シルト	
16.	橙褐色	シルト質砂礫	径1cm以下の角・亜角礫が主体
17.	橙灰色	礫混じり砂質シルト	
18.	橙灰色	シルト質砂礫	径2cm以下の角・亜角礫が主体
19.	橙灰色	シルト	
20.	橙灰色	シルト質砂礫	径2cm以下の角・亜角礫が主体
21.	灰橙色	砂質シルト	
22.	暗灰色	シルト	
23.	青灰色	砂質シルト	
24.	青灰色	シルト	
25.	青灰色	砂礫	細礫主、最大径2cm
26.	青灰色	砂質シルト	
27.	褐灰白色	火山灰	
28.	青灰色	砂礫	径1cm以下の角・亜角礫が主体

第８図　Ａ地区東部のＣ－Ｃ'地質断面図



1. 暗黄褐色	シルト質砂礫	径1~3cmの角・亜角礫が主体	10. 青灰色	砂礫	径1~5cmの角・亜角礫が主体
2. 黄灰色	シルト		11. 暗灰色	シルト	
3. 黄褐色	シルト質砂礫	径1~3cmの角・亜角礫が主体	12. 青灰色	礫混じりシルト質砂	礫は径3cm以下
4. 黄褐色	シルト		13. 暗灰色	シルト	
5. 黄灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の角・亜角礫が主体	14. 暗褐色	シルト	
6. 灰色	砂質シルト		15. 青灰色	シルト質砂礫	径2cm以下の角・亜角礫が主体
7. 黄褐色	砂礫	径3~8cmの角・亜角礫が主体	16. 青灰色	砂質シルト	
8. 黄灰色	砂質シルト		17. 青灰色	シルト質砂礫	径1cm以下の角・亜角礫が主体
9. 暗灰色	シルト				

第９図　Ｂ地区西部のＤ－Ｄ'地質断面図



1. 暗灰色	シルト質砂礫	径1~12cmの角・亜角礫が主体
2. 青灰色	砂礫	径1~3cmの角・亜角礫が主体
3. 暗灰色	礫混じり砂質シルト	礫は径1cm以下の角・亜角礫
4. 黄灰色	砂質シルト	
5. 黄褐色	砂礫	径1~3cmの角・亜角礫が主体
6. 黄褐色	シルト質砂礫	径1cmの角・亜角礫が主体
7. 青灰~黄褐色	砂礫	径1~5cmの角・亜角礫が主体
8. 黄褐色	シルト質砂礫	径1~3cmの角・亜角礫が主体
9. 黄褐色	砂礫	径2~8cmの角・亜角礫
10. 黄褐色	シルト	
11. 赤褐色	砂礫	径5~15cmの角・亜角礫が主体
12. 黄褐色	シルト	
13. 暗灰色	シルト	植物遺体が混入

第10図　Ｂ地区東部のＥ－Ｅ'地質断面図

4．地形環境の変遷

本遺跡の調査地区における地形環境はこれまでに述べた事柄に基づくと次のように考察される。

〔ステージ1〕調査地区付近には、29,000年前から23,000年前にかけて主にシルト質砂やシルトが堆積した。これらは調査地区東側の山地から洪水によって供給されたもので、時には薄い砂礫の堆積がみられた。こうした中で25,000～24,000年前には、ＡＴ火山灰が降灰した。

〔ステージ2〕22,500年前前後には、砂礫が堆積し、支流性扇状地が形成された。砂礫は調査地区東側の山地から数度の激しい洪水によって搬出された。その間には、比較的緩やかな洪水が発生し、2～4つの細粒堆積物が薄く砂礫を覆った。調査地区には、このような砂礫が堆積した結果中州が形成された。

〔ステージ3〕砂質シルトやシルトからなる細粒堆積物が、調査地区東側の山地からもたらされ、砂礫上に堆積した。そのため、扇状地は被覆され、旧中州は地下浅所に埋没した。その後洪水の発生しない安定した環境が続き、細粒堆積物の上部は長期間にわたって土壌化された。

〔ステージ4〕4,200年前頃（縄文時代中期末頃）になると、Ａ地区西部に古加古川が流下した。これは、比較的大規模な流路で、支流性扇状地の扇端を侵食して形成された。この流路は4,000年前前後にシルト質砂や砂質シルトなどの堆積によってほぼ埋積された。

〔ステージ5〕縄文時代後期から晩期にかけてのある時期、Ａ地区西部ではまず古加古川が以前の旧河道堆積物を侵食して流れた。次いで、これが埋積された後、古加古川の支流がほぼ同じ場所を流下した。この流路は弥生時代後期に入るまでに細粒堆積物によって埋積された。

〔ステージ6〕2,100～2,000年前頃には、再び古加古川支流の流路がＡ地区西部にみられる小規模な旧河道の堆積物を切って形成された。そこでは、流路が2～3つに分流し、12世紀までにそれらは埋積された。こうした地形環境がＡ地区西部でみられた弥生時代後期から中世にかけては、それより東側の支流性扇状地が安定した環境であり、弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良・平安時代および12～13世紀には、人間が浅く埋没した旧中州上に竪穴住居や掘立柱建物をつくった。

〔ステージ7〕12～13世紀には、古加古川の洪水によって砂質シルトやシルトがＡ地区西部の旧河道上に堆積し、旧河道は浅く埋没した。埋没旧河道上は低かったために湿地化し、そこでは黒褐色のシルトが生成された。その後、洪水にともなう砂質シルトの堆積によって湿地は埋積された。砂質シルトの堆積後はしばらく環境が安定し、調査地区には洪水がおよばなかった。このような環境変化の下で、人間は引き続き支流性扇状地の埋没旧中州上で生活を営んだ。

〔ステージ8〕その後12～13世紀の間に、洪水が数度発生し、特にＡ地区の埋没旧河道上と支流性扇状地の扇端付近で主に砂質シルトの堆積がみられた。Ａ地区西部はこれらの堆積後に古加古川が現流路付近で下刻を行ったために段丘化した。

5．おわりに

本遺跡の調査地区は完新世段丘から支流性扇状地にかけて位置する。Ａ地区西部には、完新世段丘に分布する旧河道がみられ、それより東側のＡ地区中央部からＢ地区には、支流性扇状地の旧中州と旧河道が認められる。

調査地区付近では、まず22,500年前前後に調査地区東側の山地から砂礫が供給されたことによって中州が形成された。これが細粒堆積物に被覆され浅く埋没した後、そこでは洪水の発生しない安定した環

境がかなり長期間続いた。次に、古加古川の本・支流がA地区西部に4度流下した。最初は、古加古川の大規模な流路が4,200～4,000年前頃（縄文時代中期末頃）に形成・埋積された。次に、縄文時代後・晩期のある時期と弥生時代後期から12～13世紀にかけて古加古川の本流と支流が次々に流れ、その後流路は埋没した。

人間は弥生時代後期～古墳時代初頭、奈良・平安時代、および12～13世紀に支流性扇状地の埋没した旧中州上で居住した。支流性扇状地では、これらの時期に東側の山地から発生する洪水がなく、またそこが氾濫原より高いために古加古川の洪水もおよばなかった。このような環境下で支流性扇状地では、わずかに高く排水の便がよい埋没旧中州上に住居や建物が立地した。支流性扇状地は、比較的急な地表傾斜を呈するものの、居住に適した地形であると考えられる。

注
1） 田中眞吾・野村亮太郎・井上　茂「兵庫県・多紀連山地域の段丘面」、地理学評論59－5、1986年
2） パリノ・サーヴェイ㈱「横田遺跡出土遺物の自然科学分析報告」、2005年
3） （株）パレオ・ラボ「横田遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定」、2005年
4） 前掲3）
5） 前掲3）
6） 前掲3）

第２節　火山灰・土壌中花粉および出土種実の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

低地部Ａ４区断面から採取された土壌の花粉分析を行い、遺跡設営時の古環境に関する情報を得るとともに、同様に低地部より検出された種実遺体の同定を行い、当時の植物利用や古植生に関する情報を得る。なお花粉分析に関する層番号は図版２に準ずる。また深掘区より検出された火山灰（図版２　P'層）の同定を重鉱物組成+火山ガラス比分析で行い、堆積物の年代指標とする。

１．試料

重鉱物組成+火山ガラス比分析用試料は、「火山灰」試料１点である。花粉分析用試料は、Ａ４区の断面から採取された試料８点である。種実同定用試料は、調査区内で検出された17点で、各試料に複数種の種実が１～20点程度含まれる。試料の詳細に関しては、それぞれの結果にあわせて示す。

２．分析方法

(1)　重鉱物組成+火山ガラス比

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4㎜-1/8㎜の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

(2)　花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９、濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で観察し、果実、種子や同定可能な葉などの大型植物遺体を抽出する。

種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川、1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか、2000）等と比較して種類を同定し、個数を数える。微砕片を含むため個数推定が困難である種類は「＋」と表示した。分析後の大型植物遺体は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施した。

3．結果

(1) 重鉱物分析+火山ガラス比

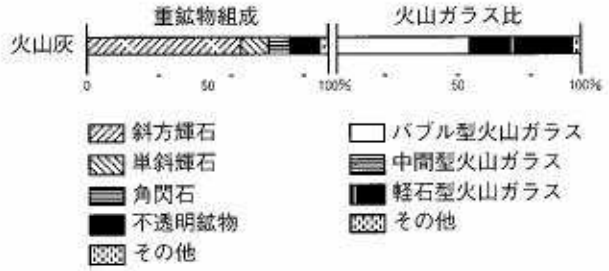
結果を第4表、第11図に示す。重鉱物組成では、斜方輝石が最も多く、約60%を占め、他にいずれも10%程度の単斜輝石、角閃石および不透明鉱物を少量伴う。火山ガラス比では、無色透明のバブル型火山ガラスと無色透明の軽石型火山ガラスの両者を主体とする。バブル型火山ガラスの方がやや多く、55%程度を占め、軽石型は40%程度である。また、火山ガラスの屈折率は、n1.499～1.500の狭いレンジに集中した（第12図、第5表）。

第4表　重鉱物および火山ガラス比分析結果

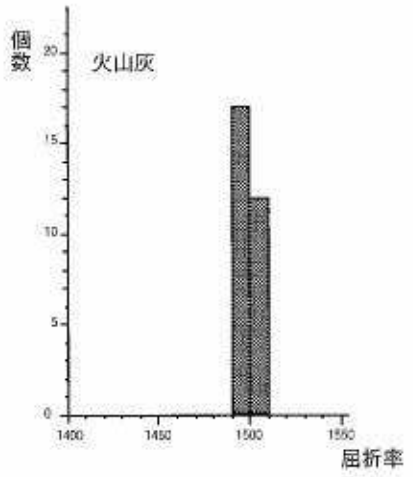
試料番号	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
火山灰	159	28	22	1	31	9	250	136	0	106	8	250

第5表　火山ガラスの屈折率

試料番号		1
屈折率	火山ガラスの形態	火山灰
	平均値	1.500
	最小値	1.499
	最大値	1.501
	合計	30
対比されるテフラ		AT



第11図　重鉱物組成および火山ガラス比



第12図　火山ガラスの屈折率測定結果

以上述べた重鉱物組成、火山ガラスの形態および屈折率から、「火山灰」とされた試料を構成する砕屑物は、鹿児島県の姶良カルデラを給源とする姶良Tn火山灰（AT；町田・新井、1976）に由来すると考えられる。ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）、宮入ほか（2001）など）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている（町田・新井、2003）。町田・新井（2003）は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。

(2) 花粉分析

結果を第6表、第13図に示す。27層では花粉化石の保存状態が悪くほとんど検出されないが、他では多くの花粉化石が検出される。木本花粉ではスギ属とアカガシ亜属の割合が高いが、スギ属が増加し、アカガシ亜属が減少する傾向が認められる。その他、マツ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、ウコギ科等が検出される。草本花粉では、イネ科の割合が高く、上位ほど増加する傾向にある。その他オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属など水生植物の花粉化石も検出される。また、1層ではソバ属の花粉化石も検出される。

(3) 種実同定

結果を第7表に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）

クルミ科クルミ属

核の完形、破片が検出された。灰褐色、広卵体で頂部がやや尖る。径3㎝程度。1本の明瞭な縦の縫合線がある。硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）

ブナ科コナラ属アカガシ亜属

幼果が検出された。幼果は灰褐色、輪状紋の椀の殻斗内に果実が包まれる。径5㎜程度。輪状紋の部分は円柱状または円錐台状に突出し、柱頭は傘状で外側を向く。同定の決め手となる柱頭の保存状態が良好である。

・アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）

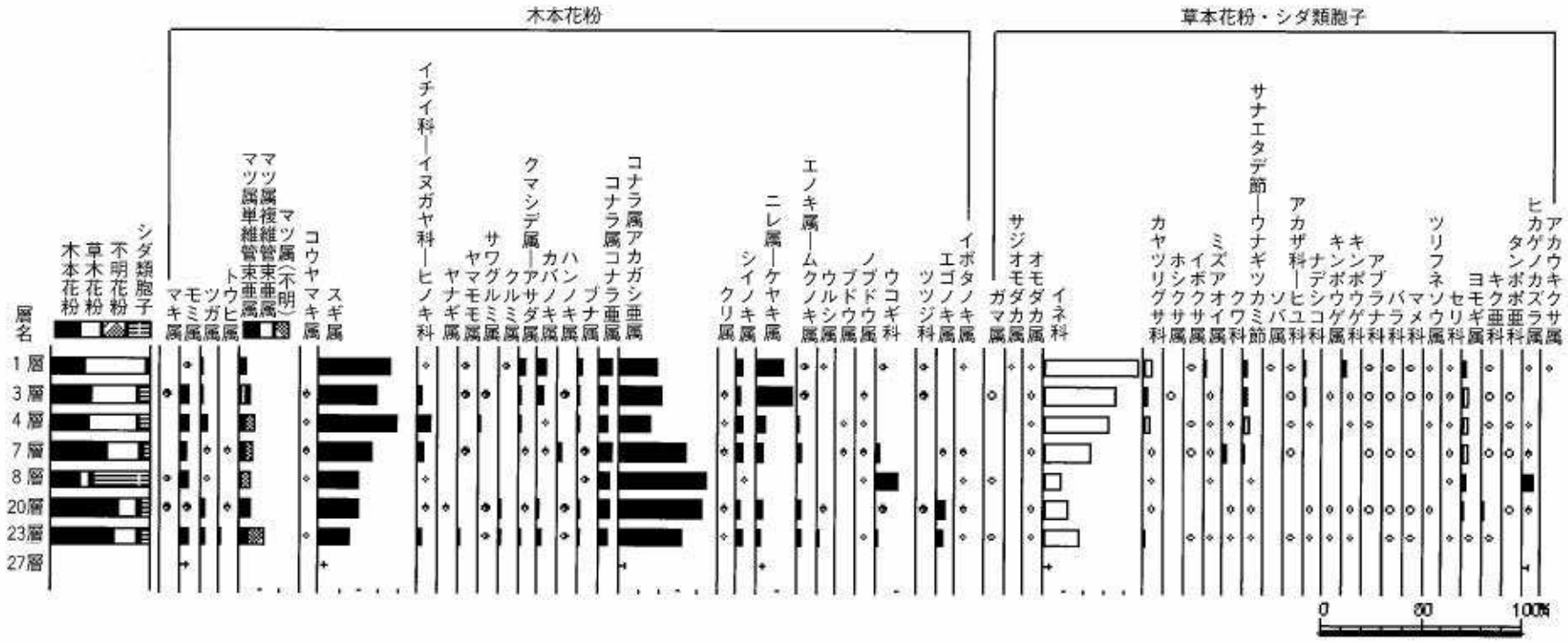
ブナ科コナラ属

果実や幼果が検出された。幼果は、上述と同様だが、柱頭が完全に残っていない個体をアカガシ亜属とした。果実は黒褐色、卵形。長さ15～20㎜、径10～15㎜程度。果実頂部には、殻斗の圧痕である輪状紋がみられる。基部の着点は円形、淡褐色で維管束の穴が輪状に並ぶ。果皮外面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。殻斗は灰褐色、椀状で、輪状紋をもつ。なお、殻斗がなく、頂部の輪状紋が残っていない個体に関しては、コナラ属とする。

第6表　花粉分析結果

A4区断面

種類	試料番号	1層	3層	4層	7層	8層	20層	23層	27層
木本花粉									
	マキ属	—	1	—	—	1	1	—	—
	モミ属	2	11	10	6	5	1	11	2
	ツガ属	4	4	6	1	1	6	6	—
	トウヒ属	—	—	—	1	—	1	3	—
	マツ属単維管束亜属	—	—	—	1	—	1	1	—
	マツ属複維管束亜属	2	7	4	4	—	7	6	—
	マツ属（不明）	4	7	12	11	6	5	22	—
	コウヤマキ属	—	1	2	2	1	—	1	—
	スギ属	79	72	66	68	20	48	39	1
	イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	2	3	14	8	1	1	3	—
	ヤナギ属	—	—	—	—	—	1	—	—
	ヤマモモ属	2	2	—	1	—	—	3	—
	サワグルミ属	—	1	3	—	—	1	1	—
	クルミ属	2	—	—	—	—	3	3	—
	クマシデ属―アサダ属	9	4	3	1	—	1	4	—
	カバノキ属	8	7	2	1	—	3	5	—
	ハンノキ属	—	1	—	4	—	1	2	—
	ブナ属	6	3	3	2	1	4	3	—
	コナラ属コナラ亜属	15	13	11	17	6	15	12	—
	コナラ属アカガシ亜属	42	54	35	87	46	105	80	2
	クリ属	—	1	2	2	—	1	1	—
	シイノキ属	7	5	6	7	1	5	8	—
	ニレ属―ケヤキ属	28	44	9	8	—	7	4	1
	エノキ属―ムクノキ属	1	2	3	7	—	5	6	—
	イヌノキ属	—	—	—	—	—	—	1	—
	キハダ属	—	1	—	—	—	—	—	—
	アカメガシワ属	—	—	—	—	—	1	—	—
	ウルシ属	1	—	—	—	—	1	3	—
	モチノキ属	—	—	1	—	—	—	—	—
	トチノキ属	—	—	—	—	—	—	1	—
	ブドウ属	—	—	2	1	—	—	—	—
	ツタ属	—	—	—	1	—	—	—	—
	ノブドウ属	—	1	1	1	1	—	1	—
	グミ属	—	—	—	—	—	1	—	—
	ウコギ科	1	—	—	4	11	1	3	—
	アオキ属	—	—	—	—	—	1	1	—
	ツツジ科	1	1	—	—	—	1	—	—
	エゴノキ属	—	—	—	1	—	13	9	—
	イボタノキ属	1	—	—	1	1	1	1	—
	トネリコ属	—	—	—	—	—	1	—	—
	ガマズミ属	—	1	—	1	—	—	—	—
草本花粉									
	ガマ属	—	1	—	—	1	—	1	—
	サジオモダカ属	2	—	—	—	—	—	—	—
	オモダカ属	1	1	2	1	—	2	1	—
	イネ科	317	241	191	109	36	46	70	3
	カヤツリグサ科	27	15	16	4	1	3	5	—
	ホシクサ属	—	1	—	—	—	—	—	—
	イボクサ属	5	—	3	1	—	—	1	—
	ミズアオイ属	8	2	5	2	1	—	1	—
	クワ科	—	—	2	7	—	1	3	—
	ギシギシ属	—	—	1	—	—	—	—	—
	イブキトラノオ節	—	1	—	—	—	—	—	—
	サナエタデ節―ウナギツカミ節	16	11	21	6	1	1	1	—
	タデ属	1	—	—	—	—	—	—	—
	ソバ属	1	—	—	—	—	—	—	—
	アカザ科―ヒユ科	2	3	3	1	—	—	3	—
	ナデシコ科	9	8	4	—	—	1	3	—
	カラマツソウ属	1	1	—	—	—	—	—	—
	キンポウゲ属	—	1	—	—	—	3	1	—
	キンポウゲ科	13	4	5	—	—	2	3	—
	アブラナ科	3	1	4	2	—	1	—	—
	ウメバチソウ属	1	—	—	—	—	—	—	—
	バラ科	1	1	—	1	—	3	3	—
	マメ科	1	2	—	1	—	3	3	—
	ツリフネソウ属	1	1	1	—	—	1	—	—
	キカシグサ属	—	—	—	1	—	—	—	—
	セリ科	5	1	2	1	2	—	1	—
	イヌコウジュ属	1	—	—	—	—	—	—	—
	シソ科	—	—	—	—	—	—	1	—
	タヌキモ属	—	1	—	—	—	—	—	—
	オオバコ属	—	1	—	1	—	—	—	—
	オミナエシ属	—	—	—	1	—	—	—	—
	ゴキヅル属	—	—	—	1	—	—	—	—
	ツルニンジン属	—	—	—	1	—	—	—	—
	ヨモギ属	17	19	22	14	6	5	1	—
	キク亜科	6	1	3	4	—	4	1	—
	タンポポ亜科	—	3	4	2	—	1	—	—
	不明花粉	17	5	5	10	15	5	7	—
シダ類胞子									
	ヒカゲノカズラ属	1	—	1	3	24	1	—	1
	ゼンマイ属	—	—	—	—	1	1	—	—
	イノモトソウ属	—	—	—	—	3	—	—	—
	アカウキクサ属	3	—	—	—	—	—	—	—
	他のシダ類胞子	16	90	85	43	209	46	54	12
合計									
	木本花粉	217	247	217	251	102	244	244	6
	草本花粉	439	321	289	161	46	77	109	3
	不明花粉	17	5	5	10	15	5	7	0
	シダ類胞子	19	90	86	46	237	47	54	13
	総計（不明を除く）	675	658	592	458	387	368	401	22



第13図　花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草木花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第7表　種実同定結果

		オニグルミ		イチイガシ	コナラ属アカガシ亜属		コナラ属	ツバキ	モモ		ブドウ属	クマノミズキ	エゴノキ属	タデ属	メロン類	木の芽	不明植物	動物遺存体	備考
		核		幼果	幼果	果実	果実	種子	核		種子	核	種子	果実	種子				
		完形	破片		破片				完形	破片								破片	
A-1区	包含層B(黒)下層	−	1	−	−	9	5+	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-1区	SD1014とSD1015の合流点	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	
A-1区	SD1014	−	−	−	−	1	1+	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-1・A-3区	包含層B(黒)	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-2区	SD1015 包含層B(黒) 西側おちこみ	−	−	1	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-2区	包含層B(黒)	−	1	−	−	−	−	−	1	3	−	−	−	−	−	−	−	−	オニグルミ頂部破損 モモ1個食害痕
A-2区	西側くぼみ 包含層B(黒)	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-2区	SD1009 灰色砂レキ層	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	
A-2区	包含層B(黒)とその下 SD1014東側おちこみ	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-2・4区	SD1009 灰色砂レキ層	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-3区	包含層B(黒)下層 包含層C	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	モモ食害痕
A-3区	包含層B(黒)下層 包含層C	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−	−	−	33.8g	
A-3区	包含層C	−	−	−	−	−	−	−	1	6	1	1	3	−	−	−	1	−	
A-4区	包含層B(黒)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	
A-4区	包含層B(黒) トレンチ東	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	
A-5区	SD1009	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	マクワ・シロウリ型
全区	すべて そうじ	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
	SK1012	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	1個食害痕

・ツバキ（*Camellia japonica* L.）　　ツバキ科ツバキ属

種子が検出された。黒褐色、長楕円体。長さ20～30㎜、径15㎜程度。腹面正中線上に鈍稜がある。基部には円形の臍がある。種皮は硬く木質、表面はやや平滑。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）　　バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、広楕円体でやや偏平。先端部はやや尖る。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。長さ２～2.5㎝、幅２㎝、厚さ1.5㎝程度。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面に小動物によるかじり跡とみられる個体がある。

・ブドウ属（*Vitis*）　　ブドウ科

種子が検出された。黒褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。長さ５㎜、径４㎜程度。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は柵状。

・クマノミズキ（*Cornus macrophylla* Wallich）　　ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）が検出された。淡褐色、偏球形で径４㎝程度。基部に小さく浅い凹みがあり、表面には一周する１本のやや幅広く浅い縦溝と、細く浅い縦溝数本が走る。

・エゴノキ属（*Styrax*）　　エゴノキ科

種子が検出された。黒褐色、卵体で表面には３本程度の縦溝が走る。長さ11～14㎜、径８㎜程度。基部には灰褐色でざらつく着点がある。種皮は厚く硬く、表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒色、丸みのある三稜状卵体で長さ2.5㎜、径1.5㎜程度、表面はやや平滑で光沢が強い個体などを含む。

・メロン類（*Cucumis melo* L.）　ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。藤下（1984）の基準によれば、マクワ・シロウリ型の中粒種子（長さ6.1～8.0㎜）に該当する。

4．考察

花粉分析の結果をみると、アカガシ亜属とスギ属が多産するが、上位に向かってアカガシ亜属が減少し、スギ属が増加する組成が認められる。丹波地域の花粉化石群集は、段丘構成層など古い時期を対象としたものは存在するが、完新世のものは、知りうる範囲内では見あたらない。高原（1998）は、近畿地方の花粉分析結果をもとに、近畿地方日本海側の植生の概略を推定している。これによれば、日本海側で標高数百m以下の地域では、縄文海進最盛期以降、約1500年前以前は、シイ・カシ類などの照葉樹林とスギ林が混在していたと考えられており、今回の結果も概ねこれに近い傾向が得られている。またスギ等の針葉樹は、いわゆる「弥生の小海退」期に伴う冷涼・多雨な時期に、分布拡大したと考えられている。今後は、各堆積物の時代性を考慮しながら、詳細に検討していく必要がある。

検出された種実のうち、メロン類とモモは栽培のため渡来した種類であることから、周囲での栽培、利用が示唆される。また、エゴノキ属、ブドウ属、クマノミズキ、ツバキ、オニグルミ等は、明るい林地を好む種類であり、河畔や林縁などを中心に生育していたと思われる。種実ではアカガシ亜属が検出されるが、花粉化石でも多産する。花粉化石でも述べたように、遺跡周辺の山地には、アカガシ亜属やシイノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。特に種実ではイチイガシが含まれていることから、アカガシ亜属の中にはイチイガシが含まれていたと推測される。なお、今回は発掘中に認められた大型の種実を同定したため、大型、堅い、形が特徴的など、めだちやすい種実に限定されている。今後は細かな篩で土壌を水洗して種実遺体を抽出するなどして、多くの情報を得ることが必要である。特に花粉化石で多産したスギは、今回の種実同定結果では検出されていないが、葉や種実は小さく脆弱なため、上記のような分析手法をとれば検出される可能性もある。

引用文献

古澤　明、1995、火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌、101、123-133.

藤下典之、1984、出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究、古文化財編集委員会編、同朋舎、638-654.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・笹井正明・小林哲夫、1995、南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代.第四紀研究、34、377-379.

石川茂雄、1994、原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会、328p.

町田　洋・新井房夫、1976、広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－.科学、46、339-347.

町田　洋・新井房夫、2003、新編　火山灰アトラス.東京大学出版会、336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗、1987、姶良Tn火山灰の14C年代.第四紀研究、26、79-83.

宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎、2001、姶良Tn火山灰のC-14年代のクロスチェック（演旨）.

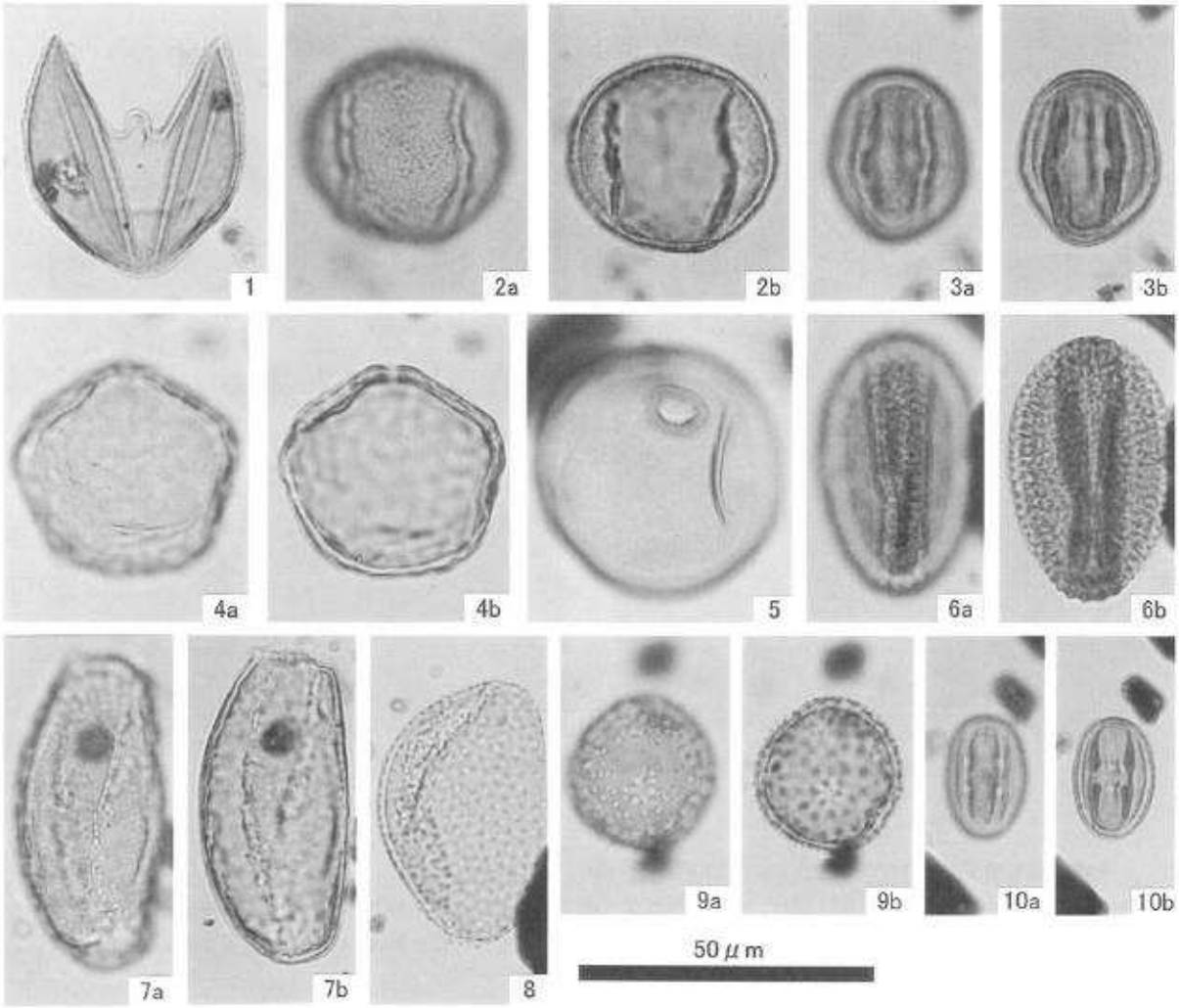
写真1　横田遺跡火山灰の重鉱物・火山ガラス

地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD-ROM）、2001、Qm-010.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦、1993、四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討ータンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代ー。地質学雑誌、99、787-798.

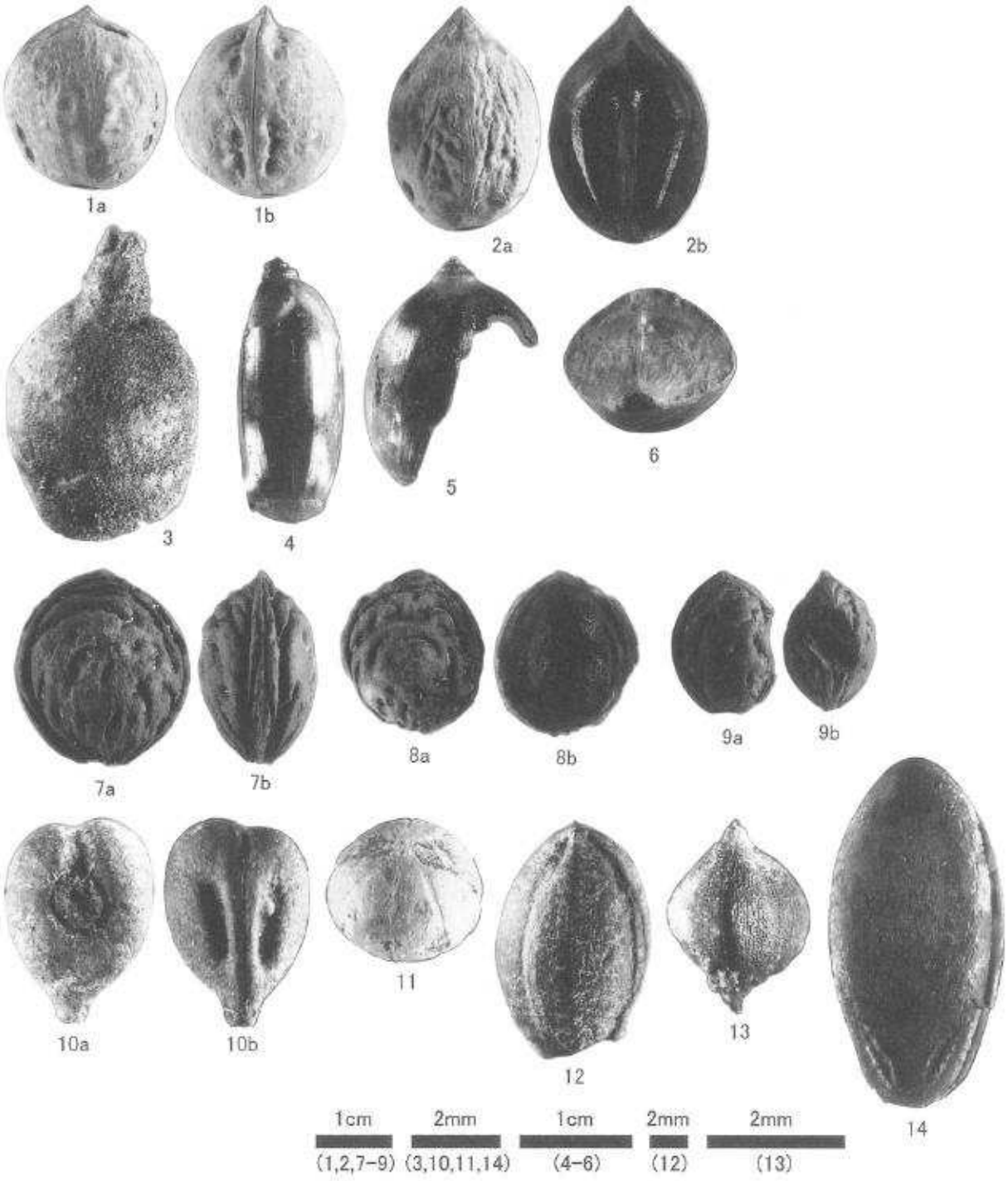
中山至大・井之口希秀・南谷忠志、2000、日本植物種子図鑑.東北大学出版会、642p.

高原　光、1996、近畿地方の植生史.図説　日本列島植生史、安田喜憲・三好教夫編、朝倉書店、114-137.



1．スギ属（A４区断層：１層）
2．コナラ属コナラ亜属（A４区断層：４層）
3．コナラ属アカガシ亜属（A４区断層：１層）
4．ニレ属ーケヤキ属（A４区断層：１層）
5．イネ科（A４区断層：４層）
6．ソバ属（A４区断層：１層）
7．ミズアオイ属（A４区断層：３層）
8．イボクサ属（A４区断層：１層）
9．オモダカ属（A４区断層：１層）
10．シイノキ属（A４区断層：１層）

写真２　横田遺跡Ａ地区湿地部堆積物中の花粉



1．オニグルミ 核（A－2区；包含層B）
2．オニグルミ 核（A－1区；包含層B下層）
3．イチイガシ 幼果（A－2区；SD1015 包含層B）
4．コナラ属アカガシ亜属 果実（A－1区；包含層B下層）
5．コナラ属アカガシ亜属 果実（A－1区；包含層B下層）
6．ツバキ 種子（A－1区；包含層B下層）
7．モモ 核（A－2区；SD1009 灰色砂礫層）
8．モモ 核（A－3区；包含層C）
9．モモ 核（食害痕）（A－3区；包含層B下層）
10．ブドウ属 種子（A－3区；包含層C）
11．クマノミズキ 核（A－3区；包含層C）
12．エゴノキ属 種子（A－3区；包含層C）
13．タデ属 果実（A－3区；包含層B下層）
14．メロン類 種子（A－5区；SD1009）

写真3　横田遺跡A地区湿地部出土の種実

第３節　横田遺跡出土木材の樹種同定

京都大学生存圏研究所　伊東　隆夫

はじめに

丹波市氷上町横田に所在する横田遺跡は加古川左岸に位置し、山裾に形成された扇状地頂部から、沖積平地にいたる緩斜面上に立地している。

横田遺跡では、大別して３時期にわたる遺構・遺物が検出された。

① 弥生時代後期～古墳時代初頭を中心とする集落跡（竪穴住居・土坑・溝等）

② 奈良時代の建物群（掘立柱建物跡・土坑）

③ 中世（鎌倉時代）の集落跡（掘立柱建物跡・木棺墓）

今回、これらの時代の木製品71点について樹種同定をおこなった。安全カミソリで木口面、柾目面、板目面の３断面の切片を切り出し、ガムクロラールで封入して顕微鏡標本を作製し、以下の識別拠点により樹種を同定した。

顕微鏡による樹種の識別拠点：

スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don.）

樹脂道を欠く。樹脂細胞が晩材に接線方向に散在する。分野壁孔はスギ型。放射組織は単列。

ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* Endl.)

樹脂道を欠く。樹脂細胞が晩材に接線方向に散在する。分野壁孔はヒノキ型。放射組織は単列。

モミ（*Abies firma* Sieb. et Zucc.）

樹脂道および樹脂細胞を欠く。放射組織の壁は厚く、末端壁は数珠状を呈する。放射仮道管を欠く。放射組織は単列。

イヌガヤ（*Cephallotaxus drupacea* Sieb. et Zucc.）

樹脂道を欠く。樹脂細胞は年輪全体に散在する。仮道管にらせん肥厚がみられる。放射組織は単列。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

環孔材。孔圏道管は極めて大きい。孔圏外道管は放射方向に火炎状に集団をなしてみられる。放射組織は単列。

アカガシ亜属（*Quercus* sp. Cyclobalanopsis）

放射孔材。大形の道管が放射方向に並ぶ。広放射組織と単列放射組織からなる。

ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

環孔材。孔圏道管は一層に並ぶ。孔圏外道管は花綱状となる。放射組織は異性で、１－６細胞幅となり、直立細胞に大形の結晶を含むことが多い。

ヤブツバキ（*Camellia japonica* Linn. v. japonica）

散孔材。小さい道管が一年輪内に多数散在する。道管は階段穿孔で、バーの数は少ない。放射組織は異性で、１－２列で直立細胞が異常に大きくなって内部に大形の結晶を含む。

カエデ属（*Acer* sp.）

散孔材。中型の道管が均一に分布する。道管は単穿孔でらせん肥厚を有する。木繊維群が薄壁となりカエデ特有の紋様を示す。放射組織は同性で、１－８細胞幅。

トネリコ属（*Fraxinus* sp.）

環孔材。孔圏道管は非常に大きい。孔圏外道管はほぼ単独ないし、２－３個放射方向に複合する。小道管の壁は厚い。道管は単穿孔。放射組織は同性で、１－３細胞幅となる。

樹種同定の結果

樹種同定の結果は第８表に示す。この表からヒノキとスギについて、弥生～古墳、および奈良～平安両時期における用材の利用傾向をみると第９表の通りである。すなわち、弥生～古墳ではヒノキとスギがほぼ同じくらい利用されているが、奈良～平安になるとスギに較べてヒノキの利用が増加する。第10表により、製品で確認すると、弥生～古墳時代ではスギの刳物が多く、奈良～平安時代には皿や曲物の底板などヒノキと結びついた製品が出現しており、これが時代差に反映されたと考えられる。弥生時代末～古墳時代の匙の用材例としては、同じ丹波地域に２例あり、大岡遺跡（氷上町）と上板井遺跡（篠山市）でいずれもカヤが使用されている。横田遺跡では匙が５例出土しており、３列でイヌガヤが使用されていた。錘は２例出土し、ともにヒノキが用いられているが、そのうちの一つはあて材を含んでいた。鹿編みの際に重さが必要なことと関連するものと思われる。

第8表　横田遺跡　樹種同定一覧表

サンプル番号	報告番号	木器登録番号	遺物名	地区	層位	遺構	時代	樹種	同定年度	同定者
1	W64	2	棒	No.6グリッド	植物遺体層		不明	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
2	W41	1	槽	A－2	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
3	W72	3	角材(有孔)	A－4	包含層B		不明	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
4	W25	5	底板	A－4	包含層B		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
5	W35	6	砧	A－4	包含層B		弥生～古墳	ヤブツバキ	平成16年度	伊東隆夫
6	W63	8	棒	A－2･4	包含層B		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
7	W71	14	建築材(丸太)	A－2･4	包含層B		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
8	W67	15	板	A－2･4	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
9	W3	17	匙	A－2･4	包含層B		弥生～古墳	イヌガヤ	平成16年度	伊東隆夫
10	W57	26	有孔板	A－2		SD1015	弥生～古墳	アカガシ亜属	平成16年度	伊東隆夫
11	W38	32	槽	A－3	包含層B		奈良～平安？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
12	W19	33	皿	A－3	包含層B		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
13	W23	34	底板	A－3	包含層B		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
14	W26	35	皿？	A－3	包含層B		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
15	W22	36	底板	A－3	包含層B		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
16	W60	40	棒(切込有)	A－1	包含層B下部		弥生～古墳？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
17	W43	41	紡錘具(？)	A－1	包含層B下部		弥生～古墳？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
18	W21	42	底板	A－1	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
19	W13	43	皿	A－1	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
20	W20	44	底板	A－1	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
21	W34	47	田舟	A	包含層		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
22	W12	49	皿	A	包含層		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
23	W66	55	有孔板	A－2	包含層B		弥生～古墳？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
24	W59	58	棒	A	包含層		弥生～古墳？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
25	W8	59	四脚器	A－2	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
26	W33	60	田舟	A－2	包含層B		弥生～古墳	モミ	平成16年度	伊東隆夫
27	W62	61	棒(切込有)	A－2	包含層B		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
28	W61	62	棒	A－2	包含層B		奈良～平安？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
29	W56	63	有孔板	A－2	包含層B		奈良～平安？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
30	W2	64	匙(柄)	A－2	包含層B		弥生～古墳	イヌガヤ	平成16年度	伊東隆夫
31	W49	65	不明	A－2	包含層B		不明	スギ	平成16年度	伊東隆夫
32	W24	66	底板	A－2	包含層B		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
33	W29	67	穂摘具	A－2	包含層B		弥生～古墳	トネリコ属	平成16年度	伊東隆夫
34	W68	68	有孔板	A－2	包含層B		弥生～古墳？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
35	W55	69	板(釘穴？)	A	包含層		奈良～平安？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
36	W54	70	板(釘穴？)	A	包含層		奈良～平安？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
37	W40	72	田舟	A－2		SD1015	弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
38	W37	87	槽	A－3	包含層C		奈良～平安？	クリ	平成16年度	伊東隆夫

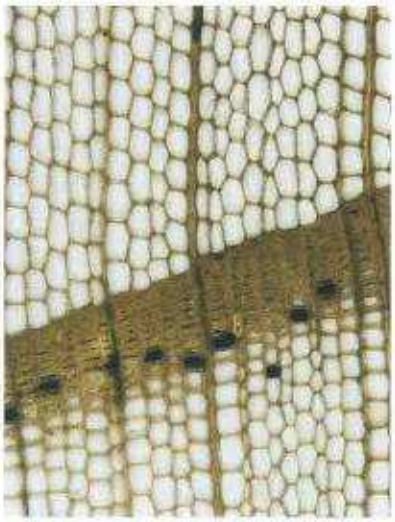
サンプル番号	報告番号	木器登録番号	遺物名	地区	層位	遺構	時代	樹種	同定年度	同定者
39	W48	88	箆形木製品	A－3	包含層		奈良～平安？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
40	W50	89	不明	A－3	包含層C		奈良～平安？	モミ	平成16年度	伊東隆夫
41	W28	90	猪口（？）	A	包含層		奈良～平安？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
42	W6	91	二脚器	A	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
43	W7	92	二脚器	A	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
44	W70	94	板材	A	包含層		弥生～古墳？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
45	W58	95	板（抉入り）	A－1・3	包含層B下部		奈良～平安？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
46	W52	96	自在鈎？	A－3	包含層B下部		奈良～平安？	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
47	W53	97	有孔板	A－3	包含層B下部		奈良～平安？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
48	W65	98	有孔板	A－3	包含層B下部		奈良～平安？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
49	W15	99	皿	A－3	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
50	W11	100	皿	A－3	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
51	W10	101	皿	A－3	包含層B下部		奈良～平安	スギ	平成16年度	伊東隆夫
52	W27	102	皿（？）	A－3	包含層B下部		奈良～平安	アカガシ亜属	平成16年度	伊東隆夫
53	W42	103	紡錘車	A－3	包含層B下部		弥生～古墳？	スギ	平成16年度	伊東隆夫
54	W36	109	平鍬	A－3	包含層B下部		弥生～古墳	アカガシ亜属	平成16年度	伊東隆夫
55	W14	110	皿	A	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
56	W17	111	皿	A－2	包含層B下部		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
57	W32	112	鍬	A－3	包含層C		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
58	W31	113	鍬	A－3	包含層B下部		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
59	W47	114	剣形木製品	A－4	包含層C		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
60	W1	115	鍬（未製品）	A－3	包含層B下部		弥生～古墳	イヌガヤ	平成16年度	伊東隆夫
61	W4	117	鍬	A－3	包含層B下部		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
62	W30	118	穂摘具	A－3	包含層C		弥生～古墳	ケヤキ	平成16年度	伊東隆夫
63	W46	119	箆形木製品	A－3	包含層C		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
64	W41	122	不明	A－3	包含層B		弥生～古墳	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫
65	W69	124	階段	A－2	包含層B		弥生～古墳	クリ	平成16年度	伊東隆夫
66	W39	126	槽	A－2	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
67	W9	127	四脚器	A－2	包含層B		弥生～古墳	スギ	平成16年度	伊東隆夫
68	W16	129	皿	A－2	包含層B		奈良～平安	スギ	平成16年度	伊東隆夫
69	W5	120	匙	A－3	包含層B下部		弥生～古墳	カエデ属	平成16年度	伊東隆夫
70	W18	128	皿	A－2	包含層B		奈良～平安	ケヤキ	平成16年度	伊東隆夫
71	W44	133	鋸歯縁木製品	B－3	包含層		奈良～平安	ヒノキ	平成16年度	伊東隆夫

第９表　用材の傾向について

	ヒノキ	スギ	その他
全　　体	35	21	15
弥生～古墳	12	13	11
奈良～平安	21	7	4
時期不明	2	1	0

第10表　製品別の用材

時　代	遺物名		ヒノキ	スギ	その他
弥生～古墳	平鍬		－	－	ｱｶｶﾞｼ亜属(1)
	匙(未製品を含む)		1	－	ｲﾇｶﾞﾔ(3)　ｶｴﾃﾞ属(1)
	鍬形木製品		－	1	－
	剣形木製品		－	1	－
	穂摘具		－	－	ｹﾔｷ(1)　ﾄﾈﾘｺ属(1)
	砧		－	－	ﾔﾌﾞﾂﾊﾞｷ(1)
	錘		2	－	－
	紡錘車		－	1	－
	階段		－	－	ｸﾘ(1)
	板・棒・有孔板・丸太など		7	4	ｱｶｶﾞｼ亜属(1)
	刳物製品	鍬(素材)	－	1	－
		四脚器	－	2	－
		二脚器	－	2	－
		田舟	2	－	ﾓﾐ(1)
		槽	1	－	－
奈良～平安		槽	－	1	ｸﾘ(1)
		猪口	－	1	
	皿		8	2	ｹﾔｷ(1)　ｱｶｶﾞｼ亜属(1)
	底板		6	－	－
	箆形木製品		－	1	－
	自在鉤？		1	－	－
	鋸歯縁木製品		1	－	－
	板・棒・有孔板・不明など		4	3	ﾓﾐ(1)
合　計			33	20	15



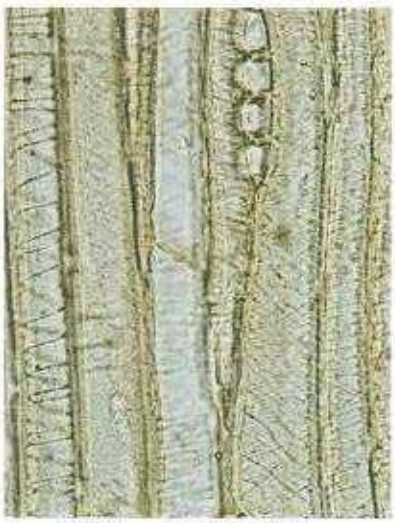
1．試料2　スギ×75

2．試料5　ヤブツバキ×75

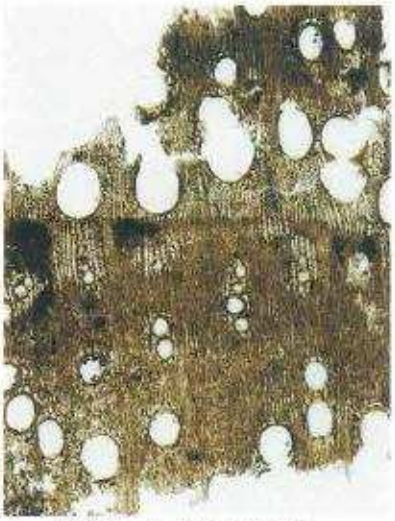
3．試料12　ヒノキ×300

4．試料21　ヒノキ×75

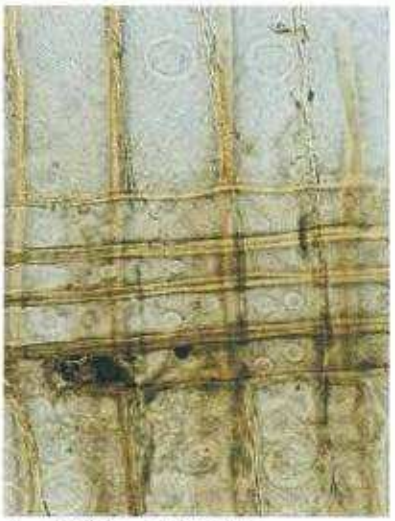
5．試料26　モミ×300



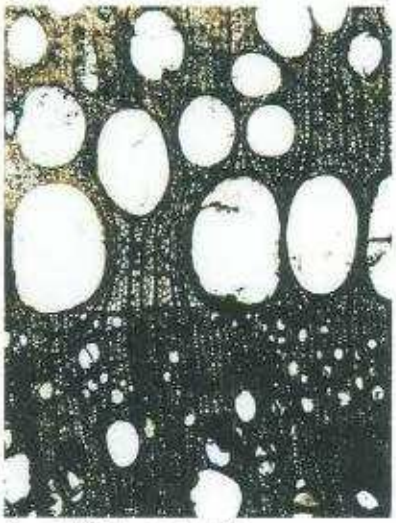
6．試料30　イヌガヤ×300



7．試料33　トネリコ属×75



8．試料35　スギ×300

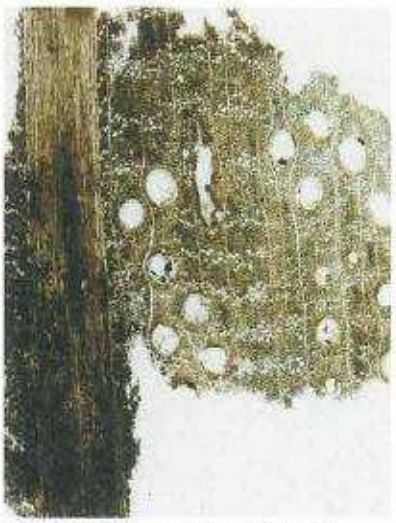


9．試料38　クリ×30

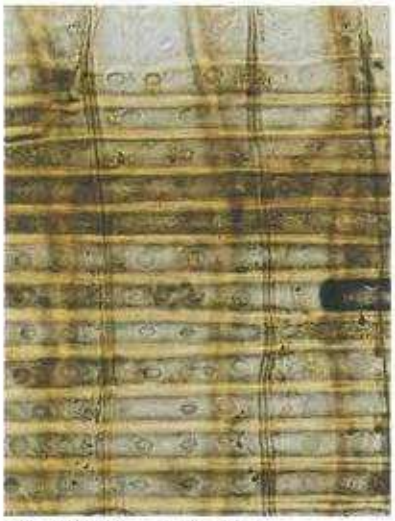
写真4　横田遺跡木製品組織顕微鏡写真（1）

10. 試料40　モミ×300

11. 試料45　ヒノキ×300

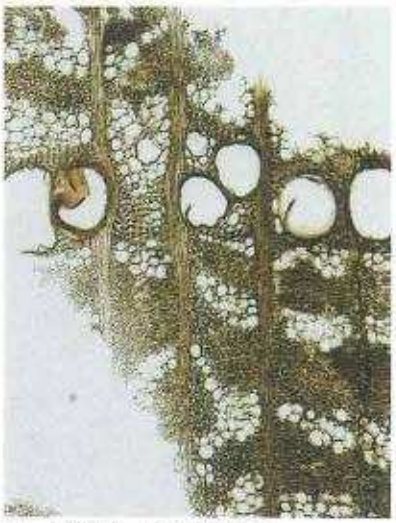


12. 試料52　アカガシ亜属×30

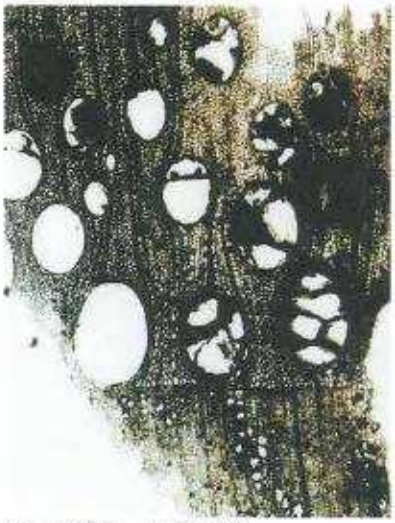


13. 試料53　スギ×300

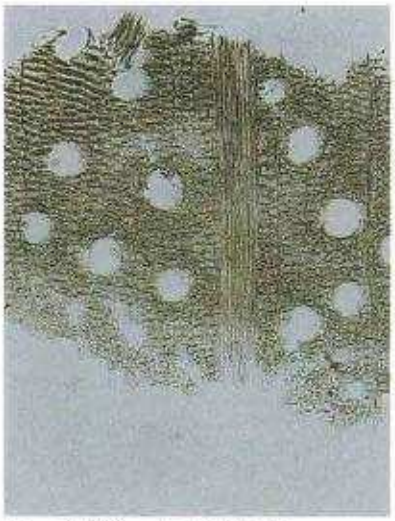
14. 試料60　イヌガヤ×75



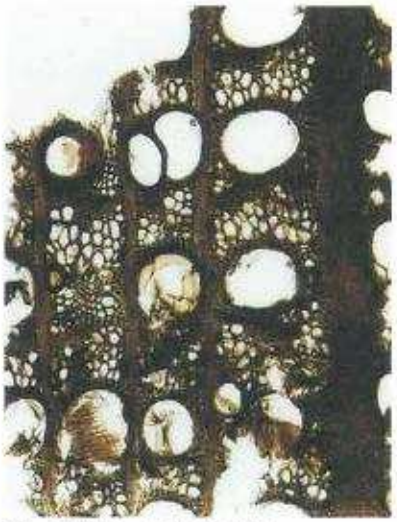
15. 試料62　ケヤキ×30



16. 試料65　クリ×30



17. 試料69　カエデ属×75



18. 試料70　ケヤキ×30

写真5　横田遺跡木製品組織顕微鏡写真（2）

第4節　横田遺跡における放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ*

1．はじめに

横田遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調整データは第11表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3．結果

第12表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を、第14・15図に暦年代較正結果をそれぞれ示す。

14C年代はAD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年代較正の詳細は以下の通りである。

暦年代較正（第14・15図）

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。

^{14}C年代の暦年代較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCal3.10の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。なお、PLD-3689：サンプル1、PLD-3690：サンプル2、PLD-3691：サンプル3、PLD-3692：サンプル4、PLD-3693：サンプル5、PLD-3697：サンプル9については、^{14}C年代が古く暦年代較正曲線の範囲外であるため、^{14}C年代のみを記載した。

第11表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-3689	その他：サンプル1	試料の種類：土壌 状態：wet カビ：無	湿式篩分け（106μm） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3690	その他：サンプル2	試料の種類：土壌 状態：wet カビ：無	湿式篩分け（106μm） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3691	その他：サンプル3	試料の種類：土壌 状態：wet カビ：無	湿式篩分け（106μm） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3692	その他：サンプル4	試料の種類：土壌 状態：wet カビ：無	湿式篩分け（106μm） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3693	その他：サンプル5	試料の種類：土壌 状態：wet カビ：無	湿式篩分け（106μm） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3694	その他：サンプル6	試料の種類：生試料・材 試料の性状：最外以外年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3695	その他：サンプル7	試料の種類：生試料・材 試料の性状：最外以外年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3696	その他：サンプル8	試料の種類：生試料・材 試料の性状：最外以外年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3697	その他：サンプル9	試料の種類：土壌 状態：wet カビ：無	湿式篩分け（106μm） 超音波煮沸洗浄 酸洗浄（塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-3698	遺構：あぜ断層 層位：最下層	試料の種類：生試料・材 試料の性状：最外以外年輪 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N，水酸化ナトリウム1N，塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

第12表　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
			1σ暦年代範囲	
PLD-3689	−26.05±0.19	22,470±140	較正曲線範囲外	
PLD-3690	−26.09±0.22	23,680±140	較正曲線範囲外	
PLD-3691	−25.72±0.18	25,110±160	較正曲線範囲外	
PLD-3692	−21.91±0.19	26,030±170	較正曲線範囲外	
PLD-3693	−27.19±0.22	25,620±180	較正曲線範囲外	
PLD-3694	−28.68± 0.3	4,025± 40	cal BC 2,580 − 2,485 (68.2%)	cal BC 2,840 − 2,810 (2.0%) cal BC 2,660 − 2,460 (93.4%)
PLD-3695	−28.03±0.18	4,030± 35	cal BC 2,580 − 2,480 (68.2%)	cal BC 2,840 − 2,810 (2.1%) cal BC 2,640 − 2,470 (93.3%)
PLD-3696	−26.77±0.19	4,190± 35	cal BC 2,890 − 2,850 (15.3%) cal BC 2,820 − 2,740 (39.4%) cal BC 2,730 − 2,690 (13.5%)	cal BC 2,890 − 2,830 (23.6%) cal BC 2,820 − 2,660 (70.7%) cal BC 2,650 − 2,630 (1.2%)
PLD-3697	−19.9± 0.2	28,460±200	較正曲線範囲外	
PLD-3698	−30.09±0.17	2,075± 35	cal BC 160 − 130 (14.8%) cal BC 120 − 40 (53.4%)	cal BC 190 − cal AD 10 (95.4%)

＊パレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

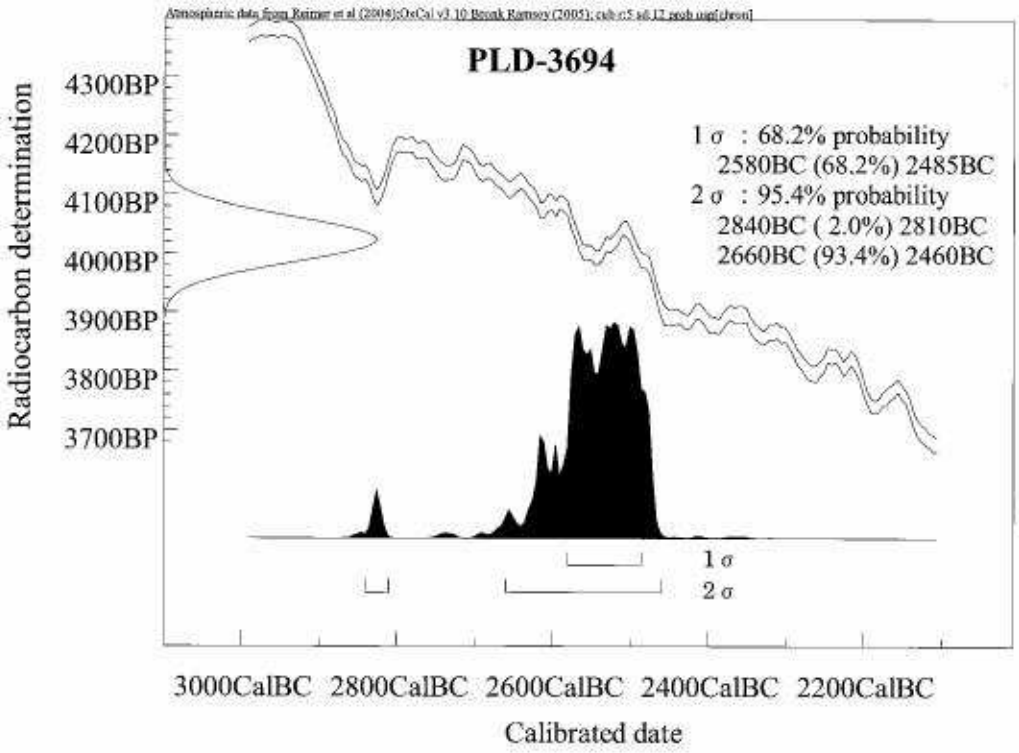
参考文献

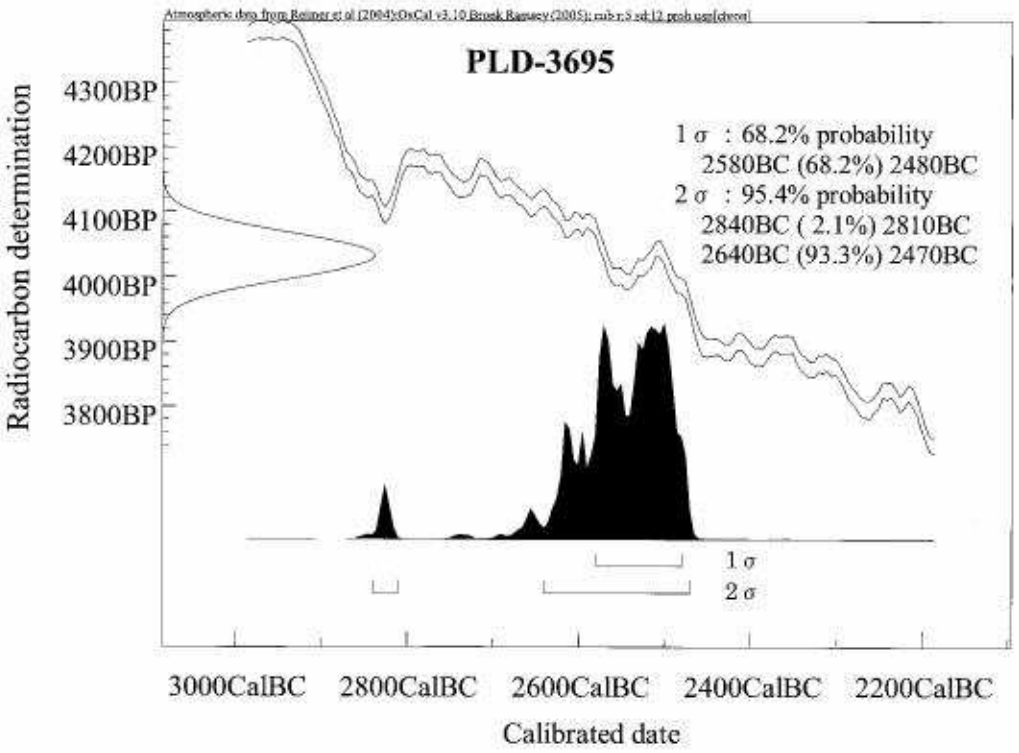
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program Radiocarbon 37(2) p.425-430

Bronk Ramsey C., 2001, Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A) p.355-363

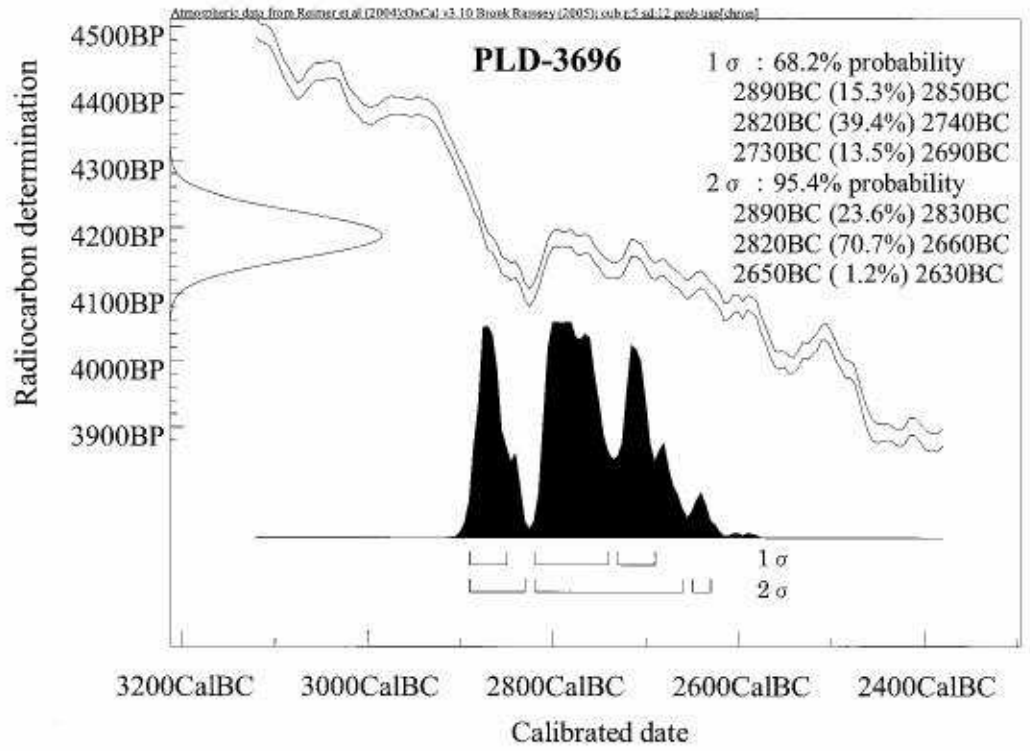
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代、p.3-20

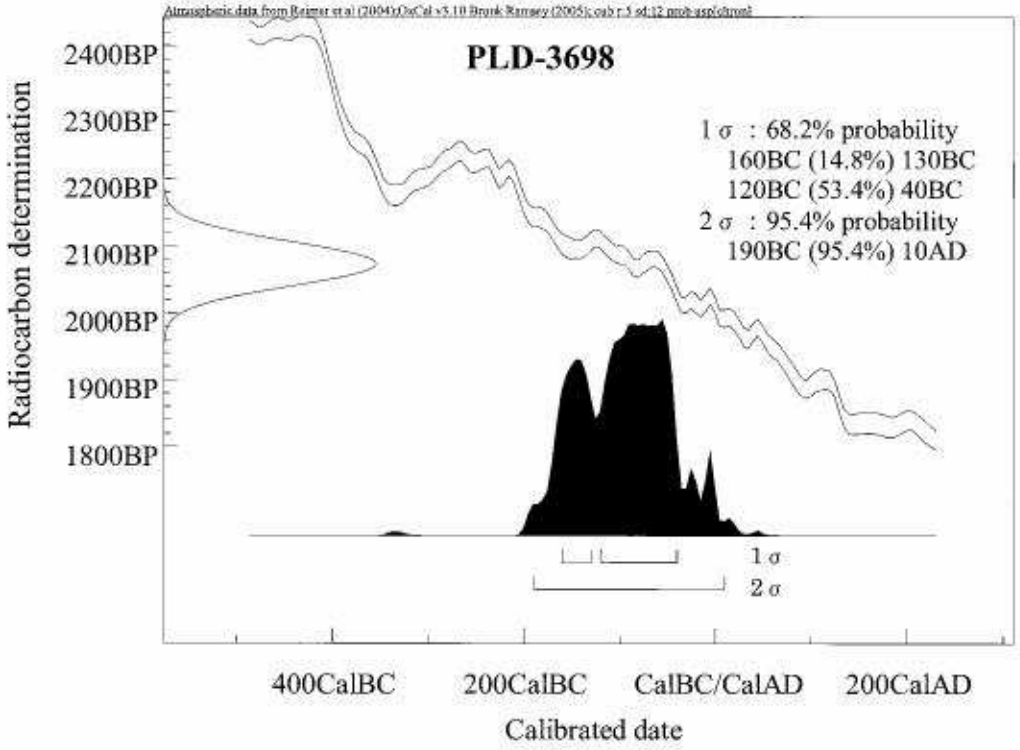
Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. 2004 Radiocarbon 46 (3) p.1029-1058





第14図　暦年代較正グラフ（1）





第15図　暦年代較正グラフ（2）

第6章　総　　括

1．横田遺跡における集落の消長

今回の発掘調査地は、横田遺跡が立地する扇状地の北半に相当し、弥生時代終末期の集落跡、奈良～平安時代前半の掘立柱建物跡群、平安時代末～鎌倉時代の集落跡を検出した。

このほかにも、遺構は不明瞭ないし希薄ではあるものの、弥生時代前期、古墳時代後期、室町時代などに属する遺物が出土しており、横田遺跡における集落の消長が明らかとなった。

弥生時代

弥生時代前期については、少数の土器の出土を見たのみであり、集落の状況は不明である。その探索は今後の課題と言わざるを得ない。

弥生時代終末期の集落は、攪乱の著しいB地区中央部～東部を除くと、ほぼ調査区全域に分布している。その分布状況からは、集落がさらに南側へ延びる可能性も高いことから、集落が相当規模のものであったことが推察される。

当該期の竪穴住居跡には、円形と隅丸方形の2形態が見られるが、重複関係からみるならば、まず円形住居群が成立しその後に隅丸方形住居群が構築されている。住居跡内からの出土遺物が比較的乏しいため、十分な検討はおこなえないが、集落継続期間が2小期に細分される可能性は高いと言えよう。

包含層出土の土器から見るならば、弥生時代終末期（庄内式並行期を含む）が中心であり、古墳時代前期（布留式併行期）の遺物は極めて僅少であることから、古墳時代前期には集落が廃絶したものと考えてよかろう。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺構は、一部の柱穴（P1053・1098・1131・2650）を見いだしうるにすぎない。低湿地部および旧河道からは、若干の遺物の出土を見るが、調査区内における当該期の遺跡は、総じてごく希薄なものだったと言える。

奈良時代～平安時代

奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡群は、B地区西部の扇状地中央部を中心に分布し、企画的な建物配置を見せることから、通常の集落とは異なる性格を想起させる。掘立柱建物以外に当該時期の遺構が希薄であることも、こうした推定と矛盾しないものと思われる。

検出された当該期の掘立柱建物跡群は、柱穴内からの出土遺物から若干の時期差の存在が推定され、SB2002の柱穴（P3019）埋土上部より出土した白磁合子（84）を除けば、奈良時代（8世紀）および平安時代中期の範疇で理解されるものであろう。SB2001には図示しうる遺物がないが、SB2002と建物の東辺が揃えられている点は、同時期の可能性を示唆するものと考えて大過なかろう。方位の点でSB2001・2002に近いSA2002も、これと同時期の可能性を考慮しうる。SB2003・2004はともに須恵器椀を出土しており、その形態から9世紀末～10世紀代に相当するものと考えてよかろう。

上述の建物跡群の他に、A地区東端部付近において多数の大型柱穴を検出しているが、建物跡の復元には至らなかった。掘立柱建物跡群に伴う遺構には、柵（SA2001・2002）があるが、他に顕著なものはみられない。

奈良時代の遺構群は、横田遺跡の西約1kmに位置し、氷上郡衙関連施設と推定されている市辺遺跡の時期に並行している点も注目すべき問題点として取り上げておきたい。

『平城宮発掘調査出土木簡概報（三十一）』（奈良国立文化財研究所編　1995）によれば、二条大路出土木簡中に、「丹波国氷上郡氷上郷横田里戸主中臣部小前調銭一貫」と記載されたものが見いだされている。この「氷上郷横田里」が横田遺跡周辺を指すとすれば、今回の調査で検出された掘立柱建物跡群は示唆的な存在である。

平安時代末～鎌倉時代

今回検出された中世の遺構群の大半は、12～13世紀代（平安時代末～鎌倉時代）に属するものと思われる。遺構は、掘立柱建物跡と土坑・溝・木棺墓から構成される。建物跡はやや貧弱な印象を受けるが、開墾による影響を強く受けていることと、当該期の遺物を出土する柱穴が調査区の全域に分布することを考慮するならば、本来営まれていた建物跡は数倍あるものと思われる。SB1003を除く建物群が、いずれも現地表で認められた開墾による段差に沿った形で営まれていることから、現地表に見られる景観が中世前半においてすでに成立していた可能性が考慮されよう。

中世後半期（室町時代）の遺構は、16世紀代と推定されるSK1010を除き明瞭ではなく、遺跡全体の出土遺物を通観してもごく乏しいものと言える。こうしたことから調査地周辺は、中世後半期には集落の中心領域から外れていた可能性が高い。

2．包含層・湿地部包含層出土の弥生土器

湿地部出土の弥生時代から古墳時代にかけての土器は、最初に述べたように弥生時代前期のものと弥生時代後期から古墳時代前期のものに大別することができ、出土量は後者が圧倒的に多くなっている。本遺跡出土の弥生前期の甕は前述のように前期新段階のものと考えられる。また、北丹波地域までは分布している貝殻施文の土器が含まれていないということから、これまで報告された遺跡と同様の傾向を示している。ただ、兵庫丹波における当該期の土器については、出土例がそれほど多くない。したがって、本遺跡例も点数が少なく、包含層出土のものであるが、加古川上流において新たに弥生時代前期の遺跡が判明した意義は大きい。

次に弥生時代後期から古墳時代前期の土器について、簡単にまとめてみたい。遺構の部分と同様、多賀氏による分析（2000、2002）に準拠している。

出土している土器のうち、口縁端部を僅かに拡張し擬凹線を施した甕（414～420）、長頸壺（394）、体部から口縁部が直立する高杯（507）、口縁端部を単純におさめる器台（527）等は、古い様相を示しており、弥生時代後期（Ⅴ期後半）に位置づけてよいものと考える。遺構出土の土器にもこの時期のものが、一定量含まれており、同様の傾向を示している。

遺構出土のものでも弥生時代終末期（Ⅵ期）に位置づけられるものが大半を占めるが、湿地部出土の土器でもその傾向は変わらない。複合口縁を持ち、擬凹線を施す甕や口縁部を上方に拡張した山陰・北陸系の土器（366・430）も数が少ないが認められる。器台においても口縁端部を拡張するものが多く、これらの土器は終末期でも前半のものと考えられる。終末期後半のものとしては、口縁部が単純に外反する形態の甕が多く出土しているほか、複合口縁を持つタタキ調整の甕も含まれており、同時に庄内系の甕も少数ながら存在している。また、他地域からの土器として下川津Ｂ類の甕（459・460）が出土し

ており、これらも終末期に位置づけられると思われる。

また、布留式の影響を受けた甕（455・456）や深い坏部を持つ高坏（511）等が存在することから、古墳時代前期に位置づけられる資料も若干含まれていると思われる。

一方、扇状地上で検出された当該期の遺構は、そのほとんどが弥生時代後期～古墳時代初頭に収まるものと考えられる。

3．集落を取り巻く古環境

花粉分析の成果からは、弥生時代後期～中世におよぶ長期間にわたって、遺跡周辺が照葉樹を含む森林とスギ林が混在した環境であったことが指摘されている。また、湿地性の草本類の花粉も検出されていることから、扇状地とこれに隣接した湿地という環境は、長期にわたって横田遺跡の立地環境の特性であったといえよう。これは低湿地出土種実からも首肯されるものであり、比較的温暖な気候下に成立する照葉樹林に加え、スギ林の存在は多湿な遺跡周辺の環境を反映したものと言える。

今回の調査で多数出土した木製品の樹種同定結果は、多数のスギが見いだされるほか、アカガシ亜属も散見される点で、上述のような花粉分析の成果とも概ね整合している。

4．横田北古墳群

横田北古墳群中、最も古い段階の遺物を出土したのは、2・4・6号墳であり、陶邑編年のTK47型式（田辺昭三　1981）に相当するものと思われる。2・4号墳は墳丘の削平が著しく、遺物も原位置を遊離した出土状況であり、より上位に存在した古墳からの遺物の流入という可能性を捨象できないものの、これと隔絶する時期を示す遺物も存在しない。

3号墳は、石棺内で枕とされていた杯蓋2点（741・742）が、いずれもTK10型式の新しい段階に対応すると思われる。従って横田北古墳群では、2・4・6号墳の築造がおこなわれた後、若干の時期差をもって3号墳が築造されたものと考えられる。

以上のような成果から、横田北古墳群はTK47～TK10型式の間（6世紀前半代）に築造されたものと考えて大過なかろう。

引用・参考文献

池田正男　2005　「緑釉陶器から見た篠山市西木之部遺跡の様相（上）」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第4号
石井精司　1989　「丹波・丹後」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』
大嶋和則　2001　「高松平野における庄内併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅩⅣ
岡田章一・長谷川眞　2003　「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号
岡田章一　2004　「時期設定と土器・陶磁器組製の変遷」『兵庫津遺跡Ⅱ（浜崎・七宮地区の調査）』兵庫県文化財調査報告第270冊
多賀茂治　2000　「兵庫丹波における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅩⅡ
多賀茂治　2002　「兵庫丹波における弥生土器の様相（予察）」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
兵庫県教育委員会　1990　『七日市遺跡Ⅰ　第2分冊　弥生～古墳時代の調査』
兵庫県教育委員会　1991　『七日市遺跡Ⅰ　第3分冊　飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査』
兵庫県教育委員会　1995　『犬岡遺跡』

兵庫県教育委員会　2003　『七日市遺跡（Ⅲ）』
兵庫県教育委員会　2004　『兵庫県遺跡地図』
奈良国立文化財研究所編　1993『木器集成図録近畿原始篇』
奈良国立文化財研究所　1995　『平城宮発掘調査出土木簡概報（三十一）－二条大路木簡五－』
埋蔵文化財研究会　1996　『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器－』《第Ⅲ分冊　近畿・中国・四国・九州・追加資料》
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について　－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4

第13表　掲載土器・土製品

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
46	1	SH1001		弥生土器	壺	13.60				口縁部はヨコナデの後、外面に擬凹線・内面にヘラミガキ。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
46	2	SH1001		弥生土器	壺					櫛描形浮文	
46	3	SH1001	2区床面	弥生土器	壺					外面はハケ・ナデ、頸部内面はハケ・ナデ、体部内面はヘラケズリ。	
46	4	P1245		弥生土器	壺	15.60					SH1001柱穴
46	5	SH1001		弥生土器	壺			9.40			
46	6	SH1001		弥生土器	壺			4.20		外面はハケ・ヘラミガキ、内面はナデ。底面にヘラ擦痕。	
46	7	SH1001	2区床面	弥生土器	甕	14.00				口縁部はヨコナデ、内面頸部下にヘラケズリ。	
46	8	SH1001		弥生土器	甕	18.90				口縁部はヨコナデ後、外面に擬凹線。内面頸部以下にヘラケズリ。	
46	9	SH1001	2区床面	弥生土器	甕	15.70				口縁部はヨコナデ、体部外面はタタキ・ナデ、内面はナデ。	
46	10	SH1001		弥生土器	甕	17.00				剥離が激しく不明。	
46	11	SH1001		弥生土器	甕	14.60	17.70	3.50	23.80	口縁部はヨコナデ、体部外面はタタキの後ハケ・ナデ。内面は頸部以下にヘラケズリ。	外面スス状炭化物付着
46	12	SH1001	2区床面	弥生土器	甕	18.40				口縁部はヨコナデ、外面はナデ、内面は頸部以下にヘラケズリ。	
46	13	SH1001		弥生土器	甕	17.00	16.20			口縁部はヨコナデ。体部外面はハケの後ナデ、内面はハケ・ナデ。	
46	14	SH1001		弥生土器	甕	15.50				剥離が激しく不明。	
46	15	SH1001	3区床面	弥生土器	鉢	17.00	14.20			口縁部はヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ・ナデ、内面はヘラケズリ。	
46	16	SH1001	1区床面	弥生土器	甕		17.30			体部外面はハケ、内面はヘラケズリ・ナデ。	外面スス状炭化物付着
46	17	SH1001		弥生土器	甕	11.40	13.40			口縁部はヨコナデ。体部外面はタタキ後ハケ・ナデ、内面はナデ。	
46	18	SH1001		弥生土器	鉢	10.90		3.50	5.00	外面は剥離が激しく不明。内面はヘラミガキ。	外面剥離顕著
46	19	SH1001		弥生土器	鉢	9.40		3.60	6.80	口縁部ヨコナデ、体部は内・外面ともナデ。	
46	20	SH1001		弥生土器	鉢	8.70			6.20	体部外面はハケ・ナデ、内面はナデ・ユビオサエ。表面にスリップ？	
46	21	SH1001		弥生土器	鉢			3.60		剥離が激しく不明。	
46	22	SH1001		弥生土器	有孔鉢			2.60			
46	23	SH1001		弥生土器	台付鉢			7.10		体部外面はナデ、脚部内面ヘラケズリ、他は剥離が激しく不明。	
46	24	SH1001		弥生土器	台付鉢（脚部）			6.50		外面はハケ・ナデ、内面はナデ。	
46	25	SH1001		弥生土器	台付鉢（脚部）			5.50		内・外面ともナデ。	
46	26	SH1001		弥生土器	台付鉢（脚部）			5.80		内・外面ともナデ。	
47	27	SH1001		弥生土器	高杯？	28.20				口縁部はヨコナデ、外面に擬凹線。杯部は内・外面ともヘラミガキ・ナデ。口縁部直下にヘラ描き波状文。	
47	28	SH1001		弥生土器	高杯	21.60				口縁部に擬凹線、他は剥離が激しく不明。	
47	29	SH1001		弥生土器	高杯	24.00				口縁部に擬凹線、他は剥離が激しく不明。	
47	30	SH1001		弥生土器	器台					外面はヘラミガキ、受部内面はヘラミガキ、脚部はヘラケズリ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
47	31	SH1001		弥生土器	器台	21.00				口縁部ヨコナデ、擬凹線、受部内・外面はヘラミガキ。	
47	32	SH1001		弥生土器	器台	19.50				口縁部ヨコナデ、擬凹線、受部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ・ナデ。	
47	33	SH1001		弥生土器	器台	23.80				剥離が激しく不明。	
47	34	SH1001		弥生土器	器台（脚部）			19.80		脚端部ヨコナデ、他は剥離が激しく不明。円孔あり。	
47	35	SH1001	2区床面	弥生土器	蓋			5.30		つまみ部ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面はヘラケズリの後ナデ。	底径欄は頂部径を示す。
47	36	SH1001		弥生土器	蓋	5.90		1.40	2.90	外面はナデ・ヘラミガキ、内面はナデ。	底径欄は頂部径を示す。
47	37	SH1001	4区床面	弥生土器	壷（底部）			3.20		外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリ。	
47	38	SH1001		須恵器	杯蓋	15.60			5.00	外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
47	39	SH1005		弥生土器	壷	13.60				口縁部ヨコナデ、体部外面はナデ、内面は頸部以下ヘラケズリ。	土器(2)
47	40	SH1004	P1181	弥生土器	甕	13.80				口縁部ヨコナデ、体部は内・外面ともナデ。	SH1005の柱穴
47	41	SH1005		弥生土器	高杯	8.30				口縁部ヨコナデ、受部外面はヘラミガキ、内面はハケ。	
47	42	SH1005		弥生土器	器台（脚部）					外面はハケ、脚部内面はナデ・ヘラケズリ。	
47	43	SH1005	2区	瓦器	椀			6.00		剥離が激しく不明。	
47	44	SH2003	1区周壁溝	弥生土器	壺	9.00	9.90	2.70	9.50	口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ・ナデ、内面は剥離が激しいがナデ。	
47	45	SH2003	1区	弥生土器	鉢	41.50				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ。ナデ、内面はハケ。	
47	46	SH2003	2区床面	弥生土器	高杯	20.80				口縁部ヨコナデ、他は剥離が激しく不明。	
47	47	SH2003	2区	弥生土器	高杯	20.00				口縁部ヨコナデ。内・外面ともハケの後ヘラミガキ。	内面磨耗顕著
47	48	SH2003	2区床面	弥生土器	台付鉢	18.20				口縁部ヨコナデ、他は剥離が激しく不明。	
47	49	SH2003	1区床面	弥生土器	台付鉢					外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ。	
47	50	SH2003	1区	弥生土器	高杯			10.10		外面はヘラミガキ、脚端部はヨコナデ。他は剥離が激しく不明。	内外面磨耗激著
47	51	SH2003	2区	弥生土器	高杯（脚部）			13.90		脚端部ヨコナデ。外面はヘラミガキ・ナデ、内面はナデ。	
47	52	SH2003	2区床面	弥生土器	壷（底部）			4.50		剥離が激しく不明。	
48	53	SH2001	P2214	弥生土器	高杯	11.20	12.50			口縁部ヨコナデ。杯部内・外面ともヘラミガキ・ナデ。	SH2001内の柱穴
48	54	SH2002	床面	弥生土器	甕	14.50				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ナデ、内面はナデ・板ナデで粘土紐の継ぎ目顕著。	
48	55	SH2004		弥生土器	壷	16.80				口縁部ヨコナデ。頸部から体部外面はタタキの後ナデ、内面はナデ、頸部以下ヘラケズリ。	
48	56	SH2004		弥生土器	器台	19.80				口縁部ヨコナデ・擬凹線。受部外面はヘラミガキ・ナデ。	
48	57	SH2004		弥生土器	甕	13.20	15.20			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ナデ、内面はナデ。	
48	58	SH2004		弥生土器	壷	15.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ・ナデ、内面は頸部以下ヘラケズリ。	
48	59	SH2004		弥生土器	蓋	10.40		3.70	4.40	内面はナデ。	底径欄は頂部径を示す。
48	60	SH2004	上層	土師器	皿	8.40			2.00	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	61	SH2004	上層	土師器	皿	8.60			1.90	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
48	62	SH2004	上層	土師器	皿	8.70			1.70	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	63	SH2004	上層	土師器	皿	8.40			1.90	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	64	SH2004	上層	土師器	皿	8.70			1.70	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	65	SH2004	上層	土師器	皿	13.70			3.30	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	66	SH2004	上層	土師器	皿	14.20			3.60	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	67	SH2004	上層	土師器	皿	14.50			3.10	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	68	SH2004	上層	土師器	皿	16.60			2.90	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	69	SH2004	上層	土師器	皿	15.00			3.30	口縁部ヨコナデ、他はナデ。底部は回転糸切り。	
48	70	SH2004	上層	瓦器	皿	8.50			1.90	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	71	SH2004	上層	瓦器	皿	8.60			1.90	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	72	SH2004	上層	瓦器	皿	9.00			2.10	口縁部ヨコナデ、他はナデ。	
48	73	SH2004	上層	瓦器	椀	15.20			5.40	口縁部ヨコナデ、内・外面にヘラミガキ、貼り付け高台。	
48	74	SH2004	上層	瓦器	椀	15.80			5.60	口縁部ヨコナデ、内・外面にヘラミガキ、貼り付け高台。	
48	75	SH2004	上層	須恵器	椀	13.80			4.00	回転ナデ。	
48	76	SH2004	上層	須恵器	椀	15.80			4.90	回転ナデ。底部内面ナデ、底部は回転糸切り。	
48	77	SH2004	上層	須恵器	椀	15.20			4.90	回転ナデ。底部内面ナデ、底部は回転糸切り。	
48	78	SH2004	上層	須恵器	椀	15.60			4.90	回転ナデ。底部内面ナデ。	
48	79	SH2006		弥生土器	(脚部)			10.80		脚部外面はナデ、内面はナデ・ハケ。	
48	80	SH2009		弥生土器	壺					外面ヨコナデ、内面ナデ。	複合鋸歯文・スタンプ文
48	81	SH2009		弥生土器	高杯	29.50				口縁部ヨコナデ、杯部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。	
49	82	SB2002	P3018	須恵器	杯			10.00		体部は回転ナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデ、内面はナデ。	底面に墨書？
49	83	SB2002	P3018	須恵器	杯			11.20		体部は回転ナデ。底部外面はヘラ切りの後ナデ。	
49	84	SB2002	P3019	白磁	合子	5.60	6.60	4.50	2.00	型作り。体部下半～底部は無釉。	
49	85	SB2002	P3019	須恵器	杯	11.70		9.60	3.90	体部は回転ナデ。底部外面はヘラ切り、内面はナデ。	
49	86	SB2004	SK2059	須恵器	杯			9.20		回転ナデ。	
49	87	SB2004	SK2002	須恵器	杯	13.60		10.20	3.70	体部は回転ナデ。底部外面はヘラ切り後ナデ、内面はナデ。	
49	88	SB2004	SK2001	須恵器	椀	12.00		5.80	4.40	回転ナデ、底部回転糸切り。	
49	734	SB2004	P3204	緑釉陶器	皿	15.80				内外面とも回転ナデ。	
49	736	SB2004	P3217	弥生土器	壺	13.90				摩耗が著しく調整不明。	
49	89	SK1002		土師器	高杯？	13.40				摩耗が激しく調整不明。	
49	90	SK1004		土師器	皿	8.20			1.70	内・外面ともナデ。底部に指頭圧痕顕著。	
49	91	SK1004		土師器	皿	7.40			1.50	内・外面ともナデ。	
49	92	SK1004		土師器	皿	7.60			1.30	内・外面ともナデ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
49	93	SK1004		土師器	皿	8.20			1.30	内・外面ともナデ。	
49	94	SK1004		土師器	皿	8.30			1.50	内・外面ともナデ。	
49	95	SK1004		土師器	皿	8.00			1.50	内・外面ともナデ。	
49	96	SK1004		土師器	皿	13.40			3.40	口縁部ヨコナデ。他は内・外面ともナデ。	
49	97	SK1004		土師器	皿	12.60			3.10	口縁部ヨコナデ。他は内・外面ともナデ。	
49	98	SK1004		瓦器	皿	8.70			1.40	内・外面ともナデ。	
49	99	SK1004		瓦器	皿	7.80			1.60	口縁部ヨコナデ。内・外面ともナデ。	
49	100	SK1004		瓦器	椀	14.00		6.30	5.40	口縁部ヨコナデ。外面はナデ、内面はヘラミガキ。	
49	101	SK1004		瓦器	椀	14.60		5.80	5.70	剥離が激しく調整不明。	
49	102	SK1008		土師器	製塩土器	7.60				ユビオサエ	
49	103	SK1008		土師器	鍋	12.70	13.10			口縁部ヨコナデ。他は内・外面ともナデ。	
49	104	SK1008		弥生土器	甕	17.80				剥離が激しく調整不明。	
49	105	SK1008		土師器	鍋	22.70				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面は頸部以下板ナデ。	
49	106	SK1008		弥生土器	高杯					脚柱部外面はヘラミガキ。	
49	107	SK1008		須恵器	高杯			9.70		内・外面とも回転ナデ。長方形のスカシを4方向にあける。	
50	108	SK1010		土師器	鍋	31.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
50	109	SK1010		陶器	すり鉢			21.20		内・外面とも回転ナデ。おろし目はヘラ描き。	丹波焼
50	110	SK1012		土師器	羽釜					口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
50	111	SK1012		瓦器	椀	14.20		6.80	5.50	剥離が激しく調整不明。	
50	112	SK1012		須恵器	椀			7.00		内・外面とも回転ナデ。底部糸切り。	
50	113	SK1012		須恵器	椀	16.80		7.50	4.60	内・外面とも回転ナデ。底部糸切り。	
50	114	SK1012		土師器	甕	15.80				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はナデ。	
50	115	SK2004	下底	弥生土器	壺	15.00	21.20		23.00	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。体部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はハケ、底部付近ヘラケズリ。	
50	116	SK2004	下底	弥生土器	壺	25.00				剥離が激しく調整不明。外面はヘラミガキ？口縁部外面に波状文＋竹管文。頸部下端に刻み目突帯。	
50	117	SK2004	下底	弥生土器	壺		20.00	3.20		外面はヘラミガキ？。内面は頸部下にヘラケズリ、下半部はハケ。	
50	118	SK2004	下底	弥生土器	甕	15.30	14.60			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ナデ、内面は頸部以下に板ナデ。	外面にススけ付着・二次焼成
50	119	SK2004	下底	弥生土器	甕	15.50	14.60			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はハケ・ヘラケズリ。	
50	120	SK2004	下底	弥生土器	甕	16.00				口縁部ヨコナデ・ハケ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ？。	
50	121	SK2022		陶器	椀	12.90				回転ナデ。	美濃天目椀
51	122	SK2031		土師器	椀			6.30		回転ナデ、底部回転糸切り。	
51	123	SK2031		土師器	鍋	23.60				口縁部ヨコナデ。体部内・外面はハケ。	
51	124	SK2047		土製品	玉	2.10	1.90		1.80	ミガキ	器表面は平滑

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
51	125	SK2047		弥生土器	高杯			12.40		脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ・ヘラケズリ。	穿孔4カ所
51	126	SK2053		弥生土器	壺？（底部）			3.80		体部内・外面はナデ。	小型の壺または鉢
51	127	SK2068		土師器	高杯	15.90		11.30	14.10	剥離が激しく調整不明。外面はヘラミガキ。	
51	128	P1015		土師器	壺	21.20				剥離が激しく調整不明。	
51	129	P1053		須恵器	杯蓋	13.80				回転ナデ。	
51	130	SB1004	P1054	須恵器	椀	16.40		6.80	5.50	回転ナデ、底部糸切り。	SB1004柱穴
51	131	P1055		磁器	急須？			6.60			
51	132	SB1004	P1064	瓦器	椀	14.60				剥離が激しく調整不明。	SB1004柱穴
51	133	P1081		須恵器	椀	14.70				回転ナデ。口縁端部が玉縁状に肥厚。	
51	134	P1085		土師器	高杯	14.60				剥離が激しく調整不明。	
51	135	P1098		須恵器	杯蓋	11.20			4.40	回転ナデ・回転ヘラケズリ。	
51	136	P1131		須恵器	杯身	11.00				回転ナデ・回転ヘラケズリ。	
51	137	P1148		瓦器	椀	14.60		6.40	5.80	剥離が激しく調整不明。	
51	138	P1148		須恵器	椀	16.50		6.90	4.60	回転ナデ。	
51	139	P1165		須恵器	鉢	26.80				回転ナデ。	
51	140	SB1002	P1175	須恵器	椀	15.40				回転ナデ。	SB1002柱穴
51	141	SB1001	P1192	須恵器	III	7.80		5.10	1.40	回転ナデ、底部糸切り。	SB1001柱穴
51	142	SB1002	P1196	須恵器	III	7.20				回転ナデ。	SB1002柱穴
51	143	SB1005	P1213	土師器	高杯					脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	SB1005柱穴
51	144	SB1001	P1222	土師器	III			7.60		剥離が激しく調整不明。	SB1001柱穴
51	145	P1225		須恵器	高杯	12.60				回転ナデ。	
52	682	P2058		土師器	高杯	15.80				口縁部ヨコナデ、杯部内外面ともヘラミガキ。	
52	683	P2063		弥生土器	鉢	5.60		2.60	3.60	剥離が著しく調整不明。	
52	684	P2077		弥生土器	高杯			13.40		外面はハケの後ヘラミガキ、内面はハケ。	
52	685	P2218		土師器	高杯	15.60				口縁部ヨコナデ、杯部外面はナデ、内面はナデで工具使用？。	
52	686	P2218		土師器	高杯	16.40				口縁部ヨコナデ、杯部外面はハケ・ナデ、内面はハケ。	
52	687	P2561		須恵器	椀	15.60		4.80	5.00	内外面とも回転ナデ。底部は回転糸切り。	
52	688	P2582		土師器	皿	8.40			1.40	内外面ともナデ。	
52	689	P2582		土師器	皿	10.80			2.90	内外面ともナデ。	
52	690	P2596		土師器	皿	8.00		5.30	1.60	内外面ともナデ。底部回転糸切り。	内面に輪状に炭化物付着。
52	691	P2596		瓦器	椀	15.40		6.80	5.70	剥離が著しく調整不明。	
52	692	P2599		須恵器	杯	12.40		9.80	4.30	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
52	693	P2599		須恵器	杯	12.20		8.70	4.00	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
52	694	P2599		須恵器	杯	13.50		10.40	3.80	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
52	695	P2597		須恵器	蓋	15.70				内外面とも回転ナデ。	
52	696	P2597		須恵器	杯			9.20		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後無調整。	
52	697	P2598		須恵器	杯			10.00		内外面とも回転ナデ。	
52	698	P2598		須恵器	杯			10.60		内外面とも回転ナデ。	
52	699	P2601		須恵器	鉢	29.40				内外面とも回転ナデ。	
52	700	P2605		土師器	皿	16.10		10.00	3.30	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
52	701	P2609		土師器	皿	8.00			1.50	剥離が著しく調整不明。	
52	702	P2650		須恵器	杯蓋	16.00			4.30	内外面とも回転ナデ。天井部外面のヘラケズリはごく一部で、内面に仕上げナデ。	
52	703	P2650		弥生土器	甕	13.80				口縁部ヨコナデ、体部内面にヘラケズリ。	
52	704	P2651		弥生土器	甕	12.50				口縁部ヨコナデ、体部外面はタタキ、内面はナデ。	
52	705	P2652		弥生土器	鉢	14.40				口縁部ヨコナデ、口縁直下に穿孔。体部外面はハケ、内面はナデ。	
52	706	P2661		須恵器	杯			6.40		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後無調整。	
52	707	P2680		須恵器	蓋	17.80				内外面とも回転ナデ。	
52	708	P2680		須恵器	杯			9.30		内外面とも回転ナデ。底部外面にヘラ記号？。	
52	709	P2680		須恵器	壺			6.80		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後無調整。	
52	710	P2681		須恵器	蓋	16.20				内外面とも回転ナデ。	
53	711	P2725		弥生土器	鉢	9.20		3.80	4.80	剥離が著しく調整不明。	外面に把手の脱落痕
53	712	P2728		土師器	皿	7.90			1.50	内外面ともナデ・ユビオサエ。	
53	713	P2728		土師器	皿	7.90			1.50	内外面ともナデ・ユビオサエ。	
53	714	P2728		土師器	皿	7.50			1.70	内外面ともナデ・ユビオサエ。	
53	715	P2728		土師器	皿	7.80			1.30	内外面ともナデ・ユビオサエ。	
53	716	P2733		土師器	鍋	24.00				口縁部ヨコナデ、体部外面はナデ？、内面はハケ。	
53	717	P2735		弥生土器	有孔鉢			4.40		剥離が著しく調整不明。	
53	718	P2810		縄文土器	深鉢					外面に突帯1条	
53	719	P2854		弥生土器	鉢（脚部）			7.20		剥離が著しく調整不明。	
53	720	P2902		弥生土器	甕			4.20		体部は内外面ともナデ。	
53	721	P2918		弥生土器	甕	33.80				剥離が著しく調整不明。内面はハケ？。	
53	722	P2933		弥生土器	鉢？（底部）			4.20		体部外面はナデ。	
53	723	P2986		須恵器	椀	16.20		6.00	5.50	内外面とも回転ナデ。底部糸切り。	
53	724	SB2002	P3011	須恵器	杯身	13.40				内外面とも回転ナデ。	SB2002柱穴
53	725	SB2003	P3031	須恵器	壺（底部）			9.40		内外面とも回転ナデ。	SB2003柱穴
53	726	SB2003	P3034	須恵器	杯身	12.00		8.20	3.60	内外面とも回転ナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	SB2003柱穴

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
53	727	SB2003	P3034	土師器	杯	16.60		13.40	3.60	口縁部ヨコナデ、体部内外面ともヘラミガキ。	SB2003柱穴
53	728	SB2003	P3042	弥生土器	甕	17.60				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はナデ。	SB2003柱穴
53	729	P3053		弥生土器	甕	10.40				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
53	730	P3138		弥生土器	高杯	22.20				口縁部ヨコナデ。杯部外面はナデ？、内面はヘラミガキ？。	
53	731	P3138		弥生土器	高杯			9.10		外面はナデ、脚内面はヘラケズリ。	
53	732	P3138		弥生土器	高杯			10.90		外面はハケ・ナデ、脚内面はヘラケズリ・ナデ。脚裾部に穿孔。	
53	733	P3138		弥生土器	鉢	12.40		4.80	7.20	剥離が著しく調整不明。	
53	735	P3216		弥生土器	甕		11.60	4.10		体部外面はハケ、内面はナデ。外面に被熱による器面の荒れが顕著。	
54	146	SD1004		弥生土器	壺	13.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線。外面はタタキ・ハケ、内面はナデ？。	
54	147	SD1004		弥生土器	甕	13.70	16.60			剥離が激しく調整不明。	
54	148	SD1004		弥生土器	甕	13.00	15.00			口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
54	149	SD1004		弥生土器	甕	16.00				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部内面はヘラケズリ。	
54	150	SD1004		弥生土器	甕	15.20				口縁部はヨコナデ。体部内面はヘラケズリ。	
54	151	SD1004		弥生土器	甕	15.30				口縁部はヨコナデ。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ。	
54	152	SD1004		弥生土器	甕	27.00	31.60			剥離が激しく調整不明。	
54	153	SD1004		弥生土器	高杯					内外面ともヘラミガキ。	杯部下半のみ残存
54	154	SD1004		弥生土器	高杯	11.70		10.00	9.40	内外面ともヘラミガキ。2個一対の円孔を3方向にあける。	
54	155	SD1004		弥生土器	器台			19.40		内面はハケ、脚端部に擬凹線。円孔を上下二段にあける（上5・下3）	
54	156	SD1004		弥生土器	蓋	15.40		4.60	5.00	剥離が激しく調整不明。	
54	157	SD1007		土師器	鍋	20.30				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
54	158	SD1007		土師器	鍋	23.20				口縁部はヨコナデ。	二次焼成を受ける
54	159	SD1007		土師器	鍋	27.00				口縁部はヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
54	160	SD1007		瓦器	椀			7.00		ナデ、貼り付け高台。	
54	161	SD1007		須恵器	鉢	32.60				回転ナデ。	
54	162	SD1009		須恵器	壺					回転ナデ。頸部に櫛描波状文。	旧河道
54	163	SD1009		須恵器	甕	34.50				回転ナデ。頸部に櫛描波状文。	旧河道
55	164	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺	16.70				口縁部はヨコナデ・擬凹線。	旧河道
55	165	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺	14.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部内・外面はハケの後ナデ。	旧河道
55	166	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺	9.70				口縁部はヨコナデ・擬凹線。他は剥離が激しく調整不明。	旧河道
55	167	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺	16.80				口縁部ヨコナデ。口縁直下に貼付突帯。	旧河道
55	168	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺	14.70				口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	旧河道
55	169	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺	17.40				口縁部ヨコナデ。体部内・外面はハケ。	旧河道
55	170	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺（底部）			4.50		体部外面はハケ。	旧河道

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
55	171	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺（底部）			6.20		体部内面はナデ。	
55	172	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	壺（底部）			9.60		体部内・外面はナデ。	
55	173	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	甕	19.00				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はタタキの後ナデ、内面はヘラケズリ。	外面にスス状炭化物が付着
55	174	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	甕	18.40				口縁部はヨコナデ、外面にハケ状工具による強いナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
55	175	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	甕	18.40				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
55	176	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	甕	12.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
55	177	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	鉢	5.70		2.50	5.60	手づくね成形。外面はユビオサエ・ナデ、内面はナデ。	
55	178	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	鉢	6.30		2.70	4.50	手づくね成形、内・外面ともナデ。	
55	179	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	蓋			3.40		内面はナデ。	
55	180	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	台付鉢			6.70		内・外面ともナデ。内面調整に一部ヘラ状工具使用？	
55	181	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	台付鉢			4.80		内・外面ともナデ。	
55	182	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	鉢	9.60		4.60	6.50	外面はナデ、内面はハケ。	
55	183	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	台付鉢（脚部）			7.10		外面はハケ・ナデ、内面はナデ。	
55	184	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	台付鉢（脚部）			5.20		外面はナデ。	
55	185	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	有孔鉢			2.10		外面はタタキの後ナデ、内面はハケ。	
55	186	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	有孔鉢			1.30		内・外面ともナデ。	
55	187	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	有孔鉢			1.60		外面はタタキの後ナデ、内面は板ナデ？	
55	188	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	有孔鉢					外面はナデ、内面はハケ。	
55	189	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	高杯	14.30				口縁部ヨコナデ、直下に凹線。内面はヘラミガキ、杯部外面に把手。	
55	190	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	高杯			11.50		脚部外面はハケ、内面はナデ。	
55	191	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	高杯			11.30		脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
55	192	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	高杯					脚部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
55	193	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	器台	19.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。内面はヘラミガキ。	
55	194	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	器台					一部にヘラミガキ。他は残存状況が悪く不明。	
55	195	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	器台					外面はヘラミガキ＋刺突文、内面はヘラミガキ・ナデ。	
55	196	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	ミニチュア土器	3.30		3.00	3.50	手づくね成形、内・外面ともナデ。	鉢？
55	197	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	ミニチュア土器	4.20		2.80	4.50	手づくね成形、内面はユビオサエ・ナデ。	鉢？
55	198	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	蓋			3.40		外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
55	199	SD1009	灰色砂礫	弥生土器	蓋	9.00		3.70	4.60	外面はナデ。	
56	200	SD1014		弥生土器	壺	17.00				口縁部はヨコナデ・擬凹線、外面に櫛描波状文。内面はヘラミガキ。	
56	201	SD1014		弥生土器	甕	17.00				口縁部ヨコナデ。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
56	202	SD1014		弥生土器	壺	17.00	20.50			口縁部ヨコナデ。体部外面はナデ、内面はヘラケズリ。	
56	203	SD1014		弥生土器	甕	13.80	19.40			口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
56	204	SD1014		弥生土器	鉢	14.60	12.60			口縁部ヨコナデ。体部内・外面ともヘラミガキ。	
56	205	SD1015	包含層B	弥生土器	壺	15.70				口縁部ヨコナデ。	
56	206	SD1015	包含層B	弥生土器	壺	15.50				口縁部はヨコナデ・擬凹線。	
56	207	SD1015	包含層B	弥生土器	壺（底部）	10.30				口縁部ヨコナデ、外面にヘラ描沈線文・スタンプ文。	
56	208	SD1015	包含層B	弥生土器	壺（底部）			3.45		外面はハケ、内面はナデ。	
56	209	SD1015	包含層B	弥生土器	壺			4.30		内・外面ともナデ。	
56	210	SD1015	包含層B	弥生土器	甕	16.50	16.00			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
56	211	SD1015	包含層B	弥生土器	甕	14.50				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ。	
56	213	SD1015	包含層B・他	弥生土器	壺	14.10	19.10			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリ。	
56	214	SD1015	包含層B	弥生土器	甕	12.80	12.20			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はハケ。	
56	215	SD1015	包含層B・他	弥生土器	甕（底部）			3.40		外面はタタキの後ハケ、内面はナデ・ミガキ。	
56	216	SD1015	包含層B・他	弥生土器	鉢（底部）			2.60		内面はヘラケズリ。	
56	217	SD1015		弥生土器	（脚部）			6.00		外面はヘラナデ、内面はナデ。	
56	218	SD1015	包含層B・他	弥生土器	（脚部）			7.80		内・外面ともナデ。	
56	219	SD1015	包含層B・他	弥生土器	（脚部）			8.90		脚端部ヨコナデ。外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
56	220	SD1015	包含層B・他	弥生土器	高杯		15.00			内・外面ともヘラミガキ。	
56	221	SD1015	包含層B・他	弥生土器	高杯	12.70				口縁部ヨコナデ、外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。	
56	222	SD1015	包含層B・他	弥生土器	器台	21.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線。内・外面ともヘラミガキ。	
57	223	SD2001	上層	丹波焼	甕			8.70		回転ナデ。外面は鉄釉施釉後、灰釉をかける。	SD1004と同一の溝
57	224	SD2001	上層	丹波焼	鉢	30.70				回転ナデ。外面は無釉。内面は灰釉。	SD1004と同一の溝
57	225	SD2001	砂礫	弥生土器	壺	11.40				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	SD1004と同一の溝
57	226	SD2001	砂礫	弥生土器	壺	14.80				口縁部ヨコナデ。外面はハケの後ヘラミガキ、内面はハケ。	SD1004と同一の溝
57	227	SD2001	砂礫	弥生土器	甕	16.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	SD1004と同一の溝
57	228	SD2001	砂礫	弥生土器	甕	18.00				口縁部ヨコナデ、内面の一部にハケ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	SD1004と同一の溝
57	229	SD2001		弥生土器	甕	16.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	SD1004と同一の溝
57	230	SD2008検出時		土師器	皿	7.75		4.70	1.10	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	231	SD2008検出時		土師器	皿	7.75		5.65	0.85	ナデ、底部は糸切り。	
57	232	SD2008検出時		土師器	皿	8.35		6.40	1.00	ナデ、底部はヘラ切り。	
57	233	SD2008検出時		土師器	皿	8.30		6.00	1.10	回転ナデ、底部はヘラ切り。	
57	234	SD2008検出時		土師器	皿	7.40		5.20	1.45	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	235	SD2008検出時		土師器	皿	8.20		6.00	1.10	回転ナデ、底部はヘラ切り。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
57	236	SD2008検出時		土師器	皿	7.80		5.30	1.85	回転ナデ、底部はヘラ切り。	
57	237	SD2008検出時		土師器	皿	7.60		5.60	1.30	回転ナデ、底部はヘラ切り。	
57	238	SD2008検出時		土師器	皿	8.15		6.20	1.40	回転ナデ、底部はヘラ切り。	
57	239	SD2008検出時		土師器	皿	7.95		5.40	1.40	ナデ、底部はヘラ切り。	
57	240	SD2008検出時		土師器	皿	8.00		5.30	1.45	ナデ、内面にユビオサエ。	
57	241	SD2008検出時		土師器	皿	9.20		5.15	1.80	ナデ、底部はヘラ切り。	
57	242	SD2008		土師器	皿	15.05		14.35	3.10	口縁部ヨコナデ。内・外面ともナデ。	
57	243	SD2008		土師器	皿	15.40		14.15	2.75	口縁部ヨコナデ。内・外面ともナデ。	
57	244	SD2008		土師器	杯	15.10		6.50	3.55	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	245	SD2008検出時		土師器	杯	14.15		8.00	3.10	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	246	SD2008		土師器	杯	14.80		7.10	3.90	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	247	SD2008		土師器	杯	14.95		7.70	4.00	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	248	SD2008		土師器	杯	15.65		9.90	3.10	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	249	SD2008検出時		土師器	杯	14.10		7.60	3.80	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	250	SD2008		土師器	杯	14.30		7.70	3.40	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	251	SD2008		土師器	杯	12.65		7.86	3.50	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	252	SD2008検出時		土師器	杯	15.70		5.90	4.20	回転ナデ。外面の一部にナデ。	
57	253	SD2008		土師器	皿			5.80		回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	254	SD2008		土師器	皿			7.55		回転ナデ、底部は回転糸切り。	
57	255	SD2008検出時		土師器	鍋	37.50				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面は板ナデ。	
58	256	SD2008		瓦器	皿	8.40		4.10	2.00	ヨコナデ・ナデ。底部外面に縦の圧痕。	
58	257	SD2008付近		瓦器	皿	8.10		2.85	2.10	回転ナデ、ユビオサエ。	
58	258	SD2008		瓦器	椀	14.40				ヨコナデ。内面にヘラミガキ。	
58	259	SD2008		瓦器	椀			7.10		ヨコナデ。内面にヘラミガキ。	
58	260	SD2008検出時		瓦器	椀	14.00				ヨコナデ。内面にヘラミガキ。	
58	261	SD2008		瓦器	椀	14.30		7.00	4.80	ヨコナデ。内面にヘラミガキ。	
58	262	SD2008検出時		瓦器	椀	16.00		7.40	4.90	ヨコナデ。内面にヘラミガキ。	
58	263	SD2008付近		須恵器	皿	8.90		4.50	2.20	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	264	SD2008付近		須恵器	椀	16.40		5.60	4.95	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	265	SD2008付近		須恵器	椀	15.40		6.50	4.00	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	266	SD2008付近		須恵器	椀	16.70		6.20	5.00	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	267	SD2008付近		須恵器	椀	16.40		6.50	4.65	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	268	SD2008検出時		須恵器	椀	15.20		6.10	4.40	回転ナデ、底部は回転糸切り。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
58	269	SD2008付近		須恵器	椀	17.00		6.75	5.15	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	270	SD2008検出時		須恵器	椀	15.90		6.30	4.95	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	271	SD2008検出時		須恵器	椀	15.20		5.40	4.35	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	272	SD2008検出時		須恵器	椀			6.40		回転ナデ、底部は回転糸切り。	
58	273	SD2008検出時		須恵器	鉢	31.50				回転ナデ。	
58	274	SD2008		白磁	皿	10.20		3.40	2.40	回転ナデ。底部露胎。	
58	275	SD2008		白磁	皿			3.40		回転ナデ、底部はヘラ切り。底部露胎。	
58	276	SD2008		白磁	碗	15.20				回転ナデ、外面下半部はヘラケズリ。下半露胎。	
58	277	SD2008検出時		須恵器	壺	11.70				回転ナデ。	
58	278	SD2008		土師器	甕	17.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ・ヘラケズリ。	
59	279	SD2014		土師器	皿	9.05		6.00	1.50	回転ナデ・ナデ。	
59	280	SD2014		瓦器	甕？		12.40			回転ナデ・ナデ。	
59	281	SD2014		須恵器	甕					回転ナデ。	
59	282	SD2014		須恵器	杯	9.70		4.95	3.20	回転ナデ、底部はヘラ切り無調整。	
59	283	SD2014		須恵器	杯	9.60		6.00	3.10	回転ナデ、底部はヘラ切り無調整。	
59	284	SD2014		須恵器	杯	10.60		7.00	3.10	回転ナデ、底部はヘラ切り無調整。	
59	285	SD2014北側		須恵器	杯	11.15		7.40	3.40	回転ナデ、ヘラケズリ。底部はヘラ切り。	
59	286	SD2014北側		須恵器	杯	13.65		9.50	3.20	回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ。	
59	287	SD2014北側		須恵器	杯			9.75		回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ。	
59	288	SD2014北側		須恵器	杯			9.20		回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ。	
59	289	SD2014北側		須恵器	杯	13.40		9.00	3.65	回転ナデ。	
59	290	SD2014	褐色砂礫	須恵器	甕	20.70				回転ナデ。	
59	291	SD2014		須恵器	壺		18.00			回転ナデ、ヘラケズリ。肩部に櫛描列点文。	
59	292	SD2014	褐色砂礫	須恵器	蓋	9.50			3.40	回転ナデ、天井部はヘラ切り後ナデ。	
59	293	SD2014		須恵器	蓋	9.90			3.40	回転ナデ、天井部はヘラ切り後ナデ。	
59	294	SD2014		須恵器	蓋	10.60			2.80	回転ナデ、天井部はヘラ切り無調整。	
59	295	SD2014北側		須恵器	蓋	10.15			3.00	回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ。	
59	296	SD2014		須恵器	蓋	11.4-9.0			3.50	回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ。	
59	297	SD2014北側		須恵器	杯身	13.35	15.15			回転ナデ・回転ヘラケズリ。	
59	298	SD2014		須恵器	杯身		14.90			回転ナデ・回転ヘラケズリ。	底部外面にヘラ記号
59	299	SD2014	褐色砂礫	須恵器	杯	12.00			4.90	回転ナデ・回転ヘラケズリ。	
59	300	SD2014	褐色砂礫	須恵器	杯身	11.50	14.10			回転ナデ。	
59	301	SD2014北側		弥生土器	長頸壺	20.50				剥離が激しく調整不明。	讃岐系か？

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
59	302	SD2014	3区アゼ	弥生土器	壺	8.30				口縁部ヨコナデ。体部は内外面とも一部にハケ。	
59	303	SD2014北側		弥生土器	壺？					外面はハケ、内面はヘラケズリ。外面に線刻	
59	304	SD2014北側		弥生土器	壺？	16.60				剥離が激しく調整不明。	
59	305	SD2014北側		弥生土器	高杯	14.20				剥離が激しく調整不明。	
59	306	SD2014	3区	弥生土器	（脚台）			4.00		剥離が激しく調整不明。	
59	307	SD2014	3区	弥生土器	高杯（脚柱）					外面調整不明。内面は鋸歯状のヘラケズリ。	
59	308	SD2014		弥生土器	高杯（脚柱）					外面調整不明。内面はヘラケズリ・ナデ。	
59	309	SD2014	3区	弥生土器	高杯（脚柱）					剥離が激しく調整不明。	
59	310	SD2014北側		弥生土器	高杯（脚柱）					外面はヘラミガキ。内面はヘラケズリでしぼり目あり。	
60	311	南側流路		弥生土器	台付鉢	11.80		4.90	6.40	剥離が激しく調整不明。底部の穿孔は焼成後。	
60	312	南側流路		弥生土器	高杯	21.20				剥離が激しく調整不明。底部の穿孔は焼成後。	
60	313	南側流路		弥生土器	高杯（脚部）			17.80		外面はヘラミガキ、内面はハケ・ナデ・ヘラケズリ。円孔3ヵ所。	
60	314	南側流路		弥生土器	高杯（脚部）			20.10		外面はヘラミガキ、内面はハケ・ナデ・ヘラケズリ。円孔4ヵ所。	
60	315	南側流路		弥生土器	器台			22.20		外面はヘラミガキ、内面はナデ・ヘラケズリ。円孔5ヵ所×3段。	
60	316	北側流路		須恵器	蓋	16.80				回転ナデ、頂部はヘラ切り後ナデ。	
60	317	SX2002	暗褐色砂	土師器	皿	8.00		6.30	1.35	回転ナデ、底部はヘラ切り。	
60	318	SX2002	暗褐色砂	土師器	皿	7.90		5.70	0.90	回転ナデ、底部はヘラ切り。	
60	319	SX2002	2・3区	土師器	皿	6.80		4.60	1.10	回転ナデ・ナデ、底部はヘラ切り。	内面に炭化した芯の痕跡
60	320	SX2002	2区	土師器	皿	8.60		6.20	1.50	回転ナデ、底部はヘラ切り無調整。	
60	321	SX2002	暗褐色砂	土師器	杯	15.90		10.70	3.40	回転ナデ・ナデ、底部はヘラ切り後ナデ。	
60	322	SX2002	2区	土師器	杯			10.10		回転ナデ、底部は回転糸切り。	
60	323	SX2002	暗褐色砂	土師器	鍋	23.80				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
60	324	SX2002	暗褐色砂	瓦器	皿	8.35		4.70	1.80	ヨコナデ・ナデ。	
60	325	SX2002	3区	瓦器	椀			7.00		回転ナデ・ナデ。横方向の暗文。	
60	326	SX2002	2区	瓦器	椀	14.80		6.30	5.50	回転ナデ・ナデ、内面にヘラミガキ。	
60	327	SX2002		瓦器	椀	14.00		6.30	5.20	回転ナデ・ナデ・ヘラミガキ。ジグザクの暗文。	
60	328	SX2002	3区	瓦器	椀	15.00		6.50	5.50	回転ナデ・ナデ・ヘラミガキ。暗文？。	
60	329	SX2002	2区	瓦器	椀	15.20		6.40	5.80	回転ナデ・ナデ・ヘラミガキ。ジグザクの暗文。	
60	330	SX2002	暗褐色砂	須恵器	椀	16.35		6.20	4.60	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
60	331	SX2002	暗褐色砂	須恵器	椀	16.15		7.75	4.80	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
60	332	SX2002	暗褐色砂	須恵器	椀	16.60		5.20	4.70	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
60	333	SX2002	暗褐色砂	須恵器	椀	16.60		6.65	5.25	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
60	334	SX2002	暗褐色砂	須恵器	椀	16.00		5.90	5.25	回転ナデ、底部は回転糸切り。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
60	335	SX2002	2区	白磁	皿	10.60		3.40	2.80	回転ナデ。外面底部露胎。	
60	336	SX2002	暗褐色砂	白磁	碗	14.45				回転ナデ。	
60	337	SX2002	2区	白磁	碗	16.00				回転ナデ。	
61	338	SX2004		弥生土器	壺	11.20				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケの後ナデ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
61	339	SX2004		須恵器	杯			8.20		回転ナデ、ヨコナデ。	
61	340	SX2005	灰褐色砂礫	弥生土器	壺	20.00				剥離が激しく調整不明。	
61	341	SX2005		弥生土器	壺（底部）			10.00		内面は指ナデ。	
61	342	SX2005		弥生土器	壺	13.60	20.40			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
61	343	SX2005		弥生土器	壺	17.00				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
61	344	SX2005		弥生土器	壺	19.80	24.70			口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
61	345	SX2005	灰褐色砂礫	弥生土器	壺	15.50				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
61	346	SX2005	上層、褐灰色砂	弥生土器	壺	13.30	18.10	4.60	22.00	口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
61	347	SX2005		弥生土器	ミニチュア	2.40	3.50	2.30	3.30	内外面ともナデ。	
61	348	SX2005		弥生土器	ミニチュア	4.70		3.30	3.20	内外面ともナデ。	
61	349	SX2005	褐色砂礫	弥生土器	ミニチュア壺	10.20		3.00	8.00	剥離が激しく調整不明。	
61	350	SX2005	灰褐色砂礫	弥生土器	（脚）			9.70		脚部外面は粗ハケの後ヘラミガキ、裾部はヨコナデ。	
61	351	SX2005	アゼ	弥生土器	有孔鉢	15.30			12.70	外面はタタキ・ハケ・ナデ、内面はナデ。底部に穿孔。	
61	352	SX2005		弥生土器	高杯（脚部）			15.80		脚柱部外面はヘラミガキ。内面はナデ。裾部に円孔４ヵ所残存（推定８ヵ所）。	
61	353	SX2005	上層、褐灰色砂	須恵器	杯	10.40		5.65	3.40	回転ナデ、ヘラケズリ。	
61	354	SX2005	上層、褐灰色砂	須恵器	椀	14.80		6.10	5.00	回転ナデ、底部は回転糸切り。	
61	355	木棺墓		青磁	皿	9.95		4.30	2.40	回転ナデ・回転ヘラケズリ。見込みに草花文、底部露胎。	龍泉窯系
61	356	木棺墓		青磁	皿	10.35		4.60	2.15	回転ナデ・回転ヘラケズリ。見込みに櫛描文、底部露胎。	同安窯系
61	357	木棺墓		青磁	碗	16.05		5.75	6.85	回転ナデ・回転ヘラケズリ。見込みに草花文、高台内部露胎。	龍泉窯系
61	358	木棺墓		土師器	皿	8.00		6.40	1.50	内外面ナデ。	
62	359		包含層（下）	弥生土器	壺	18.00				口縁端部に刻み目、口縁部直下にヘラ描沈線３条。	
62	360		精査面	弥生土器	壺	20.20	20.10			口縁部ヨコナデ、口唇部に刻み目。口縁部直下にヘラ描沈線４条。体部外面はハケ。	
62	361			弥生土器	甕	17.20	16.25	6.10	17.20	口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ・ナデ、内面はナデ。	
62	362		精査面	弥生土器	甕	14.60	15.55	6.80	18.90	口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ・ナデ、内面はナデ。	
62	363		包含層B	弥生土器	壺	22.80				口縁部ヨコナデ。内面はハケの後ミガキ。口縁部外面にコンパス波状文＋円形浮文。	
62	364		包含層B	弥生土器	壺	15.50				口縁部ヨコナデ。内面はハケ。口縁部外面に波状文。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	頸径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
62	365		包含層B	弥生土器	壺	23.50				口縁部ヨコナデ、屈曲部に刻み目。	
62	366		包含層B（下部）	弥生土器	壺	14.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線、焼成前穿孔1ヵ所残存。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ。	
62	367			弥生土器	壺	16.10				口縁部ヨコナデ、焼成後穿孔1ヵ所残存。体部外面はナデ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
62	368			弥生土器	壺	14.05				口縁部はヨコナデ。	スス残存
62	369		包含層B	弥生土器	壺	16.00				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ナデ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
62	370		包含層B	弥生土器	壺	20.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ？、内面はヘラケズリ？。	
62	371		包含層B	弥生土器	壺	21.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ・板ナデ、内面はナデで一部ヘラミガキ。	
62	372		包含層B	弥生土器	壺	13.70				口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
62	373		包含層B	弥生土器	壺	14.40				口縁部ヨコナデ。体部は内外面ともハケ。	
62	374		暗褐砂質シルト～砂礫	弥生土器	壺	15.30				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
62	375		包含層B（下部）	弥生土器	壺	14.70	21.80			口縁部はヨコナデ・擬凹線。口縁部内側に3個一組の列点文。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・ヘラケズリ・ハケの後ナデ。	
63	376			弥生土器	壺	15.00				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、ヘラミガキ。	
63	377		包含層B	弥生土器	壺	11.80				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ナデ、内面はナデ。	
63	378		灰色～褐灰色砂礫	弥生土器	壺	17.70				口縁部ヨコナデ。体部外面は粗いヘラミガキ、内面はハケ。	
63	379		暗褐砂質シルト～砂礫	弥生土器	壺	18.50				口縁部ヨコナデ、端部を拡張し櫛描波状文。頸部は内外面ともハケ。	
63	380		包含層B	弥生土器	壺	14.10				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ・ユビオサエ。	
63	381		包含層B・C	弥生土器	壺	12.10				口縁部ヨコナデ。体部外面はナデ、内面はハケの後ナデ、ヘラケズリ。	
63	382		包含層B（下部）	弥生土器	壺	15.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキ・指ナデ。	
63	383		包含層B（黒）	弥生土器	壺	24.40	23.80	5.40	14.90	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面は板ナデ・指ナデ。	体部上半に籾目痕跡
63	384		包含層B（下部）	弥生土器	壺	14.40				口縁部はヨコナデ。頸部外面はハケ、内面はハケの後粗いヘラミガキ。	
63	385		包含層B（下部）	弥生土器	壺	13.80				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ。	
63	386		包含層B（下部）	弥生土器	壺	11.55				口縁部ヨコナデ。頸部外面はハケ、体部外面はタタキ、体部内面はヘラケズリの後ナデ。	
63	387		包含層B（下部）	弥生土器	壺					頸部から体部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はナデ・板ナデ。	
63	388		包含層B（下部）	弥生土器	壺	10.15				口縁部ヨコナデ。体部内面はヘラケズリ。	
63	389		包含層（下）	弥生土器	壺	11.10	22.10			口縁部ヨコナデ。胴部内面はハケ。	
63	390			弥生土器	壺	13.70				剥離が激しく調整不明。	
64	391			弥生土器	壺	12.90				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
64	392		包含層B（下部）	弥生土器	壺	16.00	23.90			口縁部ヨコナデ。頸部から体部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラケズリの後ハケ、一部にヘラミガキ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
64	393		包含層B（下部）	弥生土器	壺	27.65				口縁部ヨコナデ。体部内面はヘラケズリ。。	外面にスス付着
64	394		包含層B（下部）	弥生土器	壺	11.80	14.40			口縁部ヨコナデ、頸部から体部外面はハケ、頸部内面はハケ、体部内面はヘラケズリ。	
64	395		湿地部上層	弥生土器	壺					口縁部外面に竹管・半截竹管によるスタンプ文	
64	396		包含層B（上部）	弥生土器	壺	11.85	20.00			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ヘラミガキ。口縁部内面はハケ、体部内面はヘラケズリ・ナデ。	
64	397		包含層B	弥生土器	壺		24.10		6.00	体部外面はハケ、内面はハケ・ヘラケズリ。	体部全体にスス付着
64	398		包含層B（下部）	弥生土器	壺					体部外面はハケ・ヘラミガキ・ナデ、内面はヘラケズリ・ユビオサエ。	
64	399		包含層B・C	弥生土器	壺（底部）			3.80		体部外面はヘラミガキ、内面は板ナデ。焼成前穿孔1ヵ所。	
64	400		暗褐砂質シルト～砂礫	弥生土器	壺（底部）			5.10		体部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はハケ。	
64	401		包含層B	弥生土器	壺		27.20	4.30		体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	
64	402		暗褐色砂質シルト	弥生土器	壺			8.00		体部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリ。	
64	403		包含層	弥生土器	壺（底部）			5.90		体部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
65	404		包含層	弥生土器	壺			3.50		体部外面はヘラミガキ、内面はハケ。	
65	405		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺			4.50		体部外面はナデ、内面はハケ。	
65	406		包含層B	弥生土器	壺			2.90		体部内外面ともハケ。	
65	407		包含層	弥生土器	壺			2.30		剥離が激しく調整不明。	
65	408		包含層B	弥生土器	壺			1.80		体部内外面ともヘラミガキ。	
65	409		湿地部上層	弥生土器	壺（底部）					体部外面はハケ、内面はナデ。	
65	410		包含層B（下部）	弥生土器	壺			3.80		体部内外面ともハケの後ナデ。	
65	411		包含層下部	弥生土器	壺			2.20		体部外面はハケ、内面はナデ。	
65	412		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺			5.60		体部外面はナデ、内面はハケ。	
65	413		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺（底部）			4.50		剥離が激しく調整不明。	
65	414			弥生土器	甕	14.10				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	415		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕	16.50				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	外面スス付着
65	416		包含層B	弥生土器	甕	15.40				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	417		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕	17.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	418			弥生土器	甕	17.50				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	419		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕	14.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	420		包含層C	弥生土器	甕	15.40				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケの後ナデ。内面はナデ・ヘラケズリ。	
65	421		包含層B	弥生土器	甕	13.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面は板ナデ。	
65	422		包含層B	弥生土器	甕	17.60				口縁部はヨコナデ、内面にハケ。体部内面はヘラケズリ。	
65	423		包含層C	弥生土器	甕	15.20				口縁部ヨコナデ。体部内外面ともハケ。	
65	424		湿地部上層	弥生土器	甕	19.40				口縁部ヨコナデ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
65	425		包含層B	弥生土器	壺	15.80				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ。	
65	426		包含層B	弥生土器	壺	14.00	16.20	3.00	19.80	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ。	
65	427		包含層B・C	弥生土器	壺	12.90				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ。	
65	428		暗褐色シルト	弥生土器	壺	15.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	429		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	17.30	14.60			口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケ、内面はナデ・ヘラケズリ。	
65	430			弥生土器	壺	16.10				口縁部ヨコナデ、ハケ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。	
65	431		包含層B・C	弥生土器	壺	15.30				口縁部ヨコナデ。体部外面は板ナデ、内面はヘラケズリ。	
66	432		包含層C	弥生土器	壺	12.40	12.00			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ・ナデ、内面は板ナデ？。	
66	433		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	12.60	25.50	4.40	19.50	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ。	
66	434		SD1014・1015間	弥生土器	壺	17.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ。	
66	435		包含層C	弥生土器	壺	13.30	12.60	3.60	13.30	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ・ナデ。	
66	436		包含層B・C	弥生土器	壺	19.00				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ。	
66	437		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	16.60				口縁部ヨコナデ十擬凹線状の条線。体部外面はタタキ、内面はヘラケズリ。	
66	438		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	15.80				口縁部はヨコナデ、内面にハケ。体部外面はタタキ、内面はハケ。	
66	439		包含層B	弥生土器	壺	13.40	12.00			口縁部ヨコナデ。体部外面は板ナデ、内面はヘラケズリ。	
66	440		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	13.60				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はヘラケズリ・ナデ。	
66	441		包含層B	弥生土器	壺	14.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリの後ナデ。	
66	442		包含層B	弥生土器	壺	15.10	18.20	2.80	23.20	口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ。	
66	443		包含層B	弥生土器	壺	15.40	17.20			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はハケ。	
66	444		包含層B下部	弥生土器	壺	17.00				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
66	445			弥生土器	壺	14.60	17.60			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ、内面はナデ。	
66	446		包含層B下部	弥生土器	壺	14.30				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はヘラケズリ。	
66	447		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	15.40	19.30			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面は板ナデ・ナデ。	
66	448		包含層B（下部）～C	弥生土器	壺	14.30	18.20			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ナデ、内面はヘラケズリ・ユビオサエ・ナデ。	
66	449		包含層B下部	弥生土器	壺	14.70				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ナデ、内面はヘラケズリ。	
66	450		包含層B	弥生土器	壺	15.60				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はナデ。	外面にヘラ描文？
66	451		包含層B下部	弥生土器	壺	23.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケ。	
67	452		包含層B	弥生土器	壺	16.40	16.40			口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリの後ナデか。	
67	453		包含層B	弥生土器	壺	13.50				口縁部ヨコナデ、内面にハケ。体部外面はタタキの後ハケ、内面はナデ。	
67	454		包含層B	弥生土器	壺	15.00				口縁部ヨコナデ、内面にハケ。体部外面はハケ・ナデ、内面はヘラケズリか。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
67	455		包含層下部	土師器	甕	15.20				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリの後ハケ。	布留式甕
67	456		包含層B～C	土師器	甕	15.40				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ、内面はヘラケズリ。体部外面にヘラ状工具による刺突。	布留式甕
67	457		褐色砂礫（中世）～包含層B	弥生土器	壺	16.80	14.70			口縁部はハケ・ヨコナデ。体部内面はヘラケズリか。	
67	458		包含層B	弥生土器	甕	18.30				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケ。内面はヘラケズリ。	
67	459		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕	14.40	20.00			口縁部ヨコナデ。体部外面は上半にハケ、下半にヘラミガキ。内面は上半はヘラケズリの後ユビオサエ、下半はヘラケズリ。	讃岐系土器（下川津B類）
67	460		包含層B（下部）	弥生土器	甕	14.80	21.70			口縁部ヨコナデ。体部外面はナデ、頸部下に強いナデによる条痕。体部内面はユビオサエ。	讃岐系土器（下川津B類）
67	461		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕	10.30	10.10	2.50	10.50	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ。内面はヘラケズリ。	
67	462		包含層B	弥生土器	甕	8.20	9.50	2.00	10.80	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ。内面はヘラケズリ。	
67	463		包含層B	弥生土器	甕			3.80		体部外面はタタキの後ハケ。内面は板ナデ。	
67	464		包含層B	弥生土器	甕			2.20		体部外面はタタキ、内面はハケの後ヘラケズリ。	
67	465		包含層B	弥生土器	甕			4.40		体部外面は底部に至るまでタタキの後ハケ。内面はヘラケズリ。	
67	466		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕			4.00		外面はタタキ、内面は板ナデ。	
67	467		包含層B（下部）～C	弥生土器	甕			5.80		外面はタタキ、内面は板ナデ。外面にヘラ記号か。	
67	468		包含層B（下部）	弥生土器	甕					外面はタタキ、内面はヘラケズリ。	
68	469		包含層B（下部）～C	弥生土器	鉢	6.50			3.80	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともナデ。	小型の丸底
68	470		包含層C	弥生土器	鉢	15.40				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ナデか、内面はナデ。	
68	471		包含層B	弥生土器	鉢	17.90				口縁部はヨコナデ・擬凹線。体部外面はハケの後ナデ、内面はヘラケズリ。	
68	472		包含層B（下部）～C	弥生土器	鉢	13.90	13.20			口縁部ヨコナデ。体部内外面ともナデ。	
68	473		包含層B（下部）～C	弥生土器	鉢	10.60	10.10	1.70	9.10	口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ、内面はハケの後ヘラミガキ。	
68	474		包含層（下部）	弥生土器	台付鉢	13.50	13.30			口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケで一部ヘラミガキ。内面はヘラケズリ。	
68	475		包含層C	弥生土器	台付鉢	18.30	14.90	11.80	14.50	口縁部ヨコナデ。脚部外面はナデ、体部内面は板ナデ。	
68	476		灰色砂礫（包含層C）	弥生土器	鉢	20.50				口縁部ヨコナデ。体部内外面はヘラミガキ。	
68	477			弥生土器	鉢	9.30		3.30	5.00	口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ヘラミガキ、内面は板ナデ。	
68	478		包含層（下部）	弥生土器	鉢	8.60		3.40	5.00	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともナデか。	
68	479		包含層B（下部）	弥生土器	鉢	8.10	9.80	2.40	6.20	口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ、内面は板ナデの後ヘラミガキ。	
68	480		包含層C	弥生土器	鉢	9.90		5.30	4.40	口縁部ヨコナデ。体部外面はヘラミガキ・ナデ、内面はヘラミガキか。	
68	481		包含層B～C	弥生土器	台付鉢	13.60		7.20	10.10	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキ・ナデ、内面はハケ。	
68	482		包含層B（下部）	弥生土器	台付鉢			6.00		体部外面はナデ、内面はハケ・ナデ。	
68	483		湧地部上層	弥生土器	鉢			3.40		剥離が激しく調整不明。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
68	484		包含層B～C	弥生土器	台付鉢（脚台）			6.30		脚部内外面ともナデ。	
68	485		包含層B（下部）～C	弥生土器	台付鉢（脚台）			4.80		脚部内外面ともナデ。	
68	486		包含層B	弥生土器	台付鉢（脚台）			9.90		脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ。	
68	487			弥生土器	台付鉢			6.00		脚部外面はナデ、内面はハケ・ナデ。	
68	488		包含層B（上部）	弥生土器	鉢（底部）			3.50		内外面ともナデ。	
68	489		包含層B（下部）	弥生土器	台付鉢（脚台）			5.60		体部内外面ともナデ、脚部内面はハケ。	
68	490		包含層B（上部）	弥生土器	台付鉢（脚台）			4.50		脚部外面はハケ・ナデ。	
68	491		包含層B（下部）	弥生土器	台付鉢（脚台）			4.30		体部外面はナデ、内面は板ナデ。	
68	492		包含層B	弥生土器	台付鉢（脚台）			9.30		体部外面はヘラミガキ、内面はナデ。脚内面はハケ、脚端部に凹線2条。	
68	493		包含層B（下部）	弥生土器	台付鉢			6.80		体部外面はハケ、内面はハケ・ナデ。脚内面はナデ。	
68	494		包含層B（下部）	弥生土器	台付鉢（脚台）			5.00		脚内外面はナデ。	
68	495		包含層B	弥生土器	台付鉢（脚台）			6.70		脚外面はユビオサエ、ナデ。	
68	496		包含層B（下部）～C	弥生土器	台付鉢	12.90		6.50	7.10	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともヘラミガキ。脚内面はナデ。	
68	497		包含層B（下部）	弥生土器	台付鉢					口縁部ヨコナデ。体部内外面はヘラミガキ。脚内外面はナデ。	
68	498		包含層B（下部）～C	弥生土器	台付鉢	11.70		5.00	6.50	口縁部ヨコナデ。内外面ともヘラミガキ。	
69	499		暗褐色土	弥生土器	有孔鉢	13.20		2.90	12.60	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともハケ・ナデ。	
69	500		包含層B（下部）～C	弥生土器	有孔鉢	16.40			13.40	口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ハケ・ナデ、内面はハケ・ナデ。	
69	501		包含層B（下部）～C	弥生土器	有孔鉢	17.70				口縁部ヨコナデ。体部外面はタタキの後ナデ、内面はハケ・ナデ。	
69	502		包含層B（下部）～C	弥生土器	有孔鉢					体部外面はタタキの後ナデ、内面はヘラケズリ。	
69	503		包含層B（下部）～C	弥生土器	有孔鉢			4.30		外面はタタキ・ナデ、内面はナデ。	
69	504		包含層B（下部）～C	弥生土器	有孔鉢			4.80		外面はハケ、内面は板ナデか。	
69	505		包含層B（下部）	弥生土器	高杯	19.60				口縁部はヨコナデ・擬凹線。杯部内外面ともヘラミガキ。	
69	506		包含層B（下部）～C	弥生土器	高杯	21.30				口縁部はヨコナデ・擬凹線。杯部内外面ともヘラミガキ。	
69	507		包含層B（下部）～C	弥生土器	高杯	24.50				口縁部ヨコナデ。杯部外面はハケ・ヘラミガキ、内面はヘラミガキか。	
69	508		包含層B（下部）	弥生土器	高杯	11.40				口縁部ヨコナデ。杯部内外面ともヘラミガキ。	
69	509		包含層B・C	弥生土器	高杯	28.10				口縁部ヨコナデ。杯部外面はハケ、内面はヘラミガキ。	
69	510		包含層B（下部）～C	弥生土器	高杯	27.60				口縁部ヨコナデ。杯部内外面ともヘラミガキ。脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。裾部に穿孔3ヵ所。	
69	511		包含層	土師器	高杯	22.70				剥離が激しく調整不明。	
69	512		包含層（灰色砂礫）	土師器	高杯	16.40				口縁部ヨコナデ。杯部内外面ともヘラミガキか。	
69	513		包含層	弥生土器	高杯	13.90		12.10	13.10	口縁部ヨコナデ、外面はヘラミガキ。杯部内面はヘラミガキ、裾部に4ヵ所穿孔。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	復径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
69	514		黒色シルト質砂	弥生土器	高杯	17.80				口縁部ヨコナデ。杯部外面はヘラケズリの後ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	
70	515		暗褐色砂質シルト	弥生土器	高杯（脚柱）					脚柱部外面はヘラミガキ、2条×3段の沈線。内面はヘラケズリ。	
70	516		包含層	弥生土器	高杯（脚柱）					杯部から脚柱部外面はハケ、2～3条×3段の沈線。杯部内面はヘラミガキ。脚部内面はヘラケズリ。	
70	517		包含層	弥生土器	高杯（脚柱）					脚柱部内面はヘラケズリ。	
70	518		湿地部上層	弥生土器	高杯（脚柱）					脚柱部外面はハケ・ヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	
70	519		包含層B（下部）～C	弥生土器	高杯（脚部）			13.50		脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ。裾部に穿孔3ヵ所。	
70	520		包含層B	弥生土器	高杯（脚部）			13.30		脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ。裾部に穿孔3ヵ所。	
70	521		包含層B	弥生土器	高杯（脚部）			15.00		脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ・ヘラケズリ。裾部に穿孔4ヵ所。	
70	522		包含層B（下部）～C	弥生土器	高杯（脚部）			14.70		脚部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はハケ、穿孔3ヵ所。	
70	523		包含層	弥生土器	高杯（脚部）			14.90		脚部外面はハケの後ヘラミガキ？、内面はヘラケズリ。	
70	524		黒色シルト質砂	弥生土器	高杯（脚部）			8.30		脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	
70	525		湿地部灰色砂礫	弥生土器	高杯（脚部）			9.90		杯部から脚部外面はヘラミガキ、脚部内面はハケ・ヘラケズリ。	
70	526		包含層B（上部）	弥生土器	高杯（脚部）					脚部内外面ともハケ。	
70	527		包含層B	弥生土器	器台	23.60				口縁部ヨコナデ、受部内外面ともヘラミガキ。	
70	528		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台	23.80				口縁部はヨコナデ・擬凹線、外面に円形浮文。受部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。	
70	529		包含層B	弥生土器	器台	21.40				口縁部はヨコナデ・擬凹線、受部外面はヘラミガキ？、内面はヘラミガキ。	
70	530		包含層B	弥生土器	器台	19.50				口縁部はヨコナデ、浅い擬凹線状の調整。受部外面はハケの後ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。	
70	531		包含層B	弥生土器	器台	18.70				口縁部ヨコナデ。体部外面はハケの後ヘラミガキ、受部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラミガキ。脚部に穿孔3ヵ所。	
70	532		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台	20.30				口縁部ヨコナデ。受部外面はハケの後ヘラミガキ、下半にヘラケズリ。内面はハケ・ナデ。	
70	533		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台	21.40				口縁部ヨコナデ、外面はハケ・ナデ、内面はナデ。	
70	534		SD1014・1015間	弥生土器	器台					外面はハケ・ナデ。内面はヘラミガキ。外面にコンパス波状文十刻み・円孔？。	
71	535		包含層B（面側くぼみ）	弥生土器	器台	11.60				口縁部ヨコナデ。受部内外面、脚部外面はヘラミガキ。脚部内面はヘラケズリ。	
71	536		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台	10.90				口縁部ヨコナデ。受部内外面はヘラミガキ。脚部外面に明瞭な稜、内面はナデ。円孔の痕跡あり。	
71	537		包含層B	弥生土器	器台	7.50		11.30	4.90	口縁部ヨコナデ。脚部外面はハケ、内面はハケ・ナデ。	
71	538		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台			11.70		脚部外面はヘラミガキ、内面はハケ・ナデ。脚端部に2孔×5方向の穿孔。	
71	539		包含層B・灰色砂礫層	弥生土器	器台			10.70		外面はハケの後ヘラケズリ、受部内面はナデ、脚部内面はハケ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
71	540		包含層C	弥生土器	器台			9.30		脚部外面はヘラミガキ、内縁はハケ。脚端部に2孔×4方向の穿孔。	
71	541		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台			14.50		脚部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ・ナデ。	
71	542		包含層B	弥生土器	器台			11.30		外面はヘラミガキ・ナデ？、内面はハケ。	
71	543		包含層B（下部）	弥生土器	器台	19.10				口縁部ヨコナデ、一部にヘラケズリ？。受部外面はヘラミガキ、内面はナデ。脚部外面にヘラ圧痕。	
71	544		包含層B（上部）	弥生土器	器台	10.60				外面はヘラミガキ。内面はヘラミガキ。脚部内面はヘラケズリ・ハケ。	
71	545		包含層B（下部）～C	弥生土器	器台			20.80		脚部外面はナデ・板ナデ。内面はナデ・ハケ。	
71	546		包含層B（上部）	弥生土器	蓋	2.60		6.40	3.40	内外面ともナデ。	
71	547		包含層B（下部）～C	弥生土器	蓋	4.40				外面はヘラミガキ・ナデ、内面はナデ。	
71	548		包含層C	弥生土器	蓋	2.70				外面はナデ。	
71	549		包含層B	弥生土器	蓋	3.20		12.50	6.10	外面はヘラミガキ・ナデ、内面はナデ。	
71	550		包含層B	弥生土器	蓋	2.80				内外面ともナデ。	
71	551		包含層B（下部）～C	弥生土器	蓋	2.20				外面はヘラミガキ、内面はナデ。	
71	552		暗褐色砂質シルト	弥生土器	蓋	2.60		11.60	5.80	口縁部ナデ、外面はナデ、内面はハケ。	
71	553		包含層	弥生土器	蓋	4.60		14.70	6.70	内外面ともナデ。	機械掘削時出土
71	554		包含層C	弥生土器	ミニチュア土器	5.00		2.80	5.10	内外面ともナデ。	
71	555		包含層B	弥生土器	ミニチュア土器	7.00			4.90	外面はナデ、内面はユビオサエ。	
71	556		包含層B・C	弥生土器	ミニチュア土器	5.80	7.00		6.10	内外面ともナデ。	
71	557		表面採集資料	弥生土器	ミニチュア土器		5.60	3.40		内外面ともナデ。	
71	558		包含層B（下部）～C	弥生土器	ミニチュア土器			2.90		外面はハケ・ナデ、内面はナデ。	
71	559		包含層B（下部）～C	弥生土器	ミニチュア土器					外面はユビオサエ・ナデ、内面はナデ。	
71	560		包含層B（下部）～C	弥生土器	ミニチュア土器			2.20		外面はナデ、内面は板ナデ。	
71	561		包含層B	弥生土器	手焙り形土器	16.70	17.70			口縁部ヨコナデ。外面はハケ。ナデ。刻みのある突帯1条。内面はハケ。	
71	562		包含層B	弥生土器	手焙り形土器		9.00			内面はヘラケズリ？	
71	563		包含層B（下部）	弥生土器	注口土器		10.80			剥離が激しく調整不明。	
72	564		包含層B	須恵器	杯蓋	11.90			3.80	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	565			須恵器	杯蓋					外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ。	
72	566		包含層B	須恵器	杯身	9.90				口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	567		包含層B（上部）	須恵器	杯身	10.90				口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	568		包含層B（上部）	須恵器	杯身	11.80			4.10	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
72	569		包含層	須恵器	杯身	11.90			4.00	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	570		包含層	須恵器	杯身	12.80			4.40	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	571		包含層	須恵器	杯身	12.60			4.80	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。底部中央はナデ。	
72	572		包含層	須恵器	杯身	11.50			4.10	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。底部はヘラ切り無調整。	
72	573		包含層	須恵器	杯身	12.60			4.80	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。底部中央はナデ。底面に編み物状圧痕。	
72	574		包含層B	須恵器	杯身	12.90			5.00	口縁部は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	575		包含層	須恵器	高杯					外面は回転ナデ。脚部に縦方向の深い沈線を三方に入れ、中央に横方向の沈線2条施す。	
72	576		包含層	須恵器	(脚部)			17.90		外面は回転カキ目、内面は回転ナデ。	
72	577		包含層B	須恵器	壺					外面は回転ナデ・櫛描波状文・貼付突帯、内面は回転ナデ。	
72	578		包含層B	須恵器	壺					外面は回転ナデ・櫛描波状文・貼付突帯、内面は回転ナデ。	
72	579		包含層	須恵器	壺	11.80				口縁部は回転ナデ。外面は回転カキ目、内面は回転ナデ。	
72	580		包含層	土師器	椀	11.80	12.40	5.70	4.60	内面はハケ？、剥離が著しく調整不明。	
72	581		包含層B	須恵器	甕	40.00				口縁部は回転ナデ。外面は回転ナデ・櫛描波状文・貼付突帯、内面は回転ナデ。	
72	582		包含層	須恵器	杯	10.00		7.20	3.30	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
72	583		包含層B	須恵器	杯	9.60		6.60	3.60	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
72	584		包含層	須恵器	杯	10.10		6.30	3.80	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
72	585		包含層	須恵器	杯	11.70		8.90	3.00	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
72	586		包含層B	須恵器	蓋	3.00				内外面とも回転ナデ。	数値はつまみ径
72	587		包含層	須恵器	蓋	2.00				内外面とも回転ナデ。	数値はつまみ径
72	588		包含層B（上部）	須恵器	蓋	3.00				内外面とも回転ナデ。	数値はつまみ径
72	589		暗灰色砂質シルト	須恵器	蓋	4.00				内外面とも回転ナデ。	数値はつまみ径
72	590		包含層	須恵器	蓋			13.90		口縁部は回転ナデ、外面はヘラケズリ・回転ナデ、内面は回転ナデ。	
72	591		暗灰色砂質シルト	須恵器	杯	13.00		8.70	3.90	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
72	592		包含層	須恵器	杯			10.50		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
72	593		包含層	須恵器	杯			9.30		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。ヘラ描き沈線あり。	
72	594		黒色シルト質砂	須恵器	杯	12.50			3.30	内外面とも回転ナデ。底部ヘラ切り後回転ナデ。	
72	595		包含層	須恵器	杯			8.10		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
72	596		包含層	須恵器	杯			9.90		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。爪状の圧痕多数。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
72	597		包含層	須恵器	杯			10.00		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	内面に墨書（未判読）。
72	598		包含層	須恵器	杯			9.30		内外面とも回転ナデ。底部ヘラ切り後ナデ、板目状の圧痕。	
73	599		包含層B	須恵器	杯	13.70		9.90	3.40	内外面とも回転ナデ。	
73	600		包含層	須恵器	杯			11.60		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
73	601		包含層	須恵器	杯			10.90		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
73	602		包含層	須恵器	杯			13.00		内外面とも回転ナデ。	
73	603		包含層	須恵器	杯	17.30		12.80	3.80	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
73	604		包含層	須恵器	杯			14.80		内外面とも回転ナデ。	
73	605		包含層B	須恵器	杯			7.10		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
73	606		包含層	須恵器	杯			7.90		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
73	607		包含層	須恵器	杯	12.50		8.80	4.40	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
73	608		包含層B（下部）	須恵器	杯	13.20		7.10	5.10	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
73	609		遺構検出面	須恵器	杯	16.00		8.30	5.40	内外面とも回転ナデ。	
73	610		遺構検出面	須恵器	杯	16.00		8.90	6.10	内外面とも回転ナデ。	
73	611		包含層	須恵器	椀	15.70		7.60	6.30	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り後ナデ。	
73	612		包含層B	須恵器	杯	13.40		7.00	3.80	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
73	613		遺構検出面	須恵器	杯	12.60		8.00	3.30	内外面とも回転ナデ。	
73	614		包含層	須恵器	杯	12.60		7.80	3.40	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
73	615		包含層	須恵器	壺（底部）			9.20		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ。	
73	616		包含層B	須恵器	壺（底部）			8.40		内外面とも回転ナデ。外面に貼付突帯1条。	
73	617		暗灰色砂質シルト	須恵器	不明					粘土紐の貼付。	
73	618		包含層B（上部）	土師器	托または椀			6.00		内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
73	619		包含層B（上部）	土師器	托または椀			6.00		内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
73	620		包含層B（上部）	黒色土器	椀			5.80		外面は回転ナデ、内面はヘラミガキ。底部回転糸切り。	
73	621		暗褐色砂質シルト	土師器	皿	16.30		9.40	2.70	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
73	622		包含層B（上部）	須恵器	鉢	15.40		10.20	7.40	内外面とも回転ナデ。	
73	623		包含層B	須恵器	壺	7.90				内外面とも回転ナデ。	
73	624		包含層B	須恵器	壺			10.30		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
73	625		包含層	須恵器	甕			13.00		内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り無調整。	
73	626		包含層	須恵器	壺			12.80		外面は底部外周にヘラケズリ？、内面は不定方向のナデ。	
73	627		包含層	緑釉陶器	椀？			7.50		外面は回転ナデ、内面は回転ナデの後仕上げナデ？。全面施釉。	
73	628		包含層	緑釉陶器	皿	12.70		5.30	2.60	外面は回転ナデ、内面は回転ナデの後仕上げナデ。底部回転糸切り。	
73	629		包含層B（下部）	緑釉陶器	椀	14.30		7.00	5.00	外面は回転ナデ、内面は回転ナデの後仕上げナデ。見込み部および高台内は無釉。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
73	630		包含層B	緑釉陶器	皿			6.40		内外面とも回転ナデ。	
73	677			緑釉陶器	皿	15.10		7.10	3.20	高台は削り出し、施釉。	
73	631		包含層	須恵器	皿	8.00		4.60	2.10	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
73	632		暗褐色砂	須恵器	皿	7.80		4.40	2.00	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	633		包含層B（上部）	須恵器	椀			5.80		内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	634		包含層B（上部）	須恵器	椀			7.10		内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	635		包含層	須恵器	椀			6.60		内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	636		灰色砂礫	須恵器	椀	15.20		5.80	4.80	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	637		包含層	須恵器	椀	14.60		6.70	5.10	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	638		暗褐色砂	須恵器	椀	15.40		4.70	5.00	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	639			須恵器	椀	16.50		5.80	5.30	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	640		包含層	須恵器	椀	16.80		4.40	5.20	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	641		包含層	須恵器	椀	15.30		6.40	4.60	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	642		暗褐色砂	須恵器	椀	15.80		6.00	5.20	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	643		包含層A	須恵器	椀	15.60		6.70	5.10	内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	644		黒褐色シルト～細砂	須恵器	椀			5.40		内外面とも回転ナデ、底部回転糸切り。	
74	645		暗褐色砂	須恵器	鉢	24.00				内外面とも回転ナデ。	
74	646			須恵器	鉢	30.20		9.60	9.60	内外面とも回転ナデ、底部ヘラ切り？後ナデ。	確認調査時出土
74	647		暗褐色砂	土師器	皿	8.00			1.90	口縁部ヨコナデ、内外面ともナデ、見込み部仕上げナデ。	
74	648		暗褐色砂	土師器	皿	7.80			1.70	口縁部ヨコナデ、内外面ともナデ、見込み部仕上げナデ。	
74	649		包含層	土師器	皿	12.90			2.80	内外面ともナデ。	
74	650		遺構検出面	土師器	鍋	19.50	22.30			口縁部ヨコナデ、体部外面はタタキ、内面はナデ。	
74	651		暗褐色砂	土師器	鍋	23.40				口縁部ヨコナデ、外面はタタキ（7本1単位）。	
74	652		包含層B（上部）	土師器	鍋	26.10				口縁部ヨコナデ、端部を外側に拡張。	
74	653		包含層	土師器	鍋	30.90				口縁部ヨコナデ。外面はタタキ（3本1単位）。	
74	654			瓦器	皿	8.20			1.80	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともナデ・ユビオサエ。	
74	655			瓦器	皿	8.80		7.40	1.80	口縁部ヨコナデ。体部内外面ともナデ・ユビオサエ。	
74	656		暗褐色砂	瓦器	皿	8.80		7.20	1.60	口縁部ヨコナデ。体部外面はナデ、内面はナデ・ユビオサエ。	
74	657		褐色土	瓦器	皿	8.80		5.00	2.10	内外面とも回転ナデ？、底部ヘラ切り無調整。	
74	658		褐色土	瓦器	椀	15.80		6.30	4.80	内外面とも回転ナデ、内面に仕上げナデ？。底部回転糸切り、平高台。	
74	659		包含層	瓦器	椀	14.30		6.40	5.40	外面はユビオサエ、貼付高台。	
74	660		褐色土	瓦器	椀	14.00		6.80	5.70	剥離が著しく調整不明。	
74	661		包含層	瓦器	すり鉢					口縁部ヨコナデ、内面に櫛描きおろし目。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
75	662		包含層B（上部）	磁器（青白磁）	合子蓋？						
75	663		暗褐色砂	磁器（青磁）	碗	14.70				外面は青緑色の釉薬。内面は草花文印刻後施釉。	
75	664		包含層	磁器（白磁）	碗	16.60				玉縁状口縁。内外面とも施釉。	
75	665		暗褐色砂	磁器（白磁）	碗	15.60				端部を外側に折り返した玉縁状口縁。内外面とも施釉。	
75	666		包含層B	磁器（白磁）	碗			6.60		内面は施釉、高台は無釉。	
75	667		暗褐色砂	陶器（丹波）	擂鉢					内面にヘラ書き（単線）のおろし目。	
75	668		灰色砂礫～褐灰色砂礫	陶器	壺	27.60				口縁部ヨコナデ。	産地不明。
75	669		褐色土	磁器（青磁）	碗			5.90		見込み部に印花による草花文。	
75	670		暗褐色土	磁器（肥前系）	碗	10.10		4.20	6.20	内外面に呉須による格子文。	焼継ぎがおこなわれている。高台内面に漆書で「ヨコタ文七□」の文字あり。
75	671			磁器（肥前系）	碗	10.40				外面は呉須による草花文。	
75	672			磁器（肥前系）	碗	9.10		4.50	4.50	外面は呉須による笹文、高台内側に呉須書き「寿」。	
75	673		褐色砂	陶器（肥前系）	碗（筒形）			4.90		外面は回転ヘラケズリ、底部は無釉。	肥前系京焼風陶器
75	674			磁器（肥前系）	皿	13.00		8.10	3.50	呉須による牡丹唐草文、見込み部にはスタンプによる五弁花、畳付けは無釉。高台内に呉須書き（大明年製？）。	
75	675		撹乱部	陶器	甕	13.50		4.00	3.30	輪状のつまみ、外面に4条の沈線。釉薬は内外面とも黄灰色。	
75	676		包含層	陶器	瓶					高台は無釉。釉薬は内外面とも灰黄色。	
75	678			陶器（備前）	擂鉢			12.40		内面は4条1単位のおろし目、見込み部は八方に放射して粗なるおろし目。	
75	679			陶器（丹波）	甕	32.50	35.60	15.80	33.10	鉄釉を施した後、灰釉を流しかける。口縁端部は内外面に拡張し、平坦面を作る。	
75	680		包含層B	土製品	土錘	2.20				算盤玉形の錘	
75	681		包含層B	土製品	土錘	4.80				棒状の錘	
88	737	1号墳堀切内		須恵器	壺		11.30			外面は回転ナデ、櫛描波状文。内面は回転ナデ・ユビオサエ。	
88	738	2号墳墳丘		須恵器	杯身	11.00	12.90			口縁部回転ナデ、体部外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	
88	739	2号墳墳丘		須恵器	杯身	11.60	13.60		2.90	口縁部回転ナデ、体部外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	
88	740	3号墳棺内	棺内流入土	須恵器	杯蓋	10.50				口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	741	3号墳棺内	棺床	須恵器	杯蓋	14.30			5.00	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	742	3号墳棺内	棺床	須恵器	杯蓋	14.30			4.90	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	743	3号墳棺内	棺内流入土	須恵器	杯身	10.20	12.30			口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	

図版	番号	遺構	層位等	種別	器種	口径(cm)	腹径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整技法など	備考
88	744	3号墳墓壙内		須恵器	杯身	11.30	13.40			口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	745	3号墳墳丘上		須恵器	杯身	11.20	13.60			口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	746	3号墳墳丘上		須恵器	杯身	12.80	15.20			内外面とも回転ナデ。	
88	747	3号墳堀切内		須恵器	壺					口縁部ヨコナデ、体部外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕。	
88	748	4号墳堀切内		須恵器	杯身	10.10	12.30		5.00	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
89	749	6号墳主体部		須恵器	高杯蓋	11.50			4.80	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	750	6号墳主体部		須恵器	高杯蓋	11.40			5.30	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	
88	751	6号墳主体部		須恵器	高杯蓋	11.50			4.70	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	753の蓋
88	752	6号墳堀切内		須恵器	杯蓋？	11.80			4.60	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。	
88	753	6号墳主体部		須恵器	高杯	9.40	11.80	8.20	8.70	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。脚に3方向のスカシ。	
88	754	6号墳主体部		須恵器	高杯	10.10	12.20	7.60	9.30	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ・カキ目、内面は回転ナデ・仕上げナデ。脚に3方向のスカシ。	
88	755	6号墳主体部		須恵器	はそう	10.70	10.30		10.40	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。口縁部・体部・頸部に櫛描波状文。	
88	756	1号墳上方		須恵器	杯身	10.90	13.90		4.90	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	757	墳丘流出土（1号墳？）		須恵器	杯身	11.10	13.40		5.30	口縁部回転ナデ。外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ・仕上げナデ。	
88	758	3号墳東側		土師器	皿	8.30		4.90	1.70	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り。	
88	759	1号墳上方		土師器	杯？			7.50		剥離が著しく調整不明。	
88	760	3号墳周辺		須恵器	椀	15.90		5.90	5.00	内外面とも回転ナデ。底部回転糸切り。	
88	761	4号墳北側		須恵器	椀	16.90				内外面とも回転ナデ。	
88	762	3号墳堀切内		土師器	鍋	26.80				剥離が著しく調整不明。	
88	763	4号墳周辺		土師器	鍋	33.10				口縁部ヨコナデ。体部内面はナデ。	
88	764	3号墳墳丘上		陶器	壺	1.90	5.20	2.20	3.90	外面は回転ナデ・回転ヘラケズリ、内面に施釉。	
88	765	2号墳主体部		土製品	土玉	1.00				ほぼ球形。中心に一孔が貫通。	重量1.3g
88	766	2号墳主体部		土製品	土玉	1.00				ほぼ球形。中心に一孔が貫通。	重量1.0g

第14表　掲載木器・木製品

図版	番号	器　種	出土地区	層　位	樹　種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備　考
76	W1	匙（未製品）	A－3	包含層B下部・C	イヌガヤ	10.6	5.4	1.6	
	W2	匙（柄）	A－2	包含層B	イヌガヤ	10.6	1.9	0.7	
	W3	匙	A－2・4	包含層B	イヌガヤ	4.6	2.3	0.8	
	W4	匙	A－3	包含層B下部	ヒノキ	8.1	3.9	2.2	
	W5	匙	A－3	包含層B下部	カエデ属	17.1	4.0	3.5	
	W6	二脚器	A	包含層B	スギ	14.0	6.1	5.7	
	W7	二脚器	A	包含層B	スギ	18.1	7.6	6.0	
	W8	四脚器	A－2	包含層B	スギ	34.6	13.8	8.6	
	W9	四脚器	A－2	包含層B	スギ	28.7	5.0	4.3	
77	W10	皿	A－3	包含層B下部	スギ	13.2	3.1	0.8	
	W11	皿	A－3	包含層B下部	ヒノキ	13.7	6.5	1.5	
	W12	皿	A	包含層	ヒノキ	9.0	2.5	0.9	
	W13	皿	A－1	包含層B下部	ヒノキ	12.2	5.0	0.9	
	W14	皿	A	包含層B下部	ヒノキ	12.5	3.5	1.0	
	W15	皿	A－3	包含層B下部	ヒノキ	14.2	4.4	1.1	
	W16	皿	A－2	包含層B	スギ	16.6	6.8	1.0	
	W17	皿	A－2	包含層B下部	ヒノキ	19.1	7.5	1.2	
	W18	皿	A－2	包含層B	ケヤキ	17.5	10.7	1.9	
	W19	皿	A－3	包含層B	ヒノキ	16.2	16.4	0.9	
	W20	曲げ物（底板）	A－1	包含層B下部	ヒノキ	12.4	2.4	0.7	
	W21	曲げ物（底板）	A－1	包含層B下部	ヒノキ	14.8	4.4	0.7	
	W22	底板	A－3	包含層B	ヒノキ	14.6	4.3	0.9	
	W23	底板	A－3	包含層B	ヒノキ	16.3	7.9	0.7	
	W24	底板	A－2	包含層B	ヒノキ	19.3	4.2	1.5	
	W25	底板	A－4	包含層B	ヒノキ	25.7	7.9	0.7	
	W26	皿（？）	A－3	包含層B	ヒノキ	19.7	6.5	3.0	
	W27	皿（？）	A－3	包含層B下部	アカガシ亜属	11.4	7.8	1.1	
	W28	猪口（？）	A	包含層	スギ	6.7	6.1	3.6	
78	W29	梗織具	A－2	包含層B	トネリコ属	5.6	6.2	1.4	
	W30	梗織具	A－3	包含層C	ケヤキ	16.0	5.2	1.1	
	W31	鎧	A－3	包含層B下部	ヒノキ	16.6	7.3	6.6	
	W32	鎧	A－3	包含層C	ヒノキ	18.5	7.3	6.7	
	W33	田舟	A－2	包含層B	モミ	29.1	11.3	6.3	
	W34	田舟	A	包含層	ヒノキ	25.2	6.8	0.9	
	W35	横槌（砧）	A－4	包含層B	ヤブツバキ	35.4	8.1	5.9	
	W36	平鍬	A－3	包含層B下部	アカガシ亜属	24.9	17.7	3.5	
79	W37	槽	A－3	包含層C	クリ	22.2	17.2	5.0	
	W38	槽	A－3	包含層B	ヒノキ	38.7	18.1	4.2	
	W39	槽	A－2	包含層B	スギ	36.8	5.3	2.1	
	W40	田舟	A－2	SD1015	ヒノキ	54.7	26.9	9.6	
	W41	不明	A－2	包含層B	スギ	71.0	20.8	6.0	
80	W42	紡錘車	A－3	包含層B下部	スギ	9.3	8.1	0.4	
	W43	紡績具（？）	A－1	包含層B下部	スギ	23.5	5.2	1.1	
	W44	錐窓縁木製品	B－3	9－3区北端	ヒノキ	18.2	2.6	1.5	ささら？
	W45	鎧（底部）	A－3	包含層B下部		7.7	7.8	3.3	
	W46	鍬形木製品	A－3	包含層C	スギ	14.3	2.8	0.9	
	W47	剣形木製品	A－4	包含層C	スギ	36.9	4.0	1.2	
	W48	琵形木製品	A－3	包含層	スギ	5.9	4.0	0.9	
	W49	不明	A－2	包含層B	スギ	25.6	4.7	0.7	しゃもじか？／曲柄鍬？
	W50	不明	A－3	包含層C	モミ	35.9	2.5	0.9	
	W51	不明	A－3	包含層B	ヒノキ	34.1	1.9	0.7	
	W52	不明	A－3	包含層B下部	ヒノキ	37.6	7.7	2.4	自在鉤か?
81	W53	有孔板	A－3	包含層B下部	スギ	27.8	6.6	0.8	箱か
	W54	板（釘穴？）	A	包含層	ヒノキ	29.5	6.7	1.6	箱か
	W55	板（釘穴？）	A	包含層	スギ	33.1	4.9	1.8	箱か　孔の間に板の接合痕あり
	W56	有孔板	A－2	包含層B	ヒノキ	14.6	2.9	0.8	箱か
	W57	有孔板	A－2	SD1015	アカガシ亜属	8.2	5.0	1.0	
	W58	板	A－1・3	包含層B下部	ヒノキ	19.5	4.3	1.0	
	W59	棒状製品	A	包含層	スギ	19.7	2.2	2.1	
	W60	棒状製品	A－1	包含層B下部	ヒノキ	25.0	2.1	2.2	
	W61	棒状製品	A－2	包含層B	ヒノキ	26.0	1.2	1.1	箸状
	W62	棒状製品	A－2	包含層B	ヒノキ	30.8	3.0	2.0	
	W63	棒状製品	A－2・4	包含層B	ヒノキ	51.7	2.5	2.1	搗り棒か
	W64	棒状製品	No.6グリッド	植物遺体層	ヒノキ	62.1	2.7	3.1	確認調査時出土
82	W65	板材	A－3	包含層B下部	スギ	23.4	2.8	0.7	
	W66	板材（有孔板）	A－2	包含層B	ヒノキ	19.1	8.5	2.2	
	W67	板材	A－2・4	包含層B	スギ	16.9	11.7	1.8	
	W68	板材（有孔板）	A－2	包含層B	ヒノキ	30.1	9.9	1.7	
	W69	階段	A－2	包含層B	クリ	27.8	12.8	7.6	
	W70	板材	A	包含層	スギ	33.3	11.6	2.7	
	W71	丸太材	A－2・4	包含層B	ヒノキ	29.0	5.5	4.8	
	W72	角材	A－4	包含層B	ヒノキ	76.0	5.6	4.9	

第15表　掲載金属器

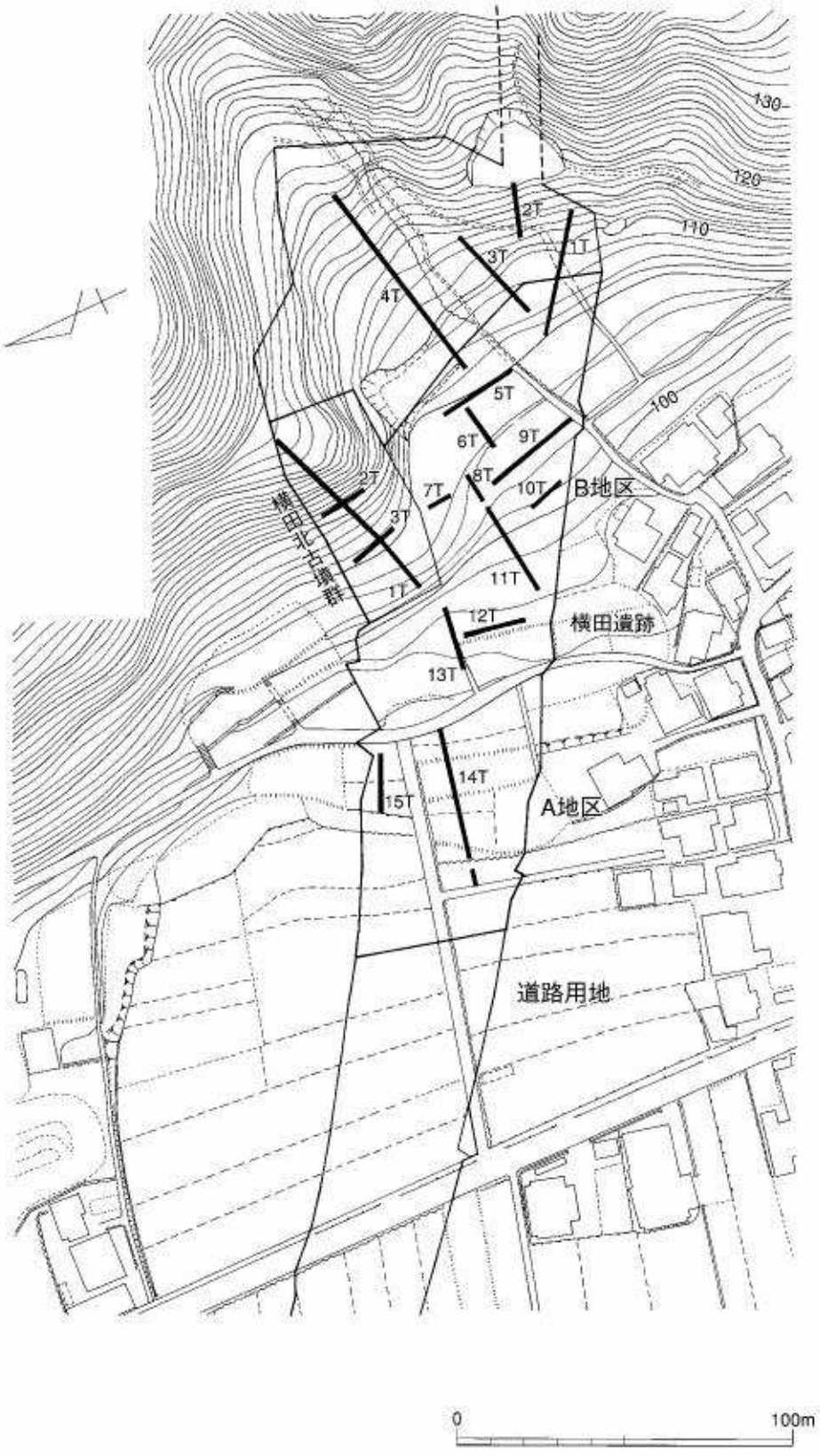
図版	番号	遺　構	材質	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考
83	M 1	SH2002あぜ	鉄	不明	3.5		0.4	上下端破断
83	M 2	木棺墓	鉄	火打ち金	7.7	2.7	0.8	1孔あり
83	M 3	木棺墓	鉄	刀	31.6	4.0	1.3	表面に木質（鞘）残存
83	M 4	北側流路	鉄	不明	3.4	3.2	1.7	
83	M 5	湿地部包含層	鉄	鎹？	7.0	3.0	0.4	両端破断
83	M 6	湿地部包含層	鉄	不明	6.5	9.3	0.3	鋳造品・薄状のものか
83	M 7	B－5区精査面	鉄	釘	8.4	0.5	0.4	
83	M 8	B－5区精査面	鉄	不明	8.0	3.3	0.4	
83	M 9	B－5区精査面	鉄	不明	6.7	7.4	0.4	
83	M10	B－4区精査面	銅	簪？	15.4		0.5	
83	M11	あさねの森	鉄	不明	3.4		0.4	両端破断
83	M12	14トレンチ	鉄	鍋？	8.6	9.9	0.3	鍋の取っ手部分か
88	M13	3号墳石棺内	鉄	刀子	11.8	1.8	0.4	基部に木質残存
88	M14	3号墳石棺内	鉄	刀子	6.3	1.5	0.3	基部に木質残存
88	M15	西側斜面	鉄	片口鉢	8.3	2.7		
第2図	M16	A－4区包含層	銅	銭	φ2.4			元豊通寶
第2図	M17	B－5区	銅	銭	φ2.3			寛永通宝
第2図	M18	B－5区	銅	銭	φ2.3			寛永通宝
第2図	M19	B－5区	銅	銭	φ2.2			寛永通宝
第2図	M20	あさねの森	銅	銭	φ2.7			寛永通宝（裏面波文）
第2図	M21	B－5区	銅	銭	φ2.4			寛永通宝（裏面文字）

第16表　掲載石器・石製品

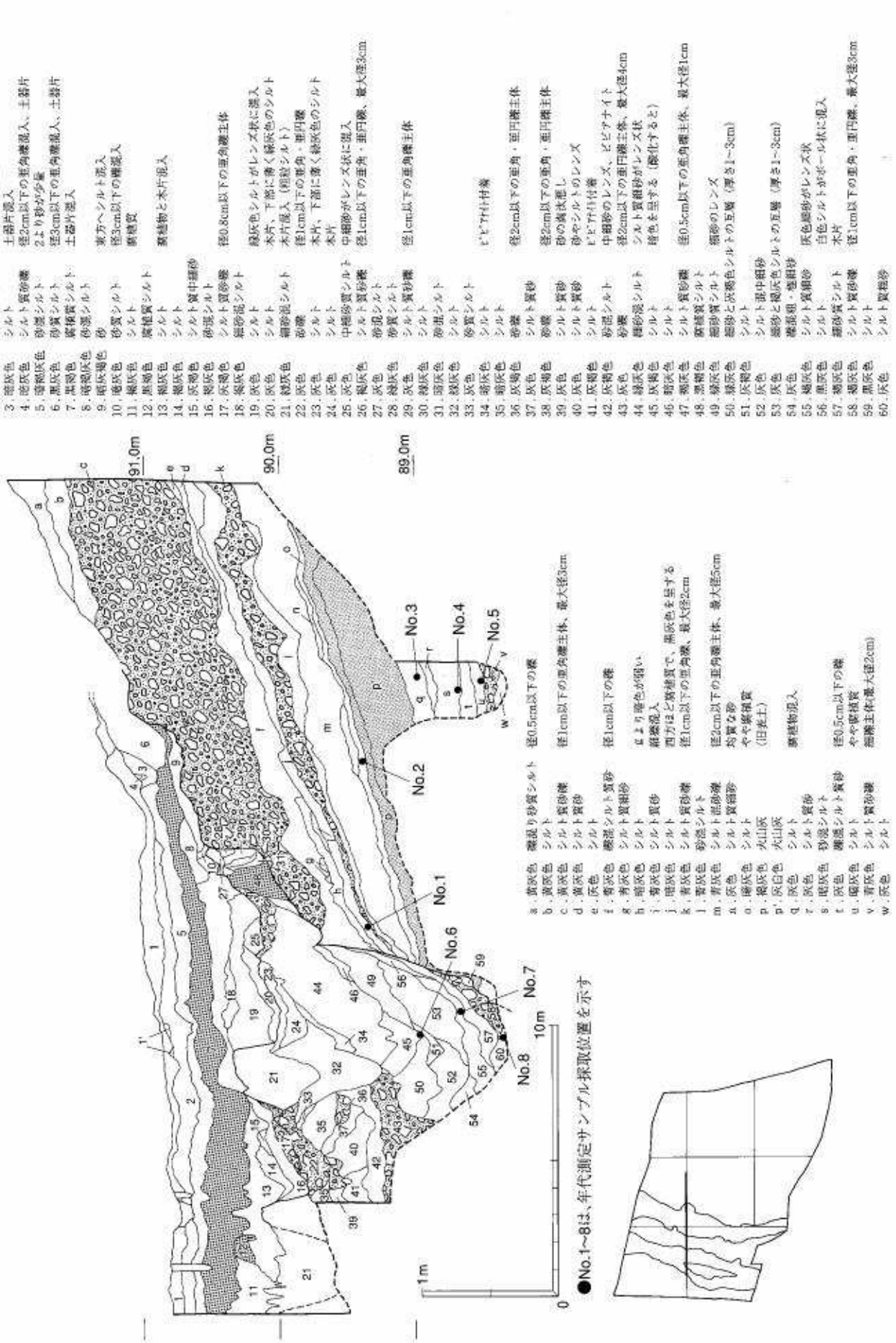
図版	番号	器種	地区	遺構	層位	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
84	S 1	剥片	A	SK1021		チャート	18.5	16.6	2.4	0.7
84	S 2	石核	B 1	SH2001		サヌカイト	35.3	17.6	13.7	4.6
84	S 3	剥片	A 7	SH1001		サヌカイト	29.7	49.4	5.4	5.6
84	S 4	剥片	B 1	SH2001		サヌカイト	52.0	24.0	10.3	9.7
84	S 5	二次加工のある剥片	A 2	SD1009		サヌカイト	43.1	45.0	7.0	12.4
84	S 6	穂摘具	A 2・4	SD1009		粘板岩	44.3	46.7	7.6	16.4
84	S 7	石核	A 2	SD1009		泥岩	66.7	69.0	12.7	40.2
84	S 8	砥石	B 1	SH2002		粘板岩	73.1	43.4	8.6	49.0
84	S 9	微細剥離痕のある剥片	A 3		包含層C（灰色砂礫）	チャート	24.6	30.3	6.9	5.0
84	S10	石核	A 1		包含層B（上部）	チャート	41.4	26.0	11.7	12.2
84	S11	石核	A 4		包含層B	粘板岩？	51.7	29.4	8.6	12.4
85	S12	石斧？	A 4		包含層B（下部）	粘板岩	83.0	43.5	21.0	83.7
85	S13	不明	B 4		精査面	粘板岩	59.8	31.6	6.4	18.2
85	S14	叩石	B 5		包含層（暗褐色砂礫）	砂岩	65.0	52.6	42.3	214.6
85	S15	砥石	A 3		包含層BC	砂岩	71.0	64.0	20.5	180.9
85	S16	剥片	北古墳群		表面採集	チャート	37.0	42.0	8.9	11.6
85	S17	剥片	北古墳群		表面採集	粘板岩	35.3	18.5	4.7	3.5
85	S18	穂摘具	北古墳群		表面採集	粘板岩	47.7	43.4	4.9	12.0
86	S19	太形蛤刃石斧	B 3	SX2005		不明	119.4	65.0	49.6	582.0
86	S20	叩石	B 2	SK2047	上面	不明	93.0	43.0	6.0	424.0
86	S21	穂摘具（未製品）	A 2・4		包含層B	粘板岩	108.5	53.0	17.3	92.0
86	S22	不明	B 5		精査面	粘板岩	146.5	44.0	18.7	158.7
86	S23	砥石	A 4		包含層B	砂岩	196.5	74.5	53.0	777.8
86	S24	砥石	A 4		包含層B	砂岩	262.0	91.0	65.0	1900.0
88	S25	石器紡錘車	北古墳群	3号墳	石棺蓋石上埋土中		φ41.0		16.0	30.8

図　　版

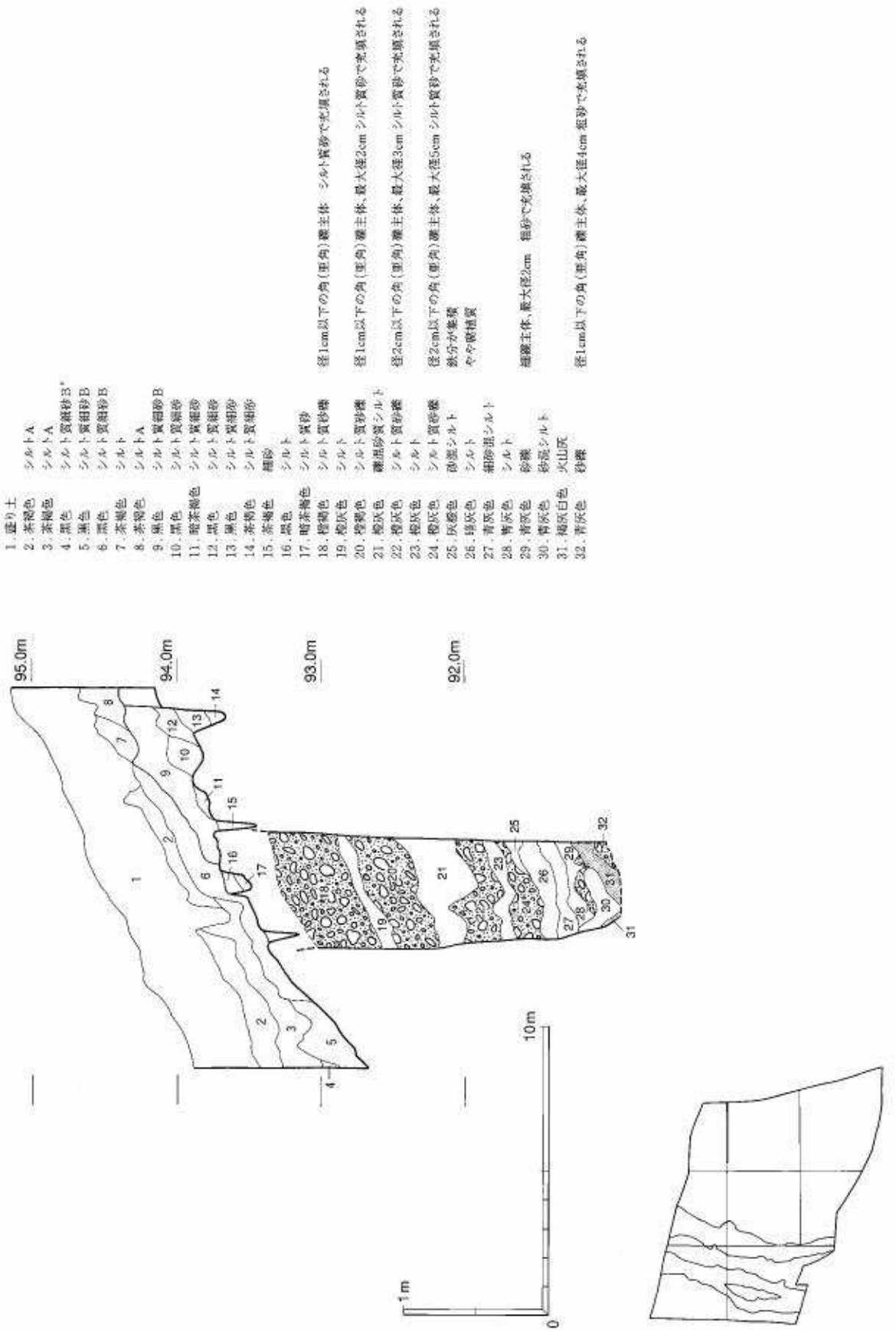
確認調査トレンチ配置図　図版1



図版2　横田遺跡（1）

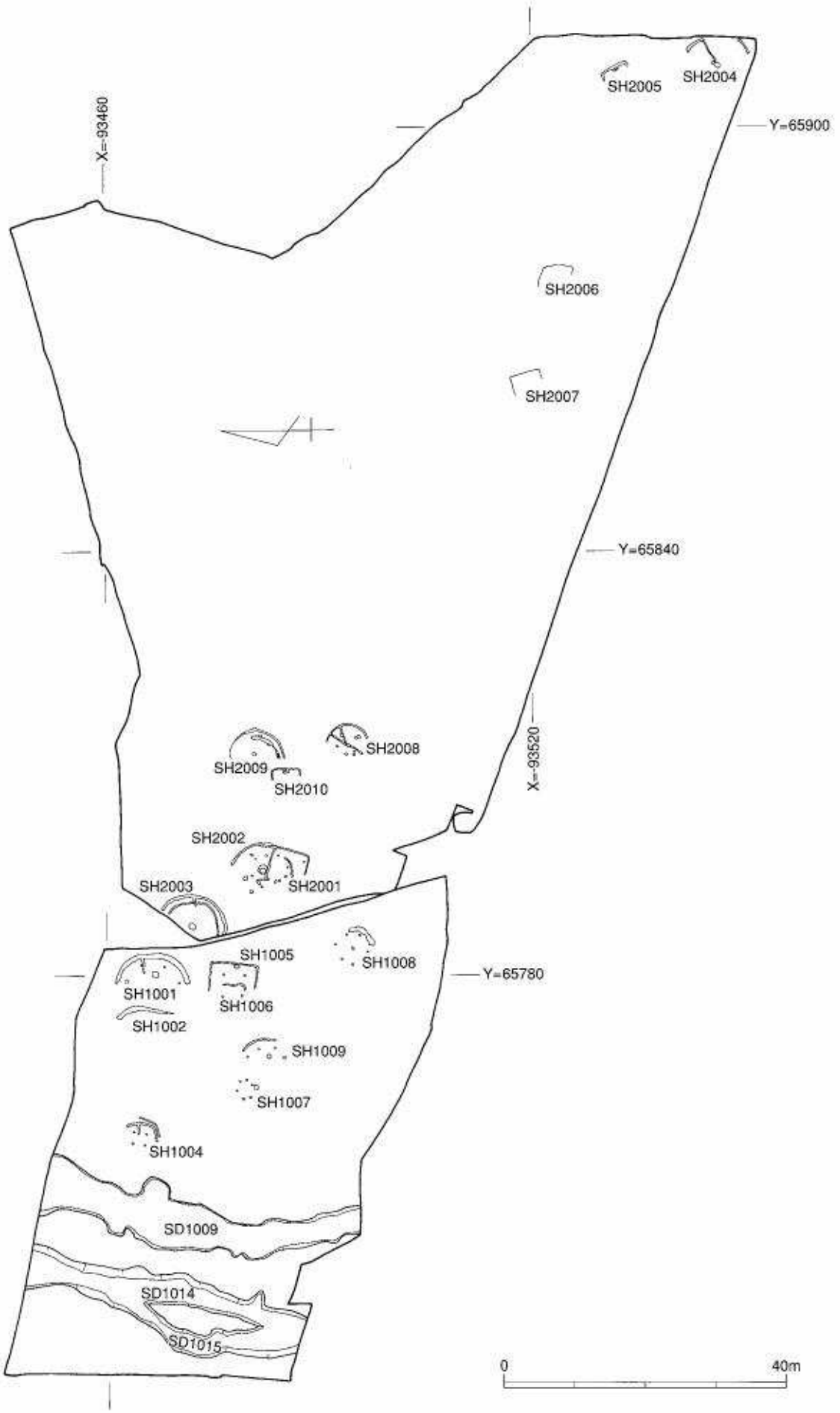


A地区地層断面図

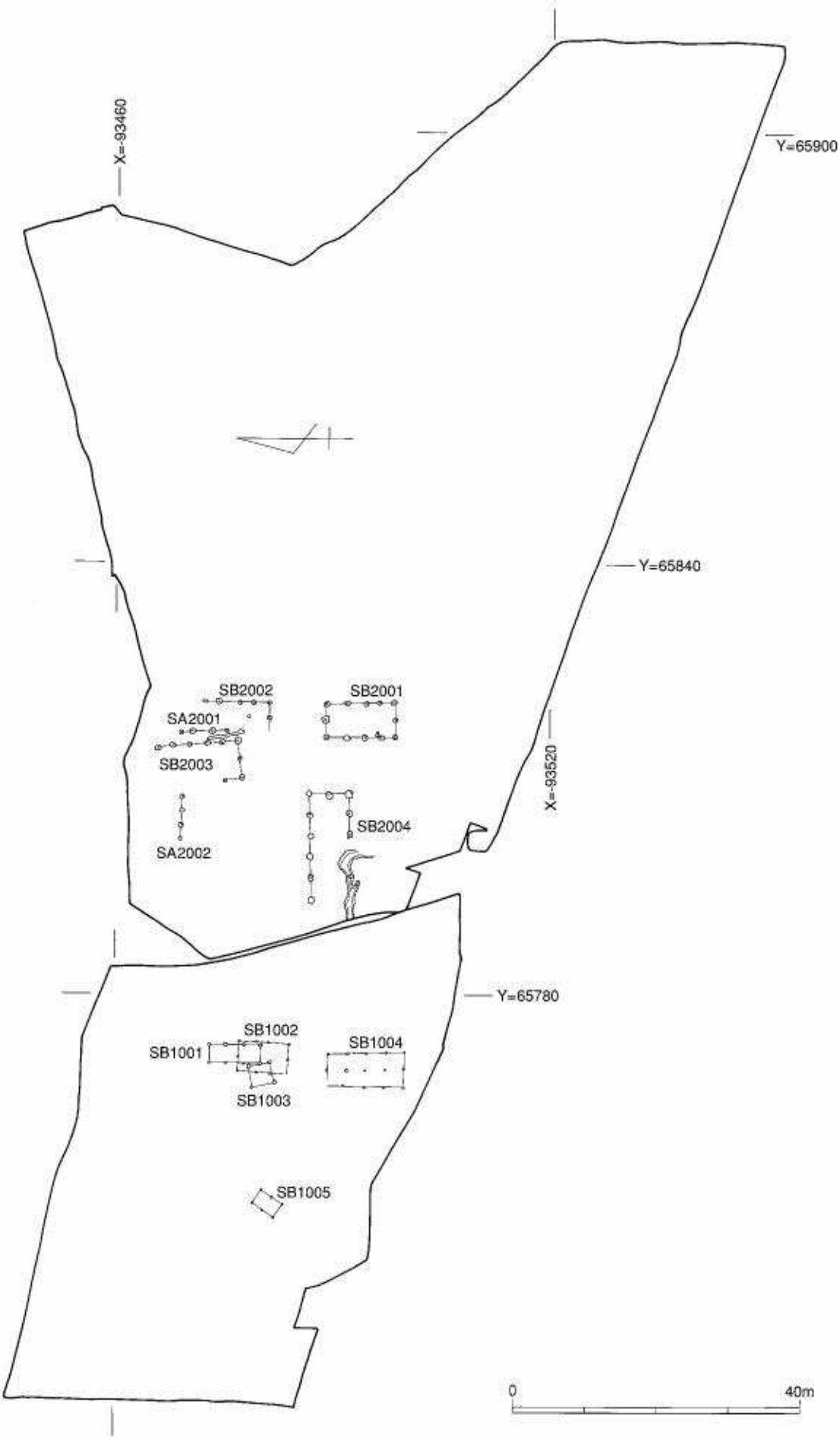

1.盛り土
2.茶褐色 シルトA
3.茶褐色 シルトA
4.黒色 シルト質細砂B'
5.黒色 シルト質細砂B
6.黒色 シルト質細砂B
7.茶褐色 シルト
8.茶褐色 シルトA
9.黒色 シルト質細砂B
10.黒色 シルト質細砂
11.暗茶褐色 シルト質細砂
12.黒色 シルト質細砂
13.黒色 シルト質細砂
14.茶褐色 シルト質細砂
15.茶褐色 細砂
16.黒色 シルト
17.暗茶褐色 シルト質砂
18.橙褐色 シルト質砂礫
19.橙灰色 シルト
20.橙褐色 シルト質砂礫
21.橙灰色 礫混砂質シルト
22.橙灰色 シルト質砂礫
23.橙灰色 シルト
24.橙灰色 シルト質砂礫
25.灰褐色 砂混シルト
26.暗灰色 シルト
27.青灰色 細砂混シルト
28.青灰色 シルト
29.青灰色 砂礫
30.青灰色 砂混シルト
31.褐灰白色 火山灰
32.青灰色 砂礫
径1cm以下の角(亜角)礫主体 シルト質砂で充填される
径1cm以下の角(亜角)礫主体、最大径2cm シルト質砂で充填される
径2cm以下の角(亜角)礫主体、最大径3cm シルト質砂で充填される
径2cm以下の角(亜角)礫主体、最大径5cm シルト質砂で充填される
鉄分が集積
やや炭化質
礫層主体、最大径2cm 粗砂で充填される
径1cm以下の角(亜角)礫主体、最大径4cm 粗砂で充填される
95.0m
94.0m
93.0m
92.0m
1m
10m
0

B地区地層断面図

図版 4　横田遺跡（3）

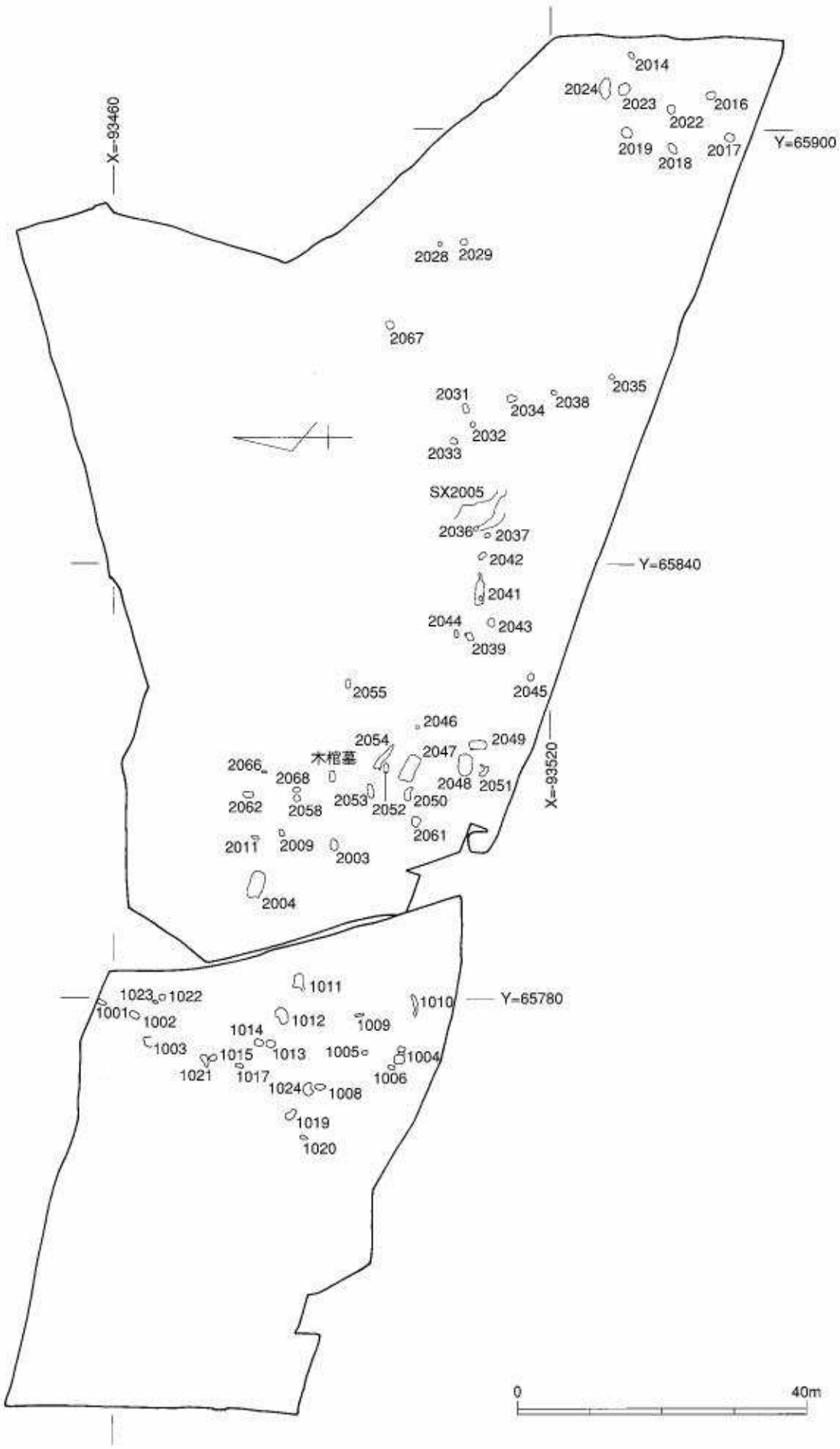


竪穴住居跡配置図

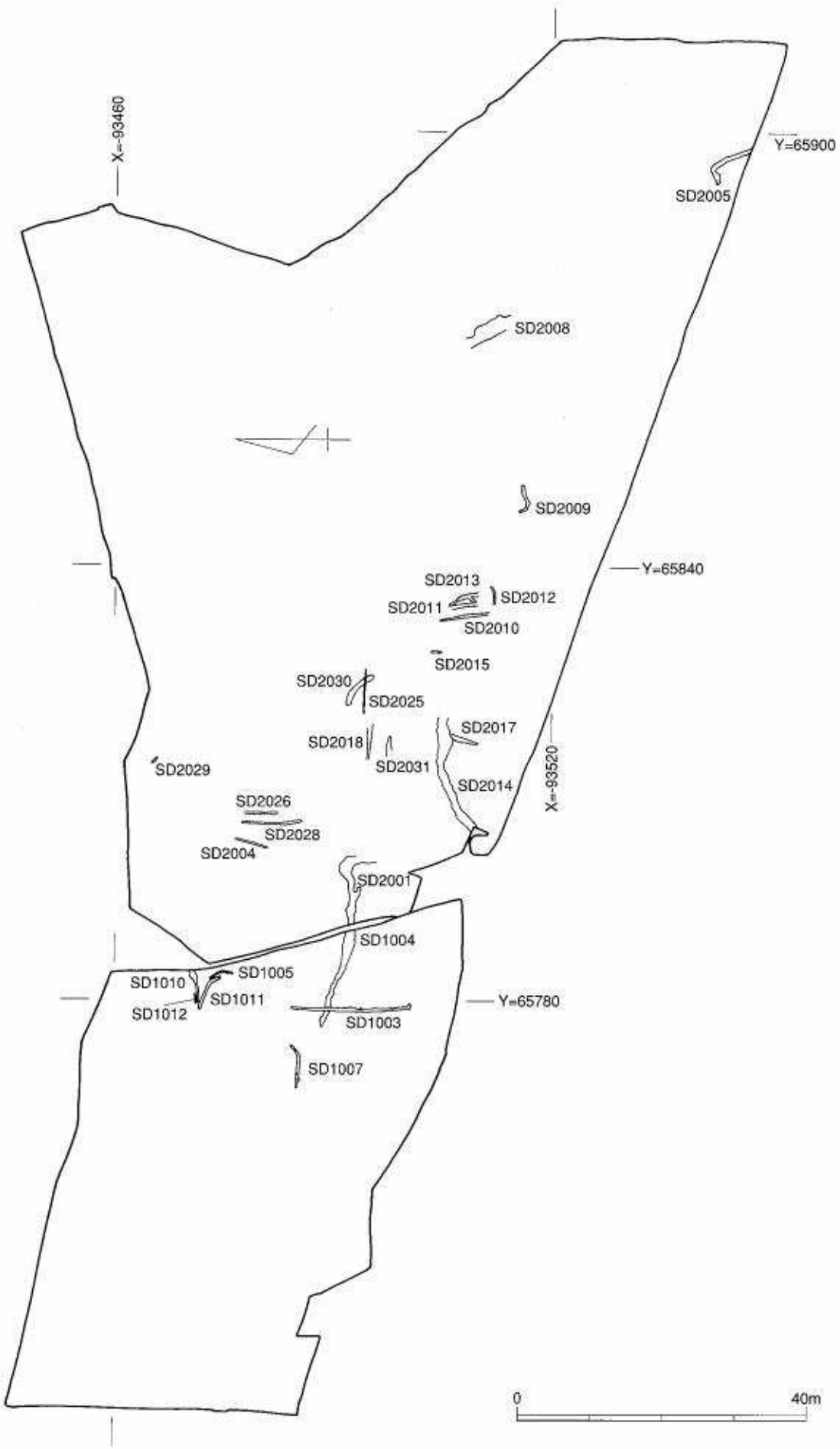

X=-93460
Y=65900
Y=65840
X=-93520
Y=65780
SB2002
SB2001
SA2001
SB2003
SA2002
SB2004
SB1002
SB1001
SB1004
SB1003
SB1005
0
40m

掘立柱建物跡位置図

図版 6　横田遺跡（5）

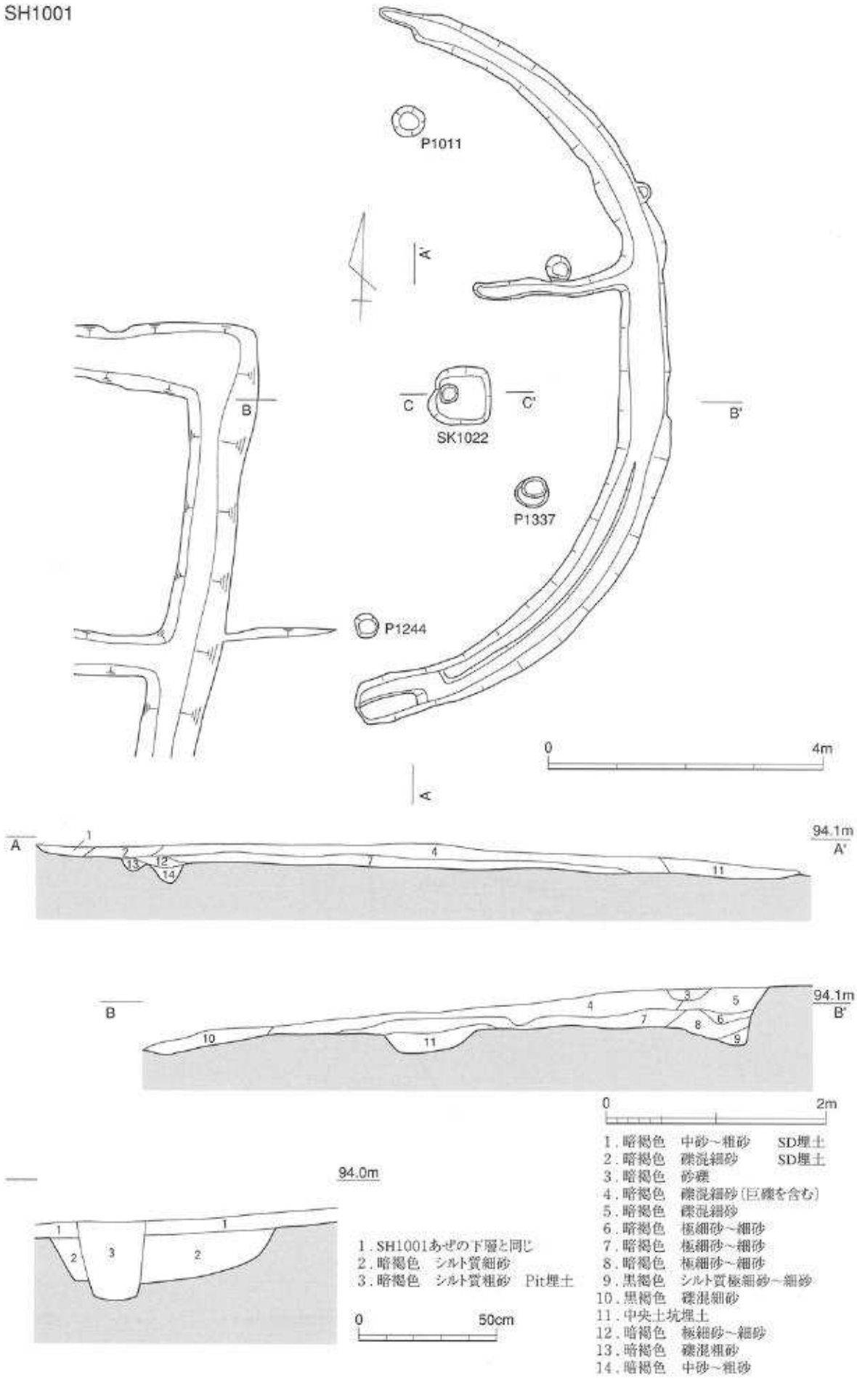


土坑位置図


X=-93460
Y=65900
SD2005
SD2008
SD2009
Y=65840
SD2013
SD2012
SD2011
SD2010
SD2015
SD2030
SD2025
SD2017
SD2018
SD2031
SD2029
SD2014
X=-93520
SD2026
SD2028
SD2004
SD2001
SD1004
SD1010
SD1005
SD1011
SD1012
SD1003
Y=65780
SD1007
0
40m

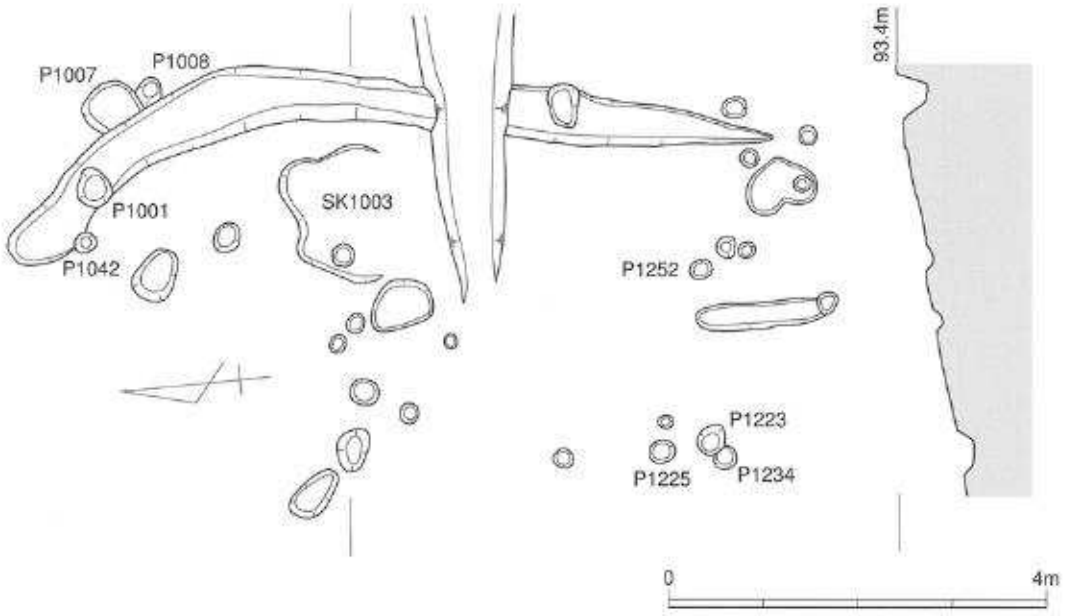
溝位置図

図版８　横田遺跡（７）

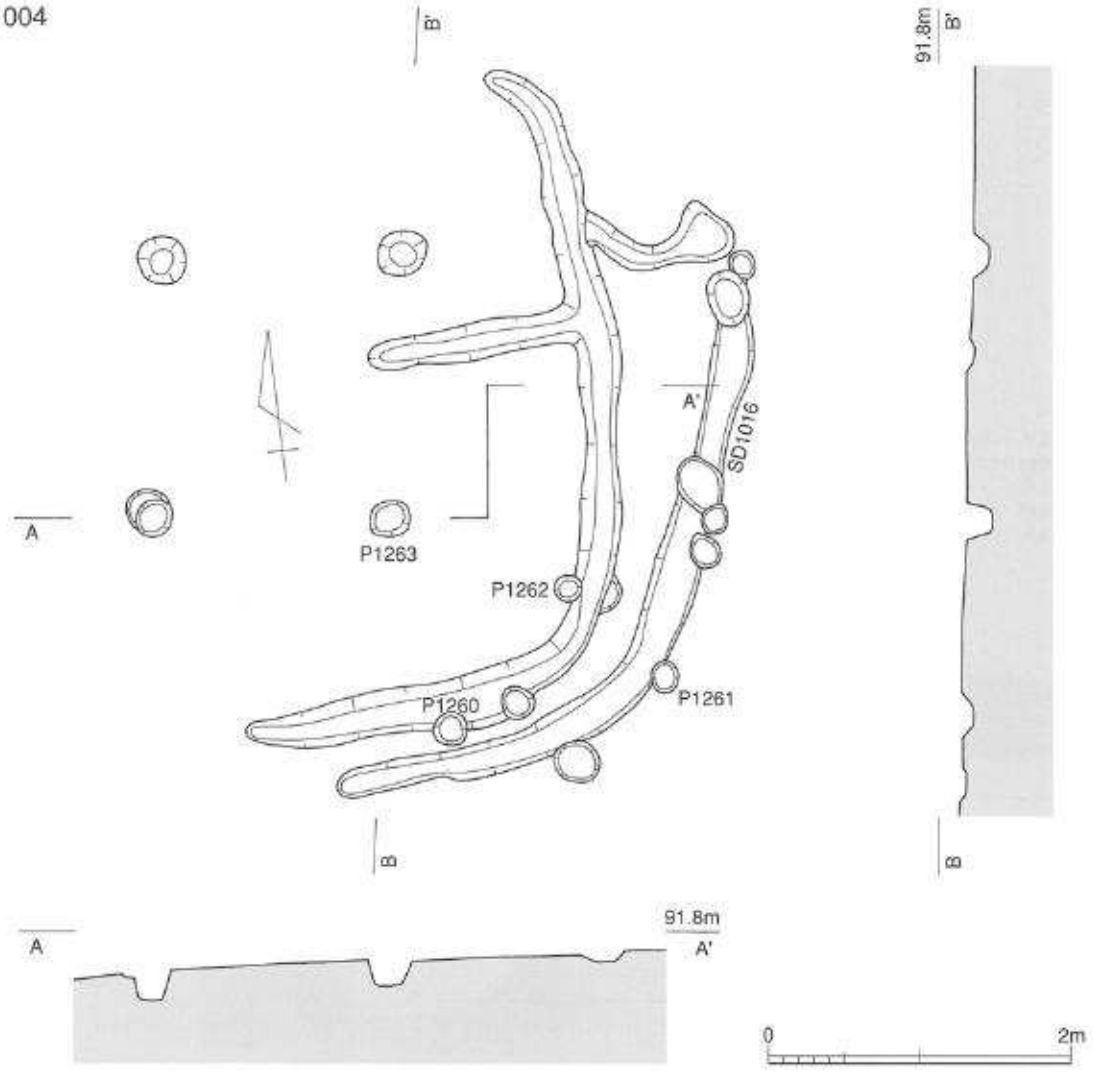


竪穴住居跡（１）

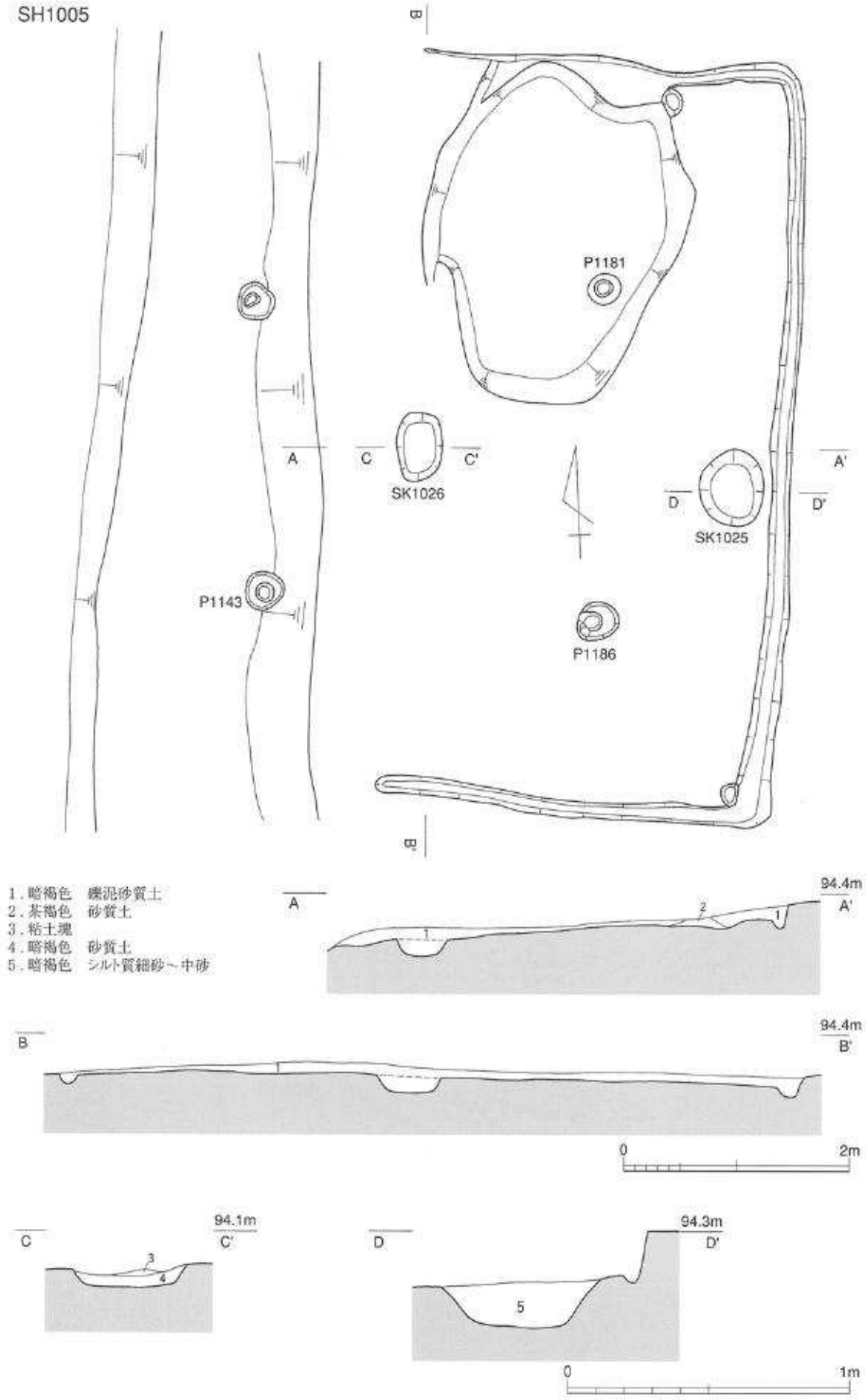
SH1002



SH1004

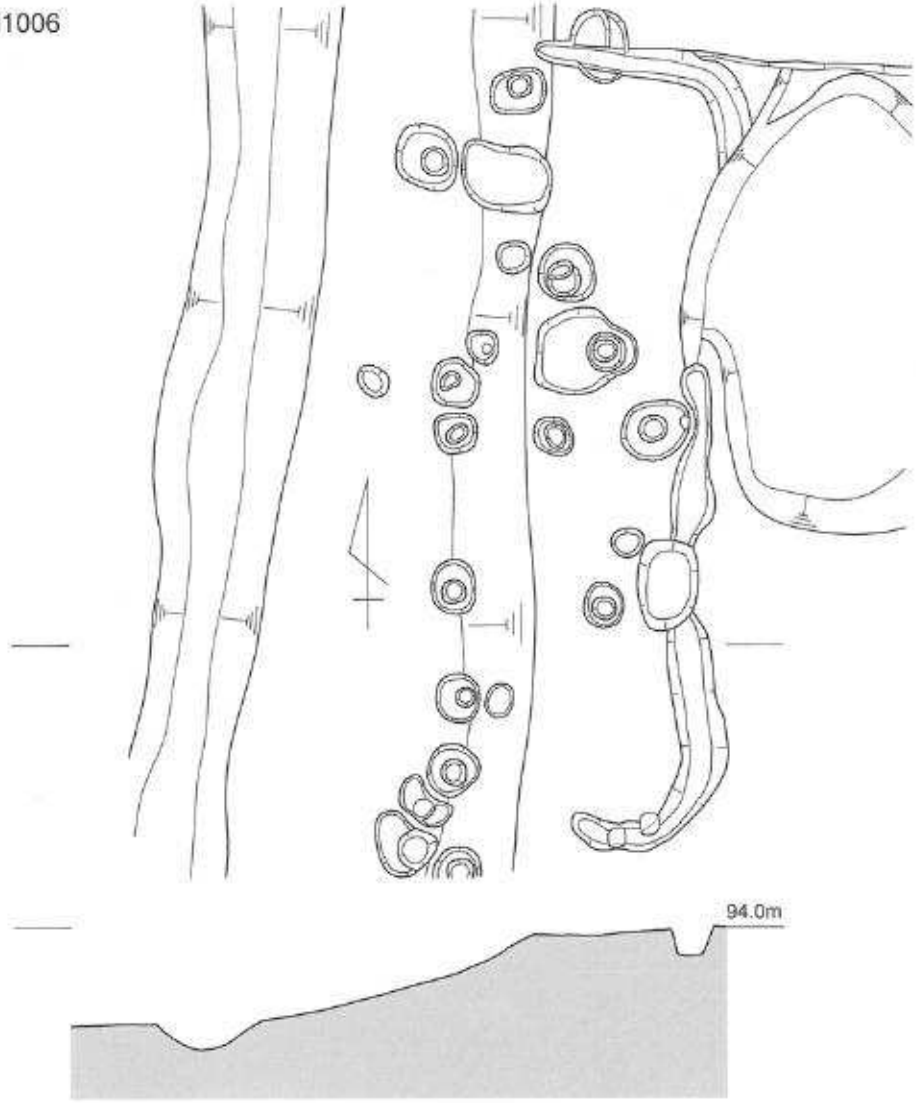


図版10　横田遺跡（9）

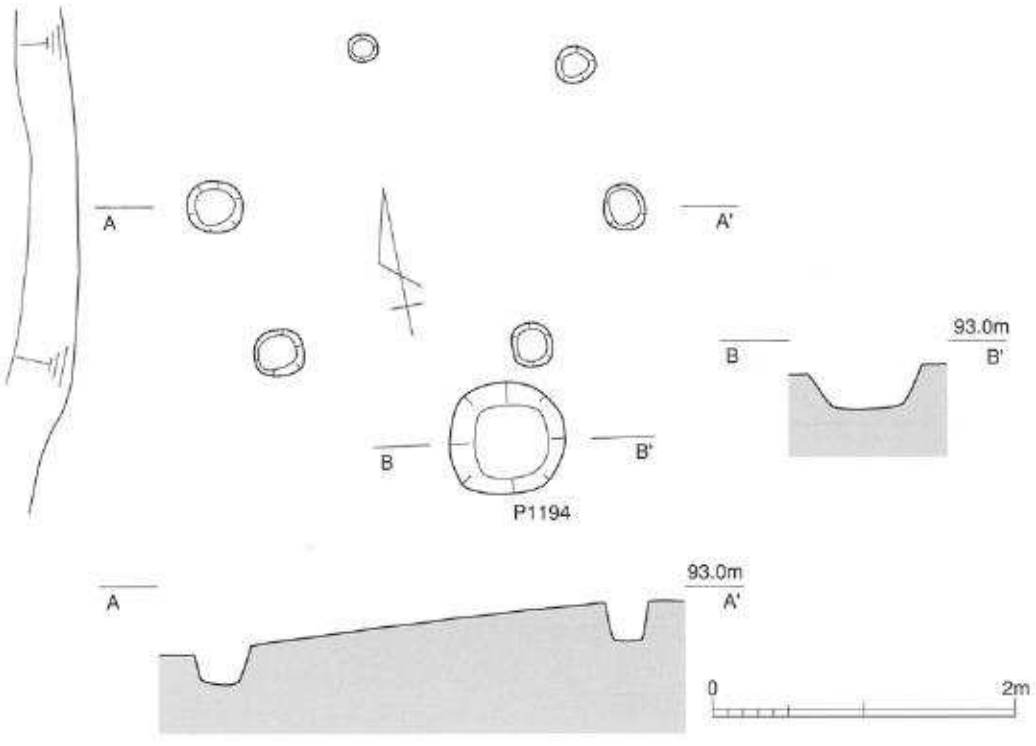


竪穴住居跡（3）

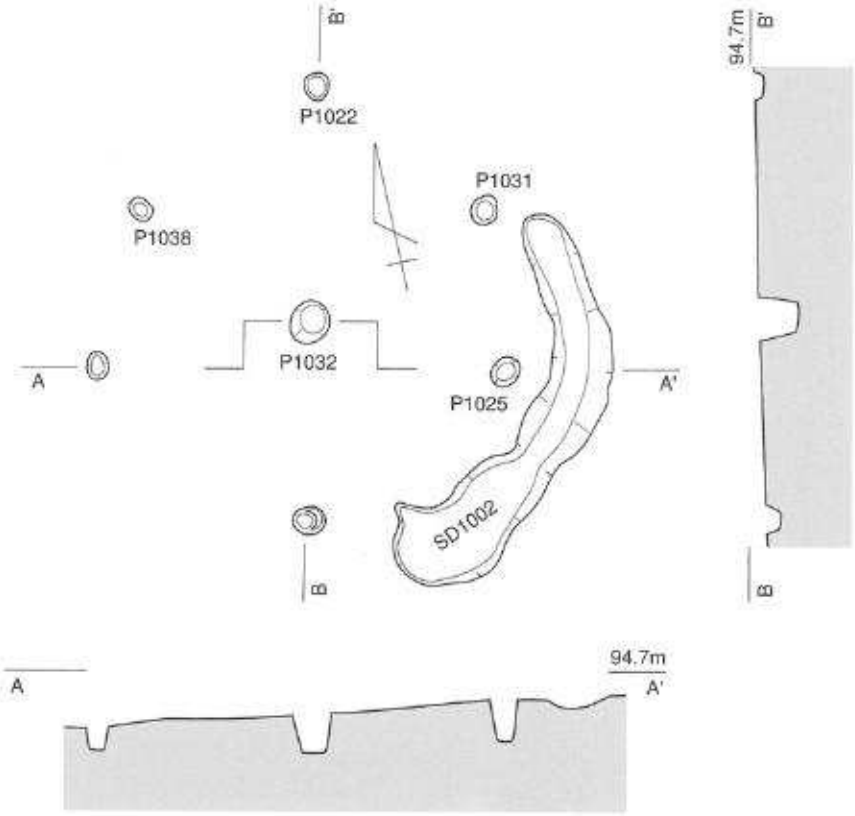
SH1006



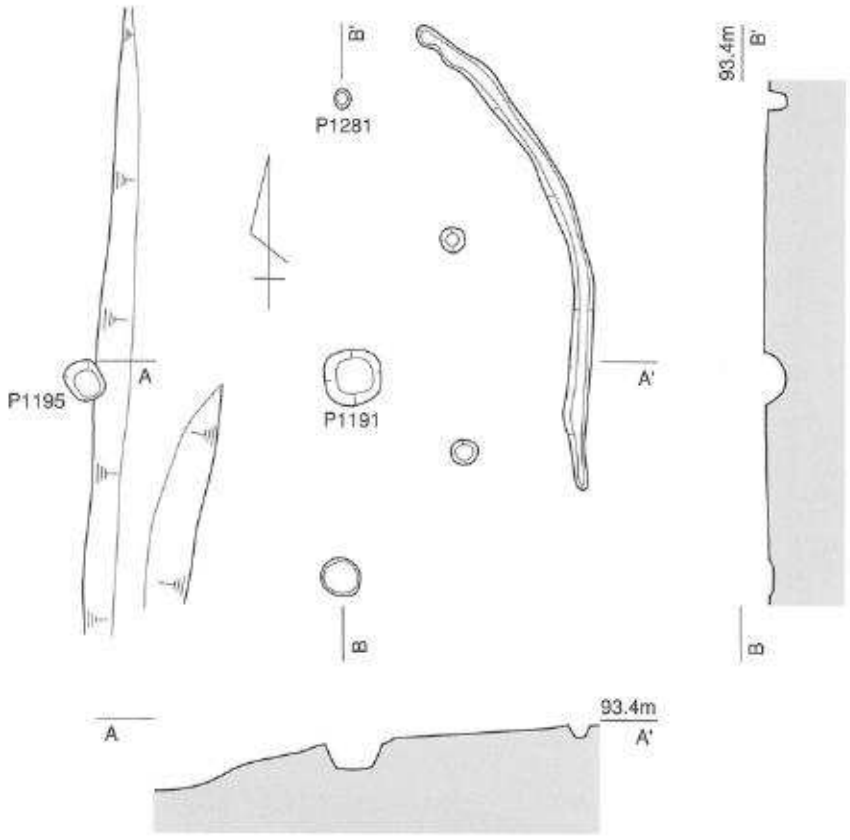
SH1007

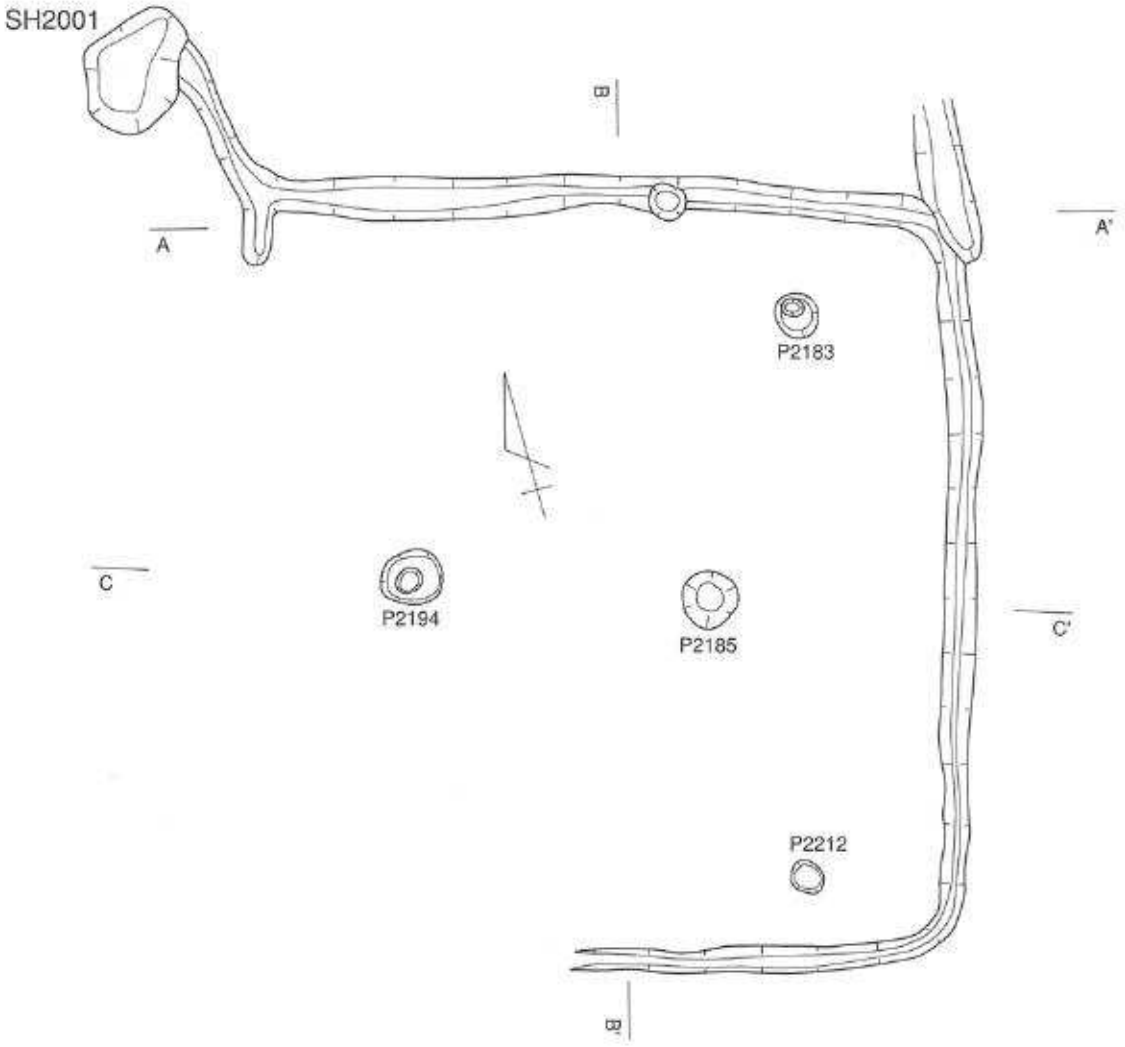


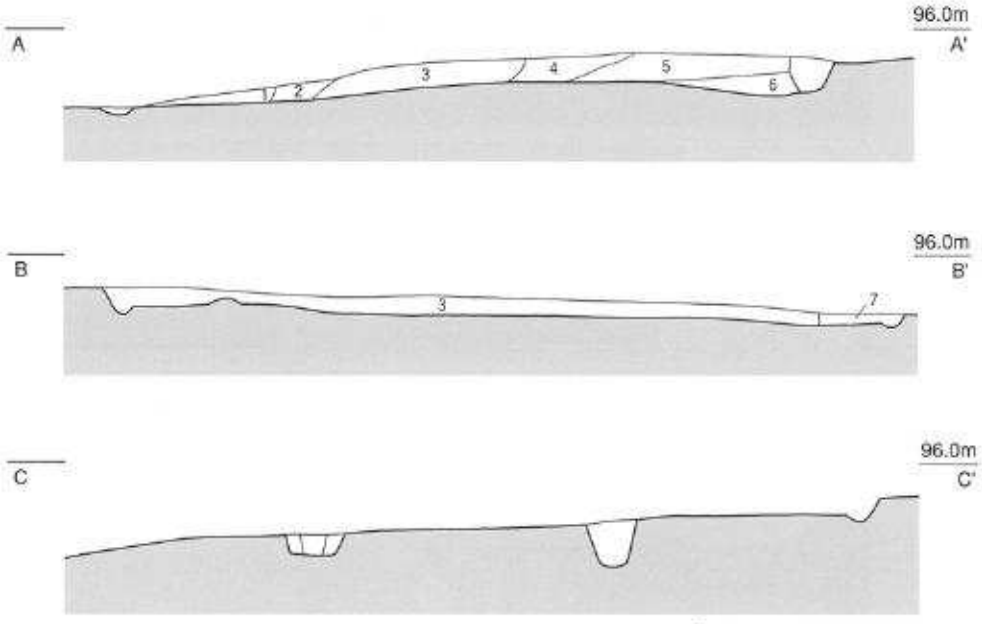
SH1008



SH1009







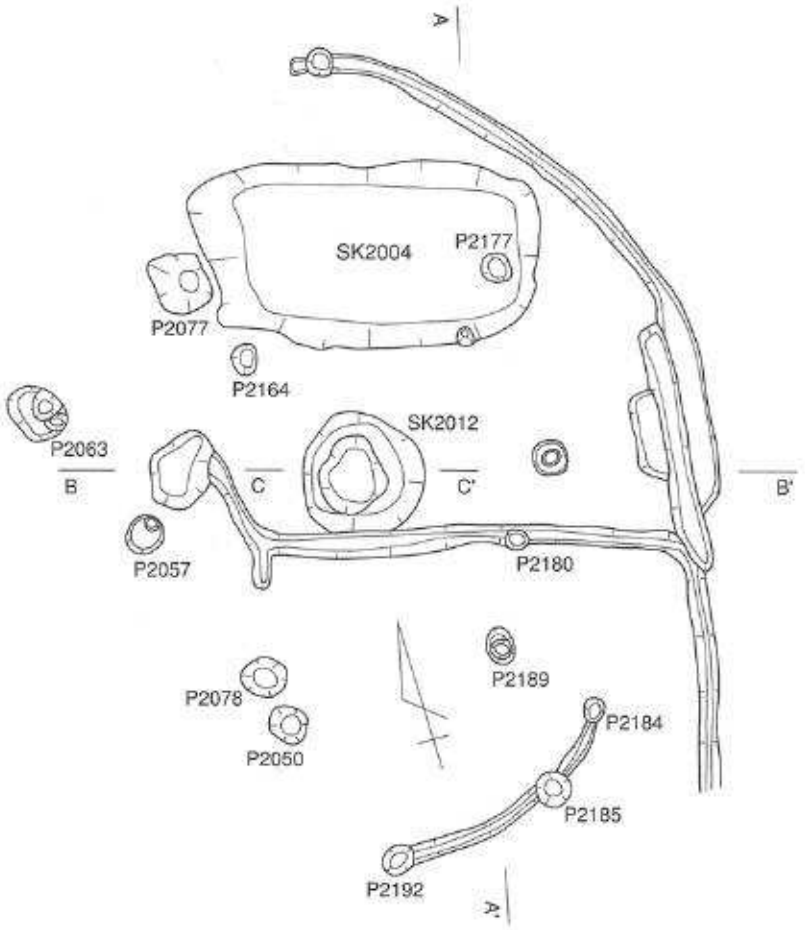
1. 10YR4/4	褐色	極細砂	土器片を多く含む
2. 10YR4/2	灰黄褐色	極砂混極細砂	径5mm程度の黄褐色粘土ブロック多く含む
3. 10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	径5mm程度の黄褐色粘土ブロック含む
4. 7.5YR4/3	褐色	極細砂	径5mm程度の黄褐色粘土ブロック多く含む
5. 7.5YR3/2	黒褐色	極細砂	径5mm程度の赤褐色粘土ブロック少量含む
6. 10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	径5mm程度の黄褐色粘土ブロック多く含む
7. 10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	径5mm程度の黄褐色～赤褐色粘土ブロック多く含む

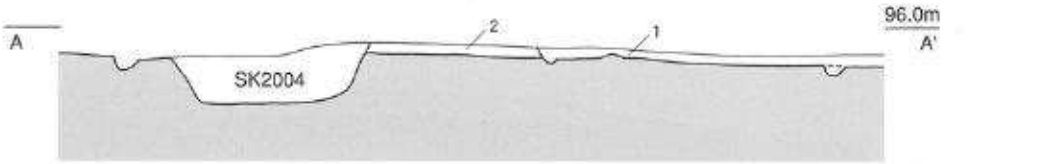
0 2m

竪穴住居跡（6）

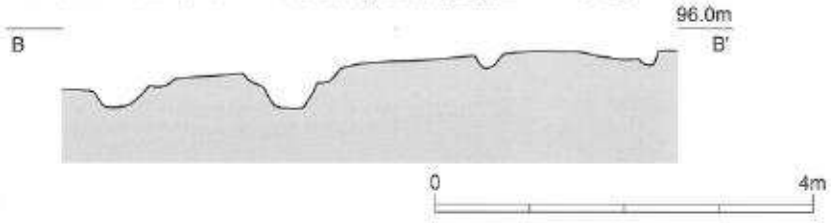
図版14　横田遺跡（13）

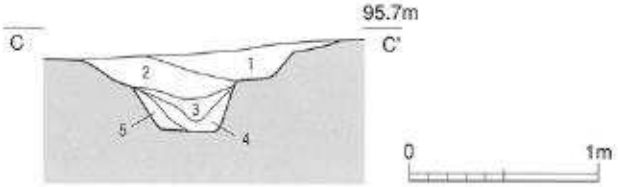
SH2002





1.10YR4/2　灰黄褐色　極細砂　径5mm程度の黄褐色～赤褐色粘土ブロック多く含む
2.10YR3/1　黒褐色　極細砂　径5mm程度の黄褐色～赤褐色粘土ブロック多く含む

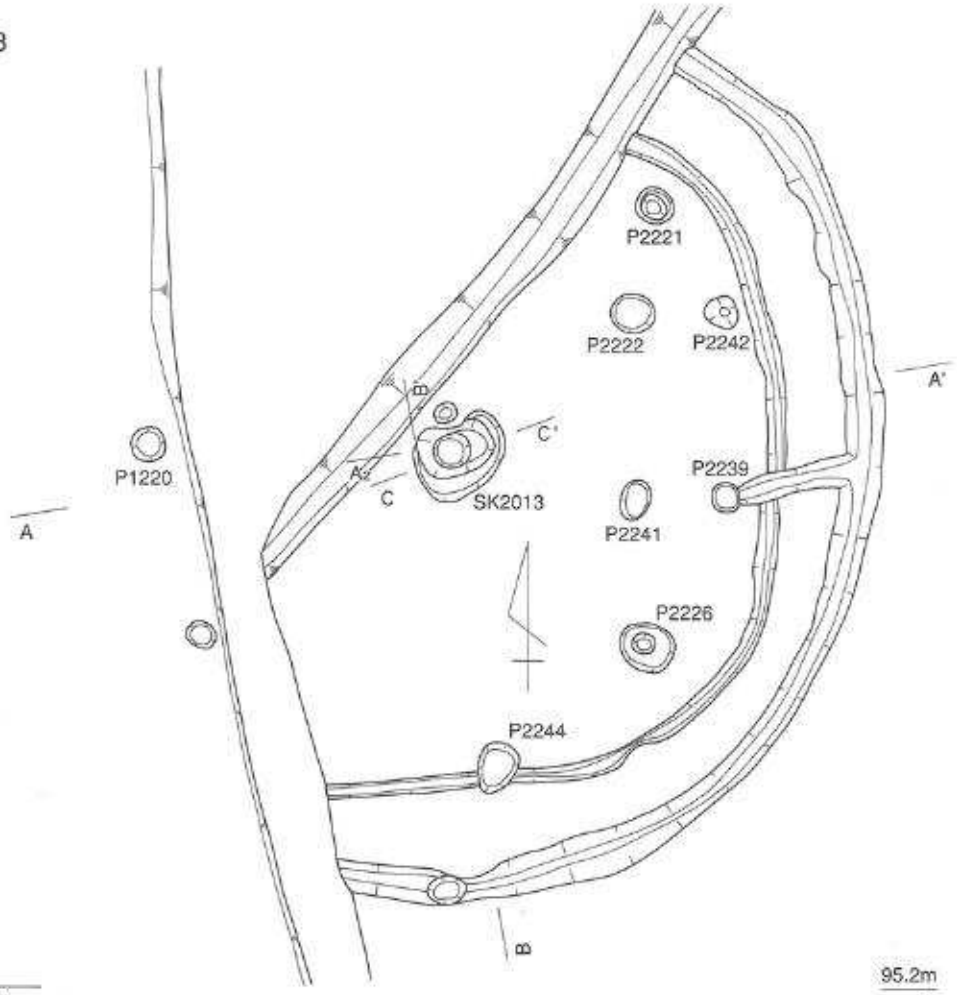


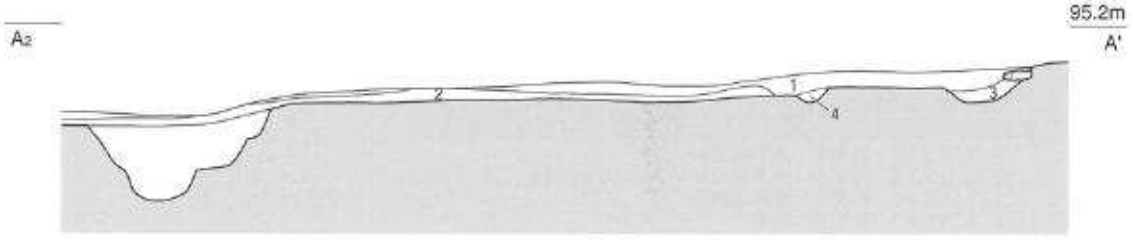


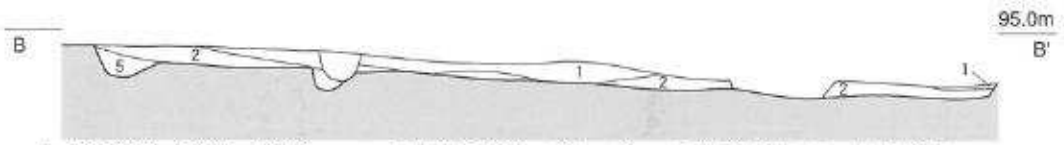
1.10YR3/3	暗褐色	極細砂	径5～10mm程度の黄褐色粘土ブロック多く含む
2.10YR2/2	黒褐色	極細砂	土器片を含む。径5～10mm程度の黄褐色粘土ブロック含む
3.10YR3/4	暗褐色	極細砂	径1cm程度の黄褐色粘土ブロック多く含む
4.10YR2/3	黒褐色	細砂混極細砂	径5～10mm程度の黄褐色～赤褐色粘土ブロック含む
5.10YR7/8～10YR3/2	黄橙色～黒褐色	細砂混極細砂	径10～15mm程度の黄褐色粘土ブロック少量含む

竪穴住居跡（7）

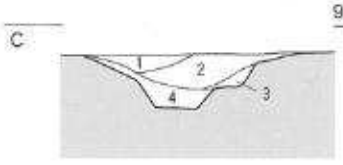
SH2003





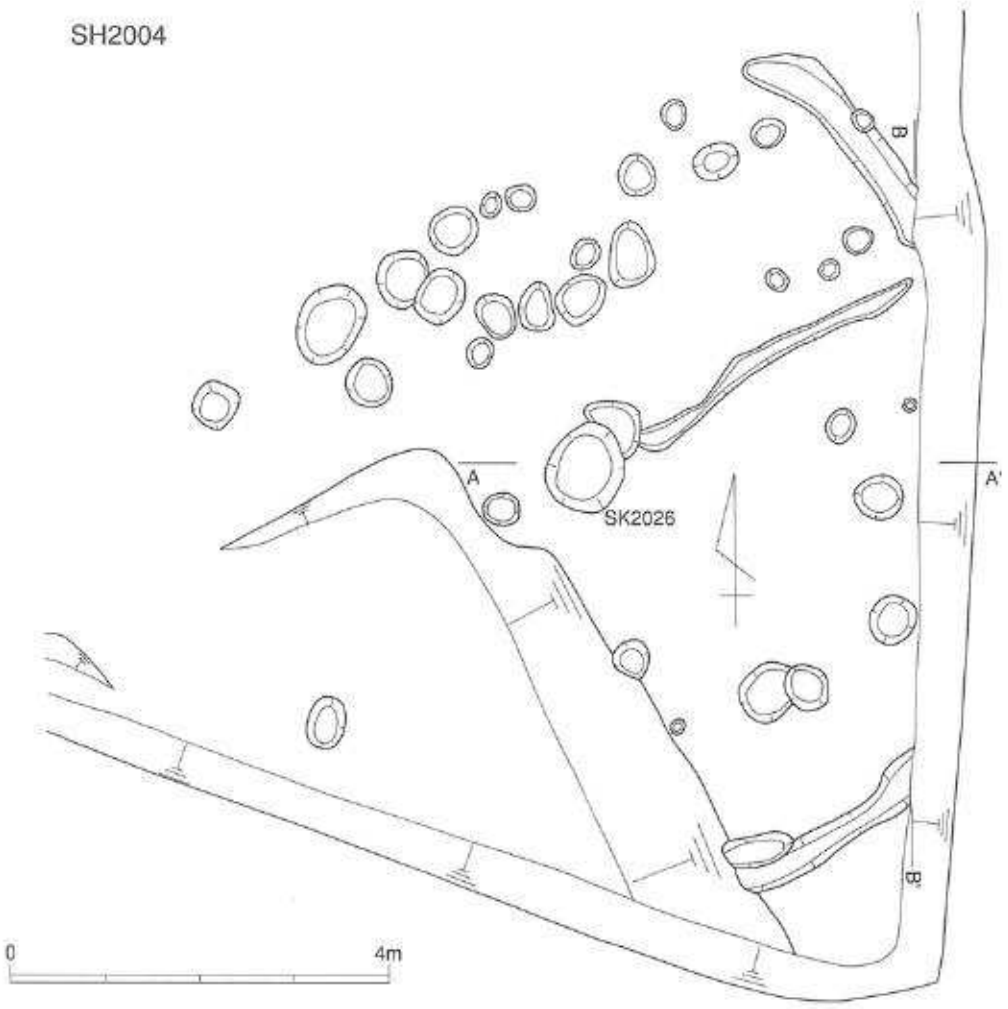


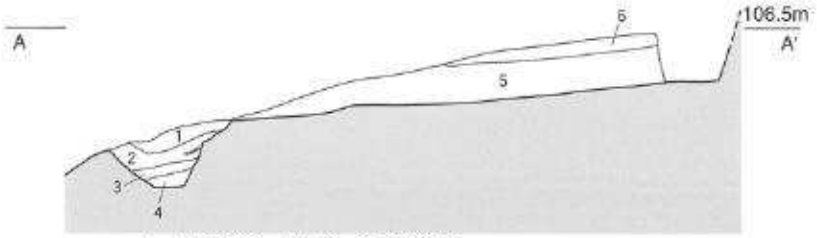
1．10YR3/3　暗褐色　極細砂　土器片多く含む　径1～2ｃｍの黄褐色粘土ブロック多く含む
2．10YR4/4　褐色　粗砂混極細砂　径5ｃｍ程度の礫多く含む
3．10YR2/3　黒褐色　極細砂　径1～2ｃｍの黄褐色粘土ブロック少量含む
4．10YR2/3　黒褐色　極細砂　径1～2ｃｍの黄褐色粘土ブロック少量含む　径1~2cmの礫わずかに含む
5．2.5Y3/1　黒褐色　粗砂混極細砂　径5～10ｍｍの黄褐色粘土ブロックわずかに含む



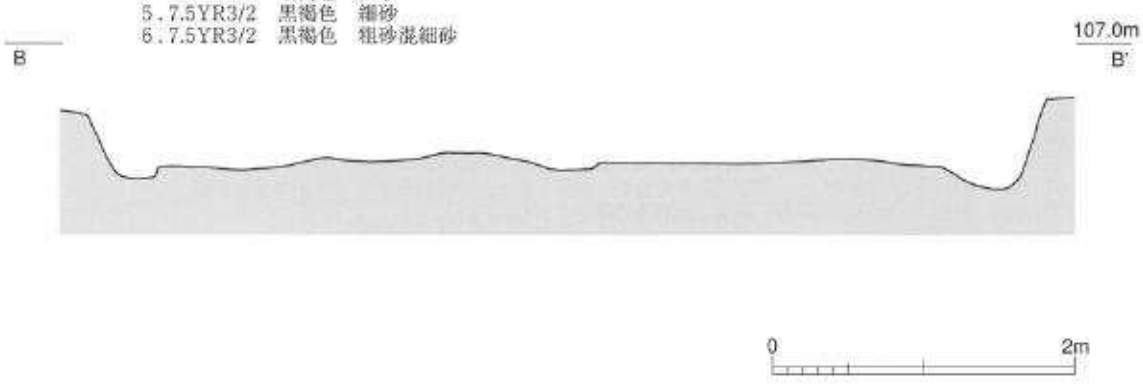
1．7.5YR4/3　褐色　細砂混極細砂　径0.5~1cm程度の黄褐色粘土ブロック少量含む
2．10YR3/2　黒褐色　細砂混極細砂　径1~2cmの黄褐色粘土ブロックわずかに含む
3．7.5YR4/4　褐色　粗砂混極細砂　径0.5cm程度の黄褐色~赤褐色粘土ブロックわずかに含む
4．7.5YR3/1　黒褐色　細砂混極細砂　径1cm程度の黄褐色粘土ブロックわずかに含む

竪穴住居跡（8）



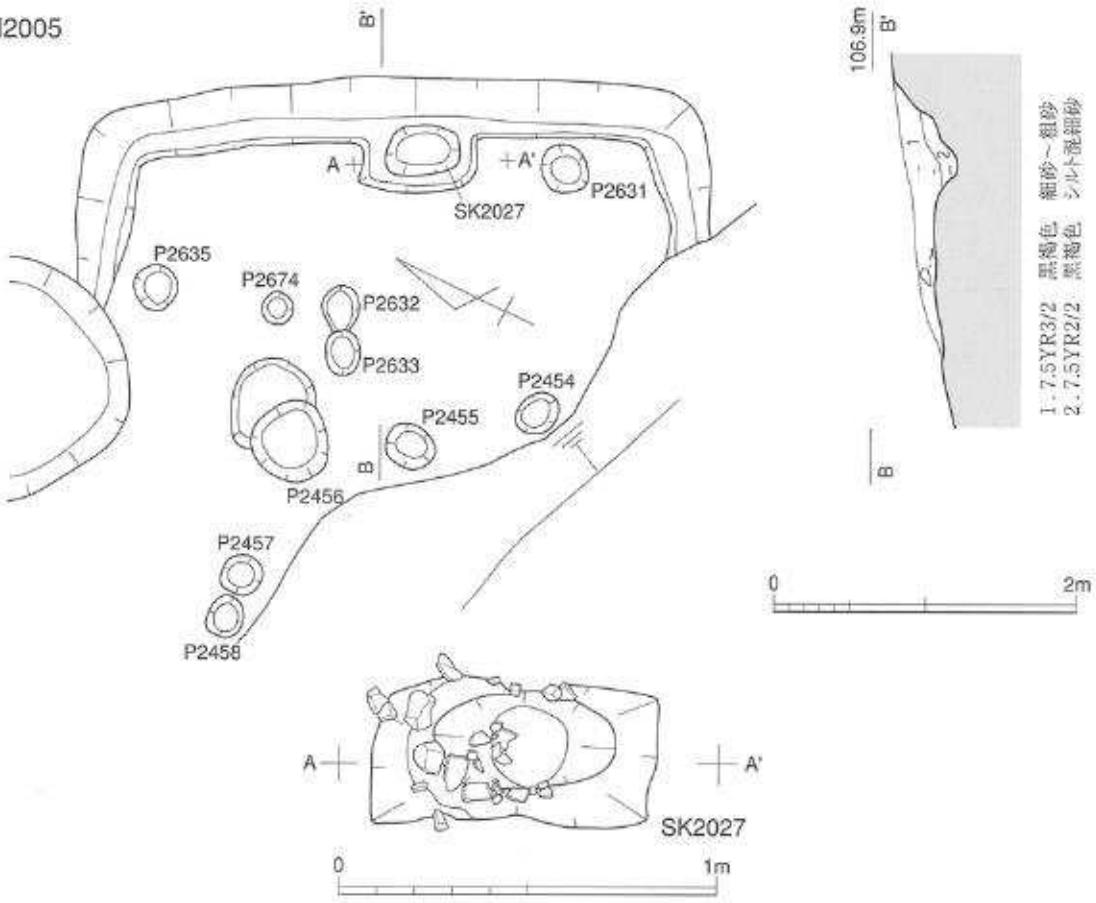


1．7.5YR3/2　黒褐色　粗砂混細砂
2．7.5YR3/2　黒褐色　粗砂混細砂（5YR3/2暗黄褐色粘土ブロック含む）
3．7.5YR2/2　黒褐色　粗砂混細砂
4．7.5YR3/3　暗褐色　細砂
5．7.5YR3/2　黒褐色　細砂
6．7.5YR3/2　黒褐色　粗砂混細砂

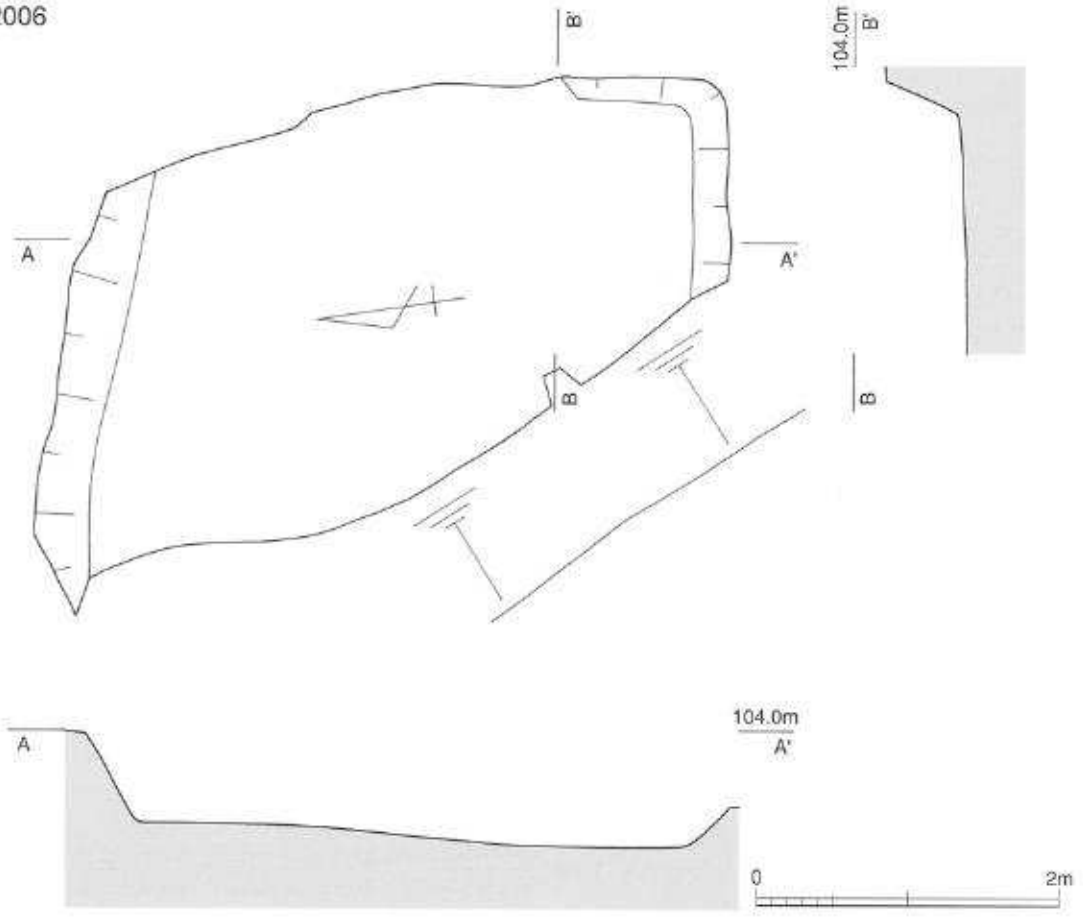


竪穴住居跡（9）

SH2005

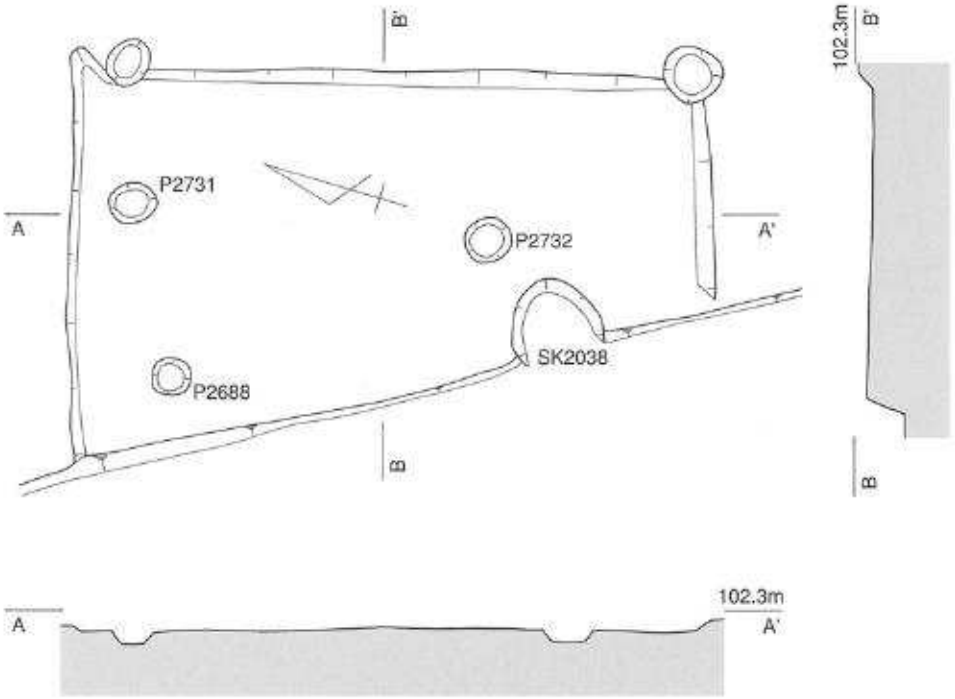


SH2006

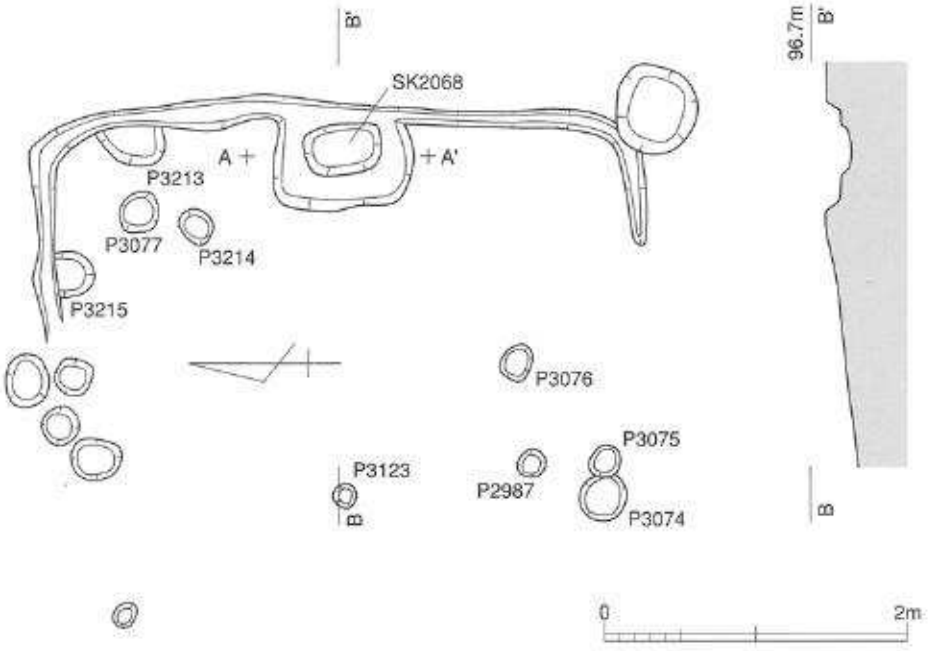


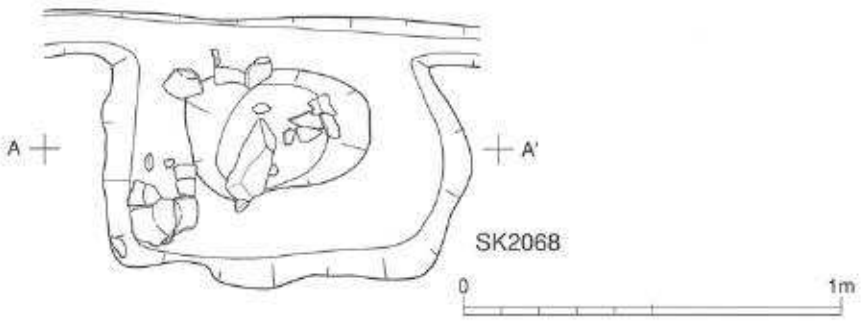
図版18　横田遺跡（17）

SH2007

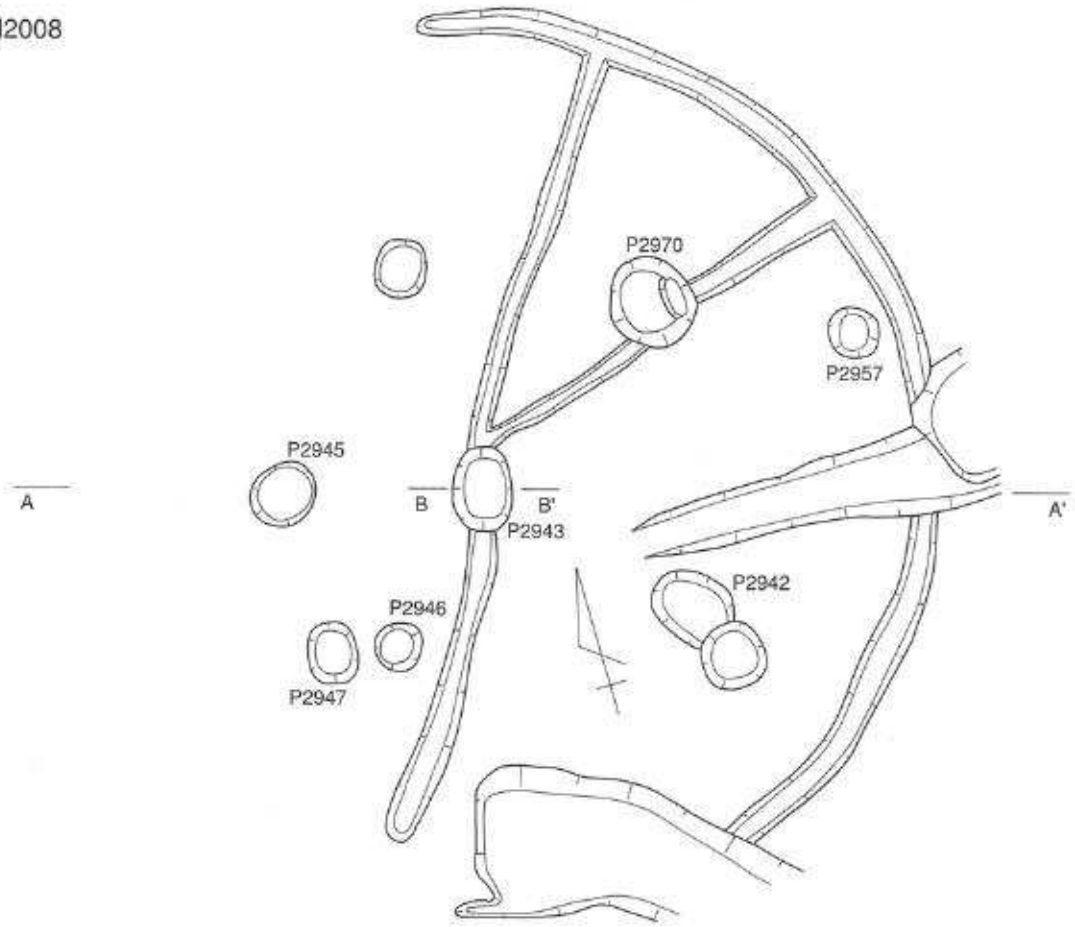


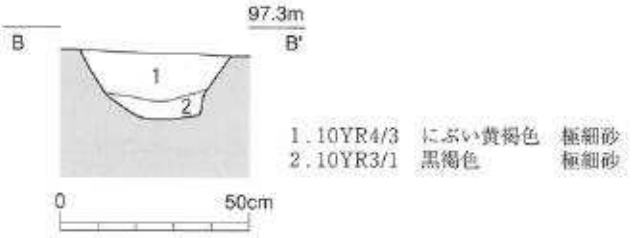
SH2010





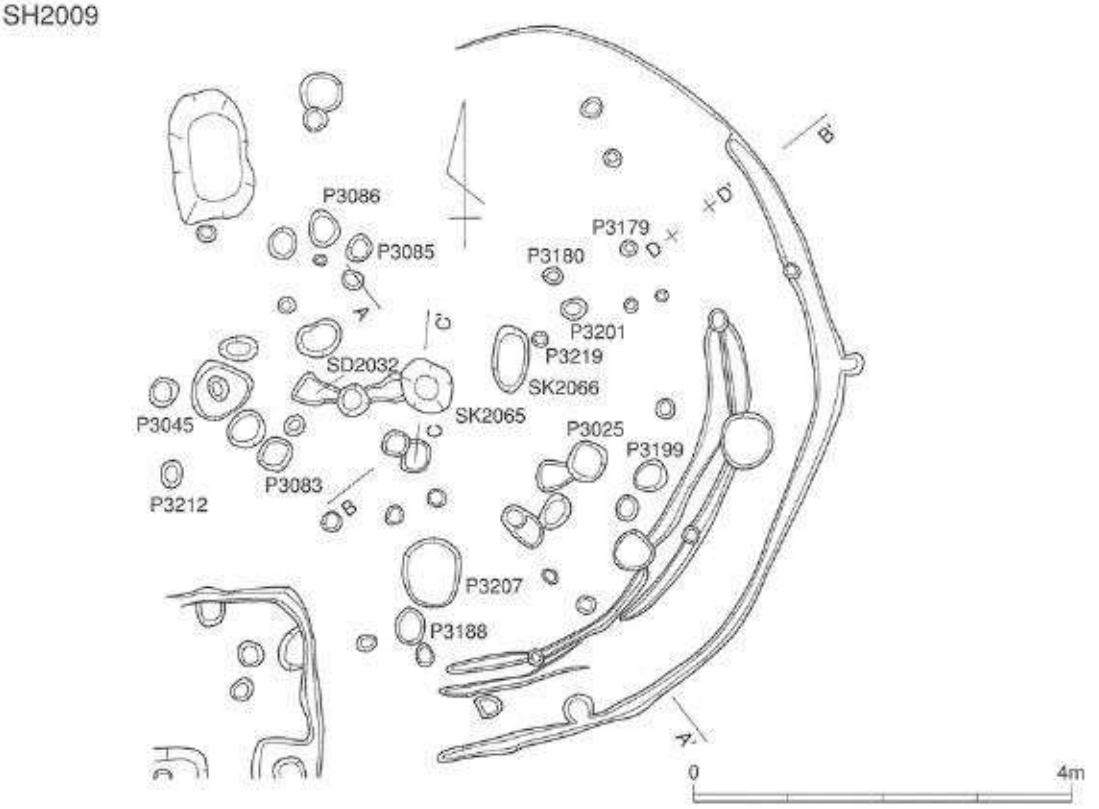
SH2008

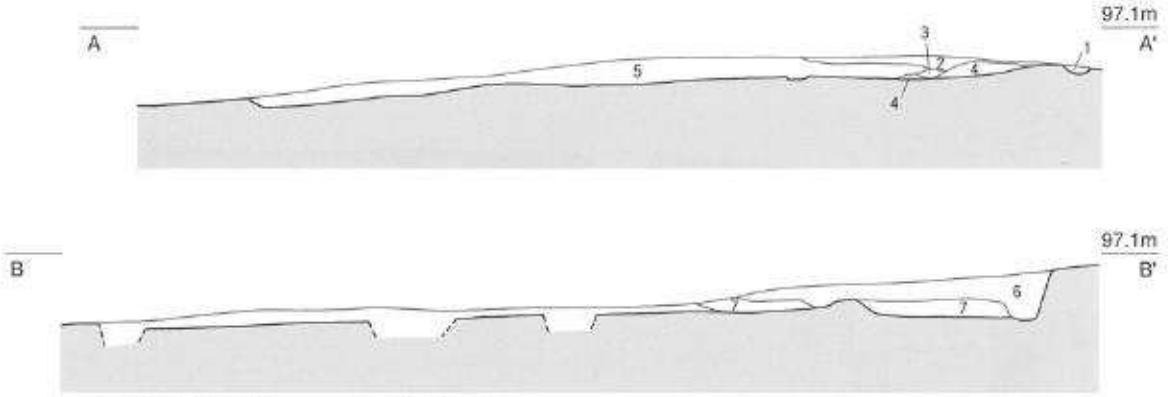




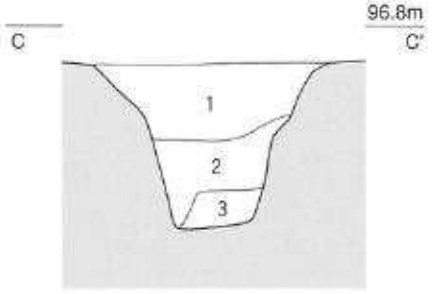
1．10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂
2．10YR3/1 黒褐色 極細砂

SH2009





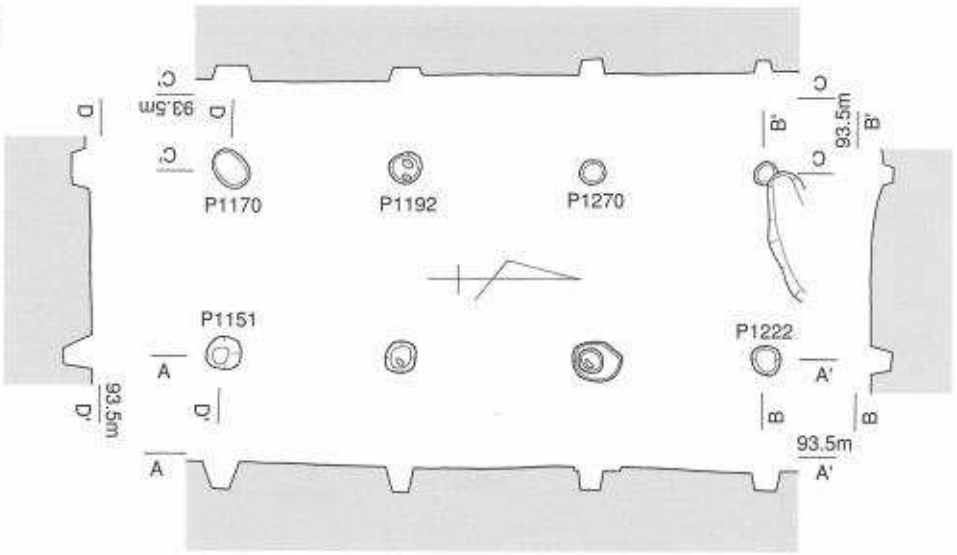
1．10YR3/2　黒褐色　極細砂　細礫混
2．7.5YR4/2　灰褐色　極細砂　細礫混
3．10YR3/2　黒褐色　極細砂　細礫混
4．10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂　細礫混（地山）
5．7.5YR4/3　褐色　極細砂　細礫混（多）
6．7.5YR3/3　暗褐色　極細砂　細礫混（多）
7．7.5YR2/1　黒色　極細砂　細礫多く含む



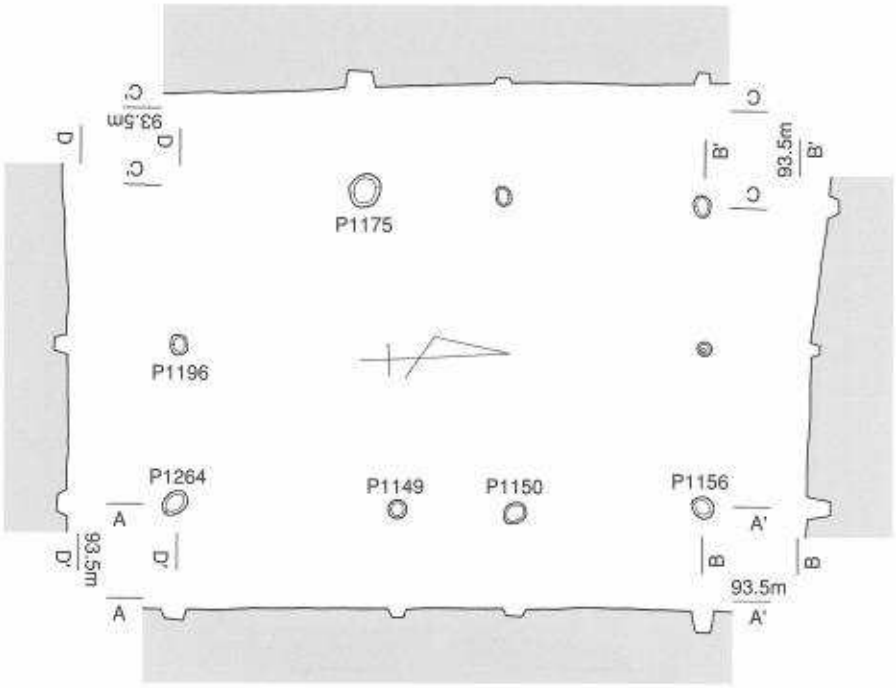
1．10YR2/2　黒褐色　極細砂
2．10YR1.7/1　黒色　極細砂 炭多く混じる
3．10YR3/2　黒褐色　極細砂

竪穴住居跡（13）

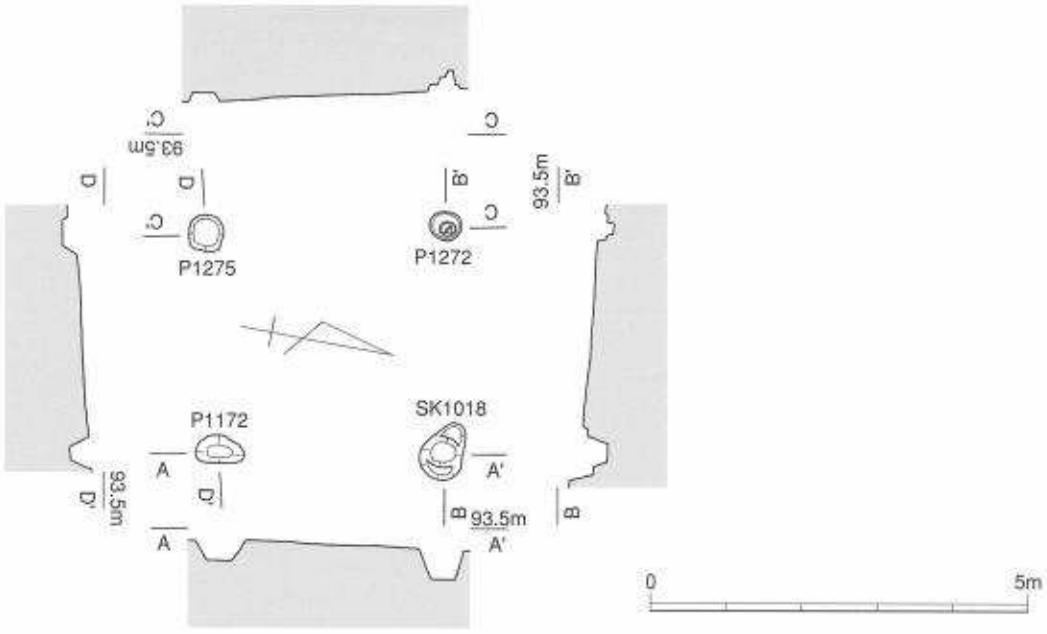
SB1001



SB1002

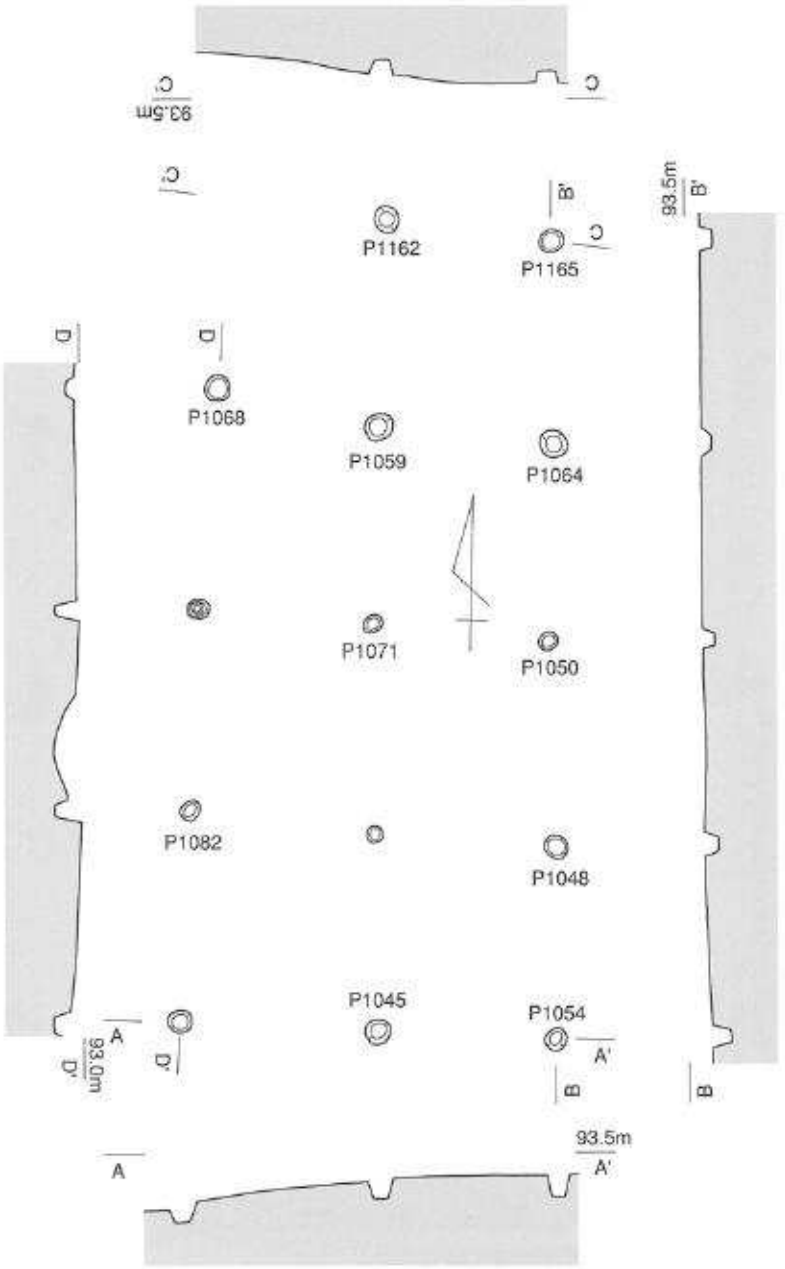


SB1003

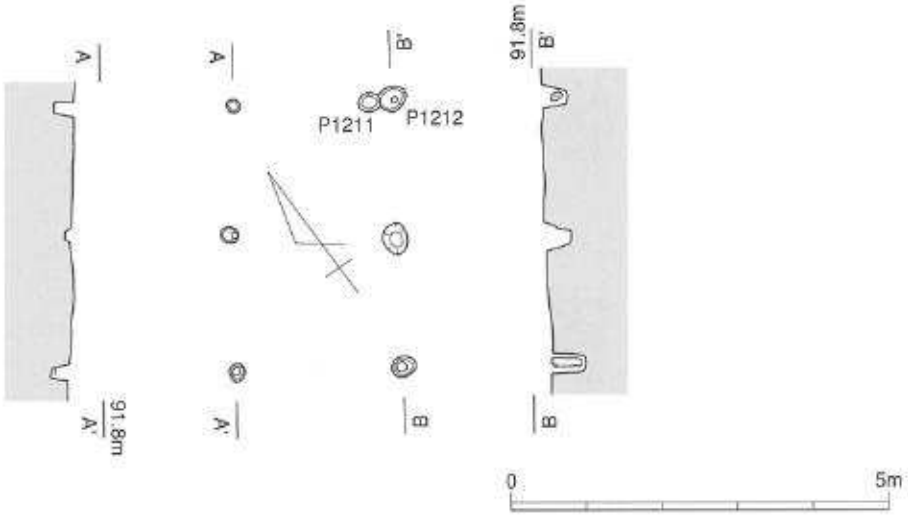


図版22　横田遺跡（21）

SB1004

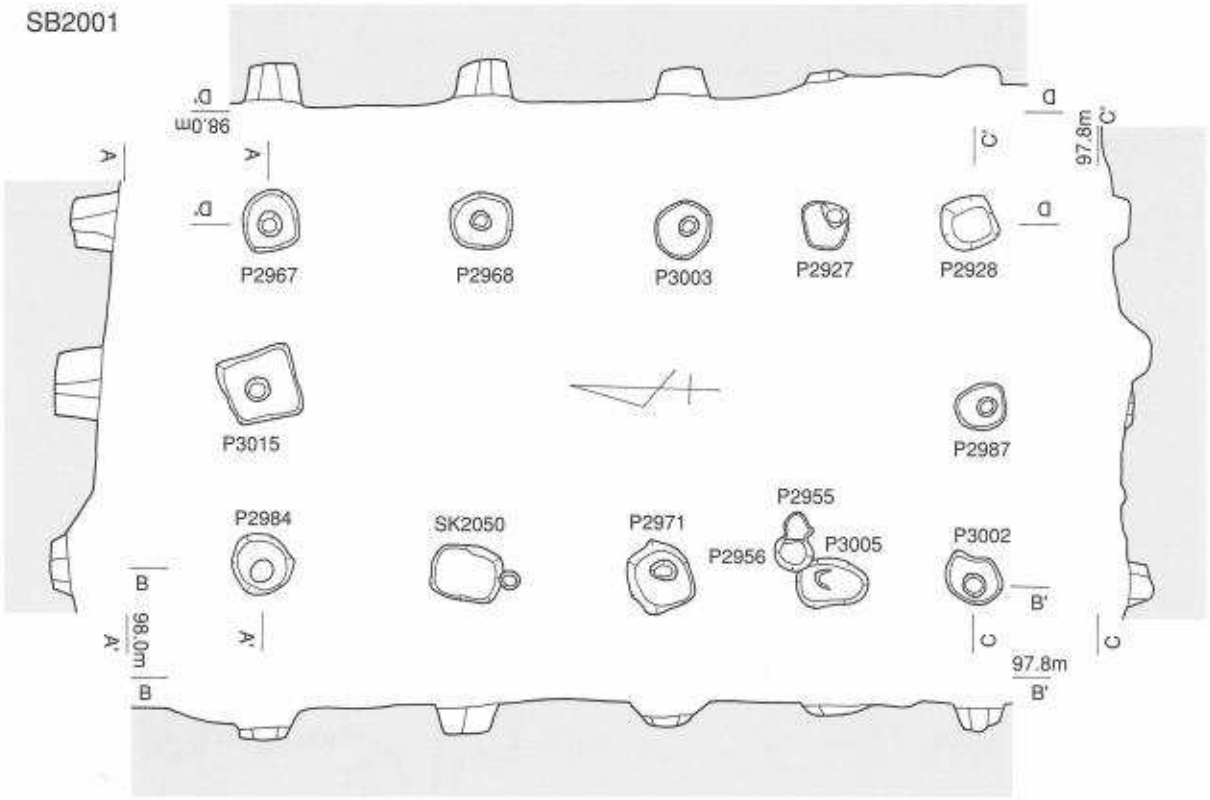


SB1005

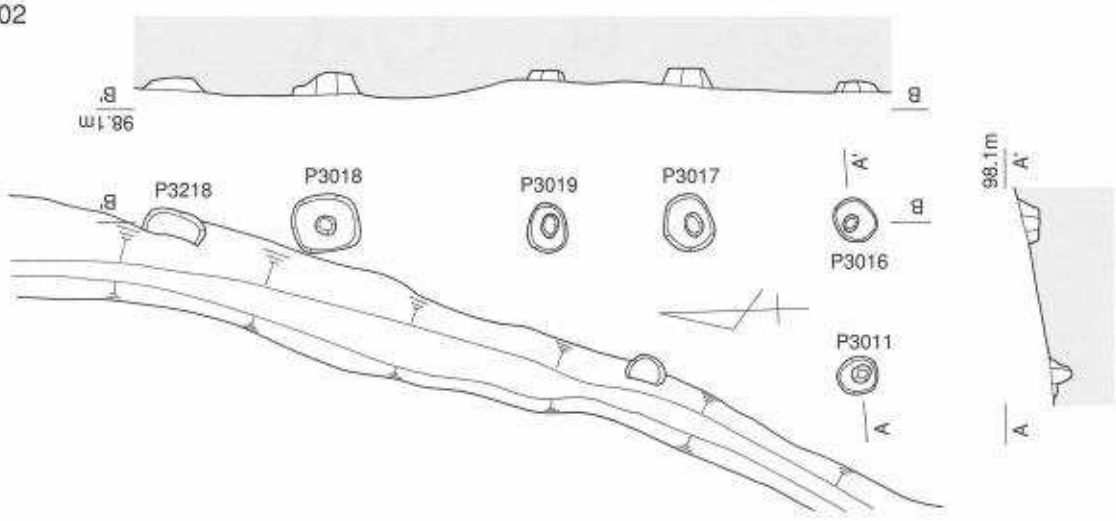


堀立柱建物跡（2）

SB2001

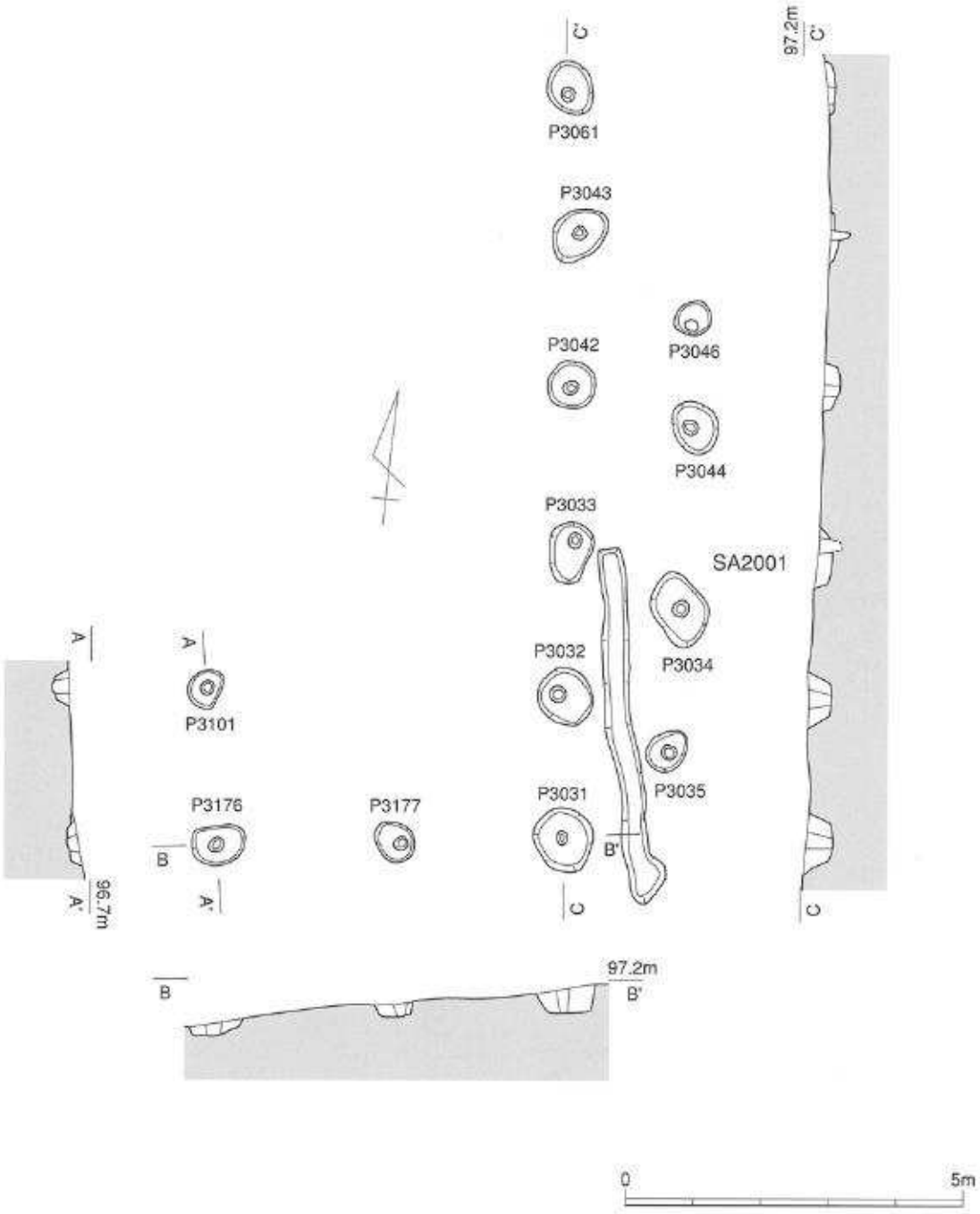


SB2002

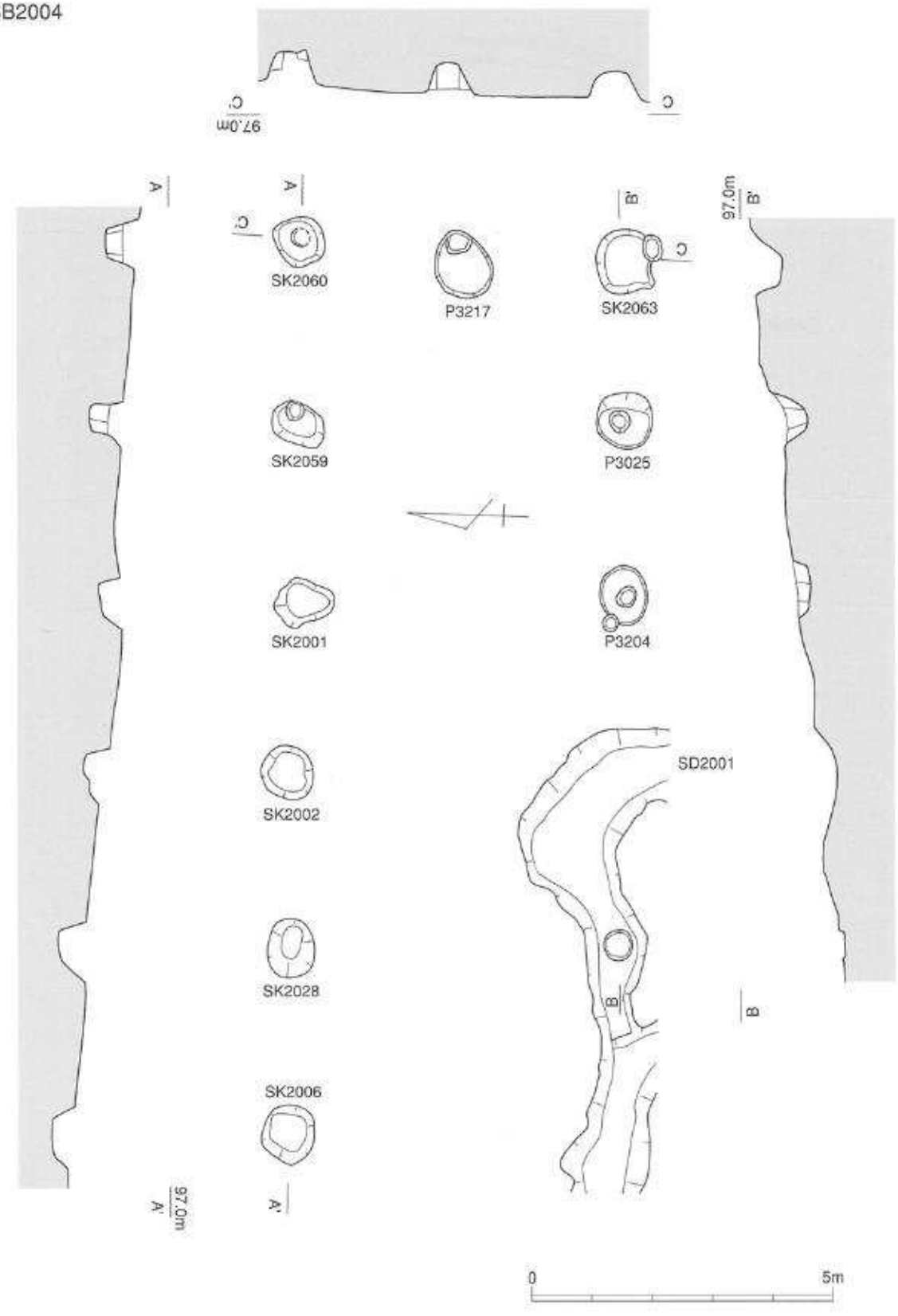


0 5m

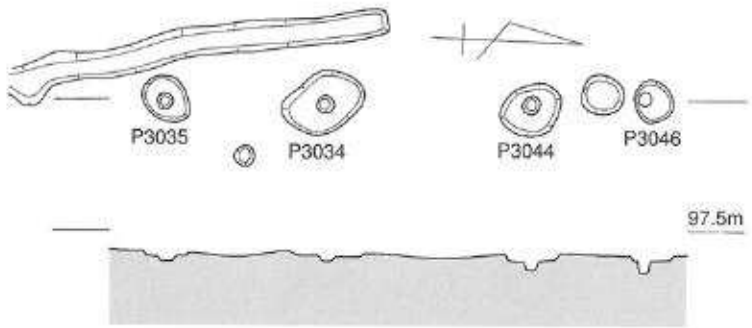
SB2003


C
97.2m
C'
P3061
P3043
P3042
P3046
P3044
P3033
SA2001
P3034
P3032
P3035
P3031
B'
A
A'
P3101
P3176
P3177
B
96.7m
97.2m
0
5m

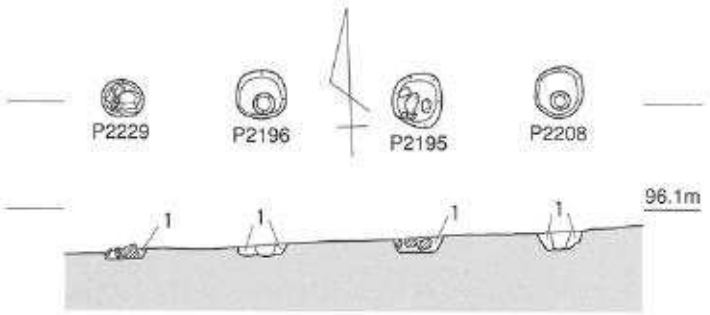
SB2004


SK2060
P3217
SK2063
SK2059
P3025
SK2001
P3204
SD2001
SK2002
SK2028
SK2006
97.0m
0
5m

SA2001

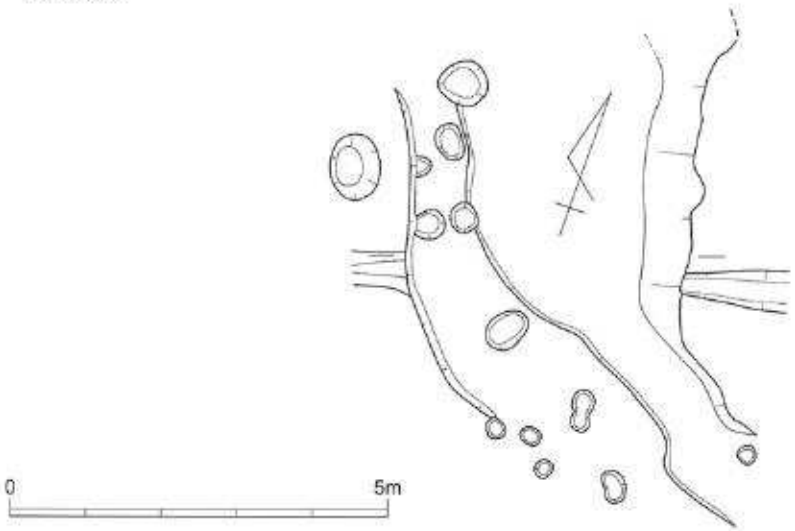


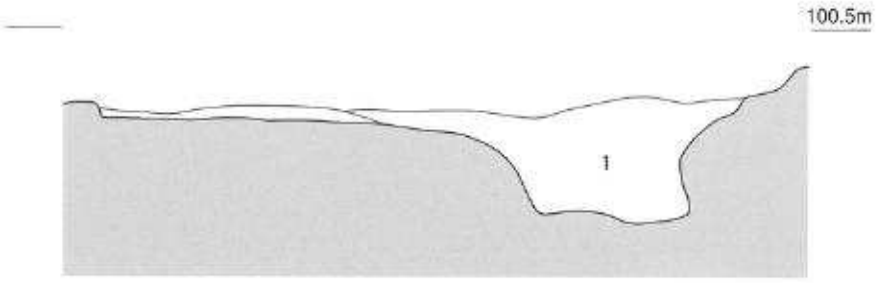
SA2002



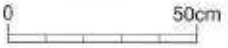
1．10YR2/2　黒褐色　極細砂

SX2005

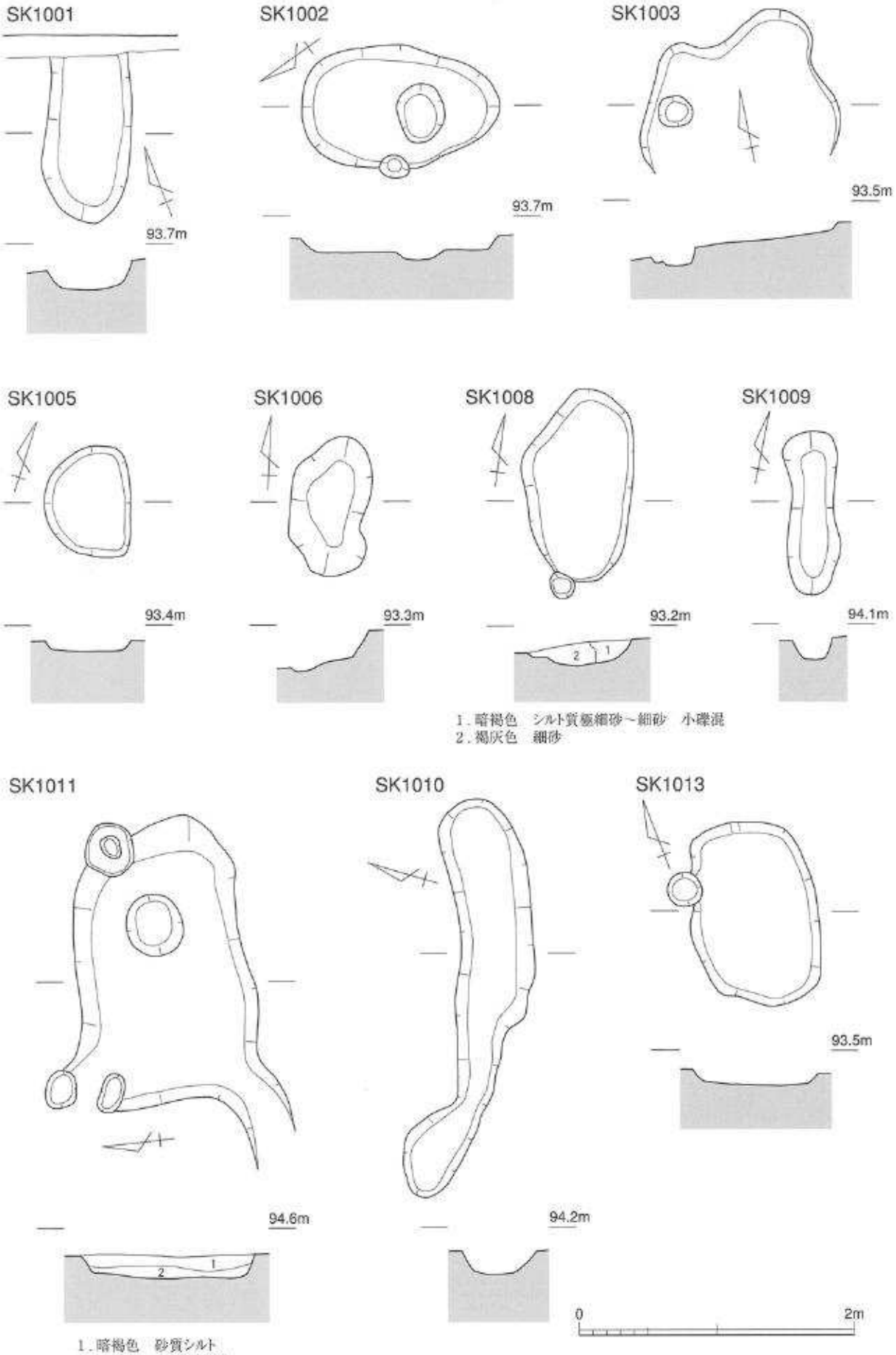


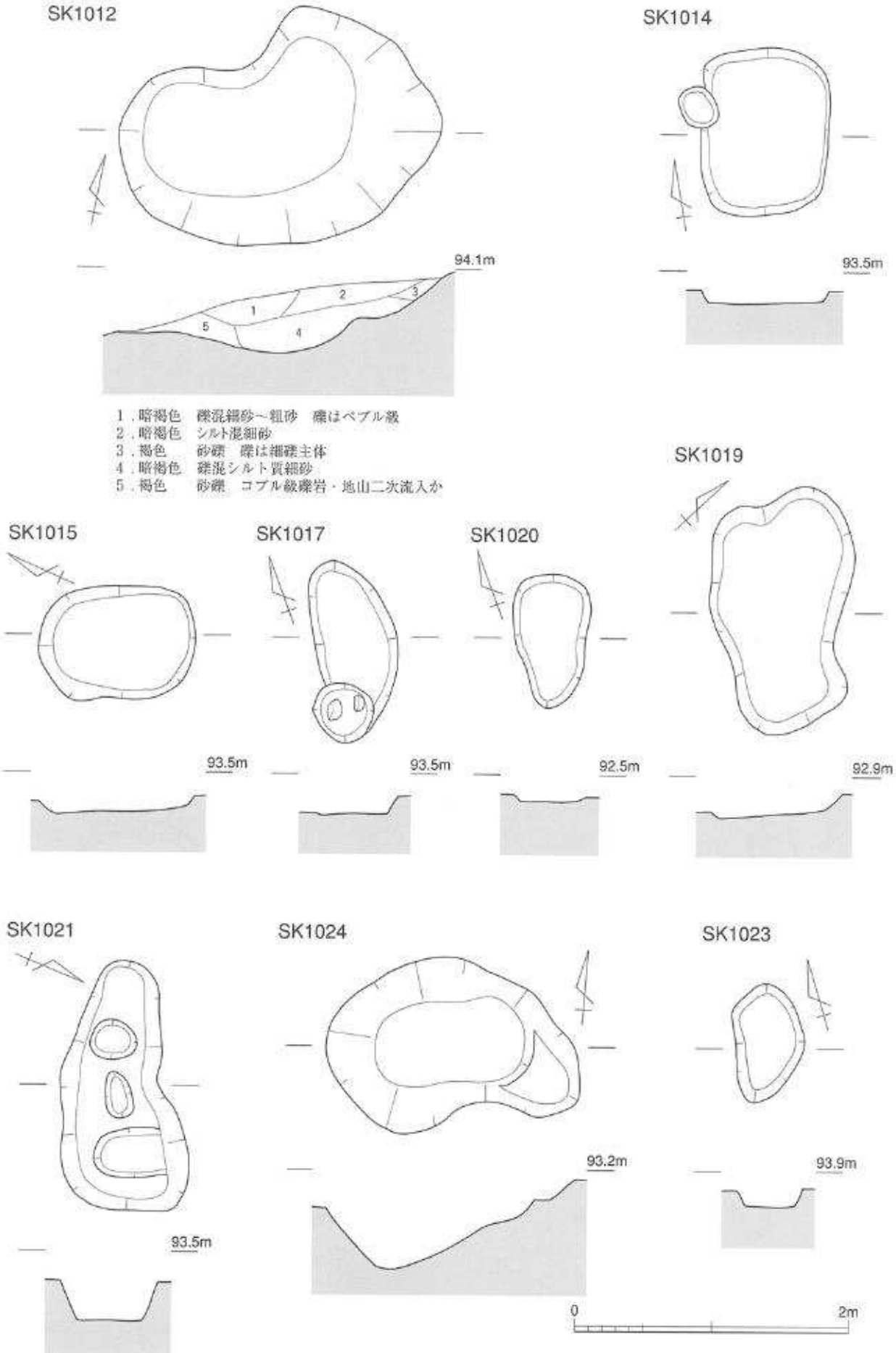


1．10YR4/2　にぶい黄褐色　細砂～粗砂



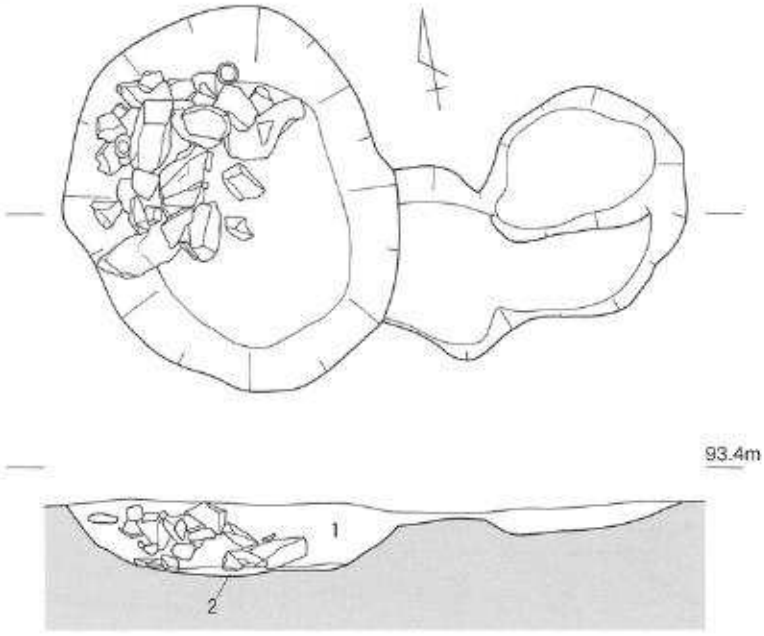
柵・不明遺構


SK1001
93.7m
SK1002
93.7m
SK1003
93.5m
SK1005
93.4m
SK1006
93.3m
SK1008
93.2m
2
1
1．暗褐色　シルト質極細砂～細砂　小礫混
2．褐灰色　細砂
SK1009
94.1m
SK1011
94.6m
2
1
1．暗褐色　砂質シルト
2．暗褐色　シルト質粗砂
SK1010
94.2m
SK1013
93.5m
0
2m


SK1012
94.1m
1
2
3
4
5
SK1014
93.5m
1．暗褐色　礫混細砂～粗砂　礫はペブル級
2．暗褐色　シルト混細砂
3．褐色　砂礫　礫は細礫主体
4．暗褐色　礫混シルト質細砂
5．褐色　砂礫　コプル紋礫岩・地山二次流入か
SK1019
SK1015
93.5m
SK1017
93.5m
SK1020
92.5m
92.9m
SK1021
93.5m
SK1024
93.2m
SK1023
93.9m
0
2m

土坑（2）

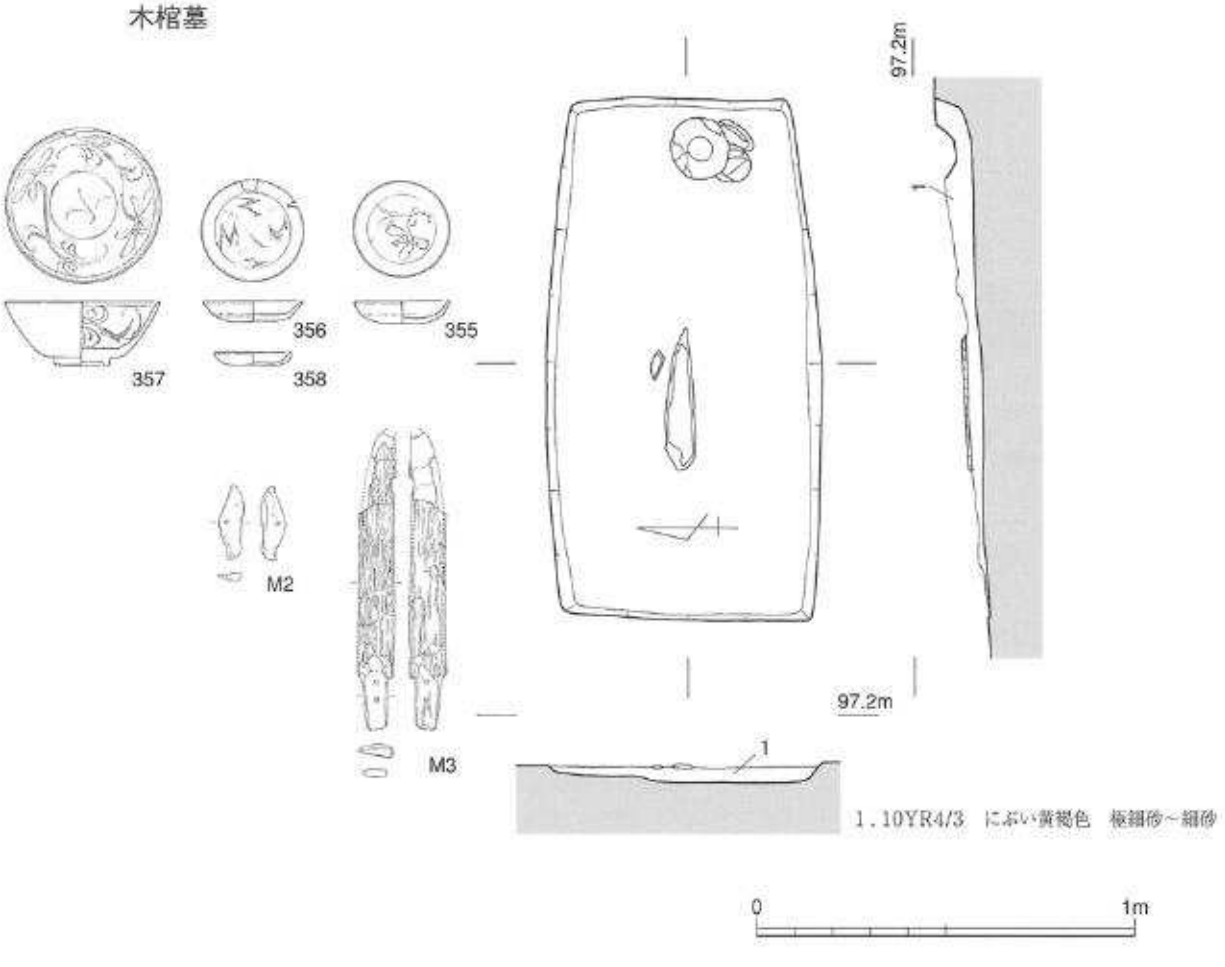
SK1004



1．暗黄褐色　細礫混中砂～粗砂
2．褐灰色　　細砂

0　1m

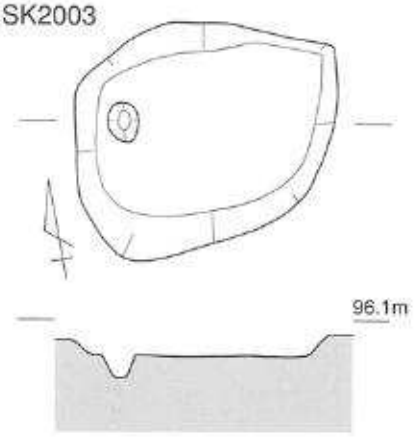
木棺墓



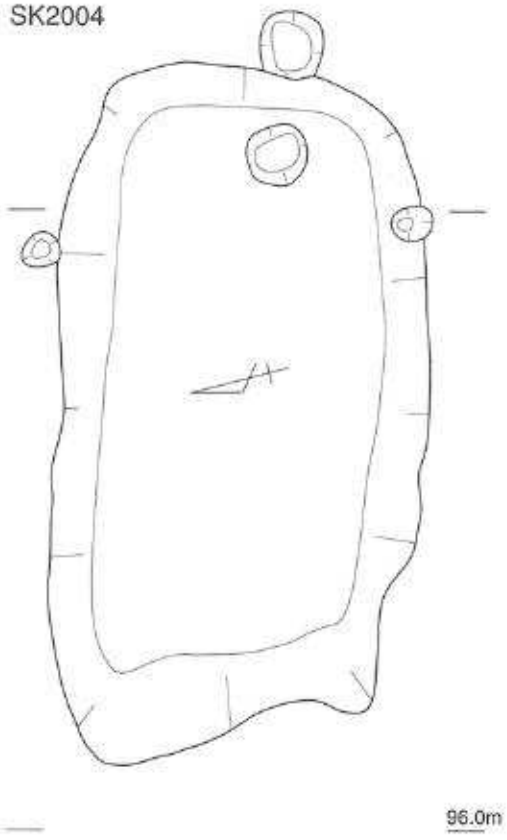
1．10YR4/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂

0　1m

SK2003

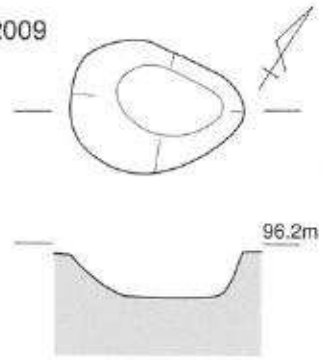


SK2004

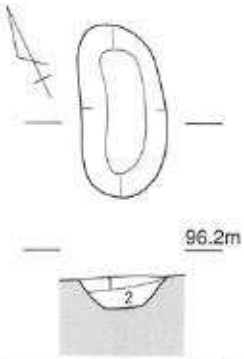


1．7.5YR3/2　黒褐色　　4．10YR2/2　黒褐色
2．10YR3/1　黒褐色　　5．10YR2/2　黒褐色
3．5YR2/1　黒褐色

SK2009

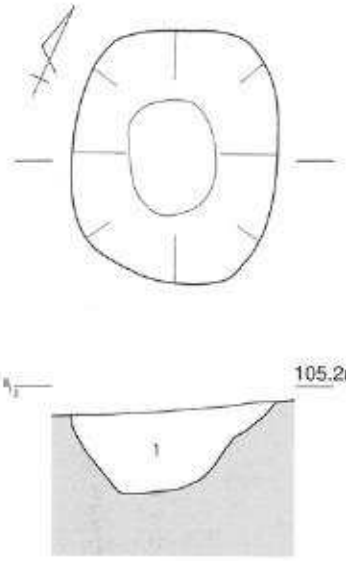


SK2011



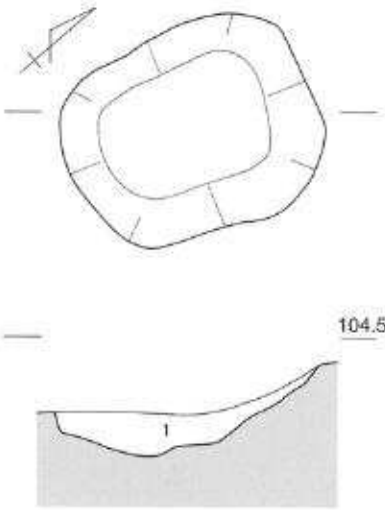
1．7.5YR3/2　黒褐色　細砂混極細砂
径5mm程度の黄褐色粘土ブロック多く含む
2．7.5YR3/1　黒褐色　極細砂
径5mm程度の黄褐色粘土ブロック少量含む

SK2016



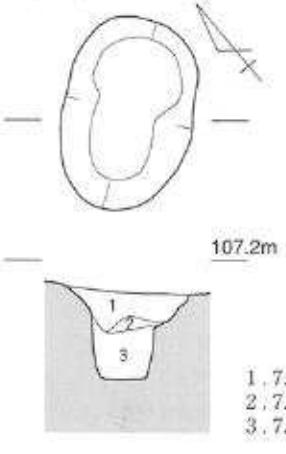
1．7.5YR2/2　黒褐色　炭混細砂　粗砂を含む

SK2017



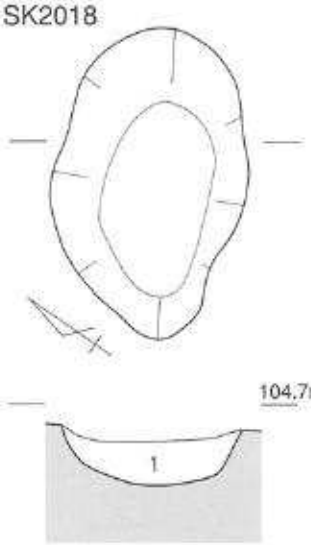
1．7.5YR2/2　黒褐色　粗砂混細砂

SK2014



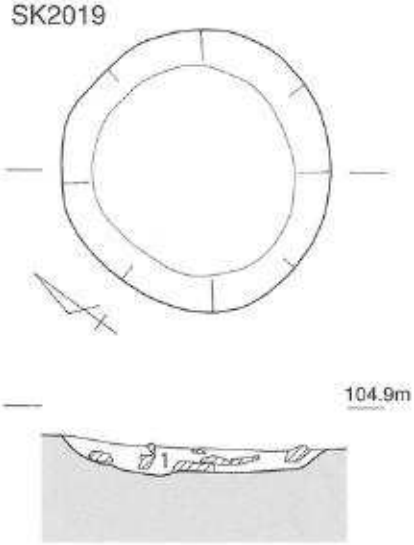
1．7.5YR3/2　黒褐色　粗砂混細砂
2．7.5YR3/4　暗褐色　粗砂・礫混細砂
3．7.5Y4/3　褐色　砂・礫層

SK2018



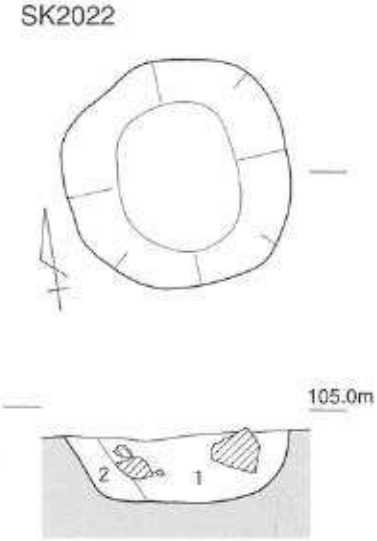
1．7.5YR3/3 暗褐色 極細砂～細砂 粗砂混

SK2019



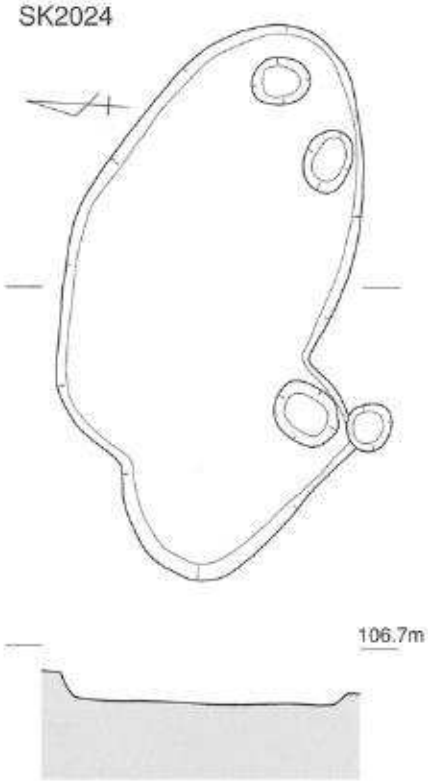
1．10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混細砂～極細砂（井戸）

SK2022

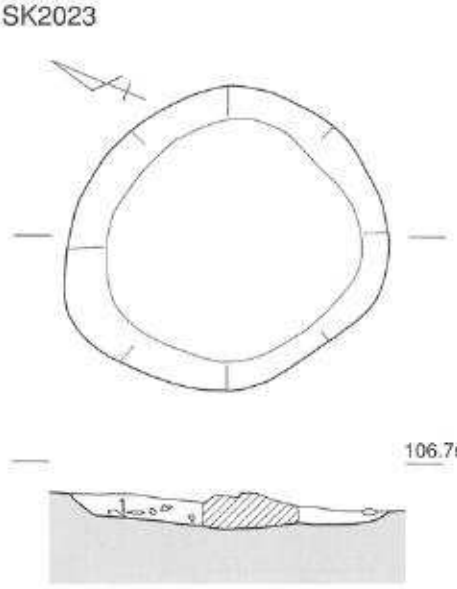


1．7.5YR4/2 灰褐色 極細砂～シルト
2．7.5YR4/3 褐色 粗砂～細砂

SK2024

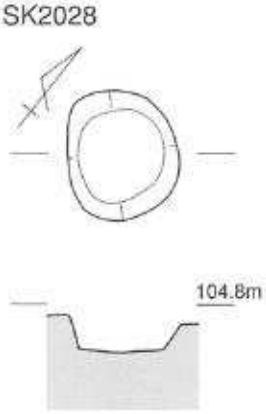


SK2023

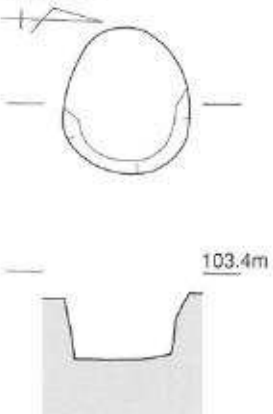


1．10YR2/2 黒褐色 粗砂混細砂 風化礫含む

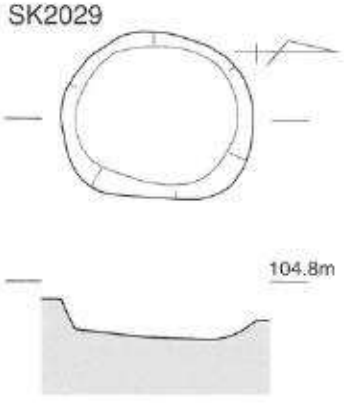
SK2028



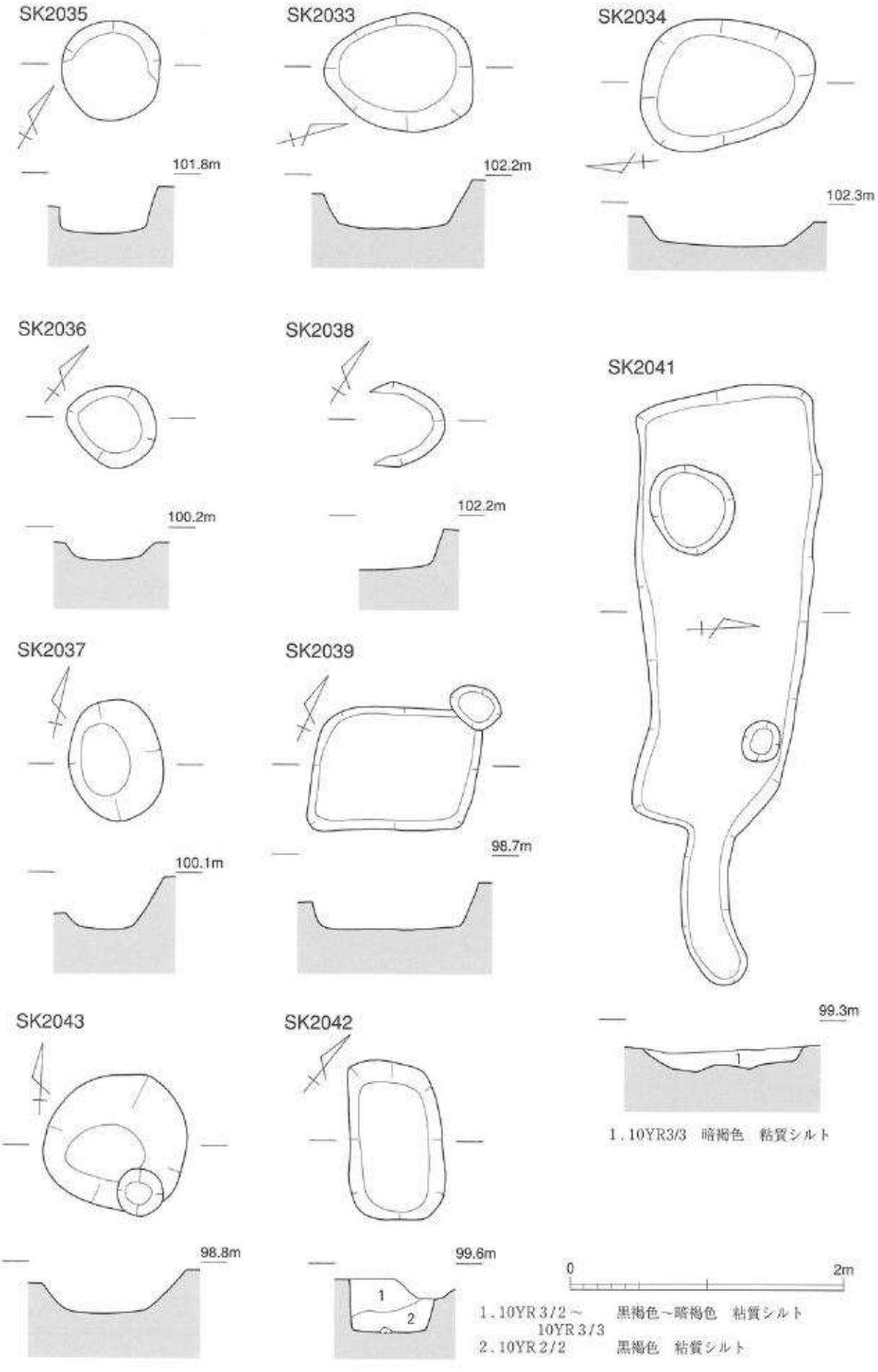
SK2032

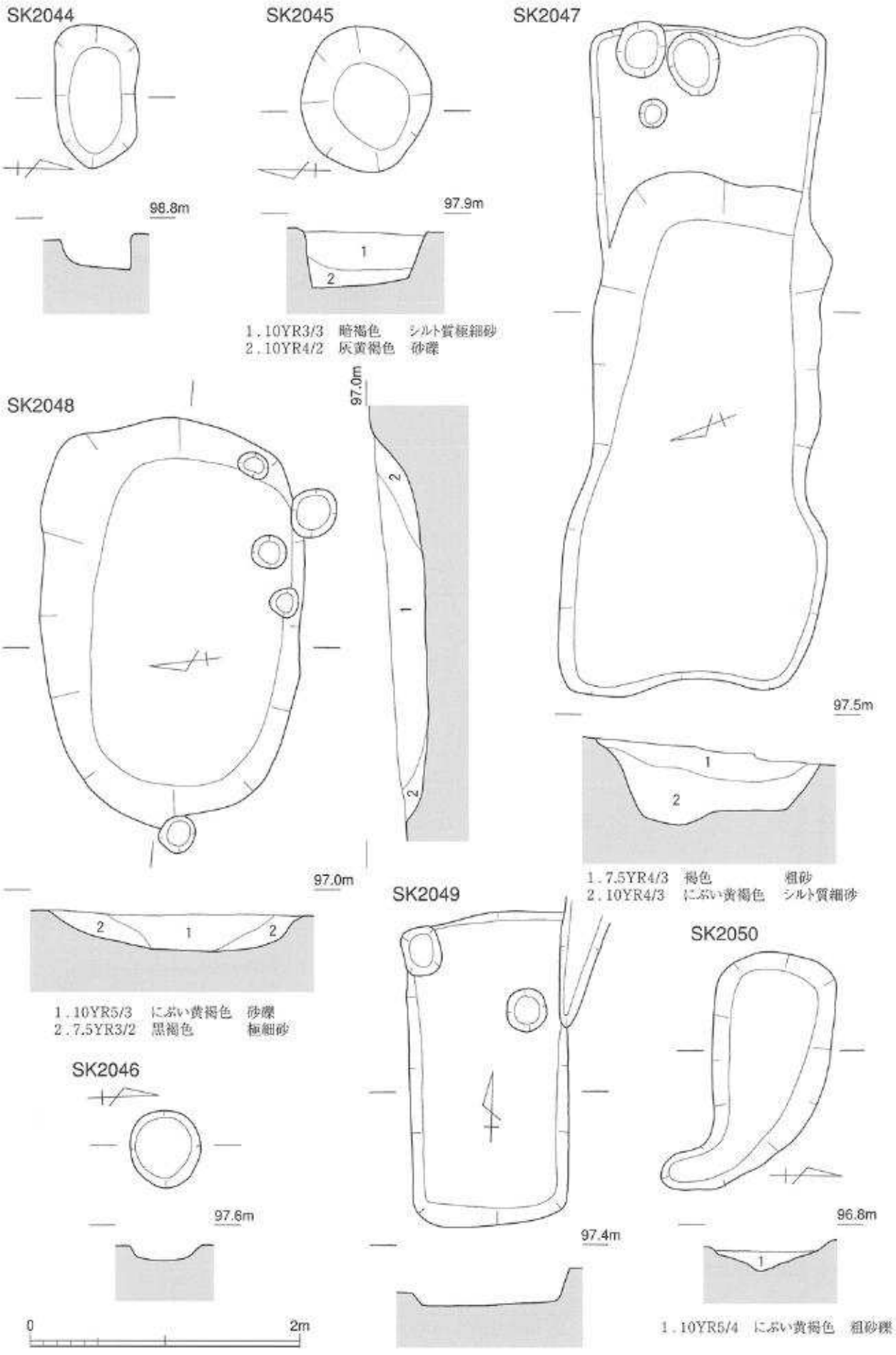


SK2029

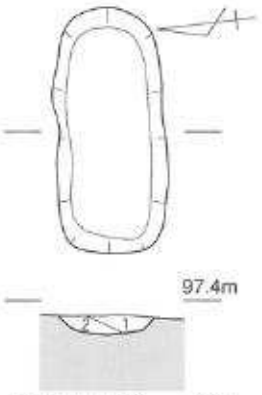


SK2031


SK2035
101.8m
SK2033
102.2m
SK2034
102.3m
SK2036
100.2m
SK2038
102.2m
SK2041
99.3m
1
1.10YR3/3　暗褐色　粘質シルト
SK2037
100.1m
SK2039
98.7m
SK2043
98.8m
SK2042
99.6m
1
2
0
2m
1.10YR3/2～10YR3/3　黒褐色～暗褐色　粘質シルト
2.10YR2/2　黒褐色　粘質シルト

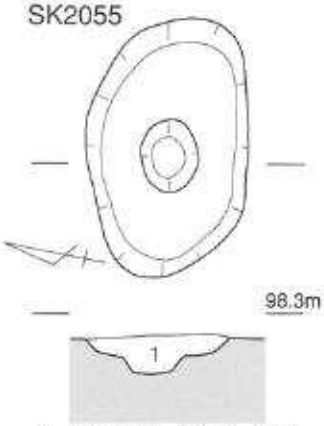

SK2044
98.8m
SK2045
97.9m
1
2
1．10YR3/3 暗褐色 シルト質極細砂
2．10YR4/2 灰黄褐色 砂礫
SK2047
97.5m
1
2
1．7.5YR4/3 褐色 粗砂
2．10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質細砂
SK2048
97.0m
2
1
2
97.0m
2
1
2
1．10YR5/3 にぶい黄褐色 砂礫
2．7.5YR3/2 黒褐色 極細砂
SK2049
97.4m
SK2050
96.8m
1
1．10YR5/4 にぶい黄褐色 粗砂礫
SK2046
97.6m
0
2m

SK2052



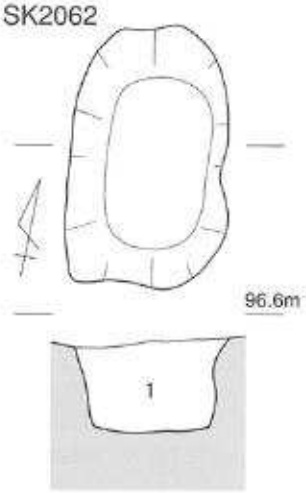
1.10YR4/4　褐色　　細砂
2.10YR4/1　褐灰色　極細砂

SK2055



1.10YR3/3　暗褐色　細砂

SK2062

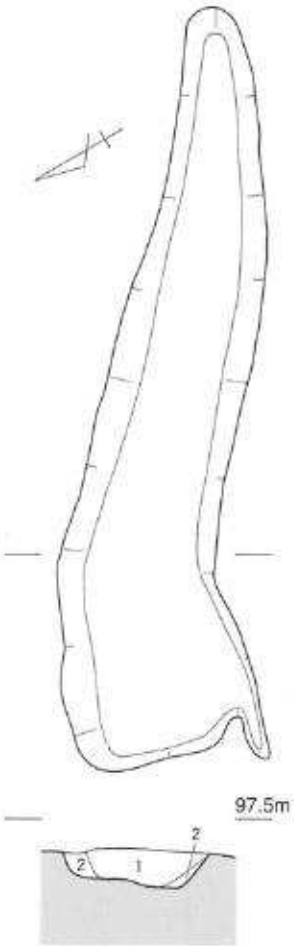


1.5YR4/2　灰褐色　粘質シルト

SK2066

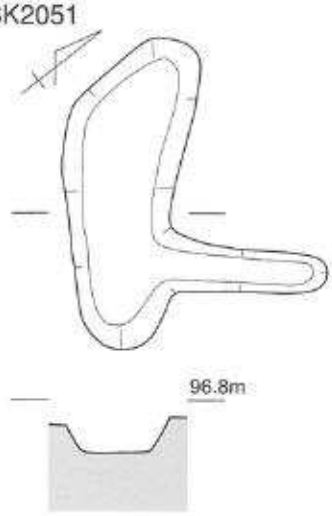
1.10YR3/2　黒褐色　極細砂

SK2054



1.7.5YR4/3　褐色　　細砂
2.7.5YR4/2　灰褐色　細砂

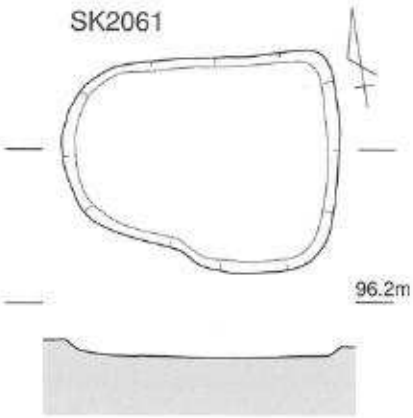
SK2051



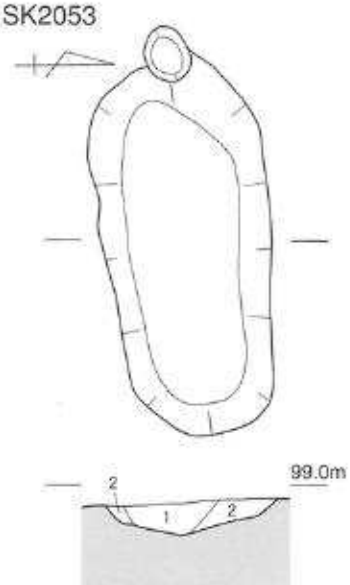
SK2058

1.10YR4/2　灰黄褐色　砂礫
2.10YR4/1　褐灰色　　シルト

SK2061

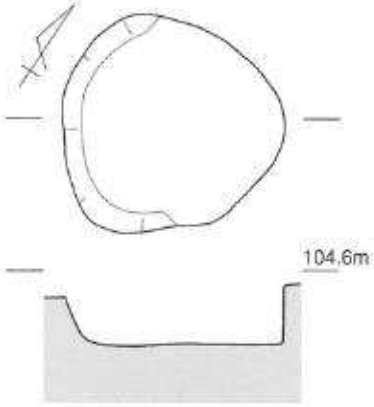


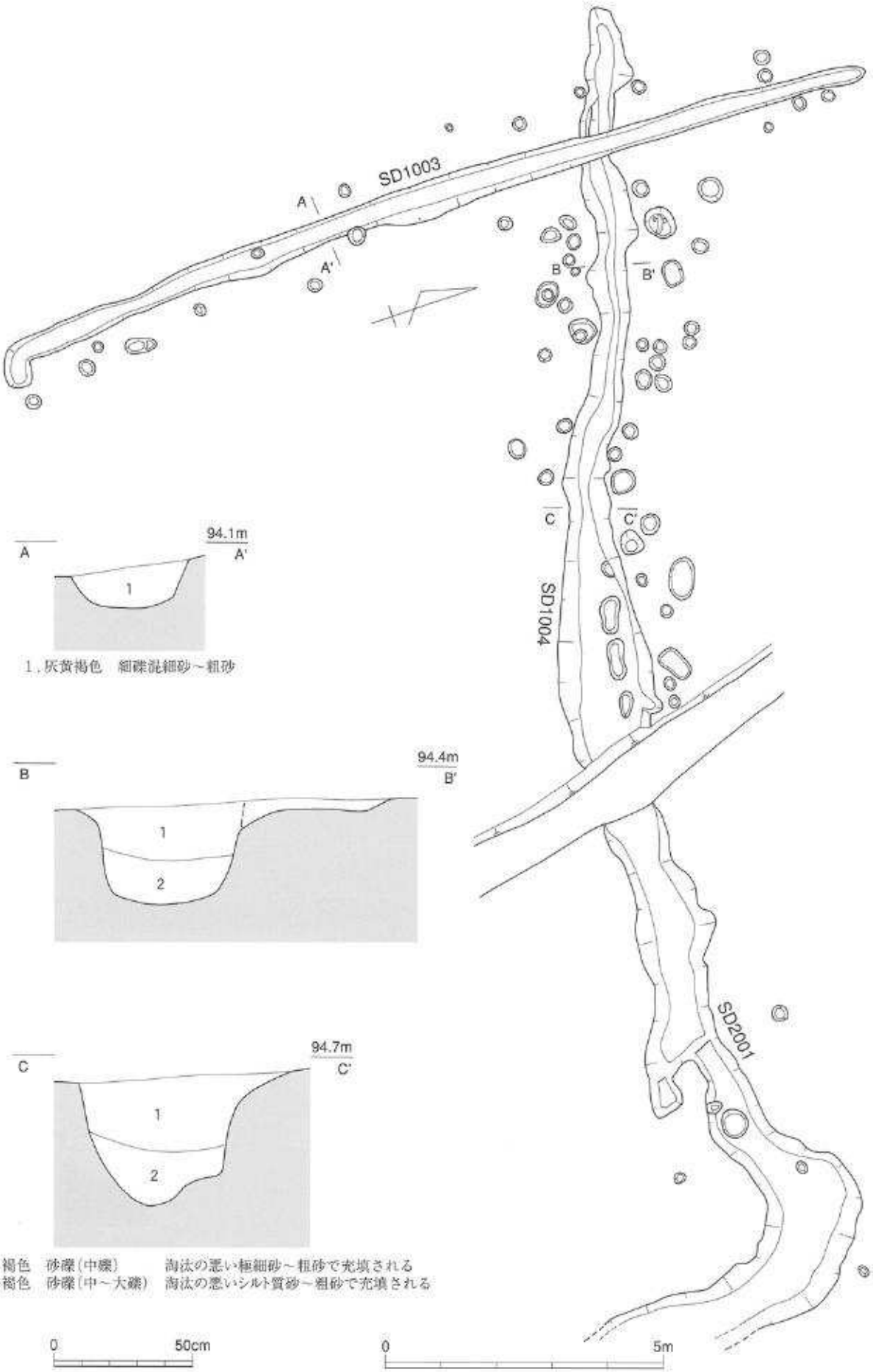
SK2053



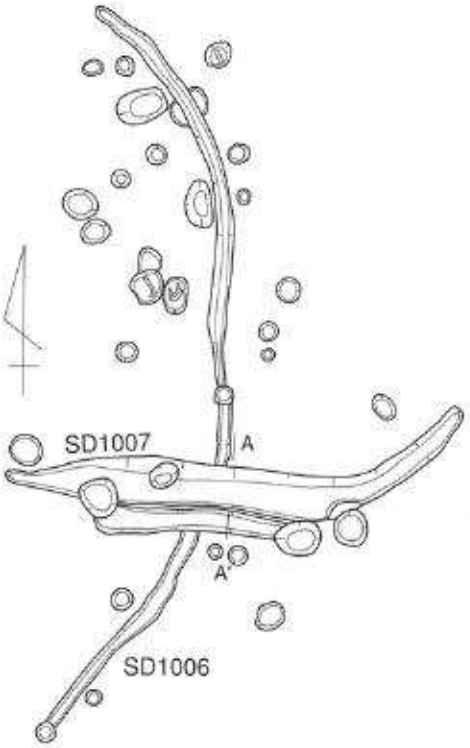
1.10YR4/3　にぶい黄褐色　極細砂
2.10YR3/3　暗褐色　　極細砂

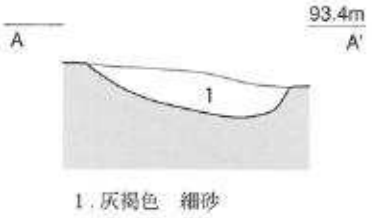
SK2067



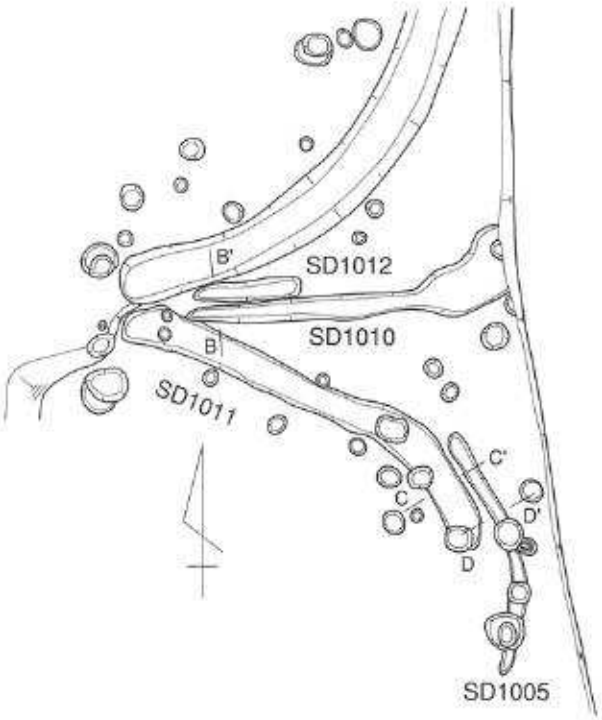

SD1003
A
A'
B
B'
C
C'
SD1004
SD2001
94.1m
A
A'
1
1．灰黄褐色　細礫混細砂～粗砂
94.4m
B
B'
1
2
94.7m
C
C'
1
2
1．褐色　砂礫（中礫）　　淘汰の悪い極細砂～粗砂で充填される
2．褐色　砂礫（中～大礫）　淘汰の悪いシルト質砂～粗砂で充填される
0
50cm
0
5m

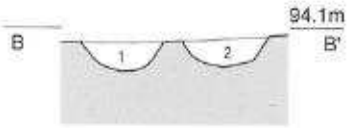
図版36　横田遺跡（35）





1．灰褐色　細砂



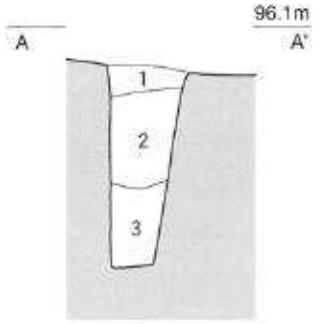


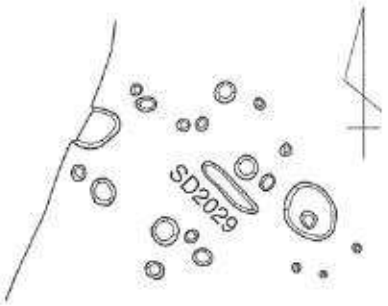
1．暗褐色　細砂～粗砂
2．暗褐色　礫混極細砂

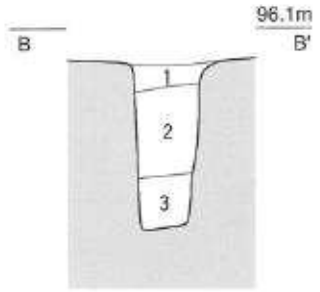
1．暗褐色　細砂～粗砂

1．暗褐色　細砂～粗砂

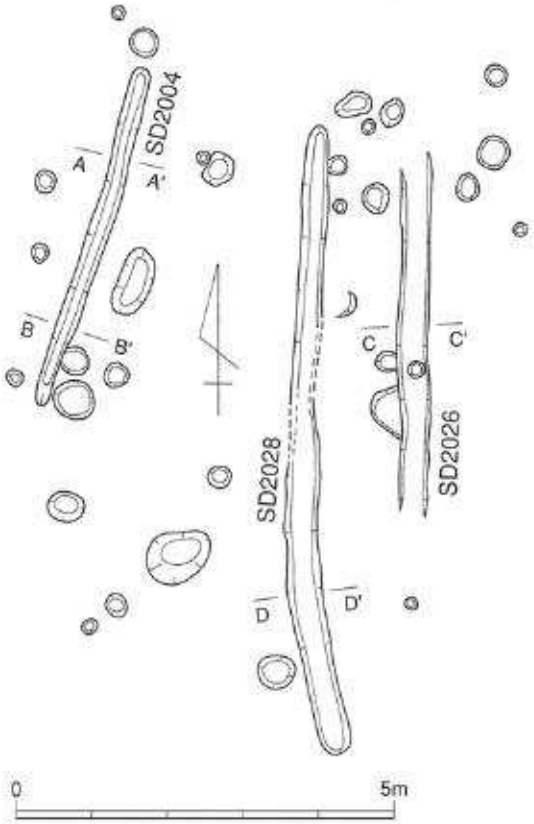
溝（2）

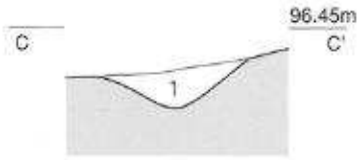




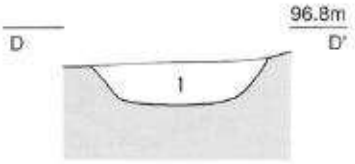


1.10YR8/6　黄橙色　粗砂混極細砂　2～3cmの礫を含む
2.10YR3/1　黒褐色　極細砂　0.5～3cmの礫を含む
3.10YR4/6　褐色　極細砂　0.5cmほどの黄褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸを含む



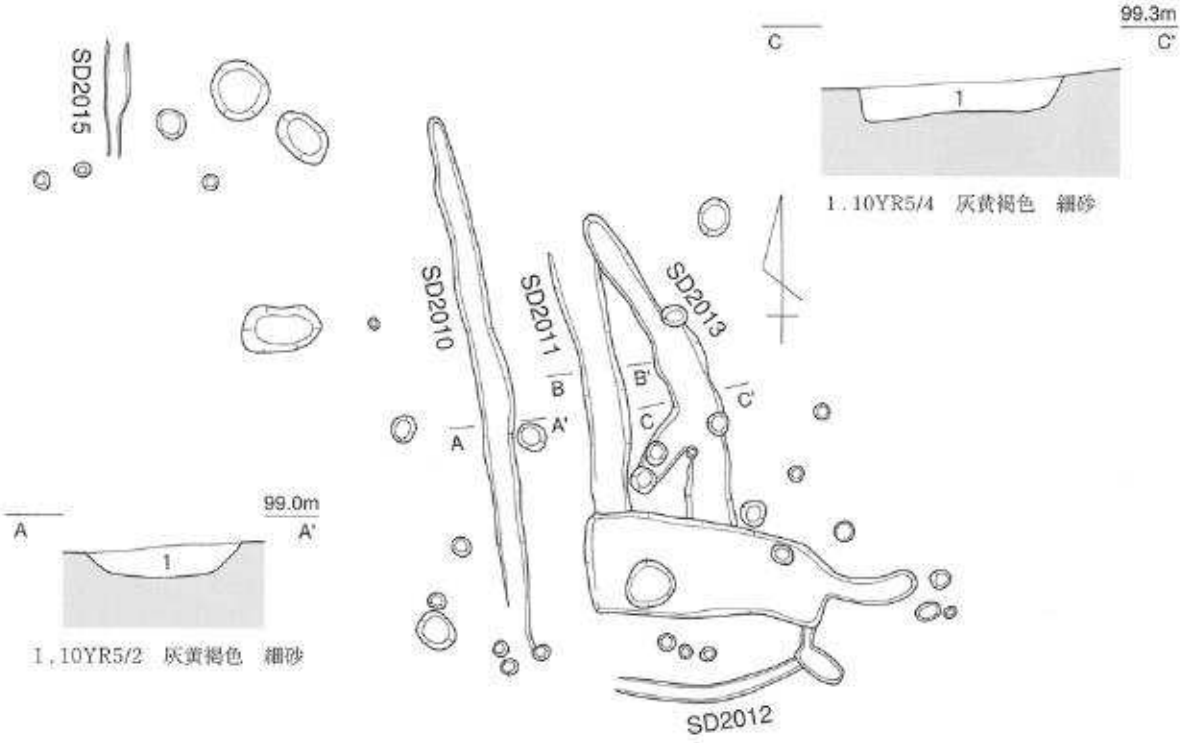


1.10YR3/2　黒褐色　極細砂　細礫を含む

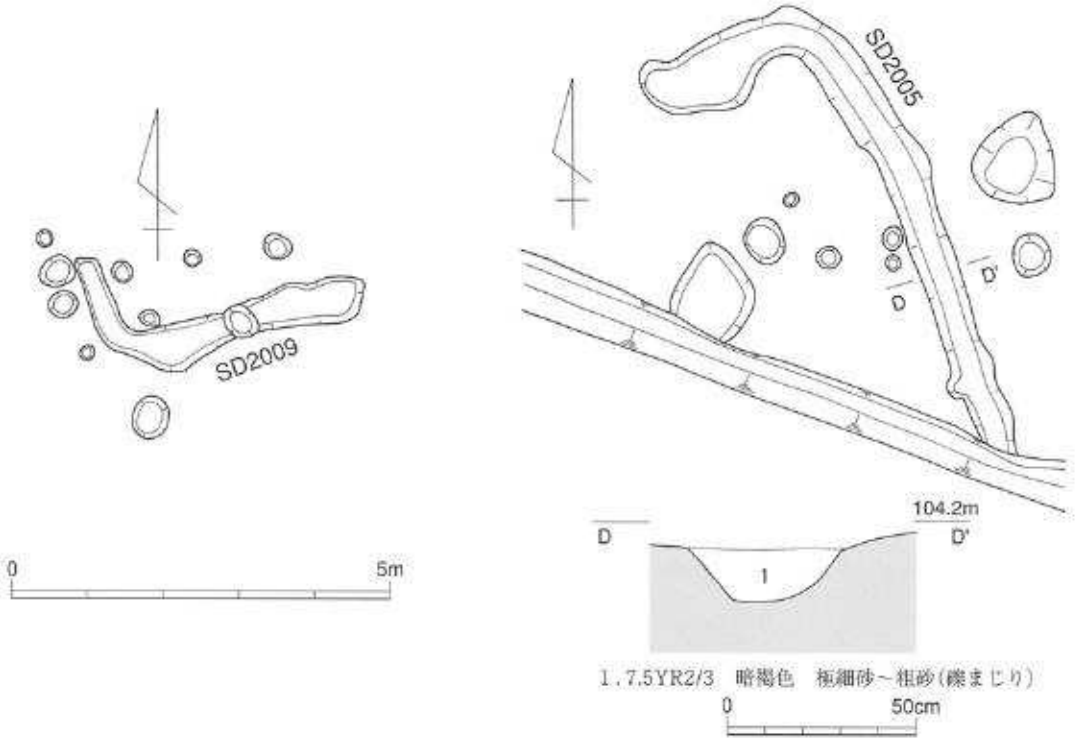


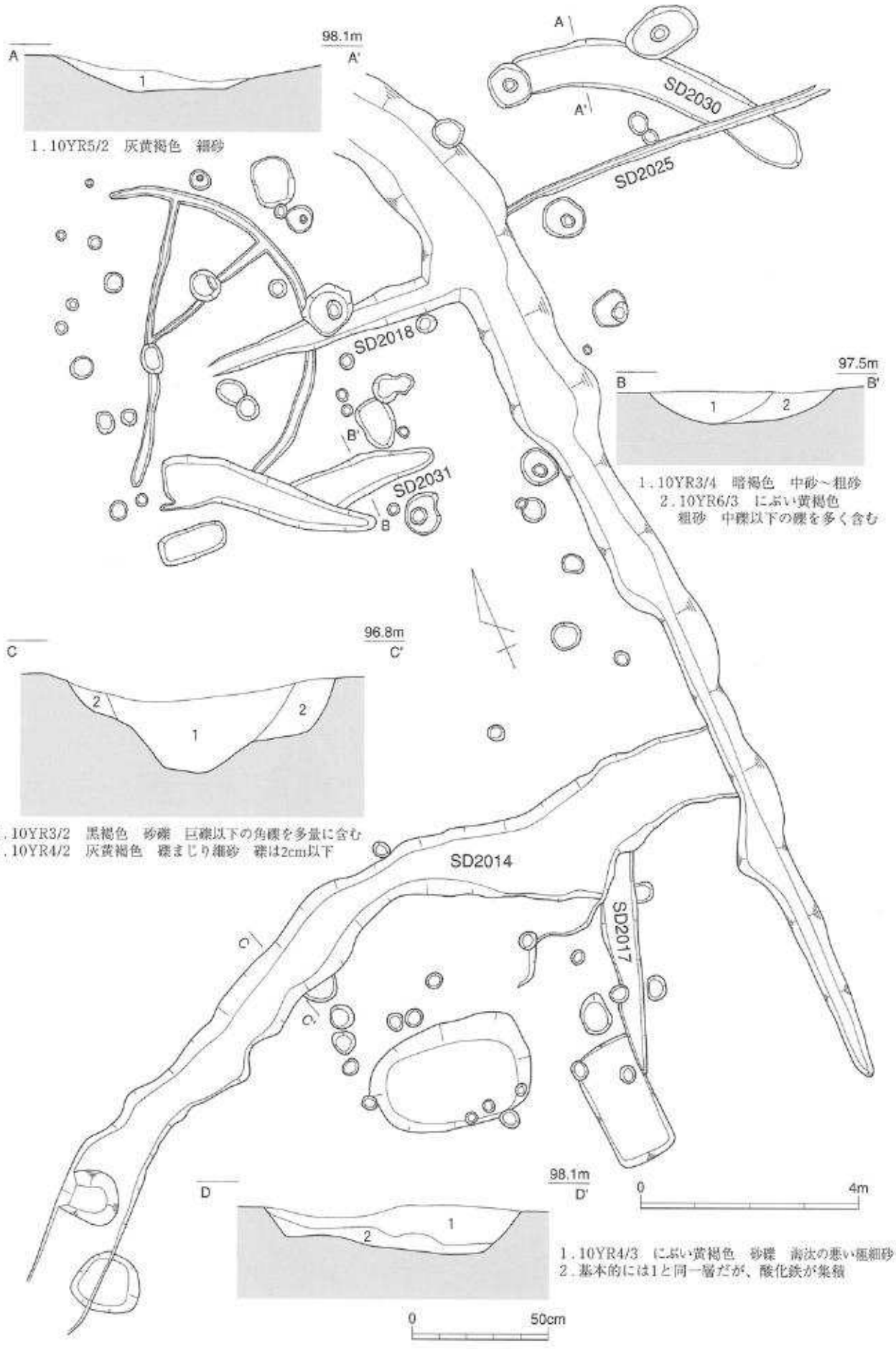
1.7.5YR3/3　暗褐色　極細砂　細礫を含む

図版38　横田遺跡（37）

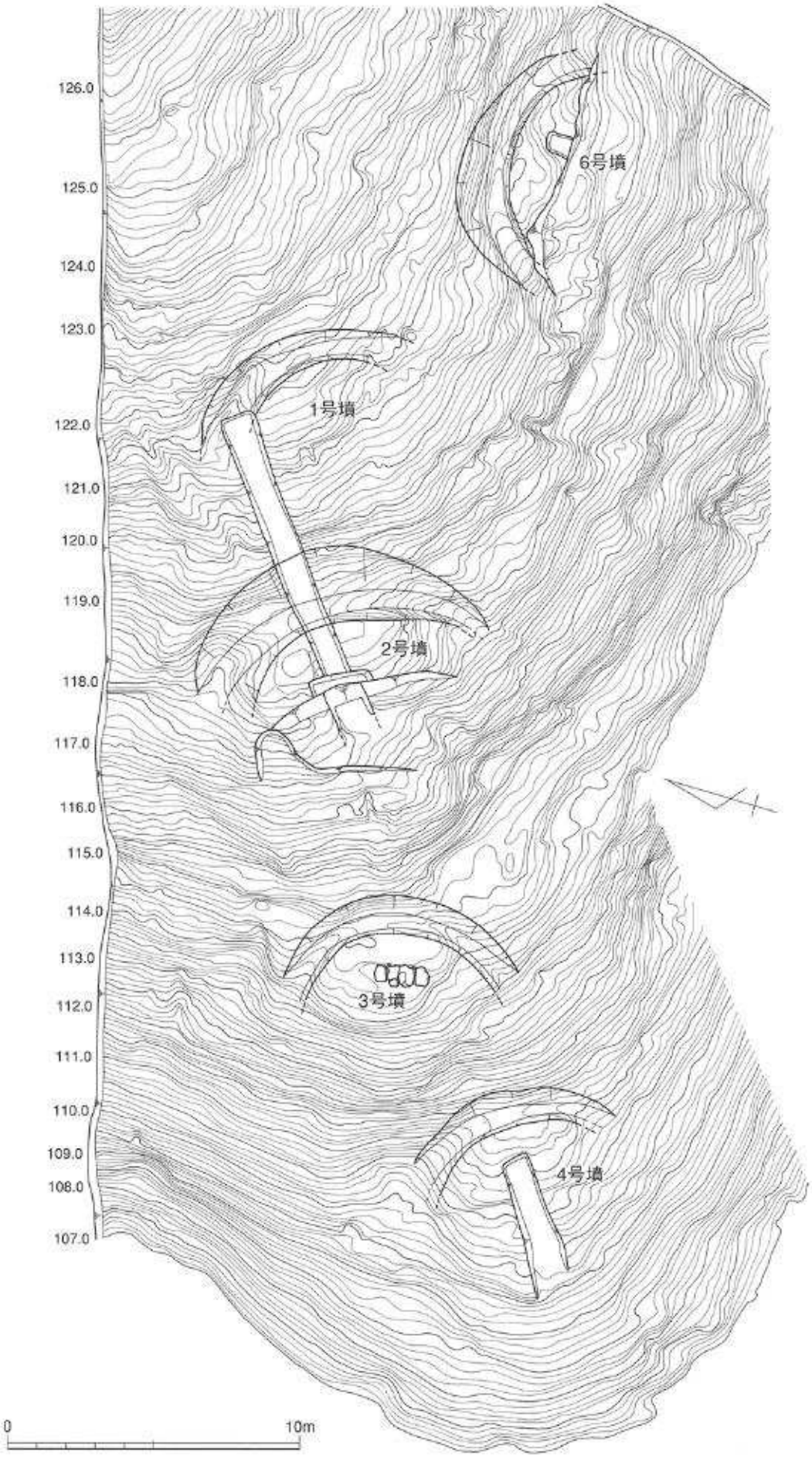

SD2015
SD2010
SD2011
SD2013
SD2012
A
A'
B
B'
C
C'
99.0m
99.3m
1
1.10YR5/2　灰黄褐色　細砂
1.10YR5/4　灰黄褐色　細砂

B
B'
99.1m
1
1.10YR5/2　灰黄褐色　細砂

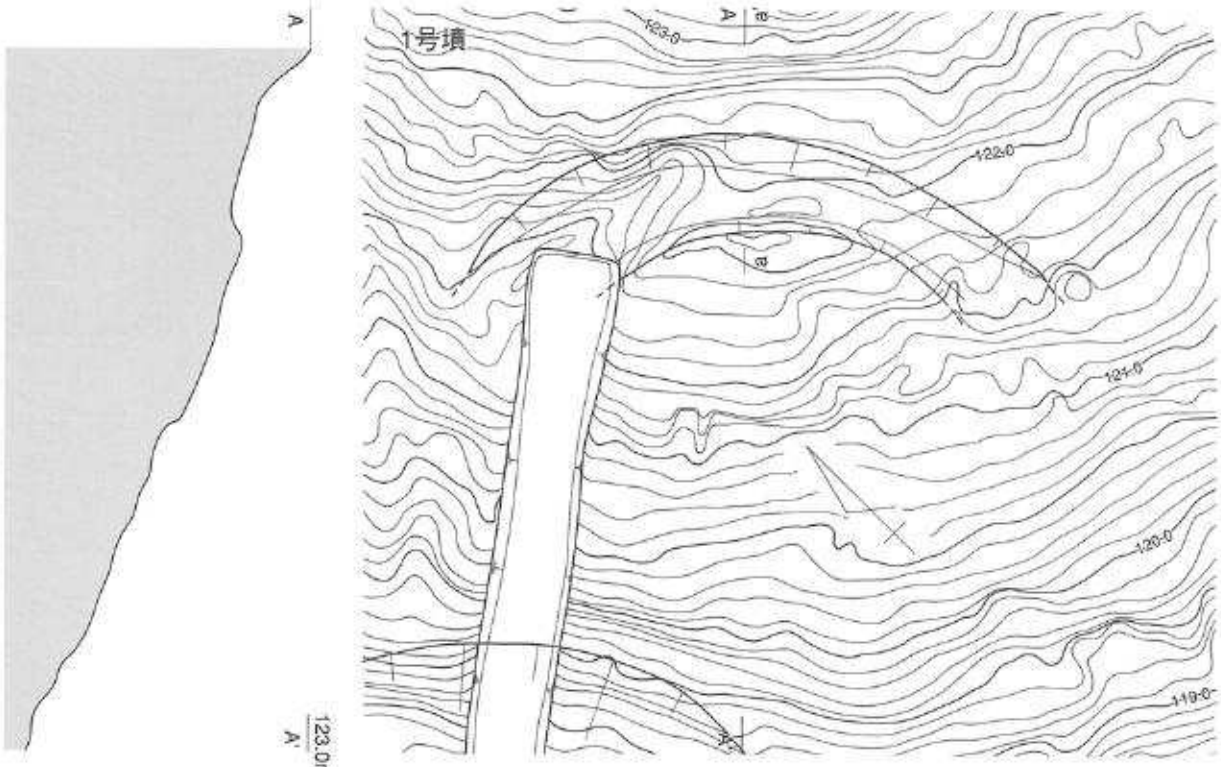

SD2009
SD2005
D
D'
104.2m
1
1.7.5YR2/3　暗褐色　極細砂～粗砂(礫まじり)
0
5m
0
50cm

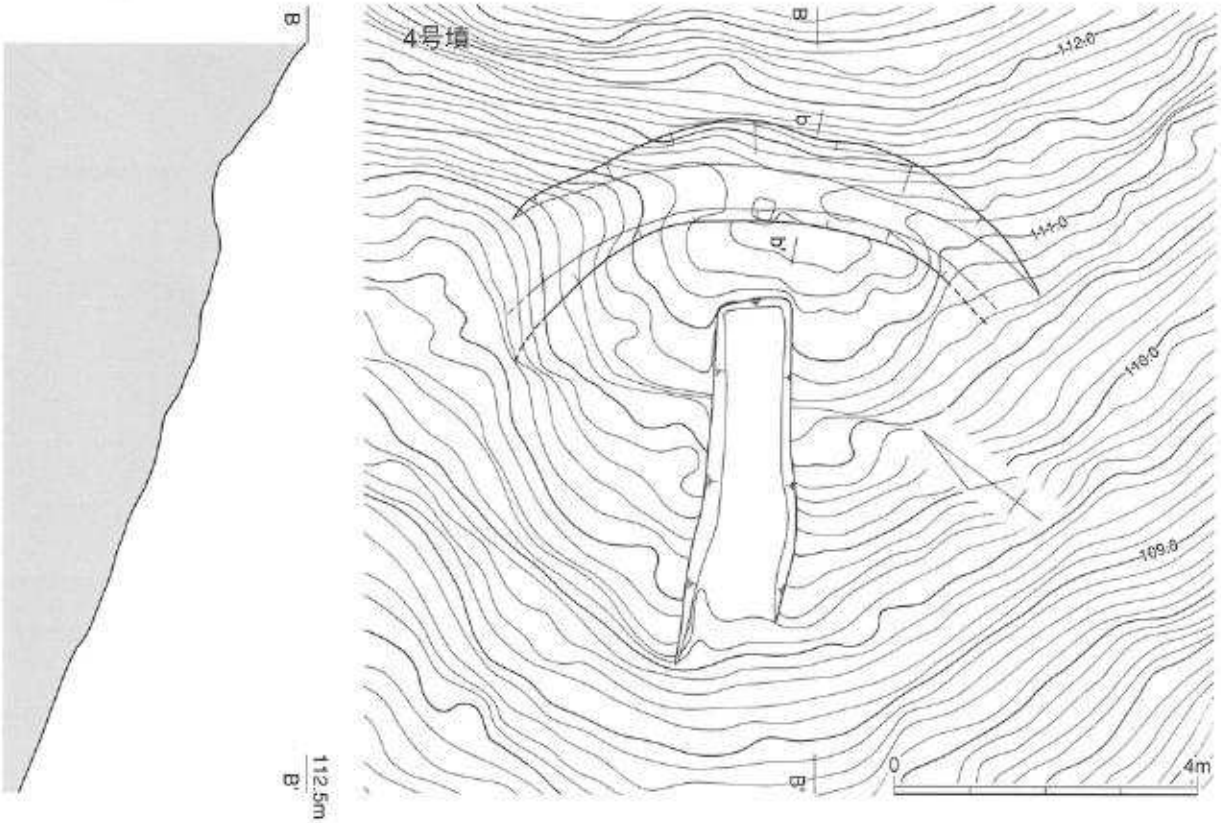

A
98.1m
A'
1
1．10YR5/2 灰黄褐色 細砂
SD2030
SD2025
SD2018
B
97.5m
B'
1
2
1．10YR3/4 暗褐色 中砂～粗砂
2．10YR6/3 にぶい黄褐色
粗砂 中礫以下の礫を多く含む
SD2031
C
96.8m
C'
2
1
2
1．10YR3/2 黒褐色 砂礫 巨礫以下の角礫を多量に含む
2．10YR4/2 灰黄褐色 礫まじり細砂 礫は2cm以下
SD2014
SD2017
D
98.1m
D'
0
4m
2
1
1．10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫 淘汰の悪い極細砂～粗砂
2．基本的には1と同一層だが、酸化鉄が集積
0
50cm

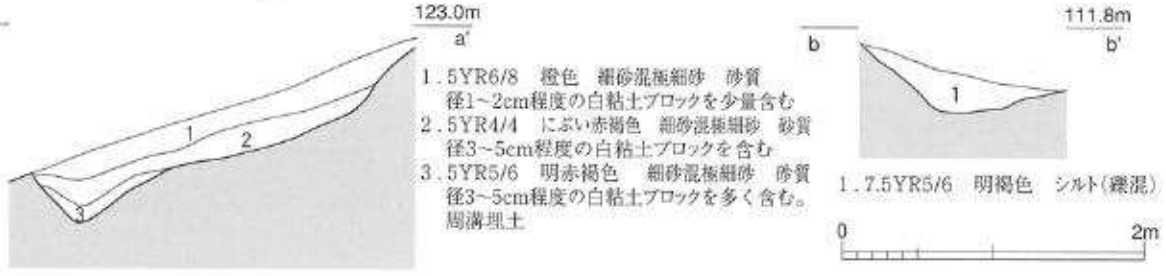
図版40　横田北古墳群（1）



横田北古墳群全体図

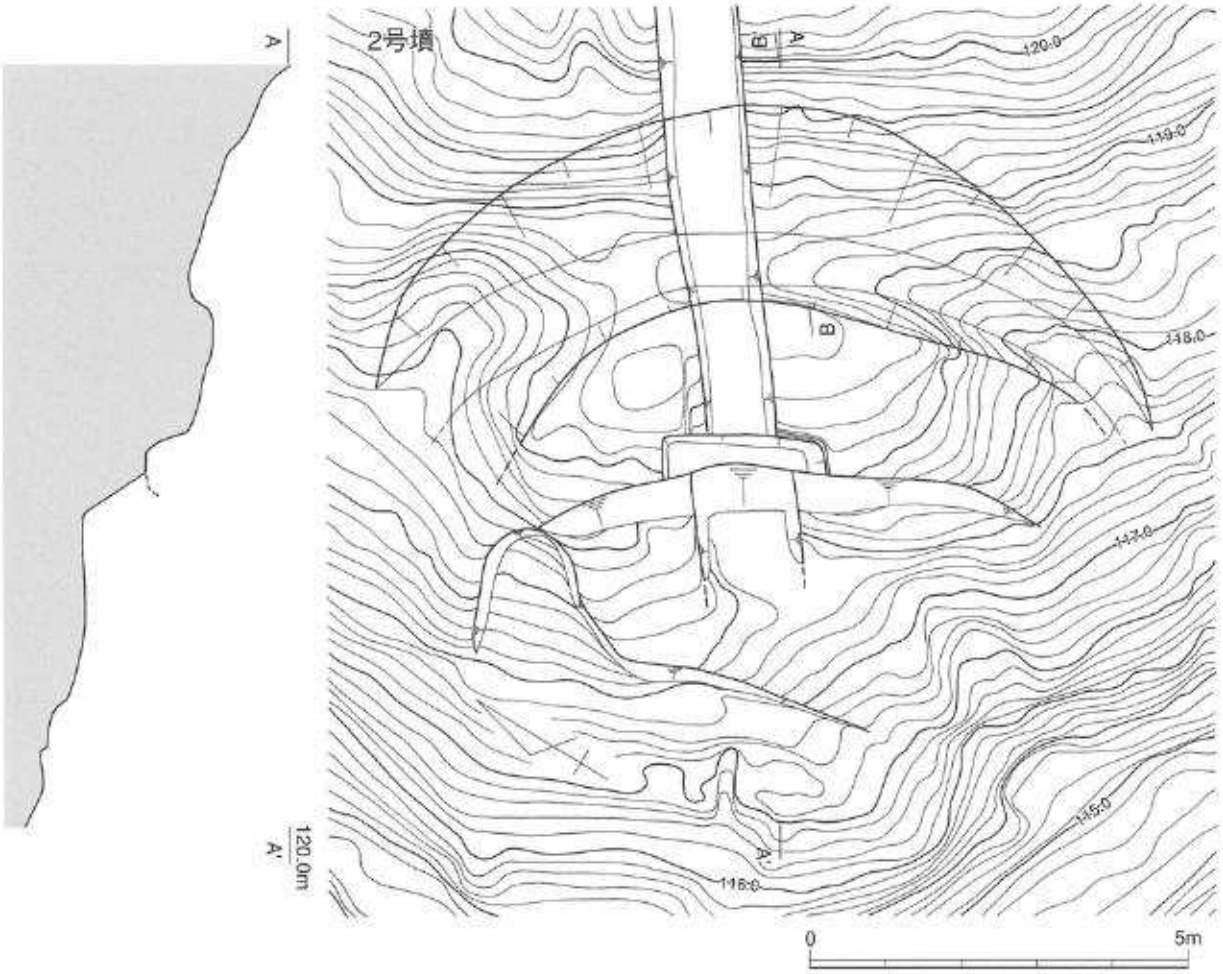

1号墳
A
A'
123.0m
123.0
122.0
121.0
120.0
119.0

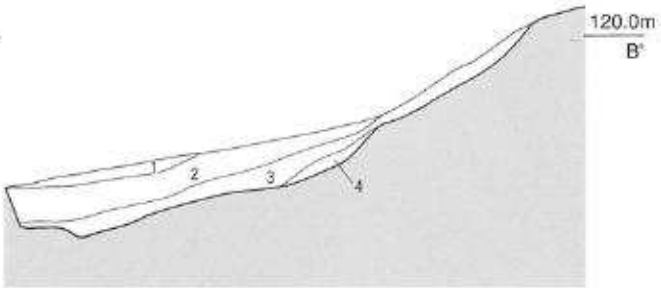

4号墳
B
B'
112.5m
112.0
111.0
110.0
109.0
0
4m


a
123.0m
a'
1
2
3
1.5YR6/8 橙色 細砂混極細砂 砂質
径1~2cm程度の白粘土ブロックを少量含む
2.5YR4/4 にぶい赤褐色 細砂混極細砂 砂質
径3~5cm程度の白粘土ブロックを含む
3.5YR5/6 明赤褐色 細砂混極細砂 砂質
径3~5cm程度の白粘土ブロックを多く含む。
周溝埋土
b
111.8m
b'
1
1.7.5YR5/6 明褐色 シルト(礫混)
0
2m

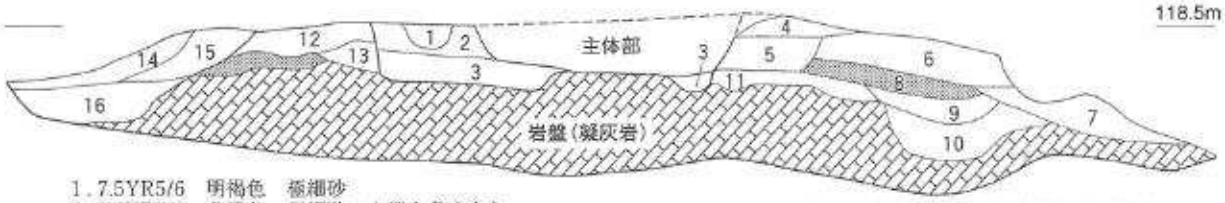
1号墳・4号墳

図版42　横田北古墳群（3）



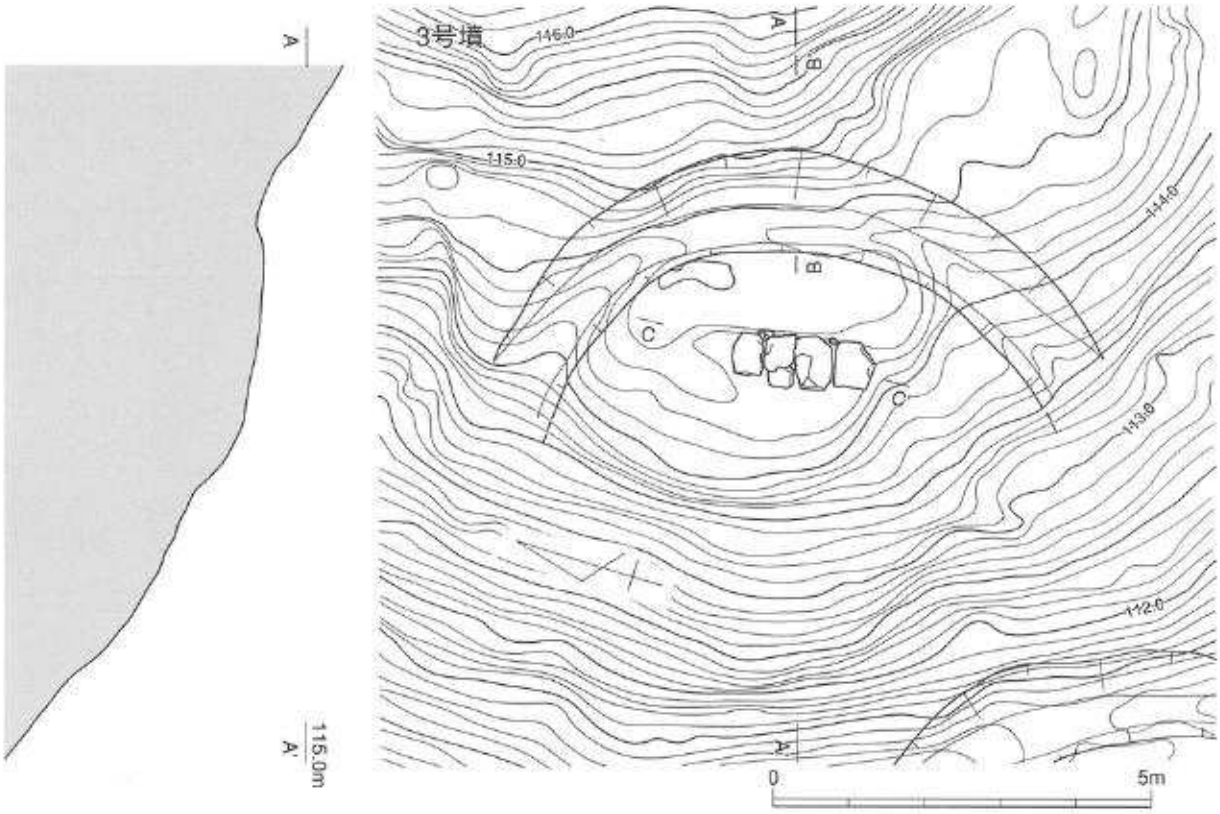


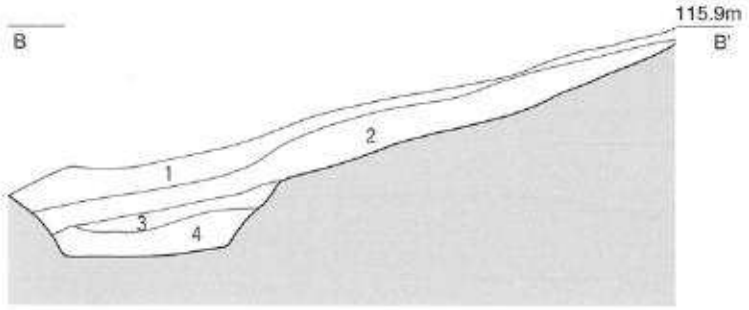
1．7.5YR6/4	にぶい橙色	細砂混極細砂	やや粘性	径1cm程度の礫わずかに含む
2．7.5YR5/6	明褐色	粗砂～細砂混極細砂	やや粘性	径5～20mm程度の白色粘土ブロックを少量含む
3．7.5YR4/4	褐色	細砂混極細砂	やや粘性	径5～10mm程度の白色粘土ブロックを少量含む
4．7.5YR4/6	褐色	細砂混極細砂	砂質	径5～10mm程度の白色粘土ブロックを少量含む
5．5YR5/6	明赤褐色	極細砂	やや粘性	径1～5cm程度の白色粘土ブロックを多く含む



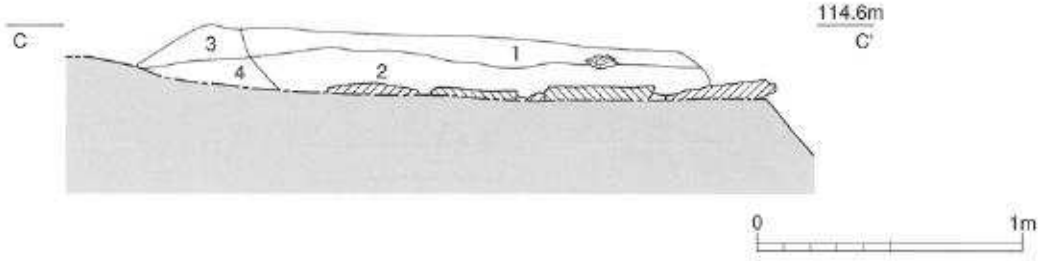
1．7.5YR5/6	明褐色	極細砂	
2．7.5YR7/8	黄橙色	極細砂	小礫を多く含む
3．7.5YR6/6	橙色	極細砂	小礫～細礫多い棺内土（土玉出土）
4．7.5YR5/6	明褐色	極細砂	小礫混
5．7.5YR5/6	明褐色	極細砂	大礫含む
6．7.5YR6/8	橙色	極細砂	中礫含む（少量）
7．7.5YR5/6	明褐色	極細砂	中礫含む（少量）
8．7.5YR4/4	褐色	極細砂	（古墳造営前の旧表土）
9．7.5YR6/6	橙色	極細砂	非常に軟い、根攪乱か？
10．7.5YR5/6	明褐色	砂礫	角礫、根による岩盤の風化部か？
11．7.5YR6/6	橙色	砂礫	（岩盤の風化部）
12．4と同じ			
13．5と同じ			
14．7.5YR6/6	橙色	極細砂	
15．7.5YR5/8	明褐色	シルト質極細砂	
16．7.5YR6/8	橙色	シルト質極細砂	

2号墳





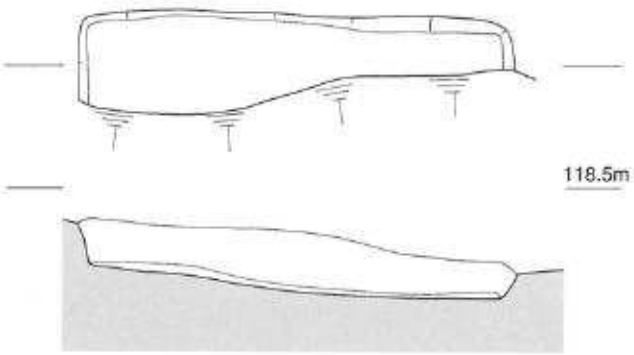
1．7.5YR5/8　明褐色　細砂～粗砂
2．7.5YR5/6　明褐色　細砂（粗砂少し混）
3．7.5YR9/6　褐色　　極細砂～細砂
4．7.5YR4/5　にぶい黄褐色　シルト（風化岩盤、灰混）



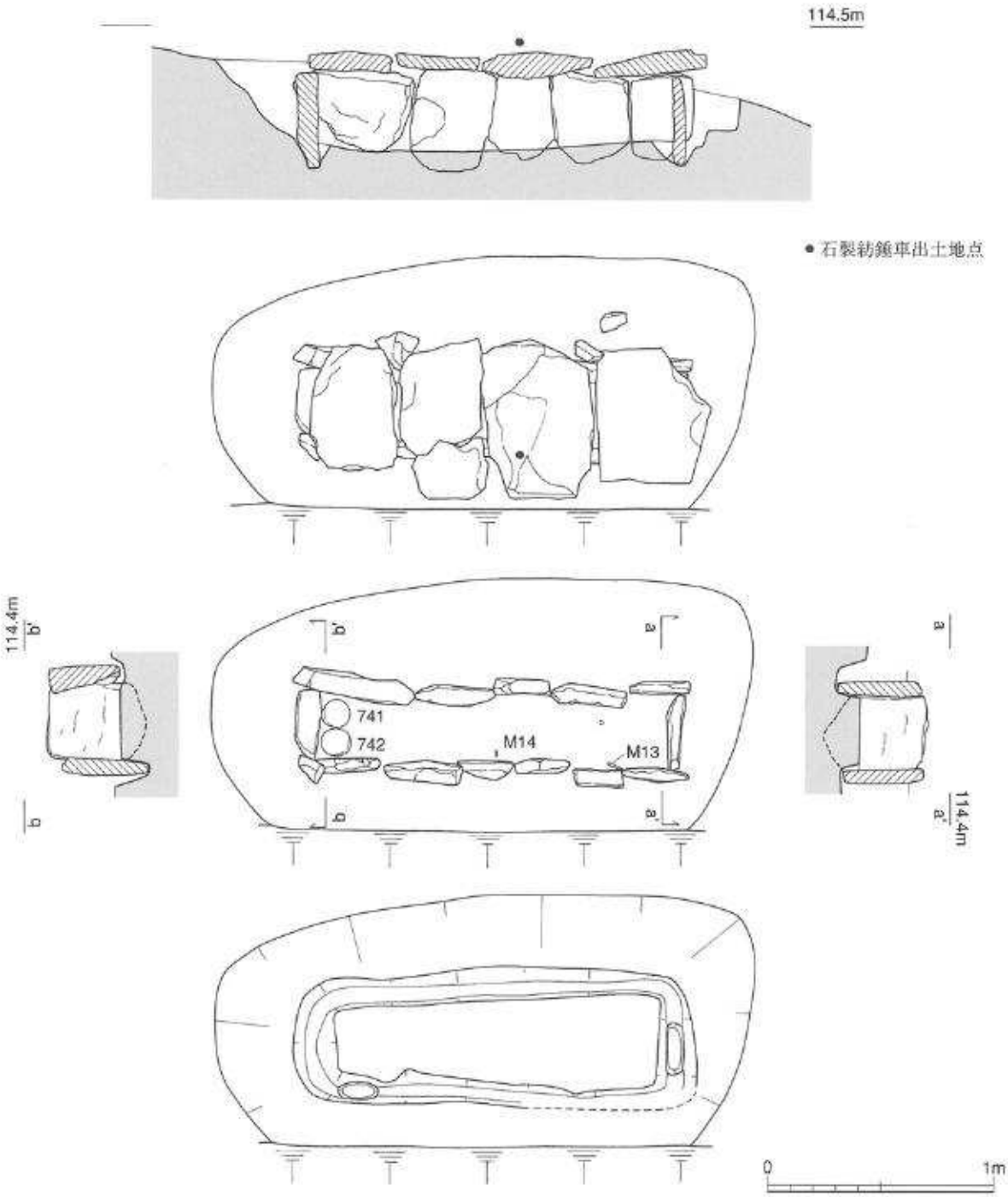
1．7.5YR6/8　橙色　　細砂混極細砂　砂質　径0.5～1cm程度の白色粘土ブロックをわずかに含む
2．7.5YR5/8　明褐色　細砂混極細砂　砂質　径1～2cm程度の白色粘土ブロックを少量含む
3．7.5YR5/6　明褐色　細砂混極細砂　砂質　（墳丘盛土）
4．7.5YR5/6　明褐色　細砂混極細砂　砂質　径2～3cm程度の白色粘土ブロックを含む。（墳丘盛土）

図版44　横田北古墳群（5）

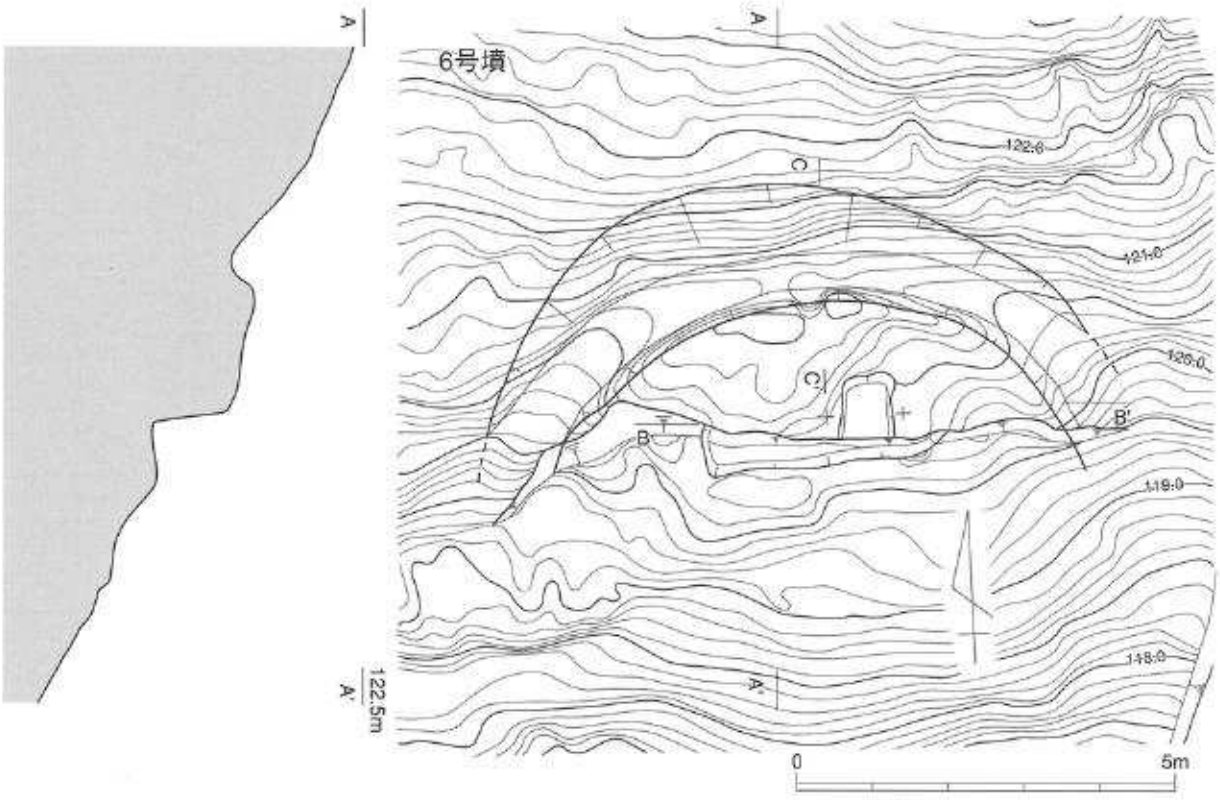
2号墳

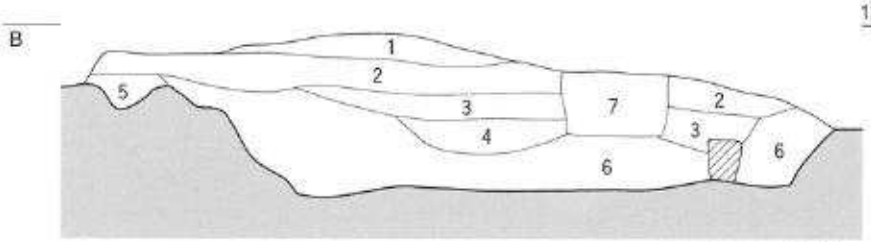


3号墳

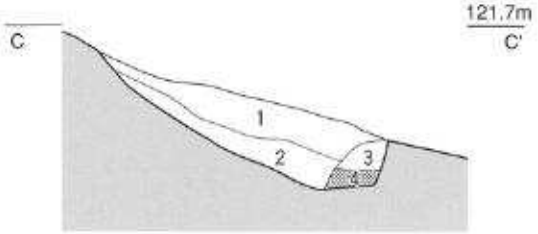


3号墳（2）

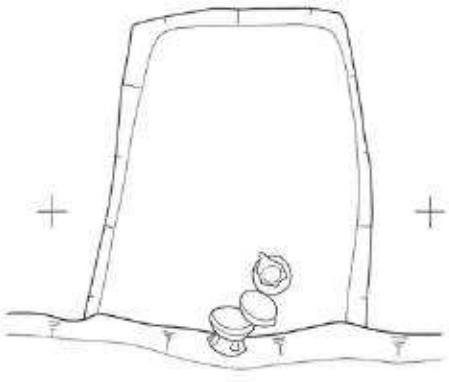




1. 7.5YR5/6 明褐色 礫混細砂
2. 7.5YR6/6 橙色 礫混細砂（ややしまりあり）
3. 7.5YR5/4 にぶい褐色 極細砂～細砂
4. 7.5YR4/4 褐色 極細砂、風化礫（20cm大）含む
5. 7.5YR7/6 橙色 礫混細砂
6. 7.5YR5/8 明褐色 極細砂、風化礫（20～30cm大）含む
7. 7.5YR4/6 褐色 礫混細砂



1. 7.5YR5/4 にぶい褐色 細砂
2. 7.5YR4/6 褐色 細砂、炭化物含む
3. 7.5YR5/8 明褐色 極細砂～細砂（墳丘盛り土）
4. 7.5YR5/6 明褐色 細砂、炭化物を含む旧表土



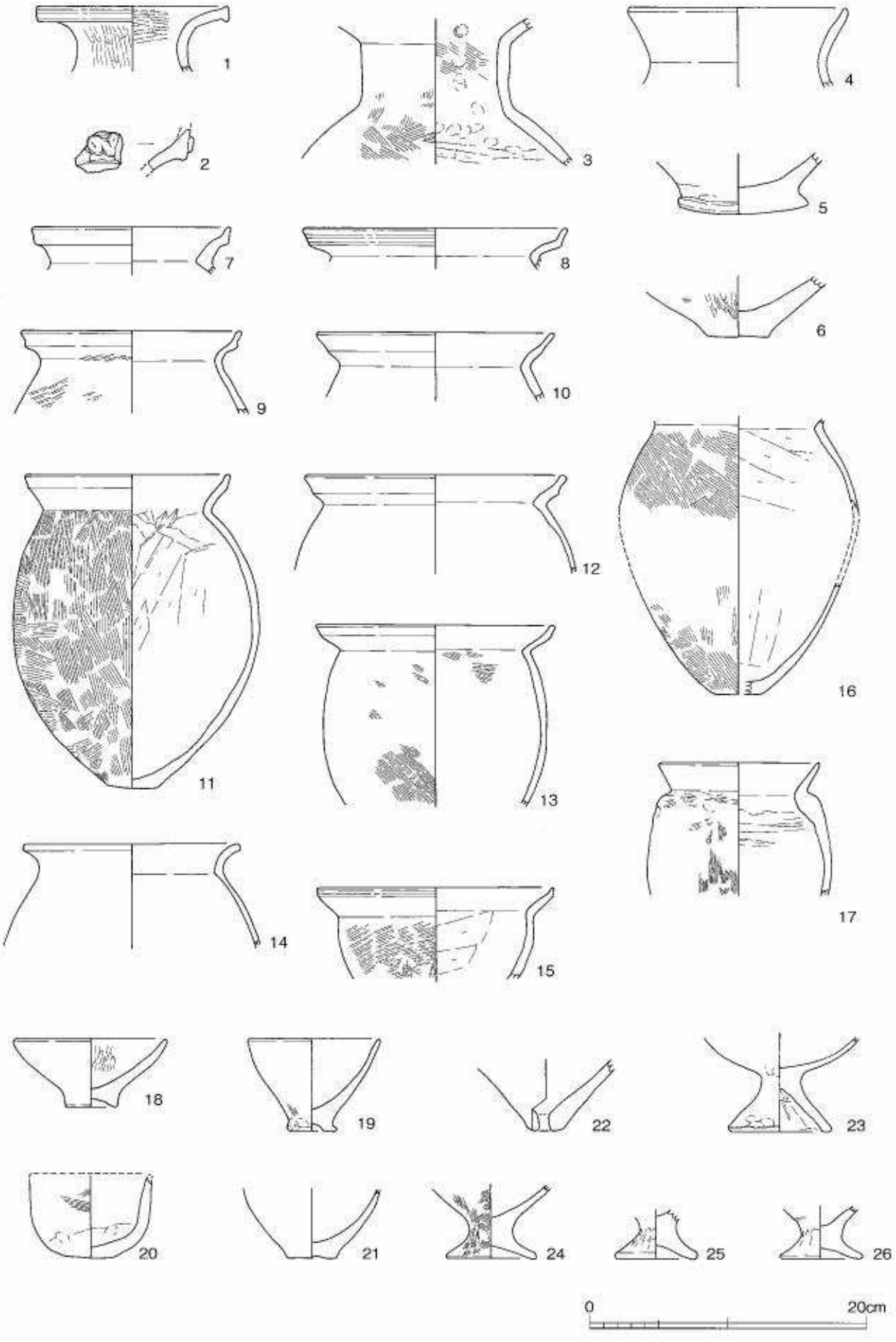
0 2m

0 1m

6号墳

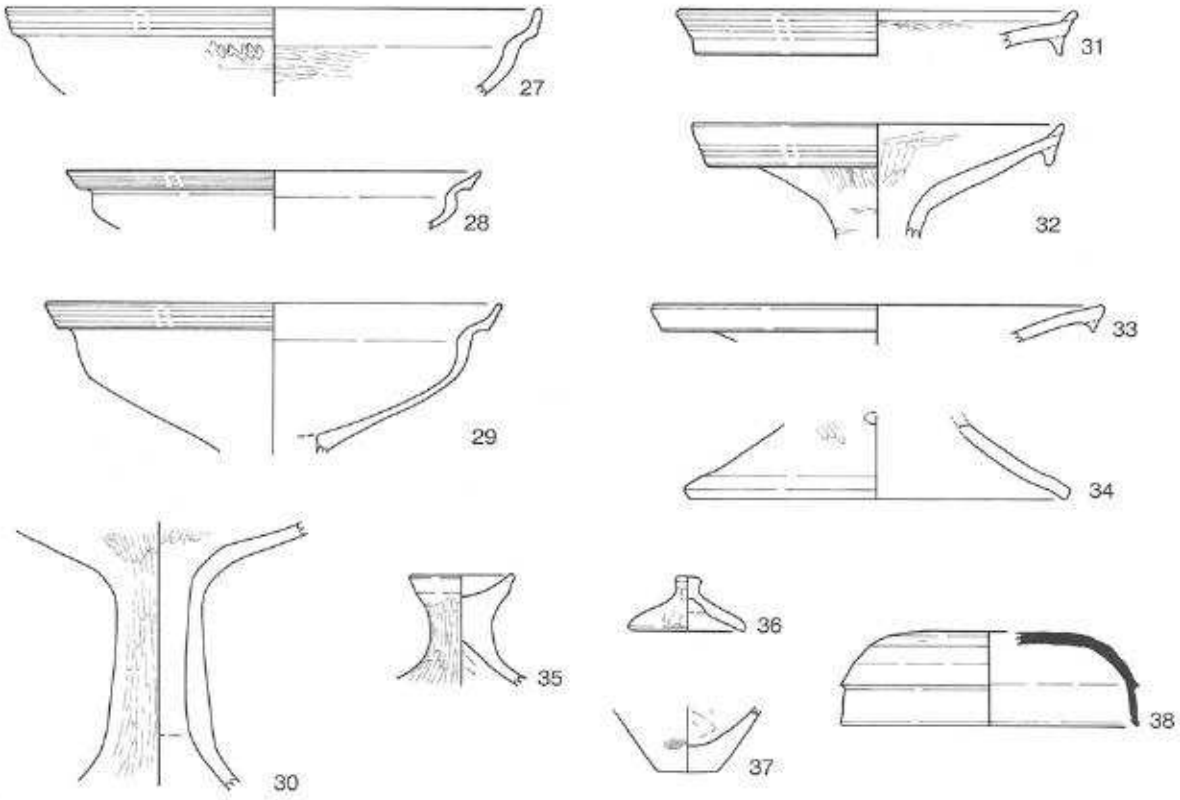
図版46　横田遺跡出土遺物（1）

SH1001

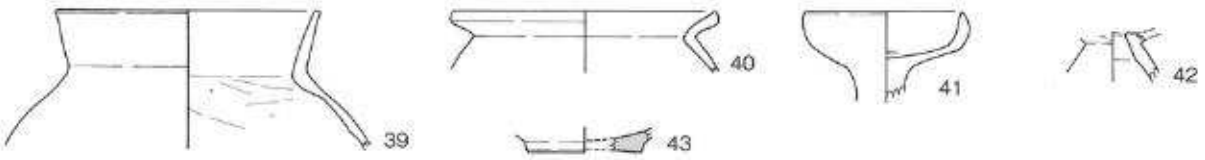


竪穴住居跡出土土器（1）

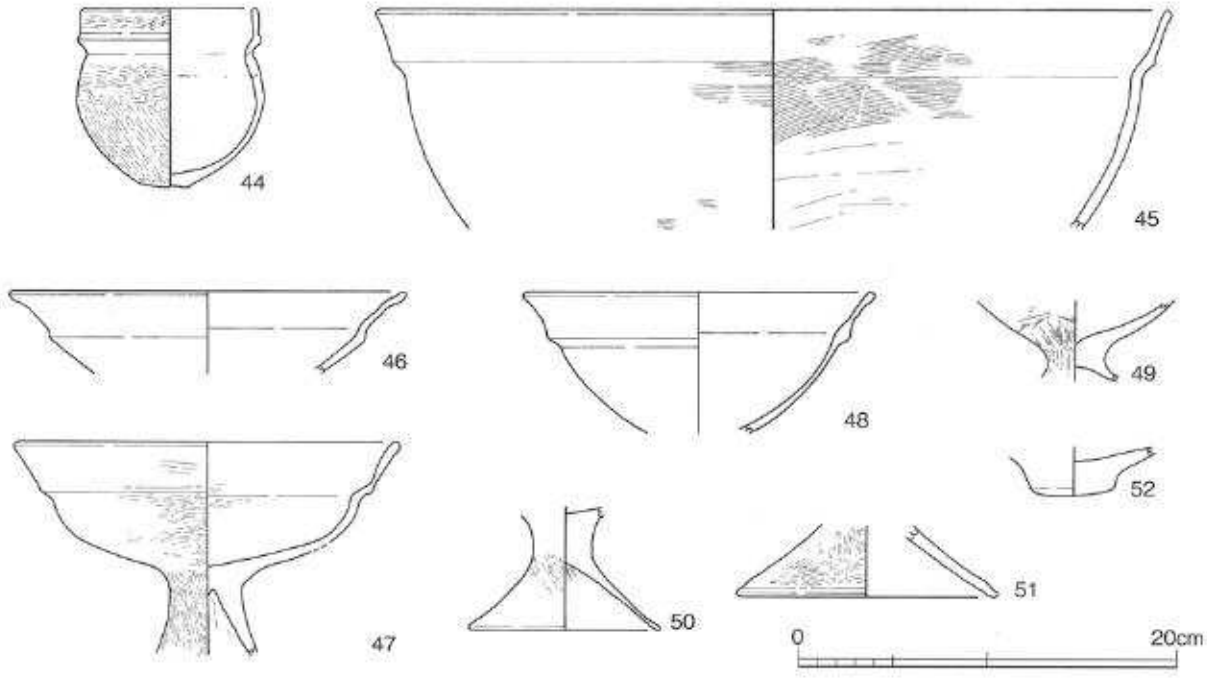
SH001



SH1005

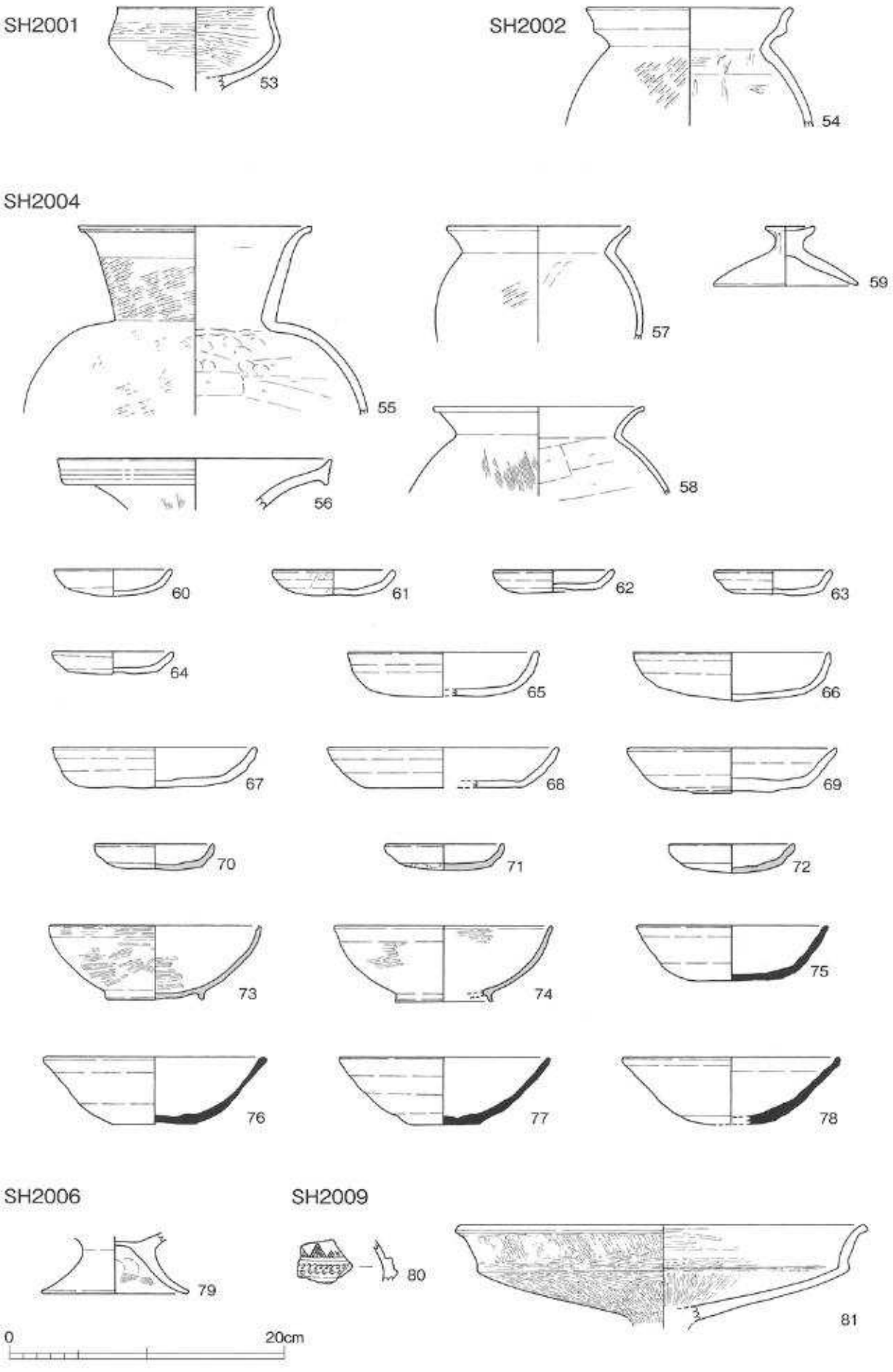


SH2003



竪穴住居跡出土土器（2）

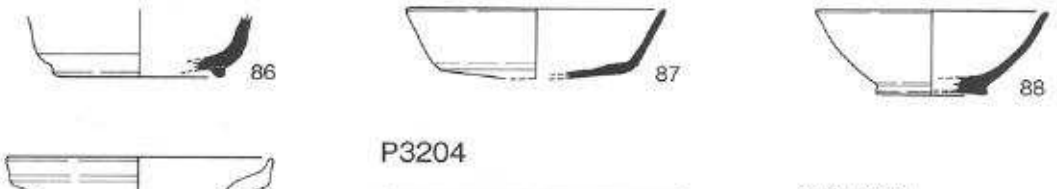
図版48　横田遺跡出土遺物（3）



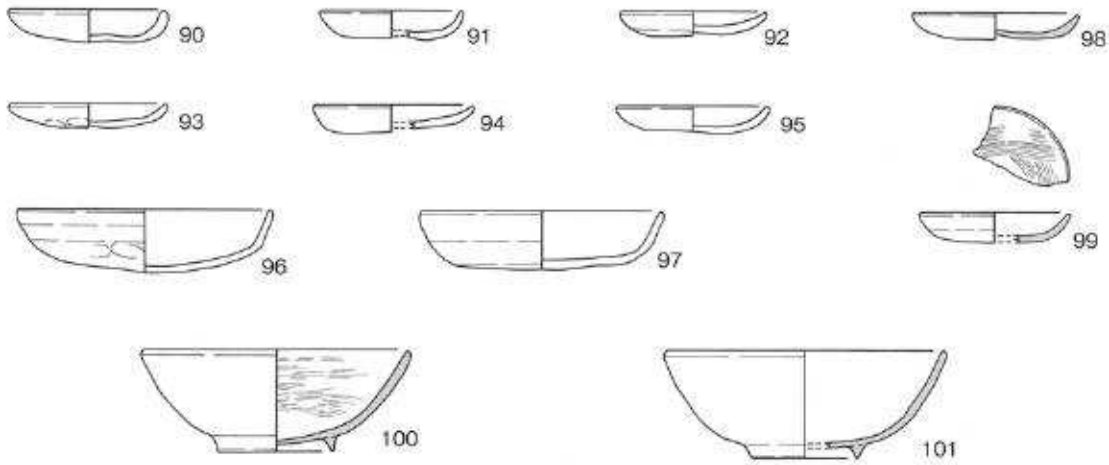
竪穴住居跡出土土器（3）

SB2002

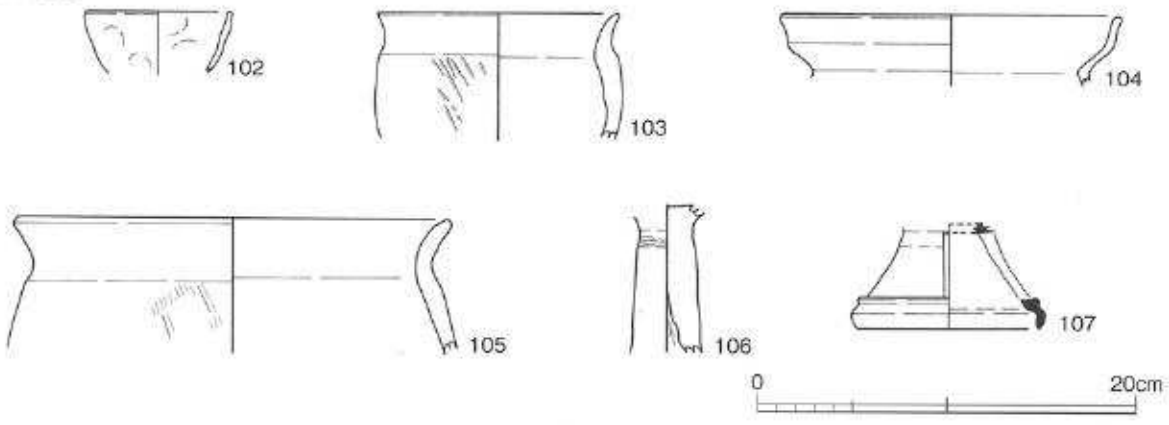
SB2004



SK1004

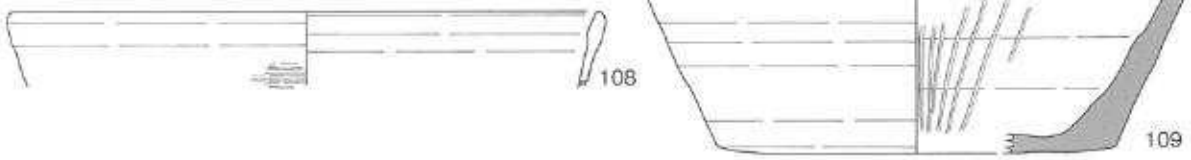


SK1008

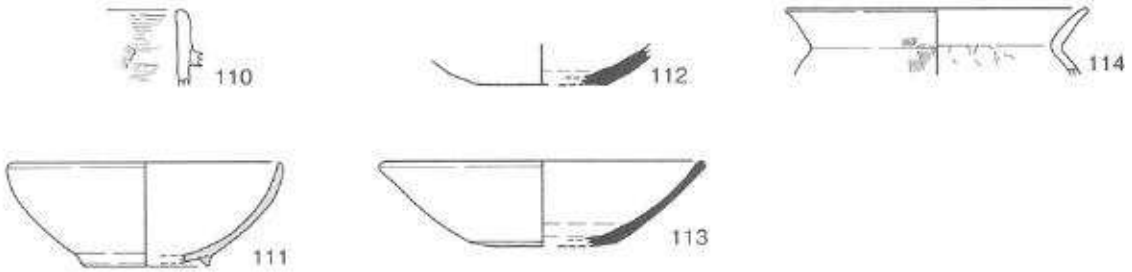


図版50　横田遺跡出土遺物（5）

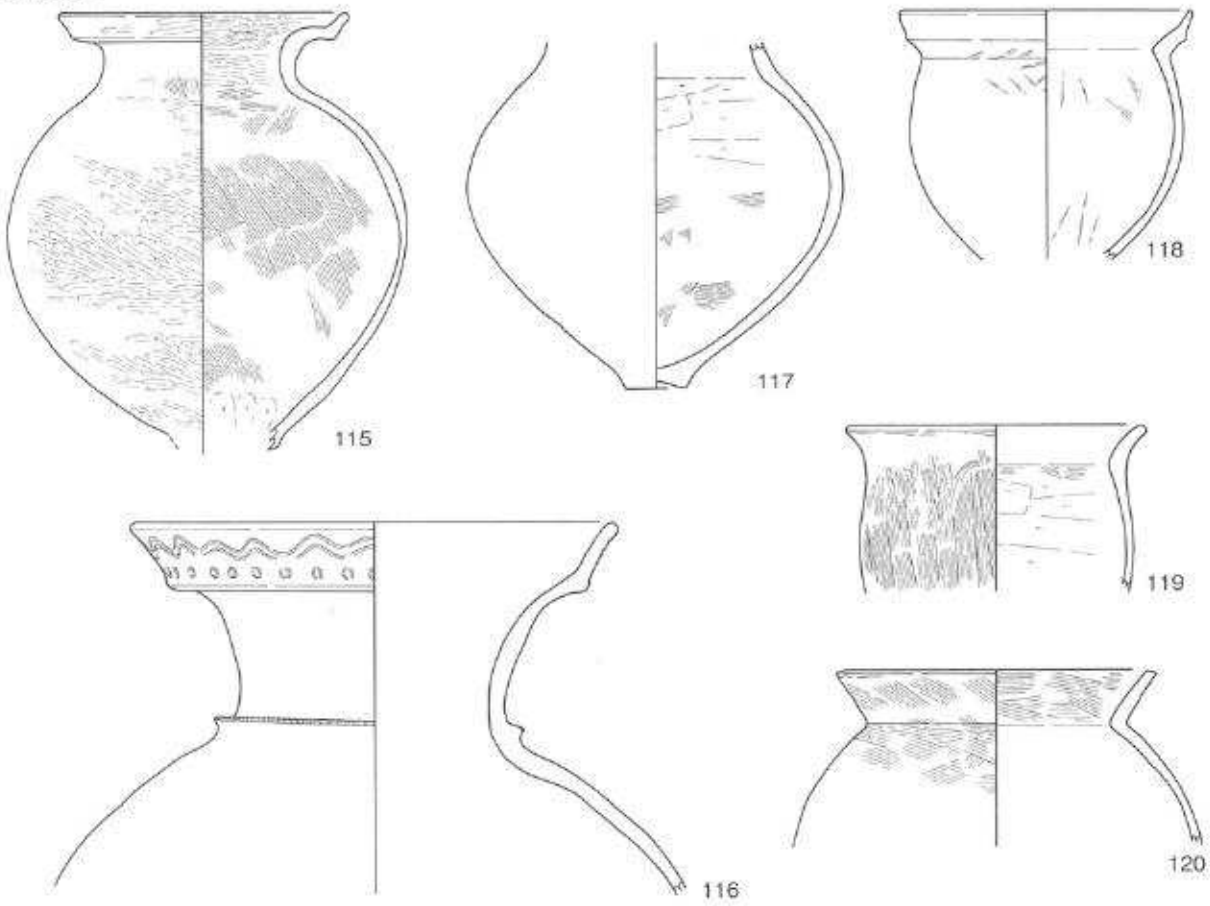
SK1010



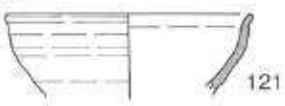
SK1012



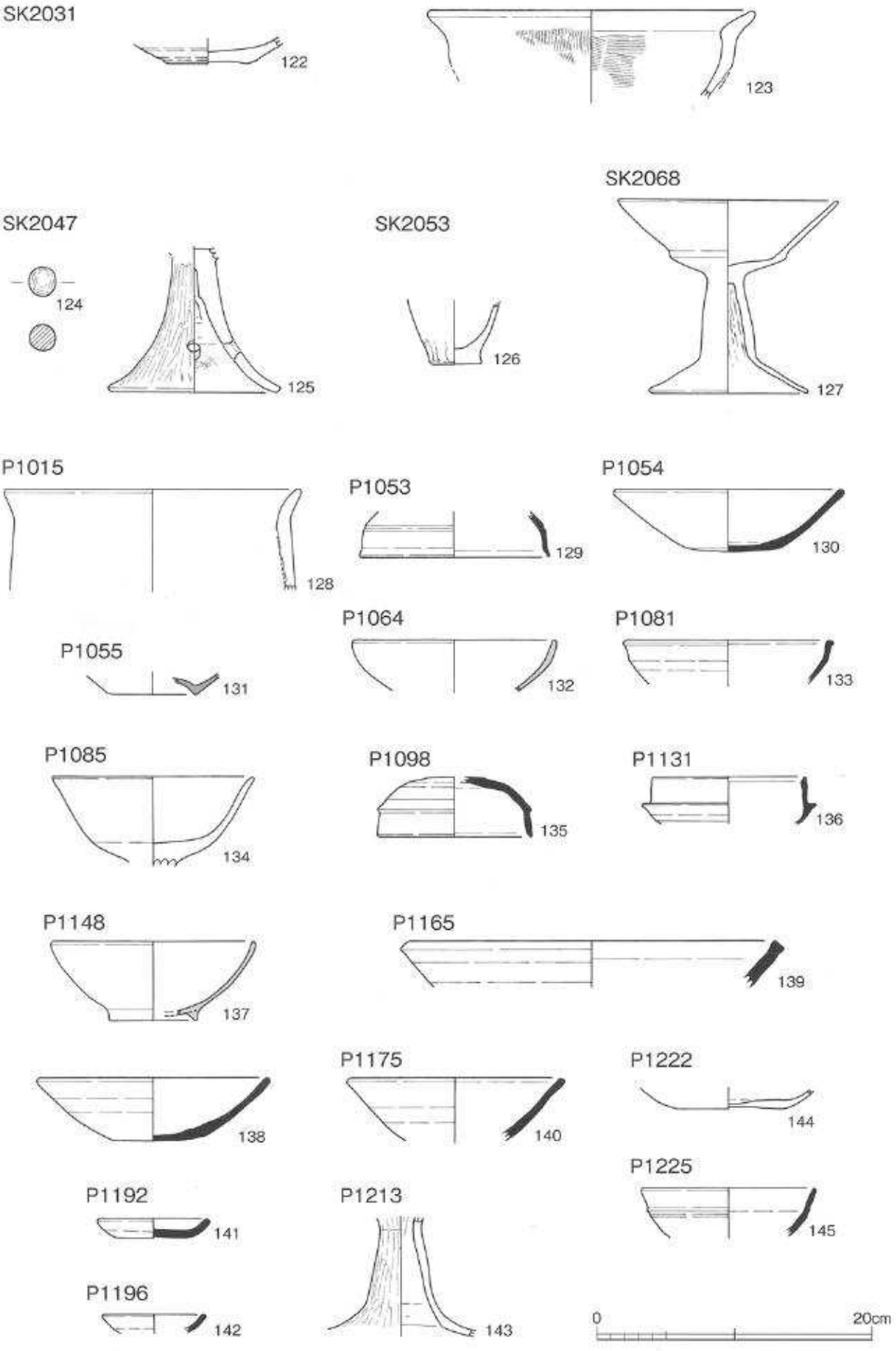
SK2004



SK2022

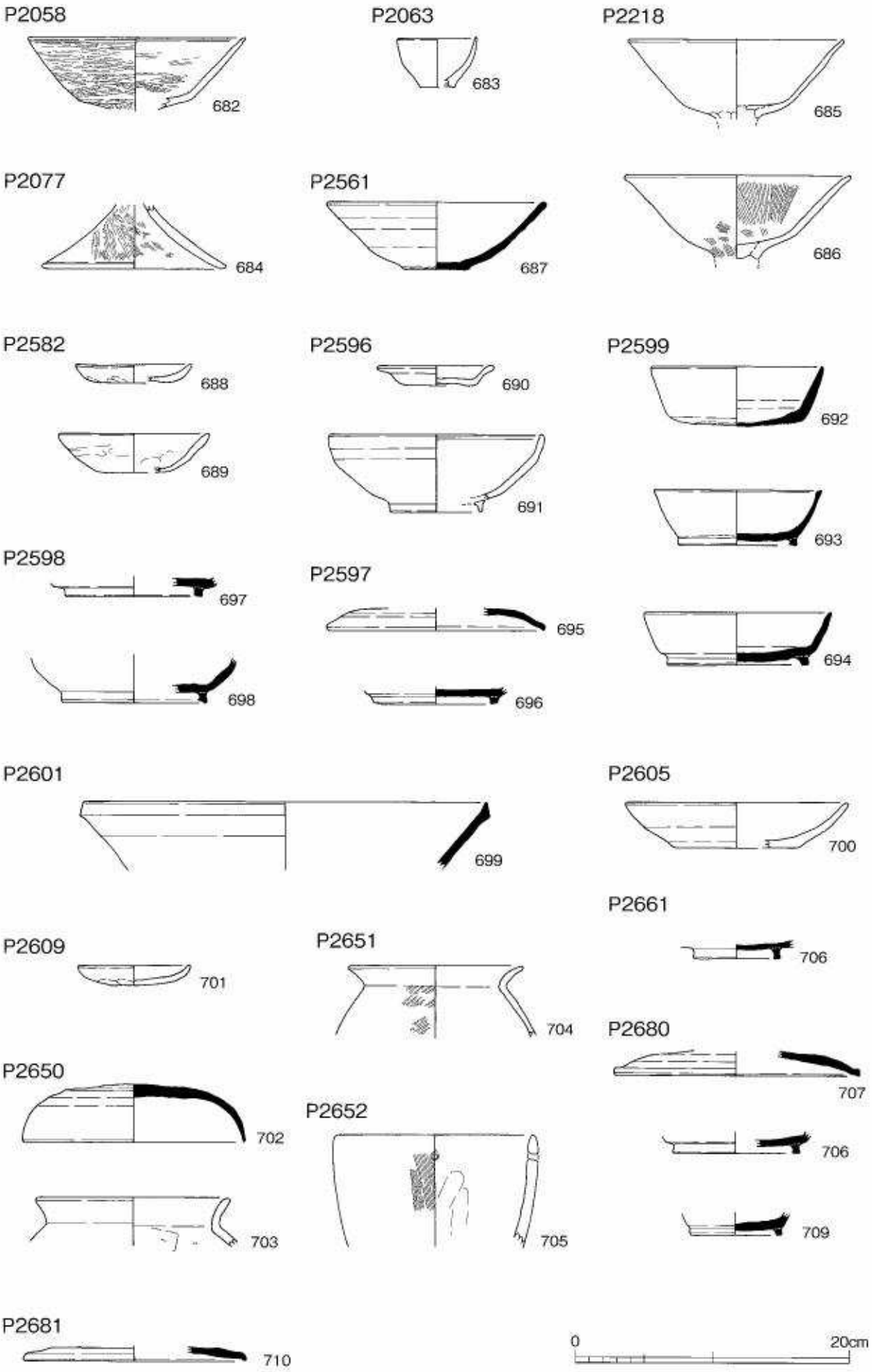


土坑出土土器（2）

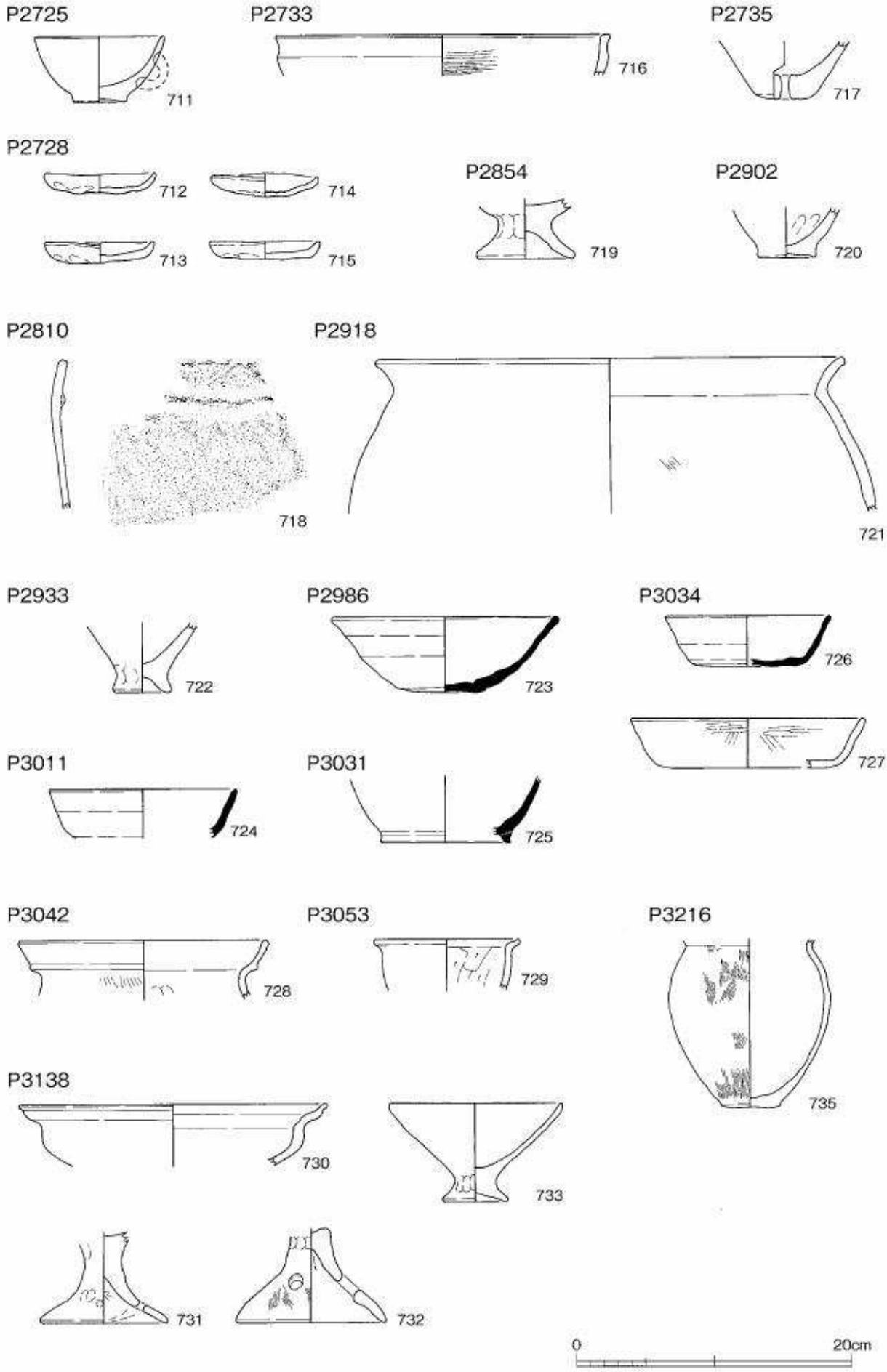

SK2031
122
123
SK2068
SK2047
124
125
SK2053
126
127
P1015
128
P1053
129
P1054
130
P1055
131
P1064
132
P1081
133
P1085
134
P1098
135
P1131
136
P1148
137
P1165
139
138
P1175
140
P1222
144
P1225
145
P1192
141
P1213
143
P1196
142
0
20cm

土坑・柱穴出土土器

図版52　横田遺跡出土遺物（7）



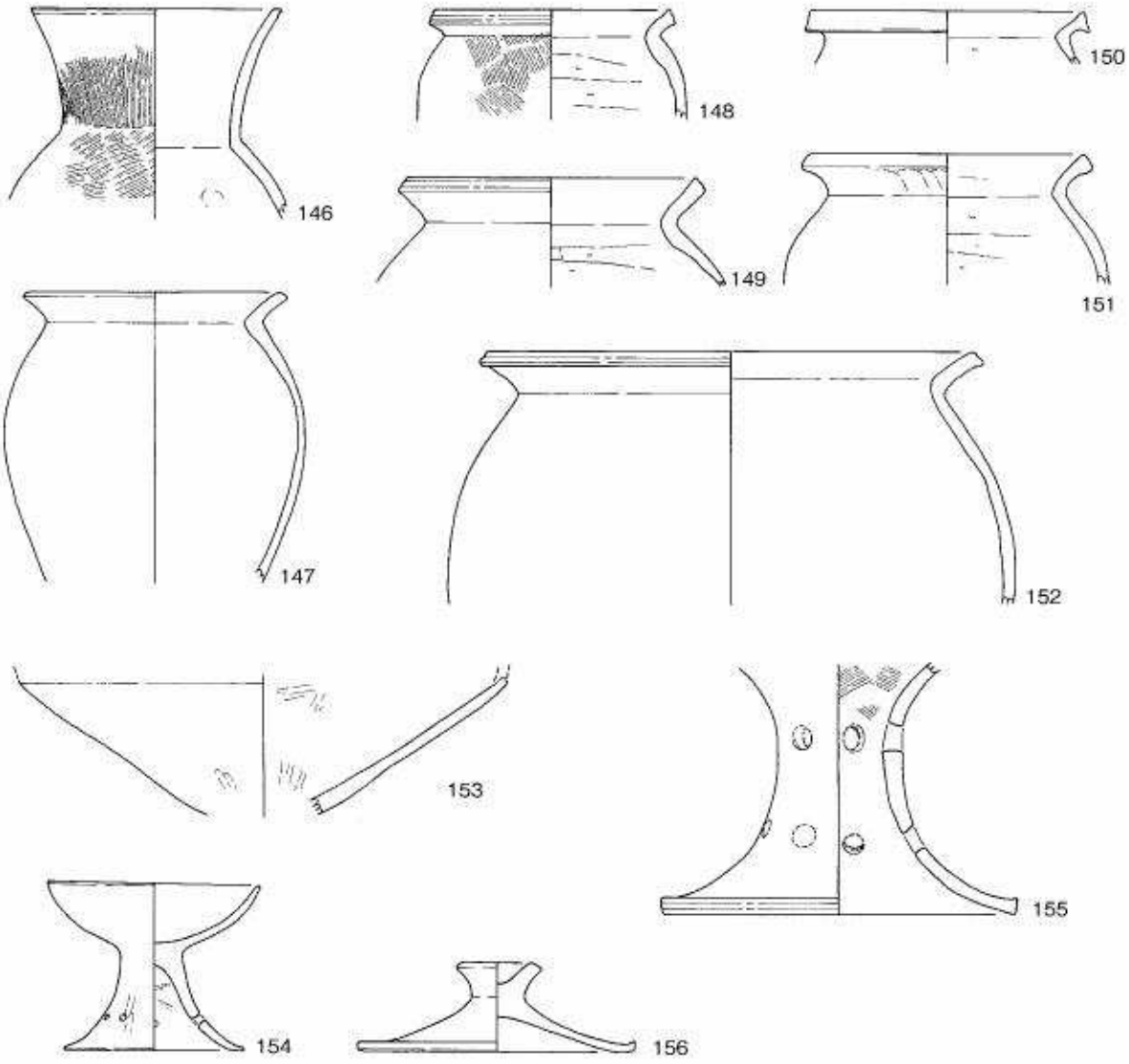
柱穴出土土器（2）


P2725
711
P2733
716
P2735
717
P2728
712
714
713
715
P2854
719
P2902
720
P2810
718
P2918
721
P2933
722
P2986
723
P3034
726
727
P3011
724
P3031
725
P3042
728
P3053
729
P3216
735
P3138
730
733
731
732
0
20cm

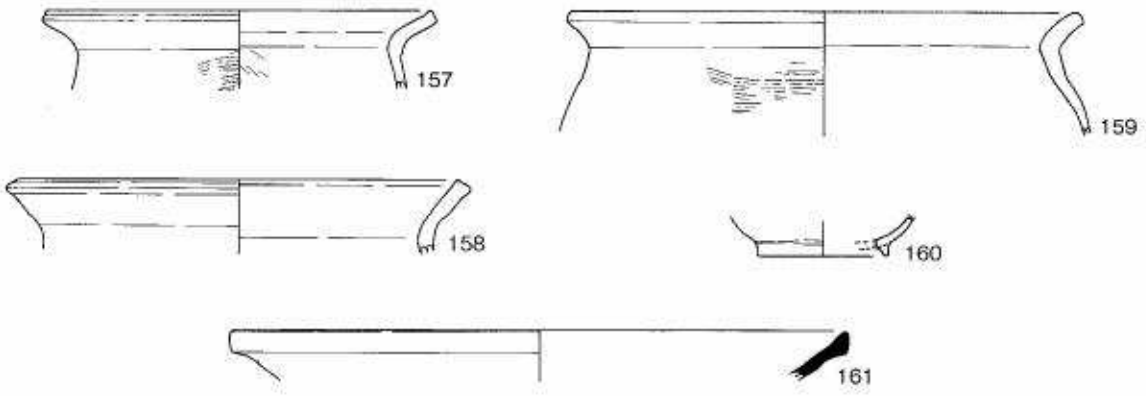
柱穴出土土器（3）

図版54　横田遺跡出土遺物（9）

SD1004



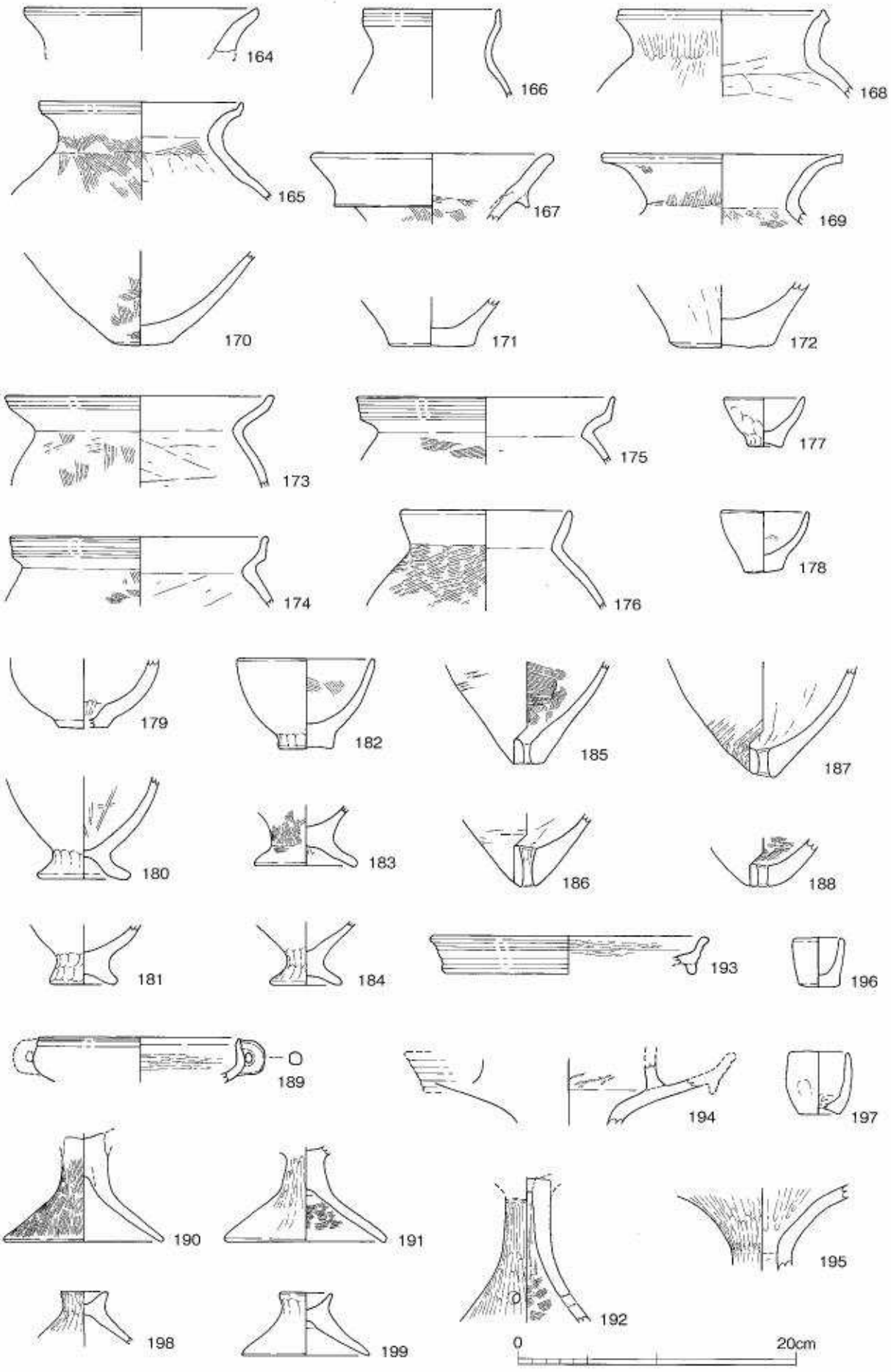
SD1007



SD1009

溝出土土器（1）

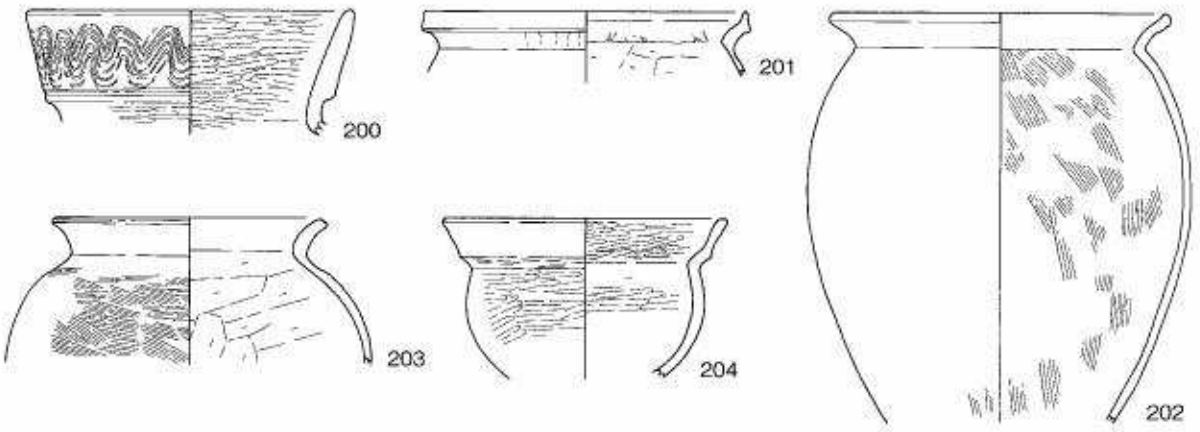
SD1009



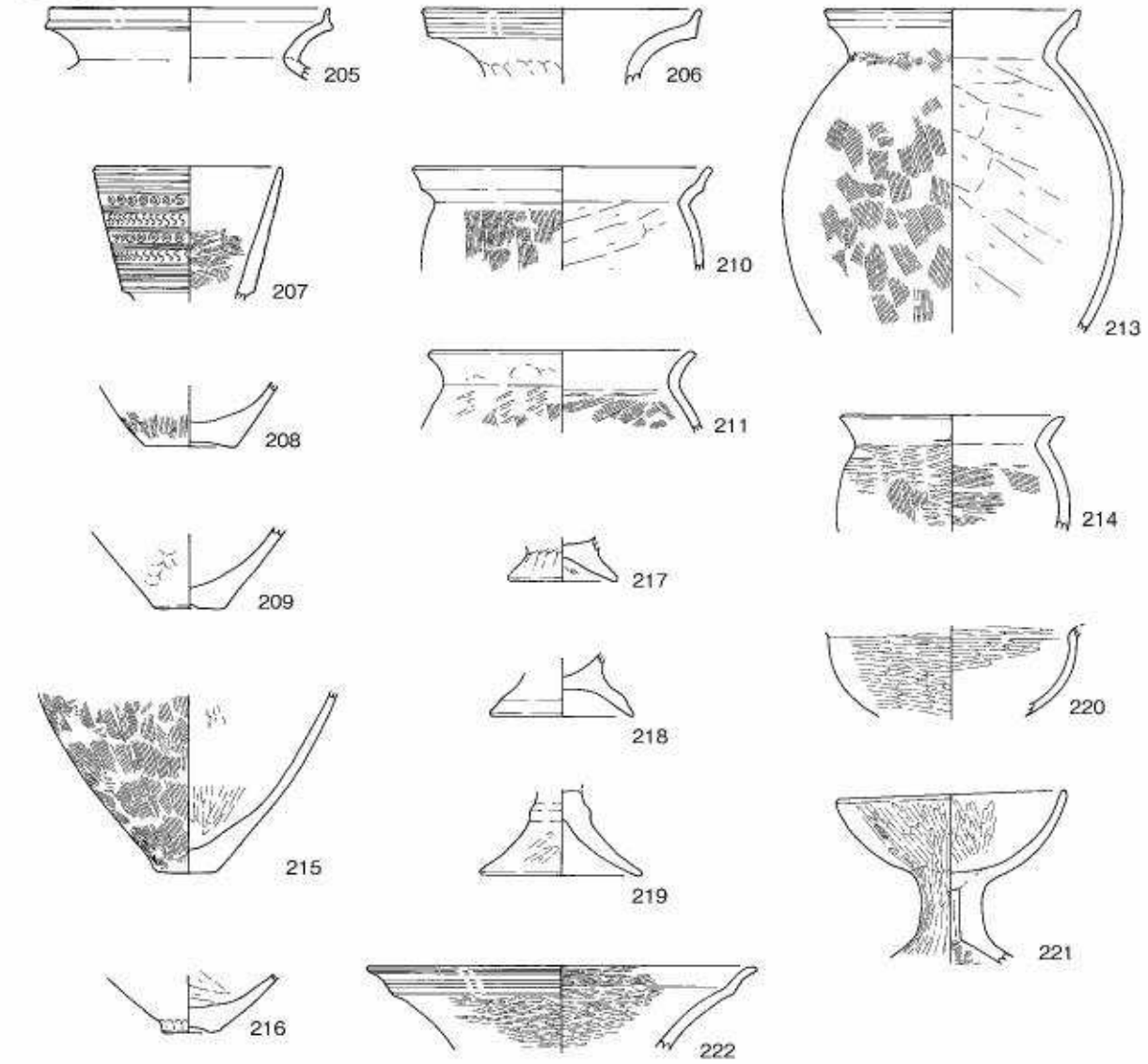
溝出土土器（2）

図版56　横田遺跡出土遺物（11）

SD1014

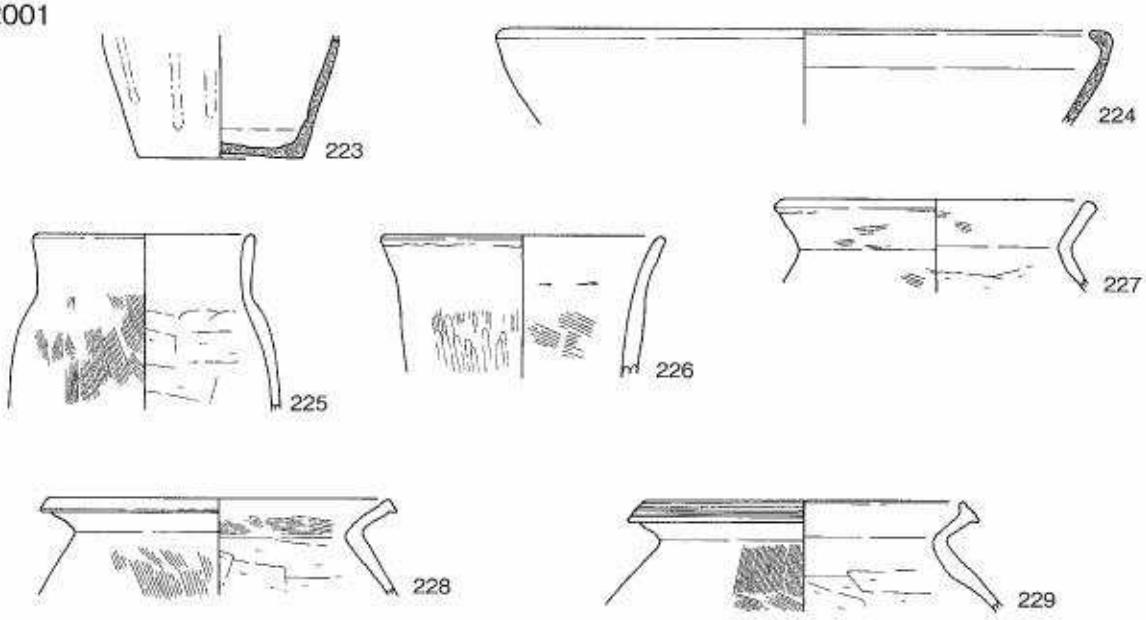


SD1015

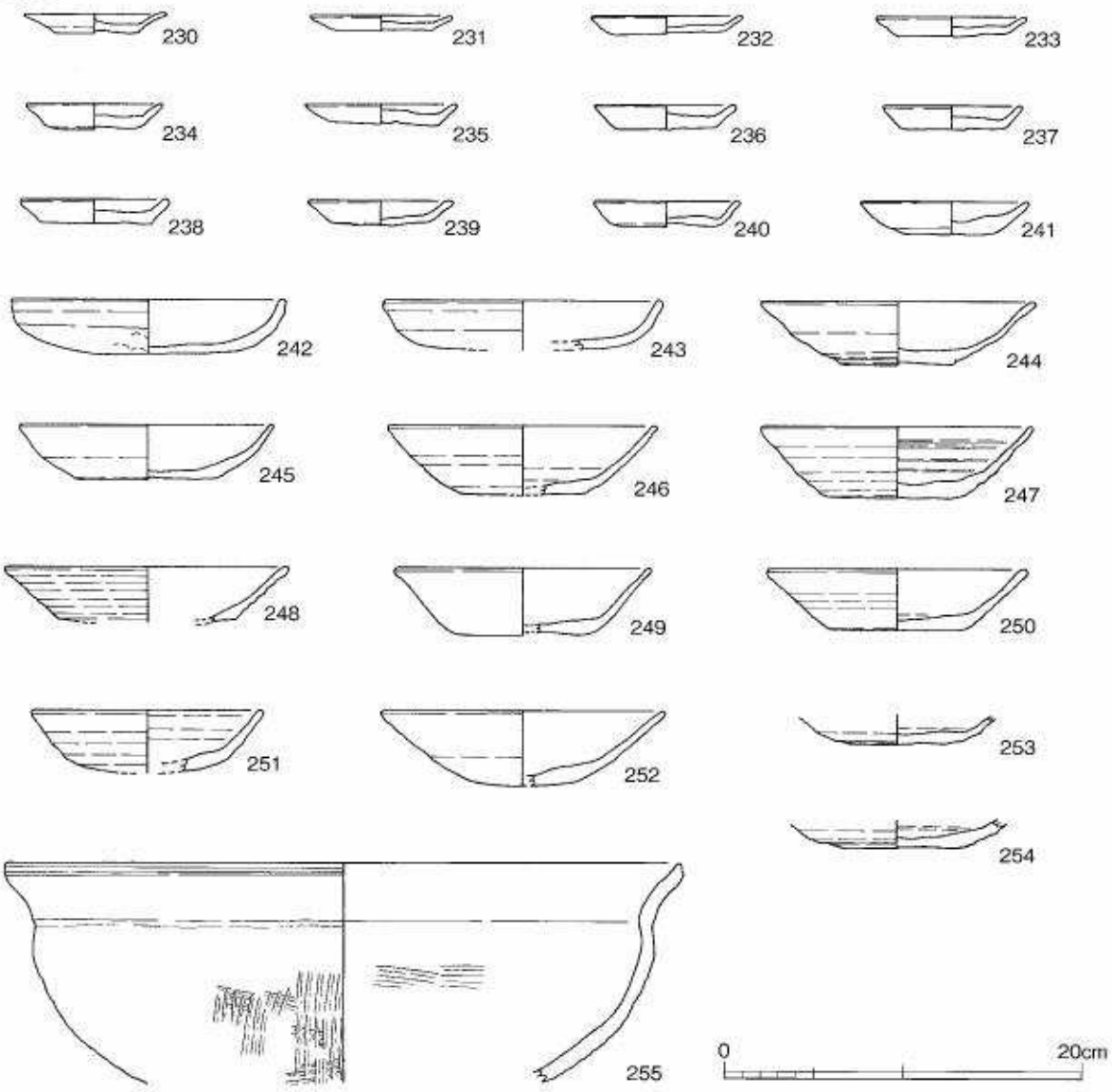


溝出土土器（3）

SD2001



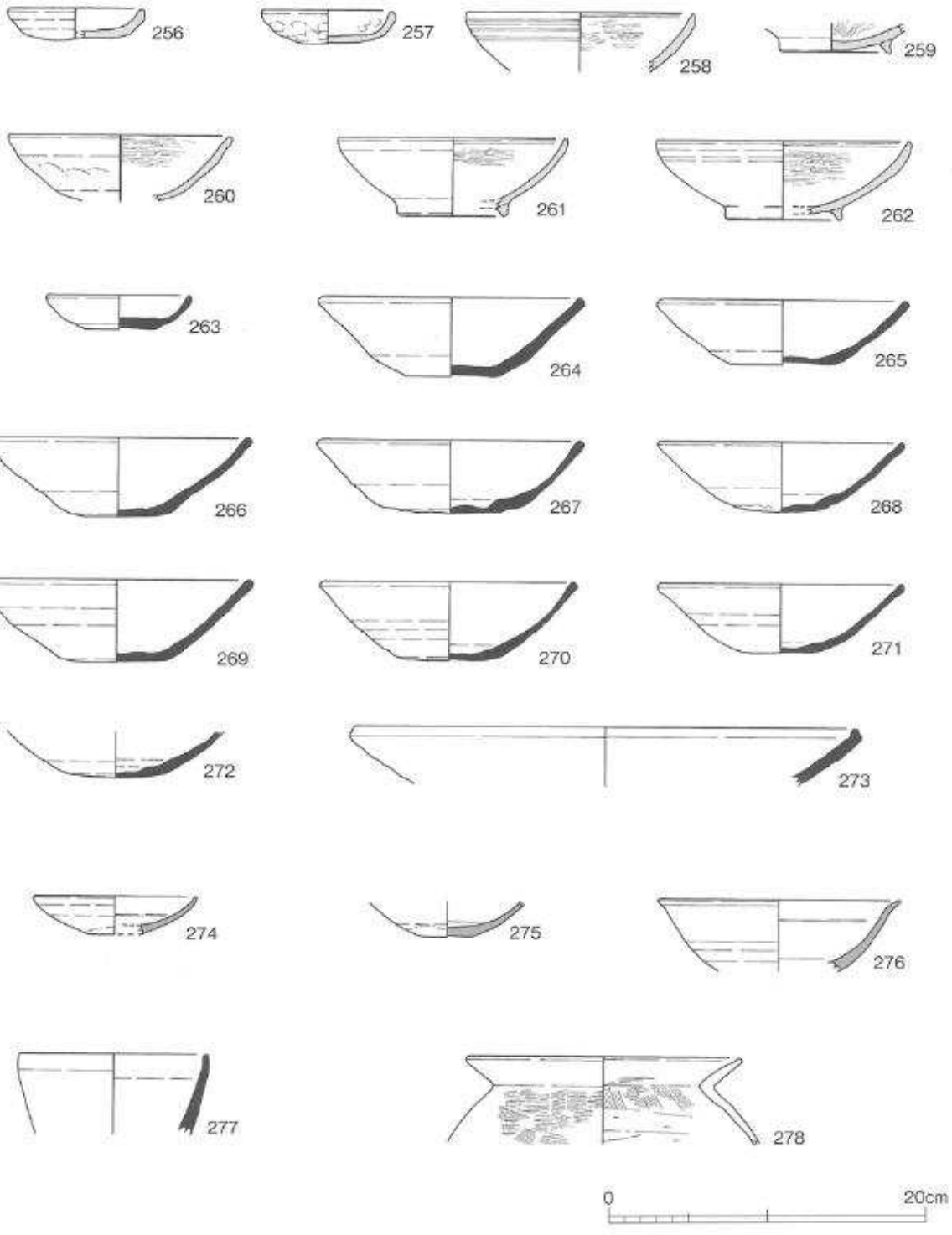
SD2008



溝出土土器（4）

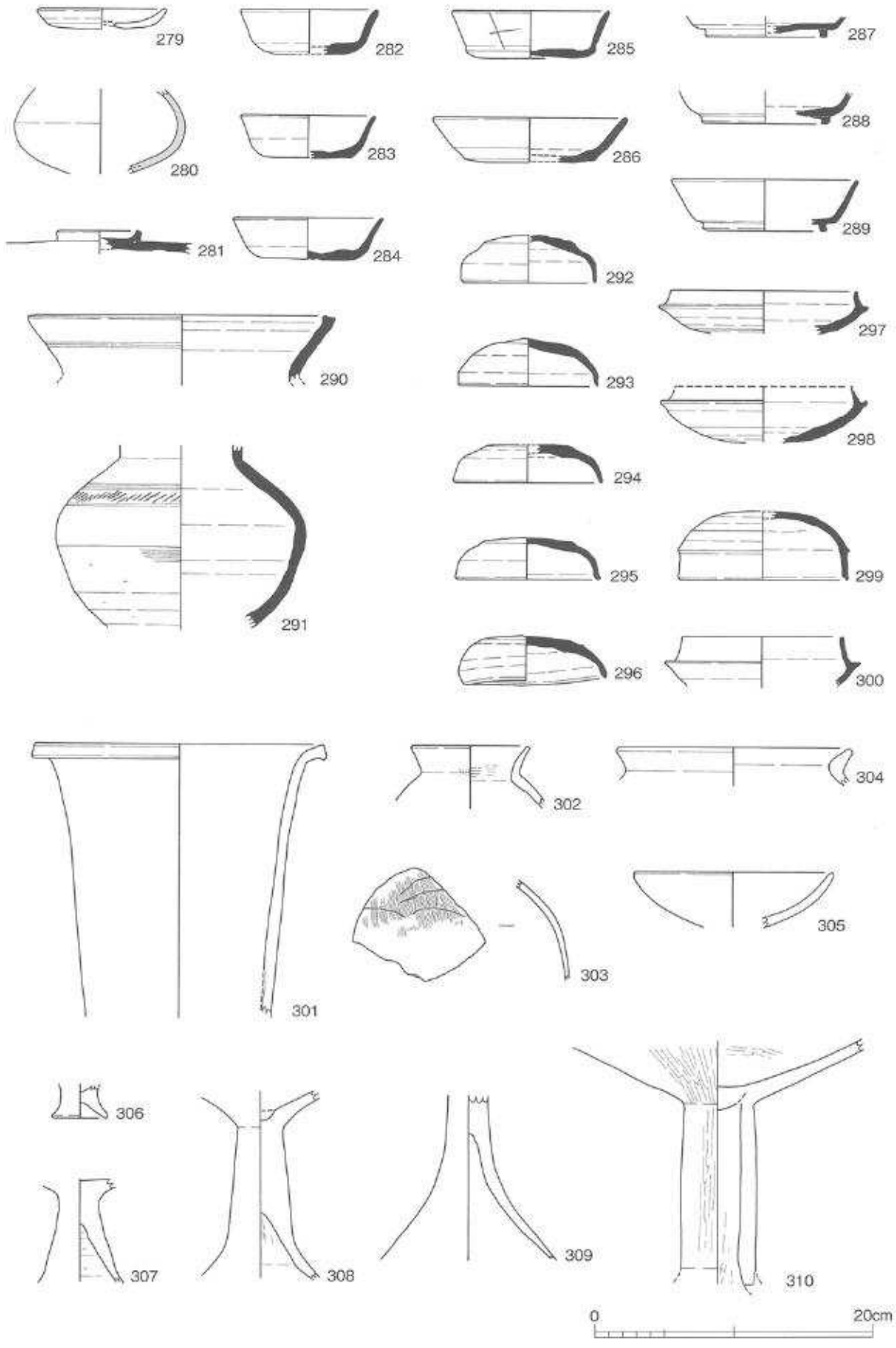
図版58　横田遺跡出土遺物（13）

SD2008



溝出土土器（5）

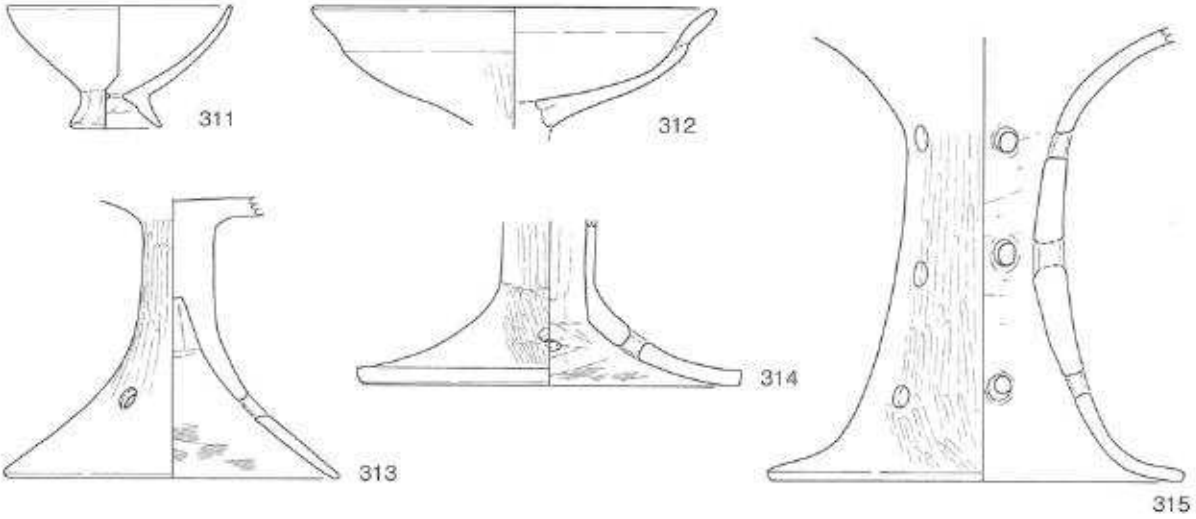
SD2014



溝出土土器（6）

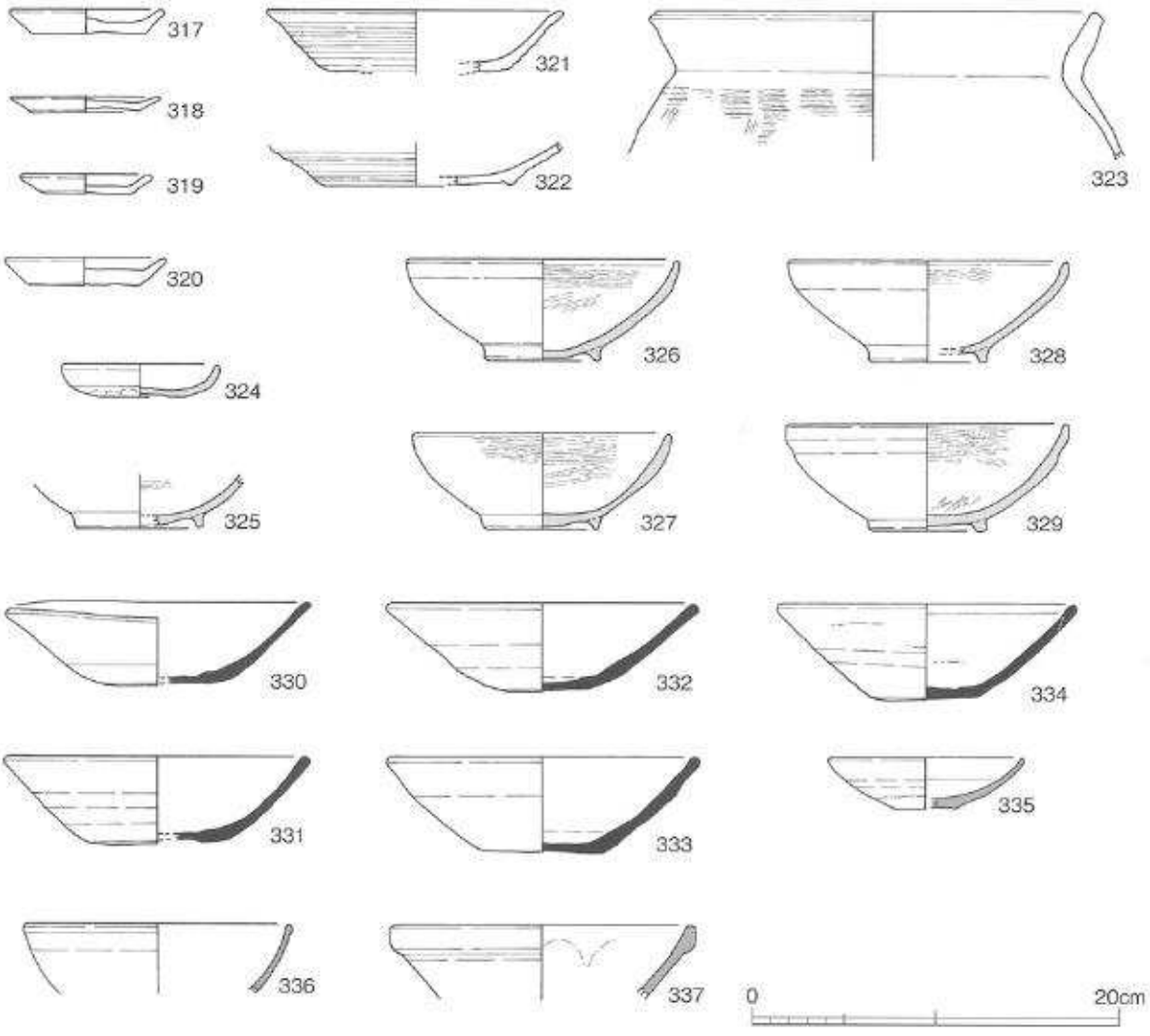
図版60　横田遺跡出土遺物（15）

南側流路



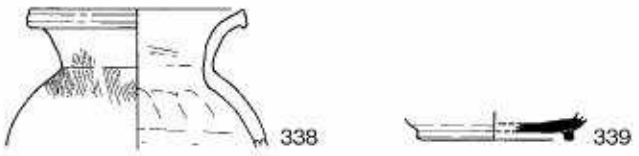
北側流路

SX2002

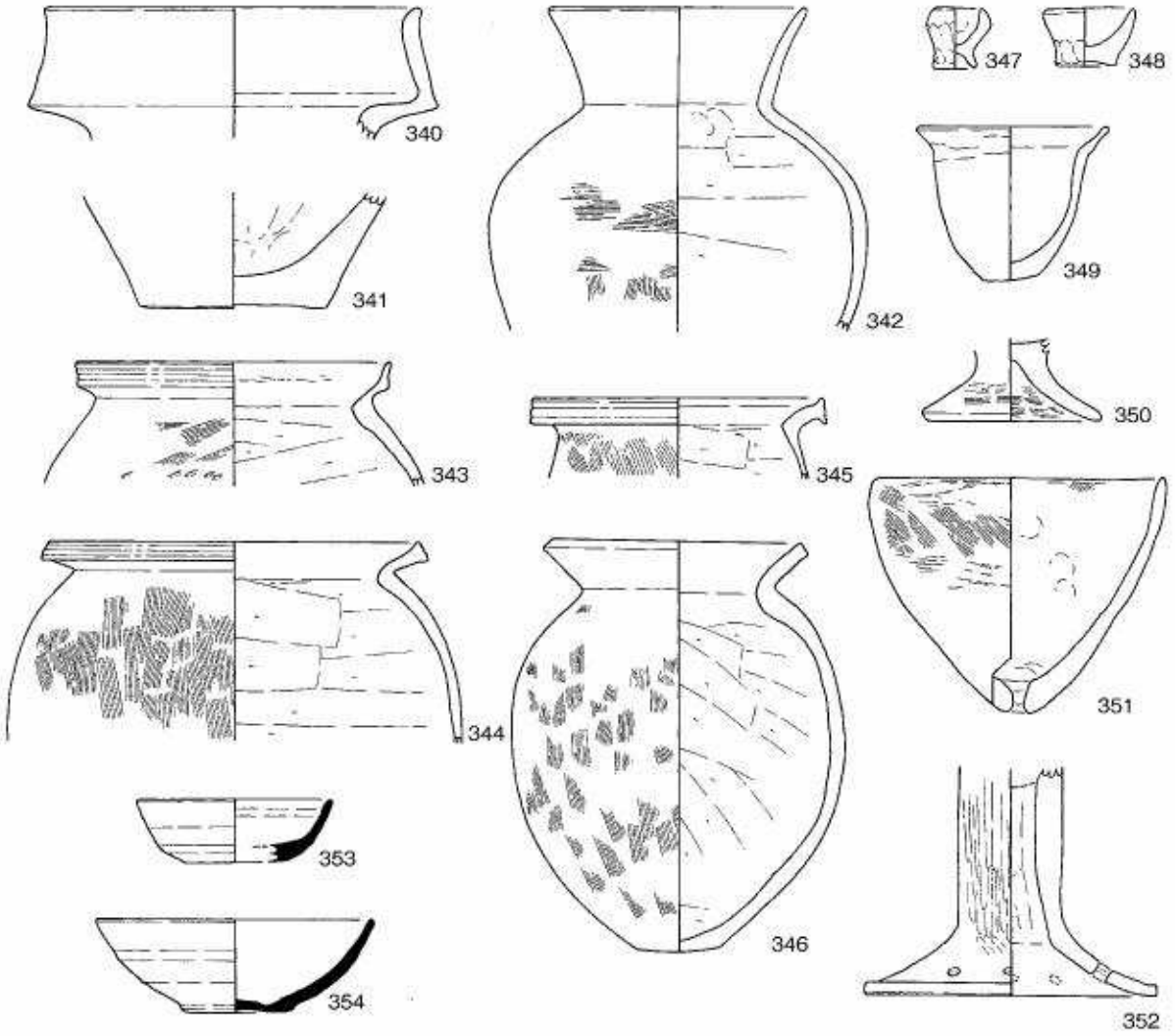


流路・不明遺構出土土器

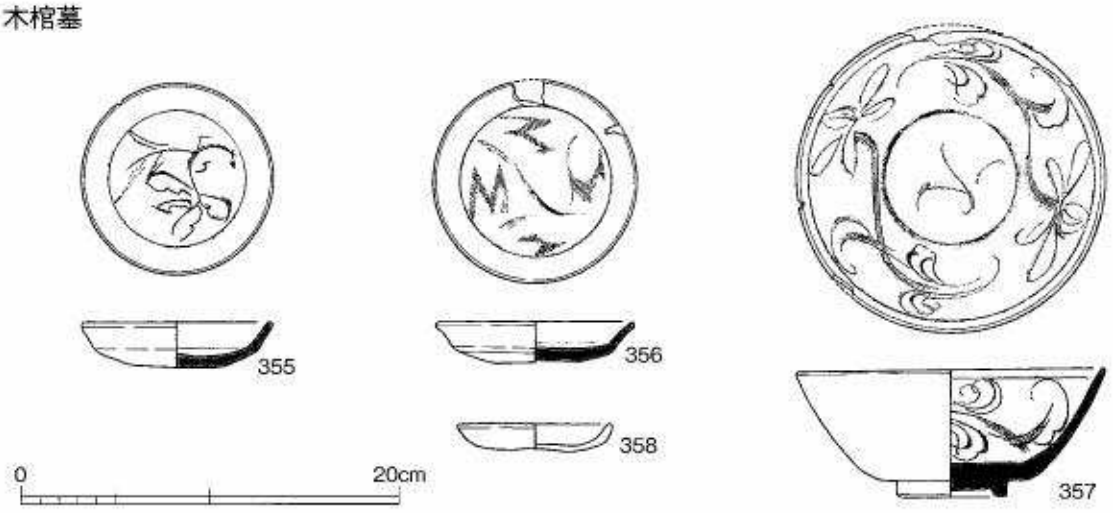
SX2004



SX2005

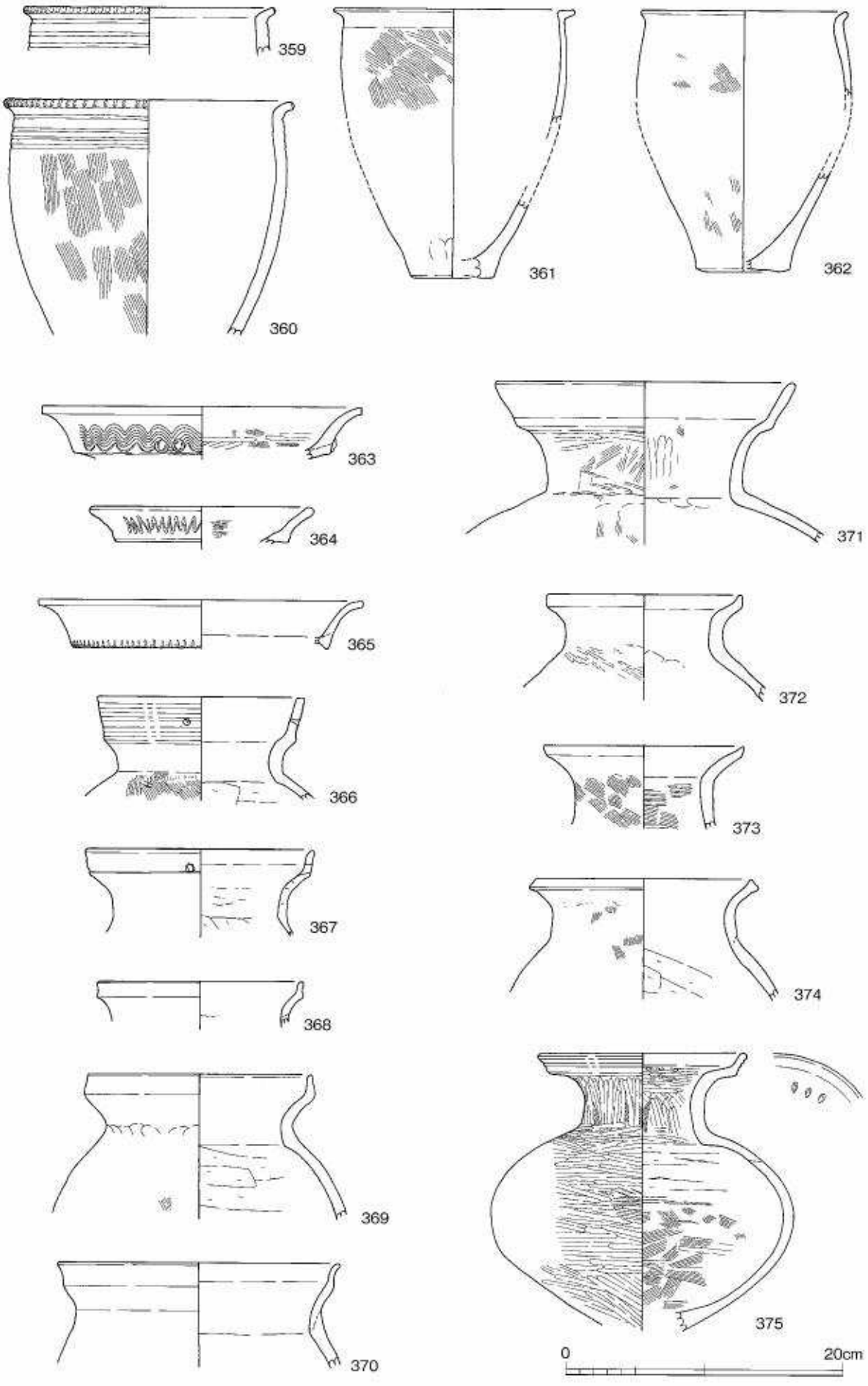


木棺墓

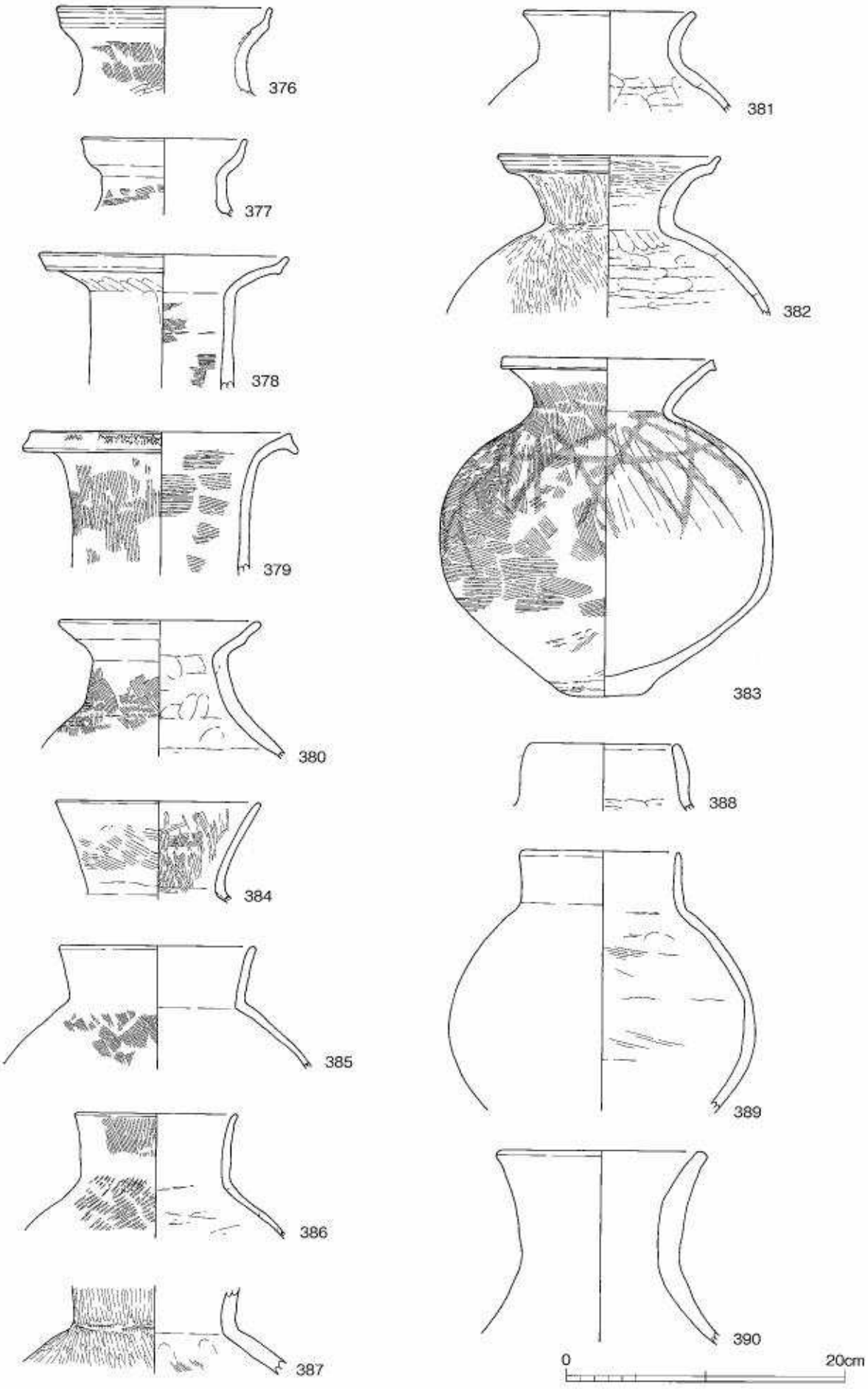


不明遺構・木棺墓出土土器

図版62　横田遺跡出土遺物（17）

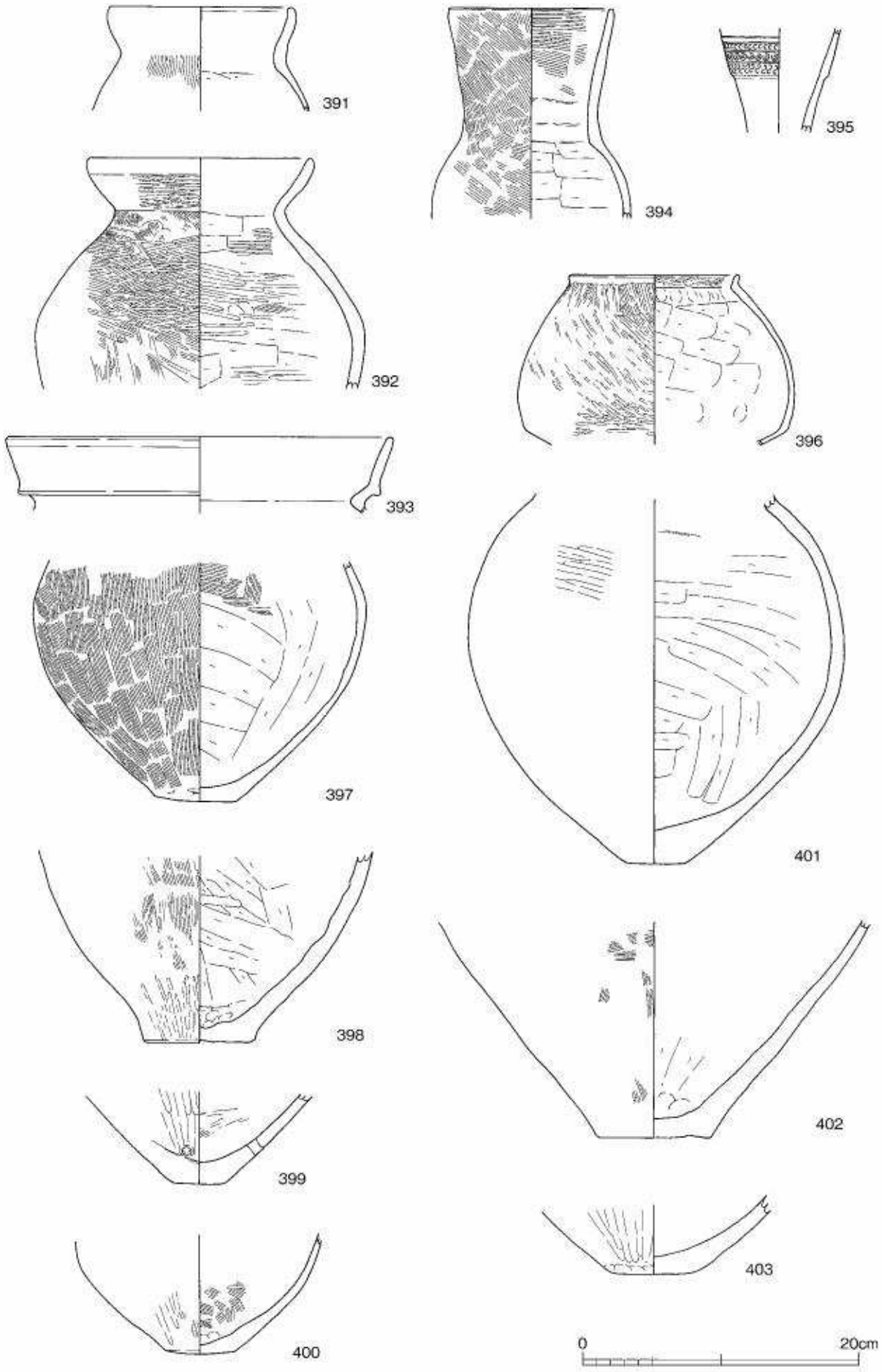


包含層出土土器（1）

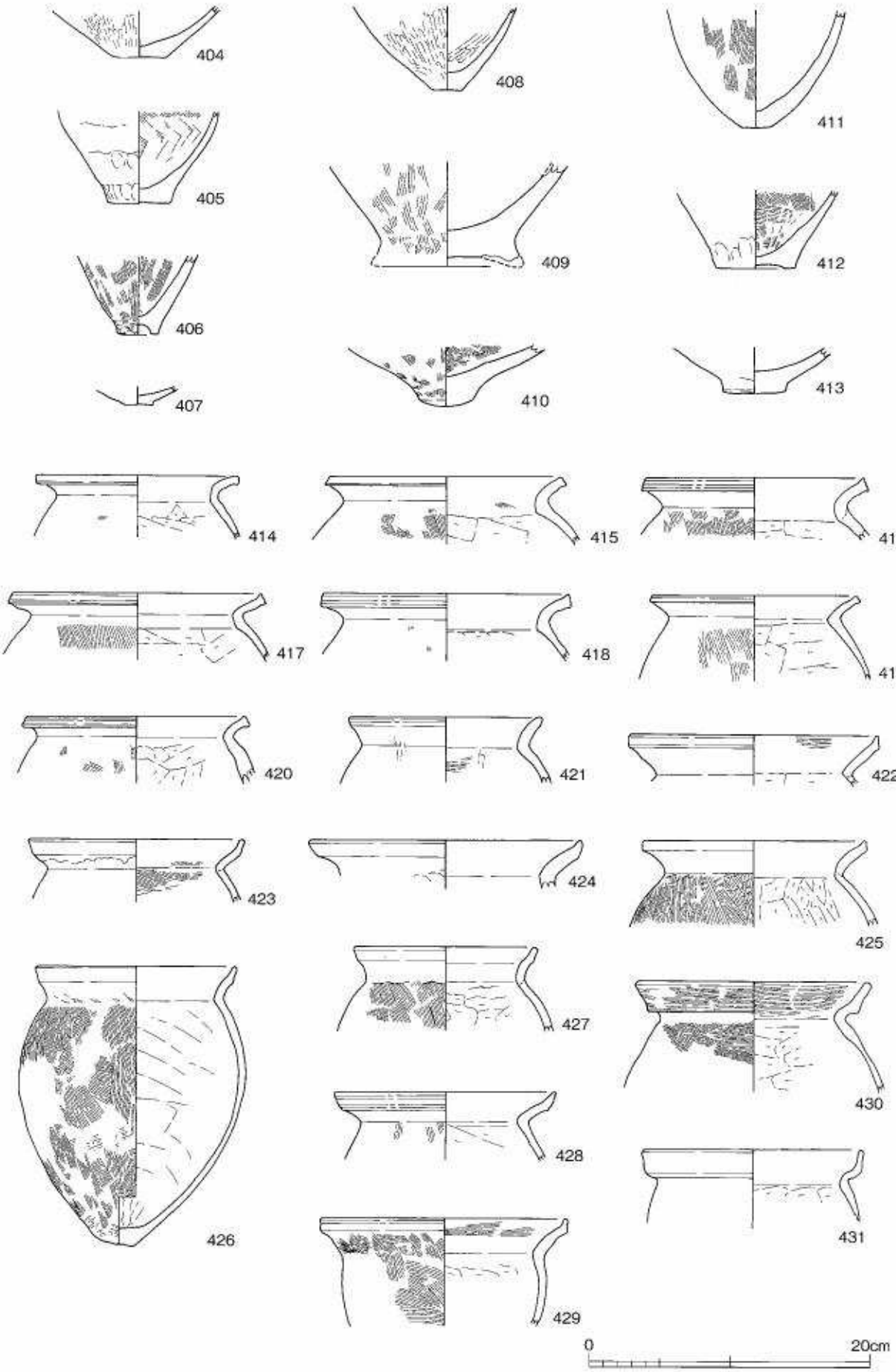

376
377
378
379
380
384
385
386
387
381
382
383
388
389
390
0
20cm

包含層出土土器（2）

図版64　横田遺跡出土遺物（19）

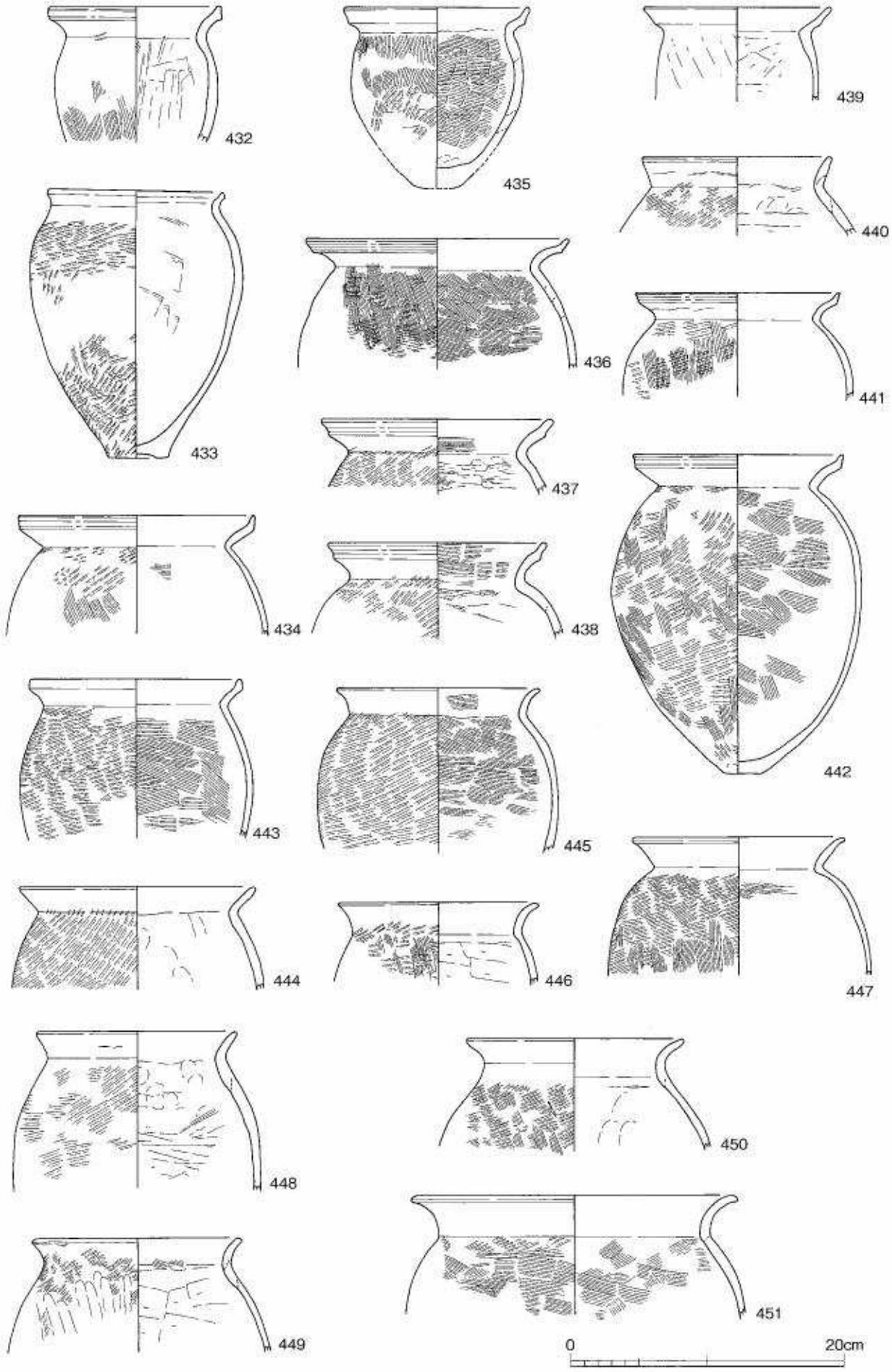


包含層出土土器（3）

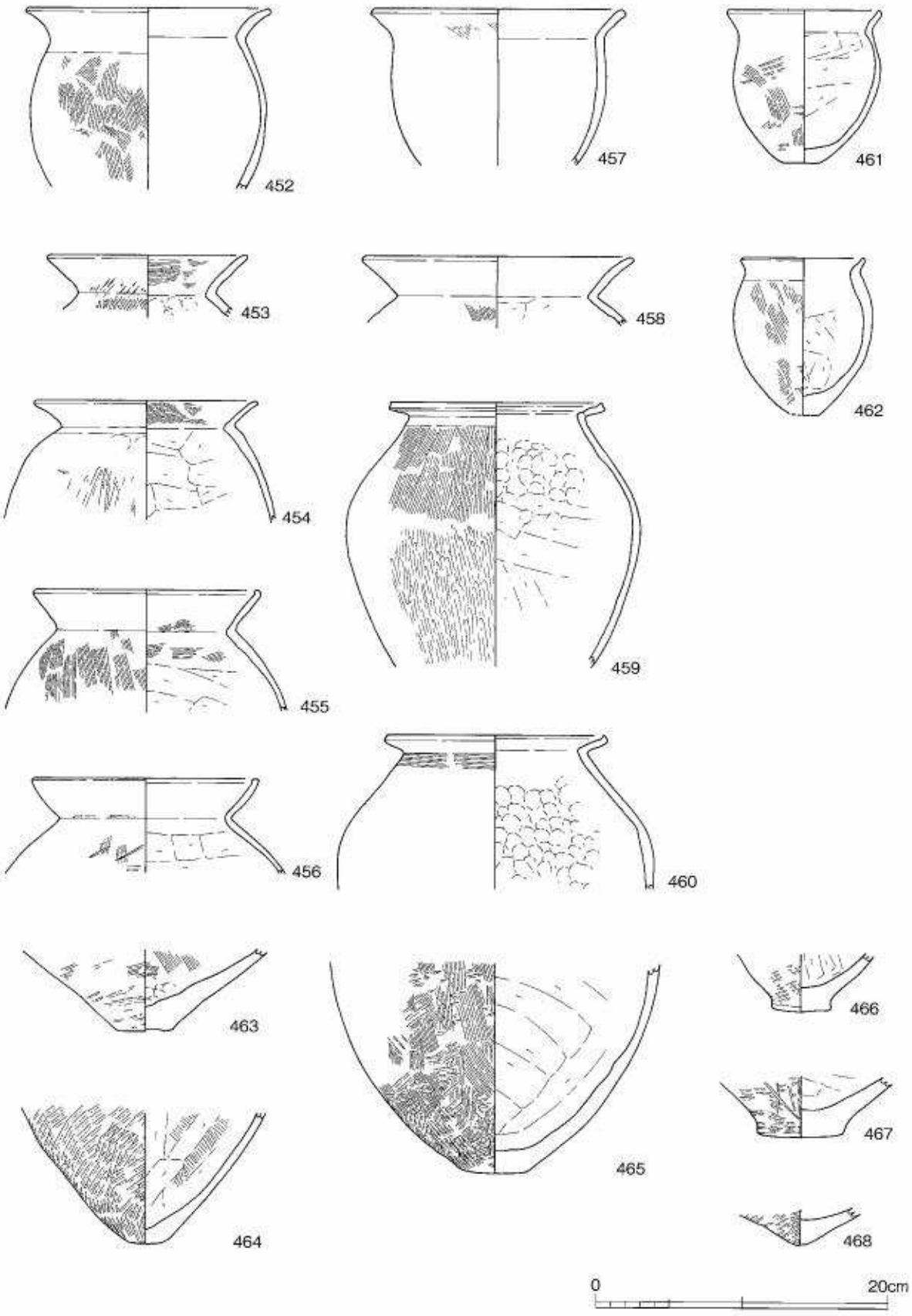

404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
0
20cm

包含層出土土器（4）

図版66　横田遺跡出土遺物（21）

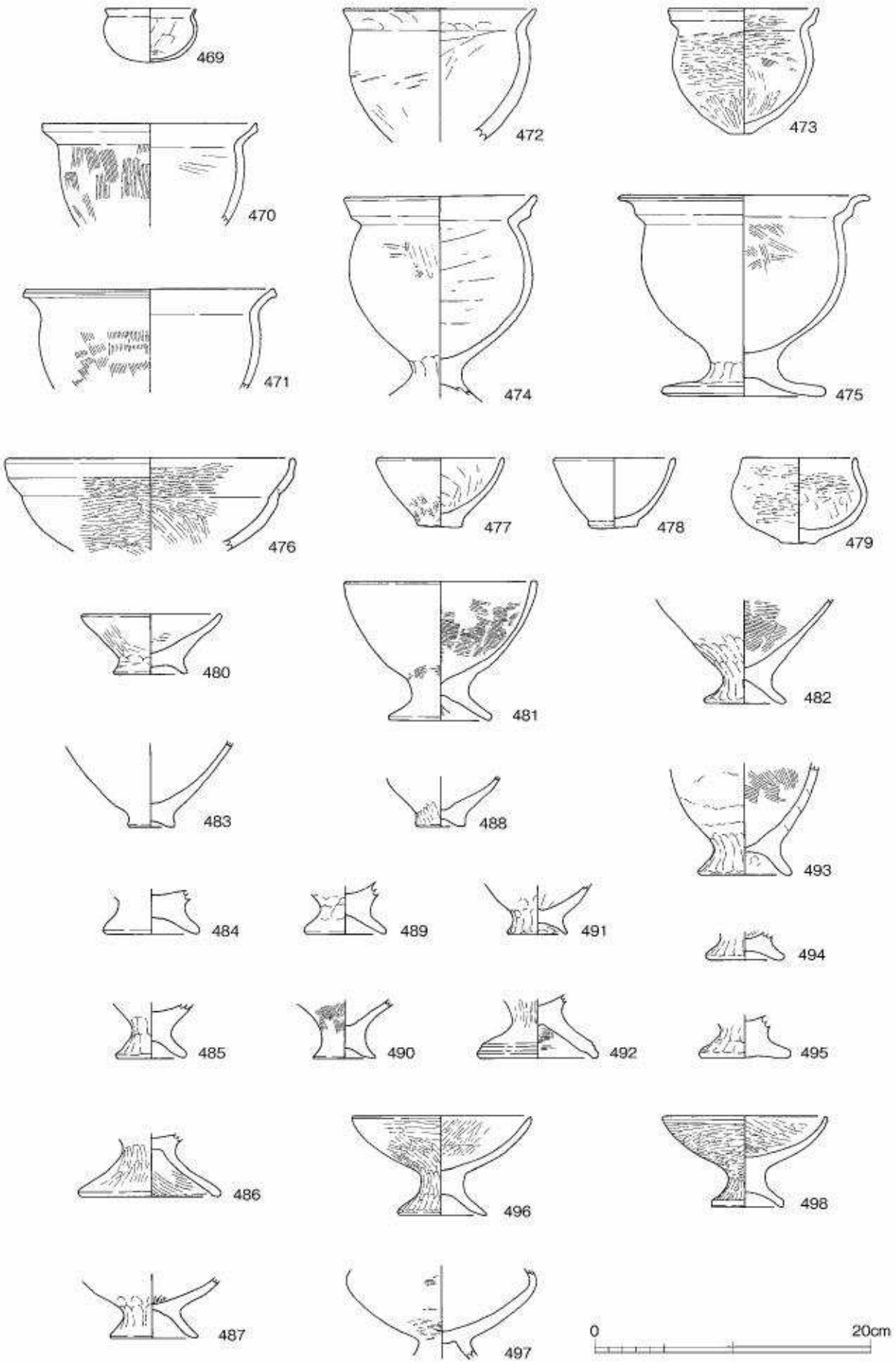


包含層出土土器（5）

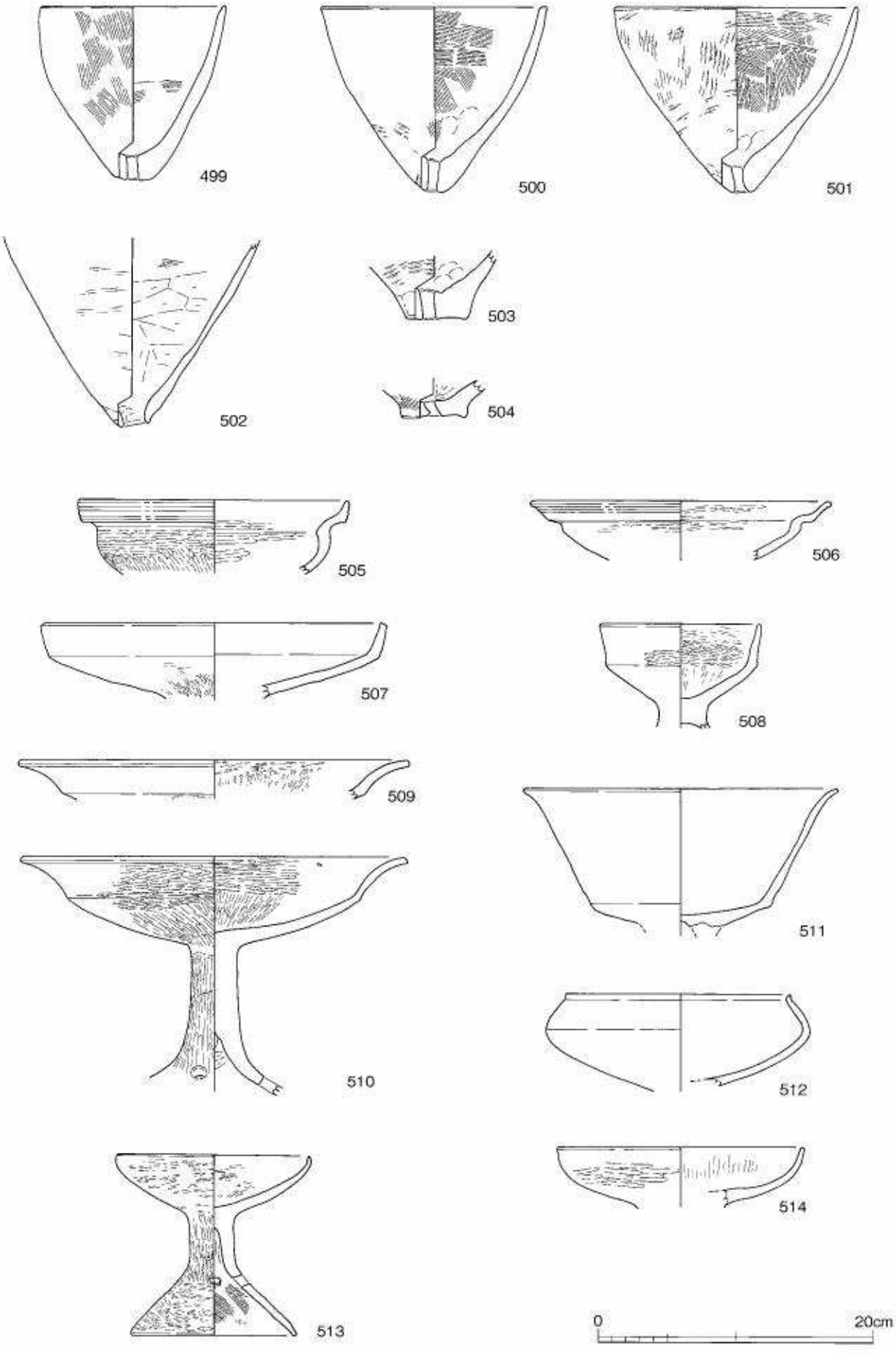

452
457
461
453
458
462
454
459
455
456
460
463
465
466
467
464
468
0
20cm

包含層出土土器（6）

図版68　横田遺跡出土遺物（23）

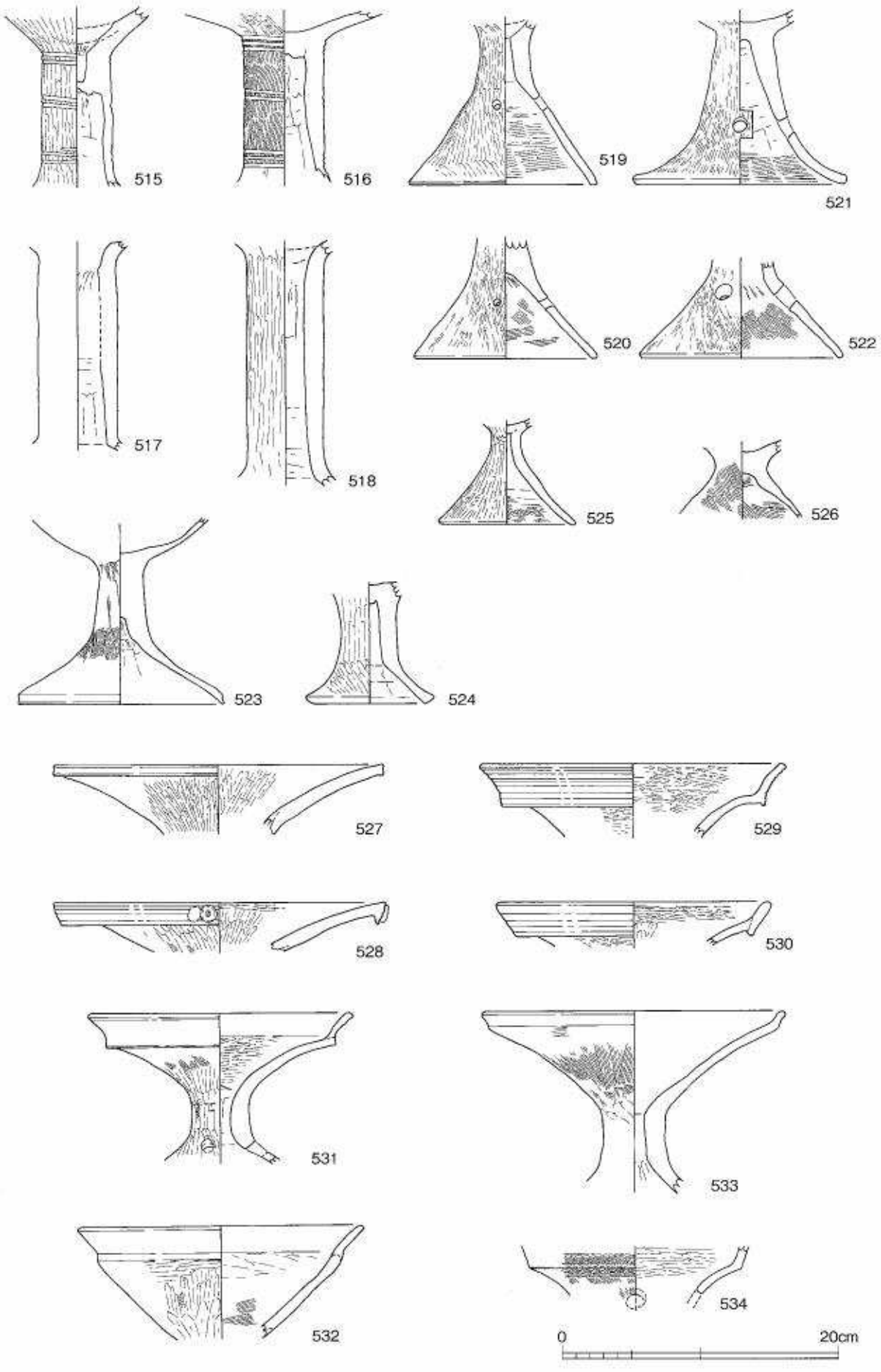


包含層出土土器（7）

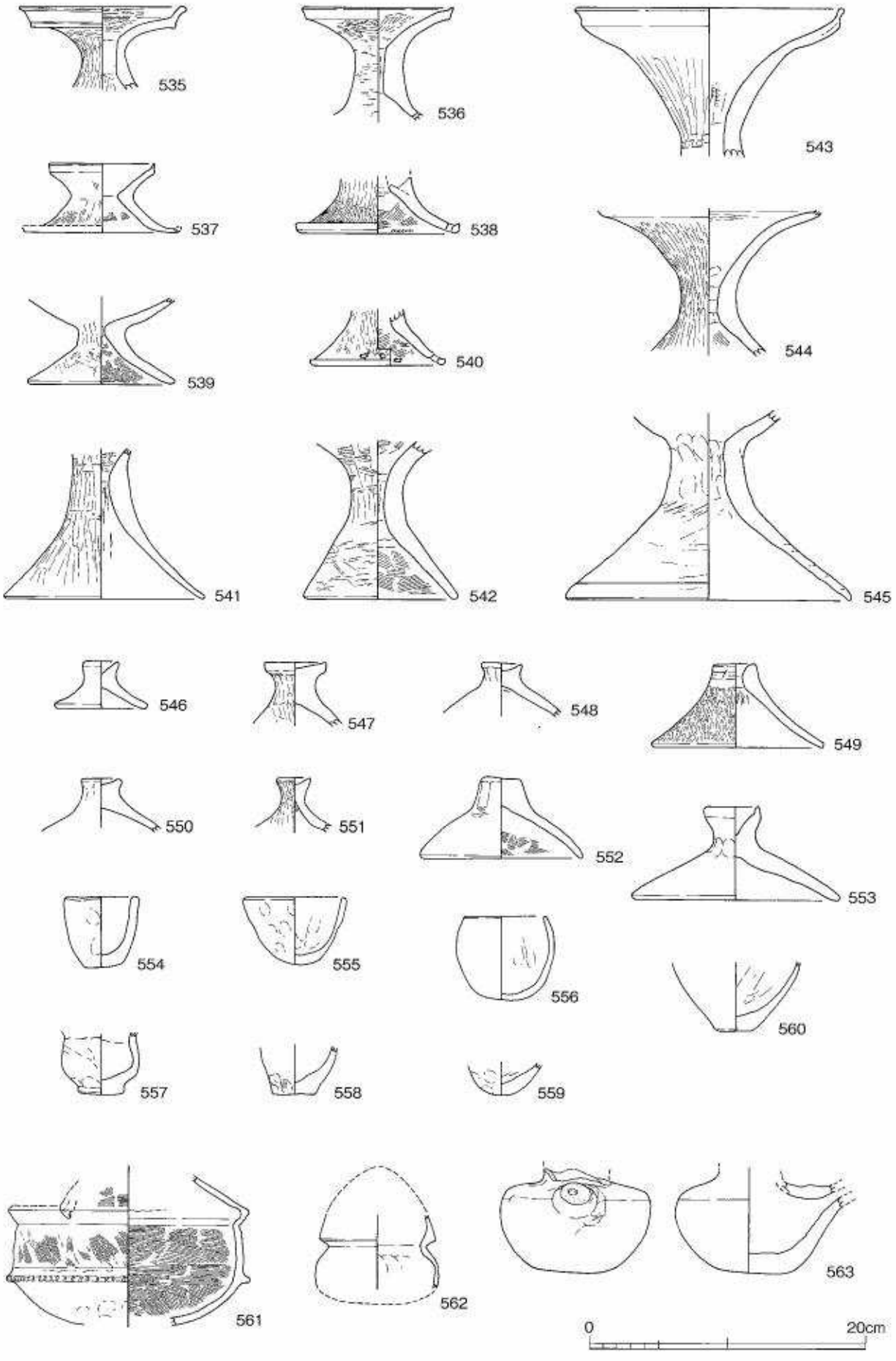

499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
0
20cm

包含層出土土器（8）

図版70　横田遺跡出土遺物（25）

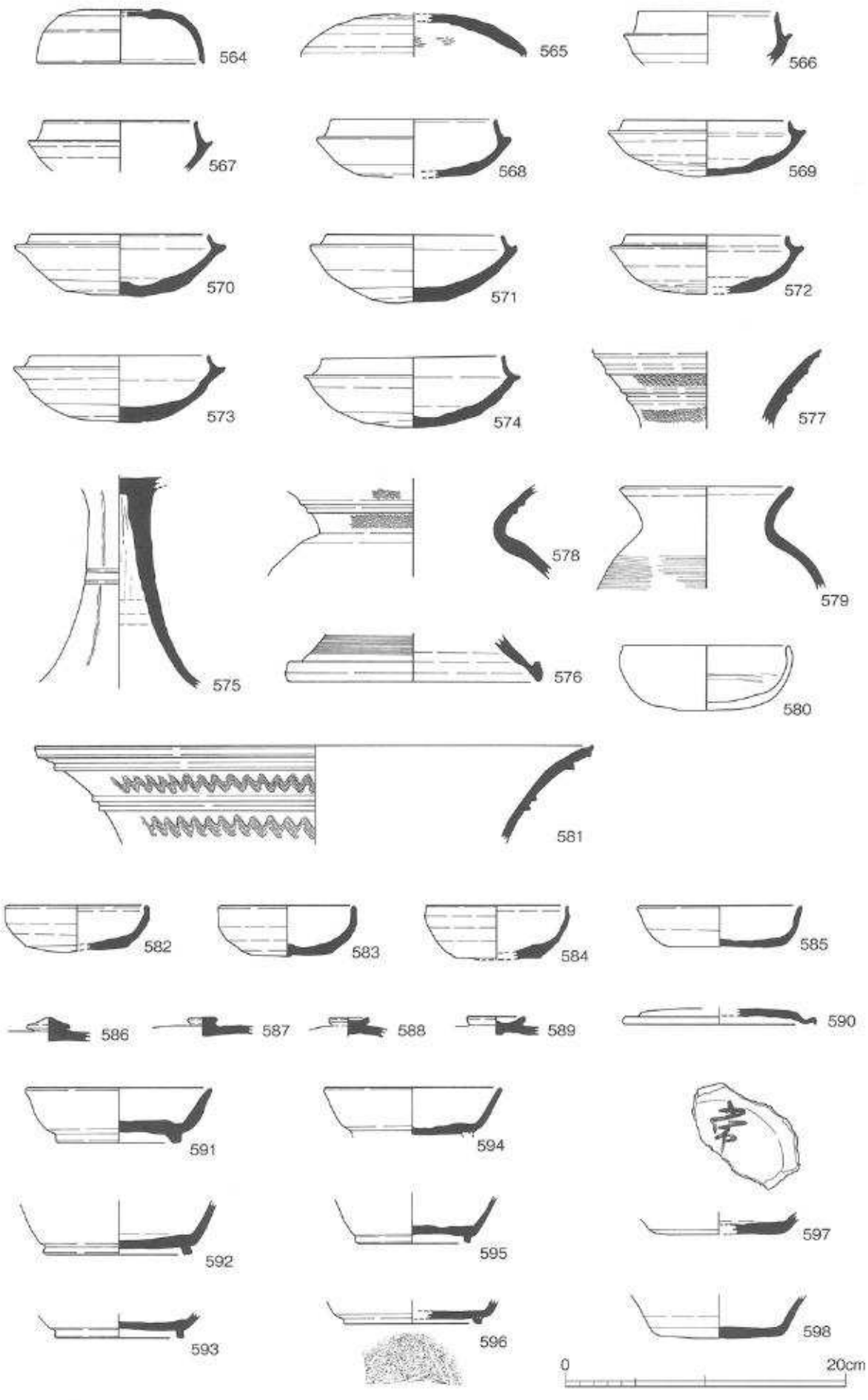


包含層出土土器（9）

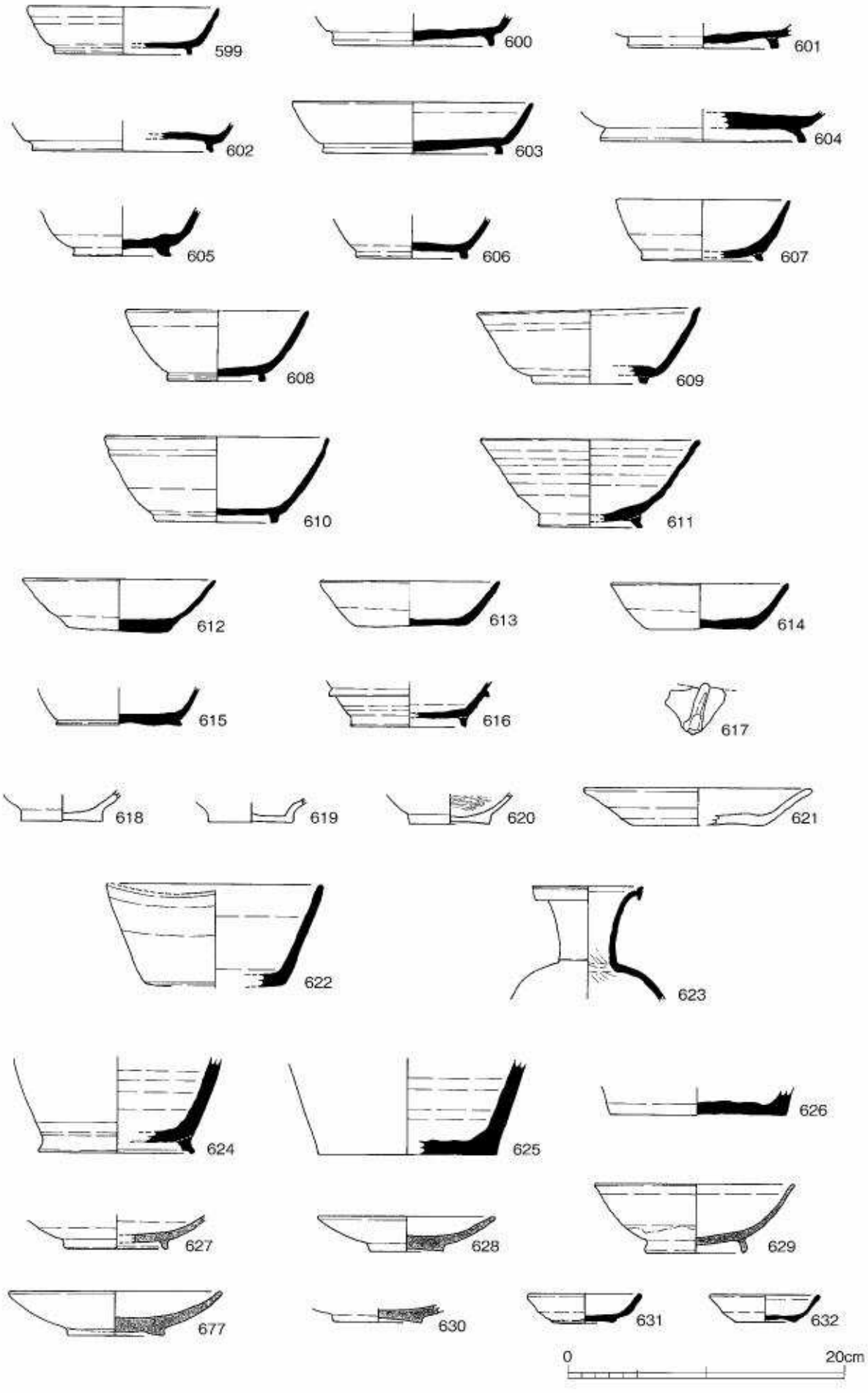

535
536
543
537
538
544
539
540
541
542
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
560
557
558
559
561
562
563
0
20cm

包含層出土土器（10）

図版72　横田遺跡出土遺物（27）

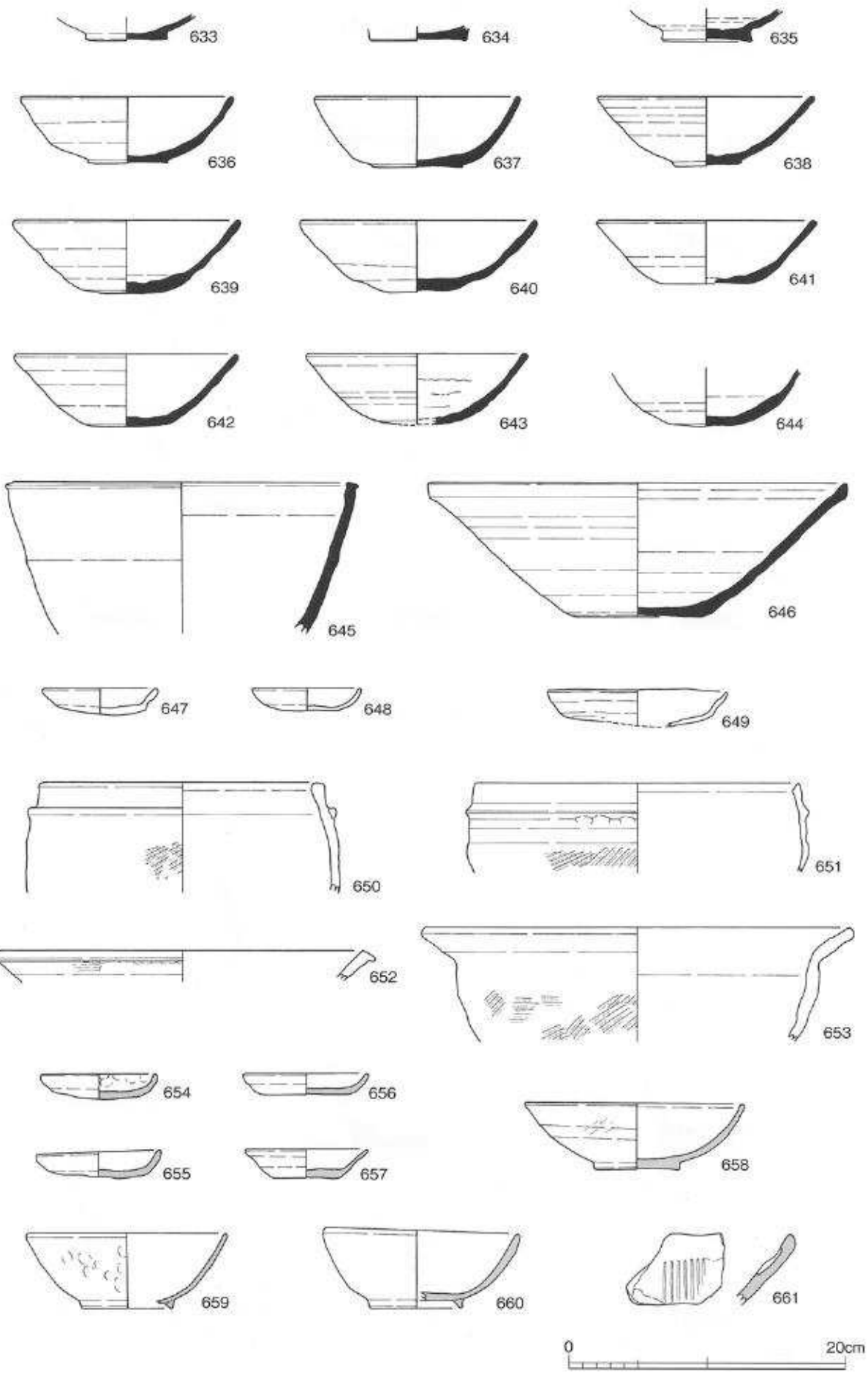


包含層出土土器（11）

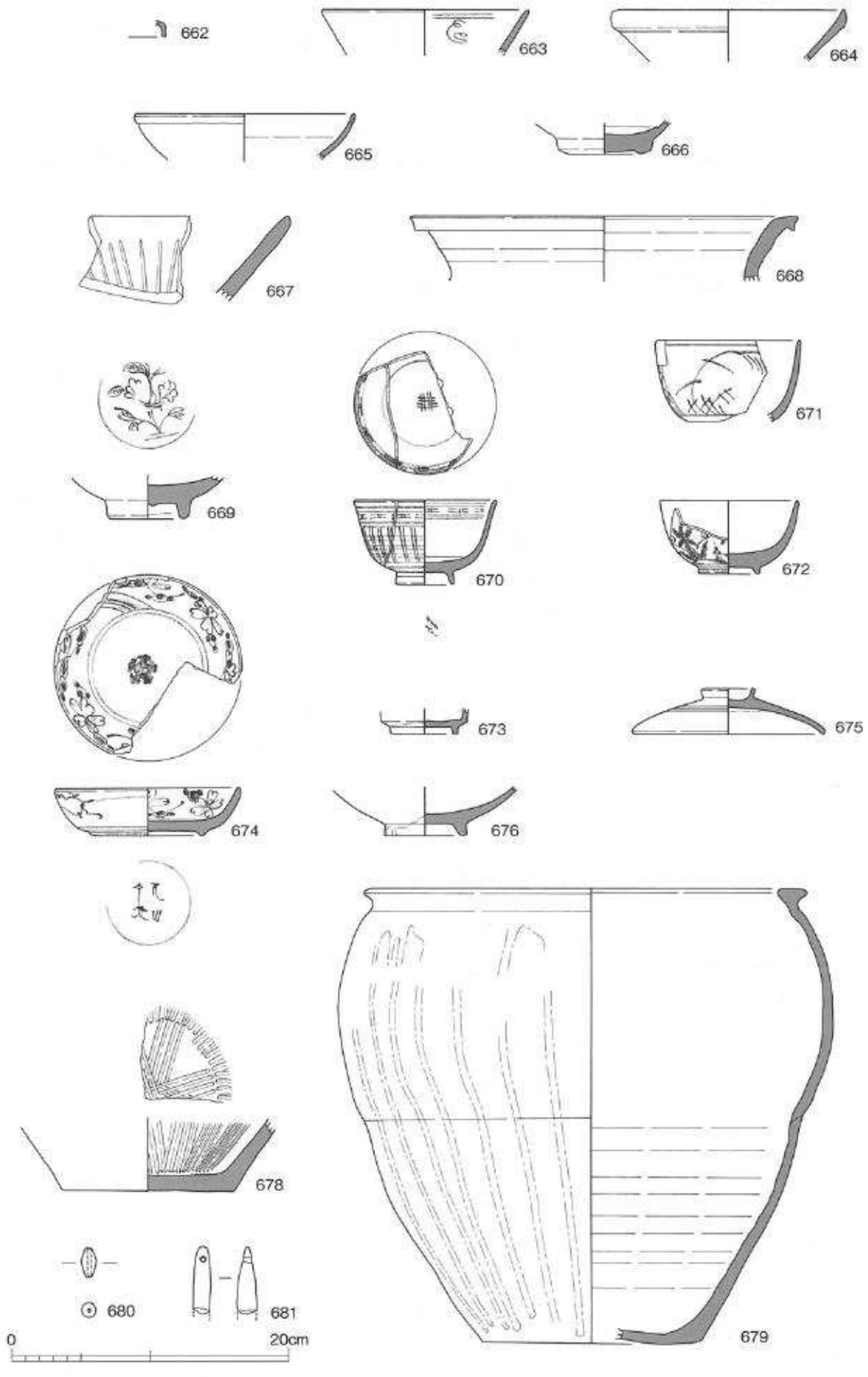

599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
677
630
631
632
0
20cm

包含層出土土器（12）

図版74　横田遺跡出土遺物（29）

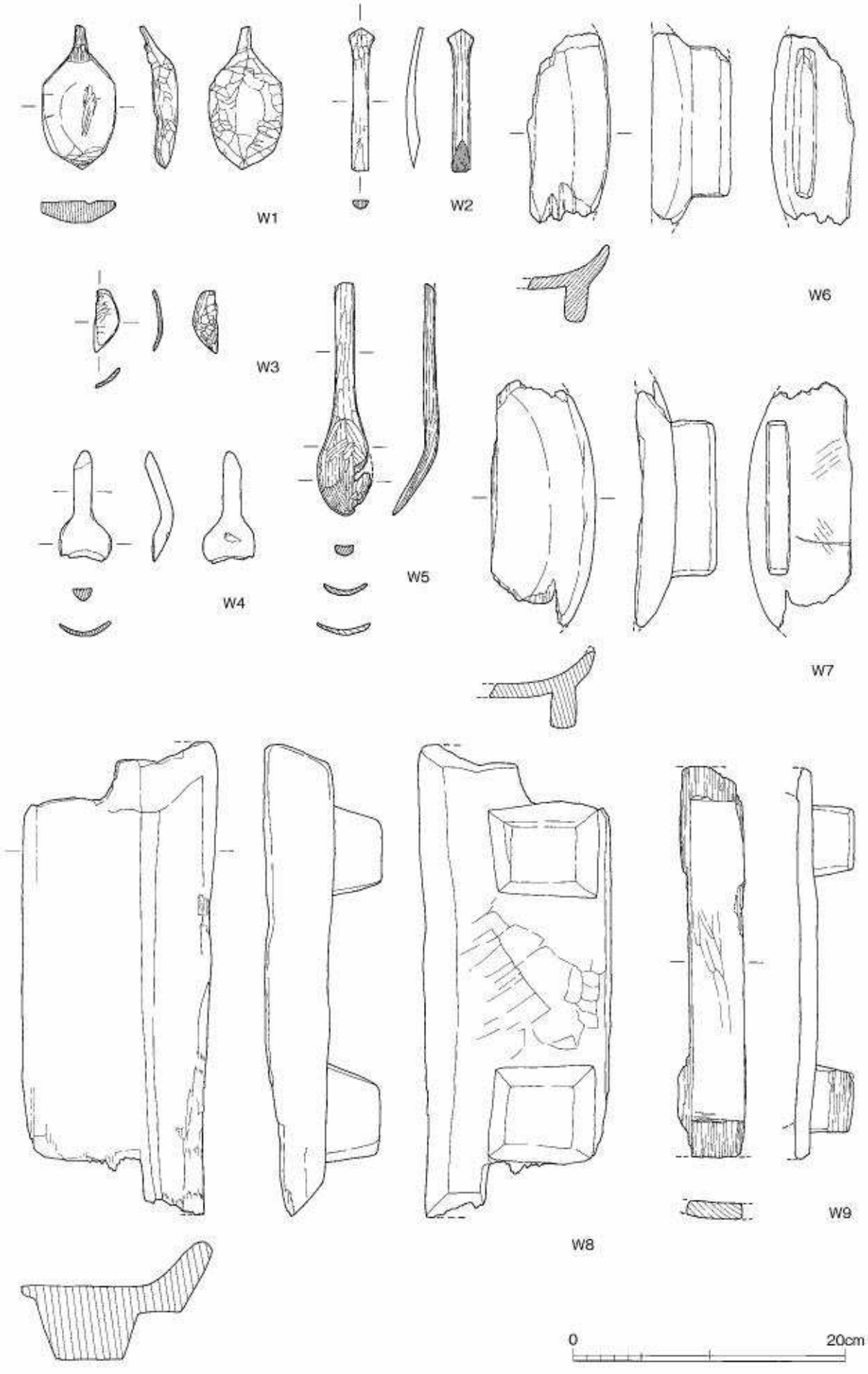


包含層出土土器（13）

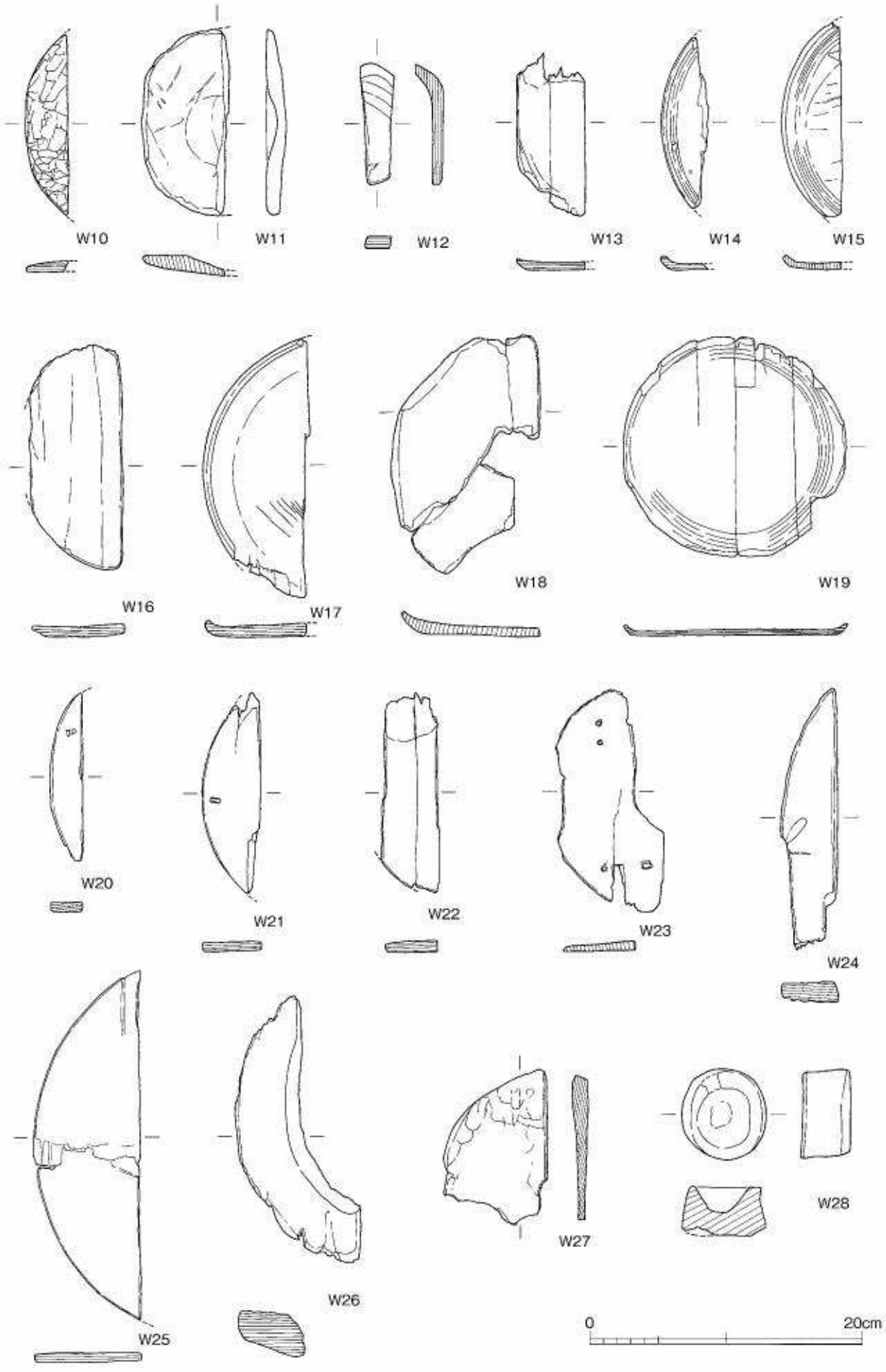

662
663
664
665
666
667
668
671
669
670
672
673
675
674
676
678
679
680
681
0
20cm

包含層出土土器（14）

図版76　横田遺跡出土遺物（31）

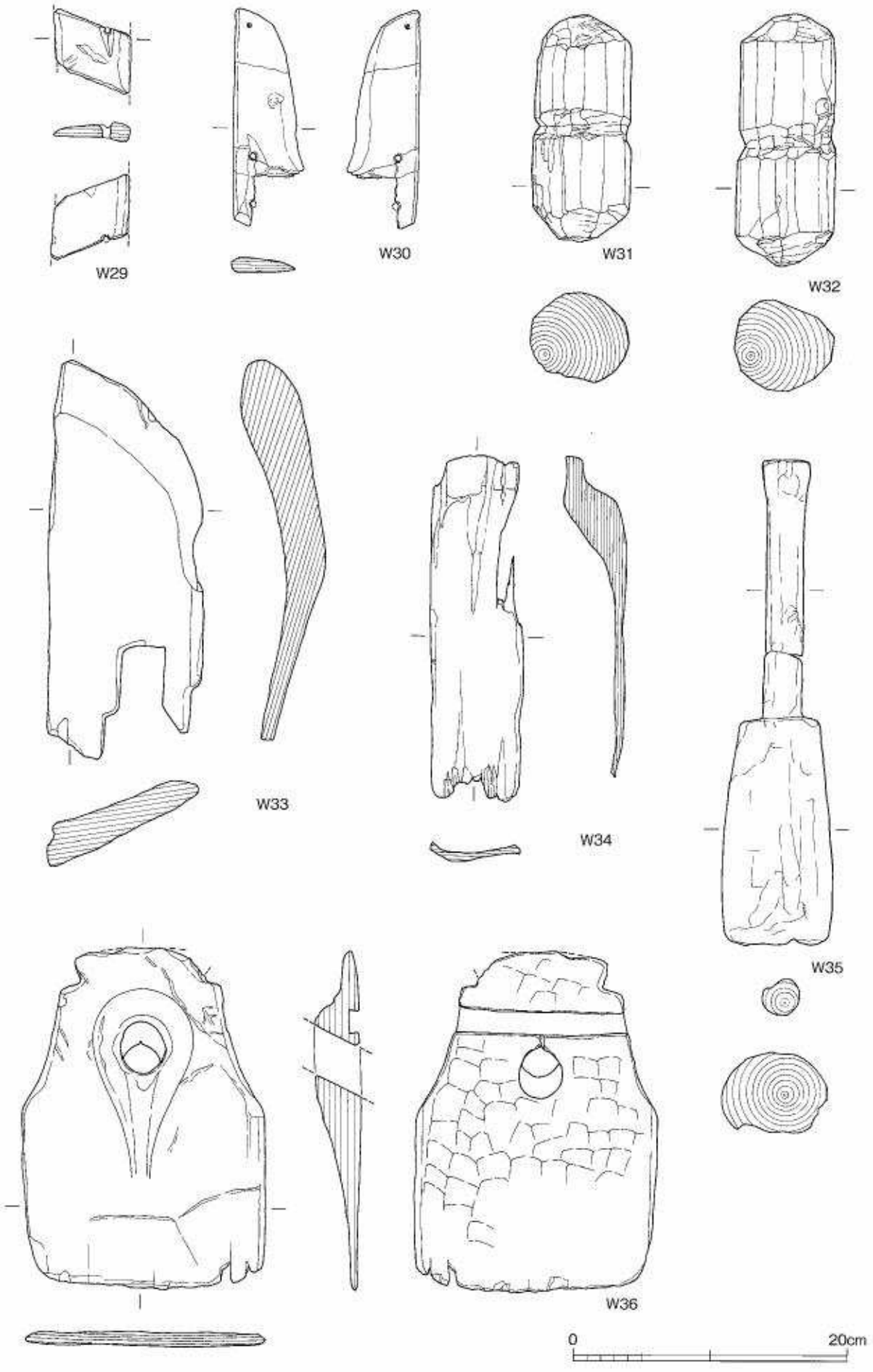


出土木製品（1）

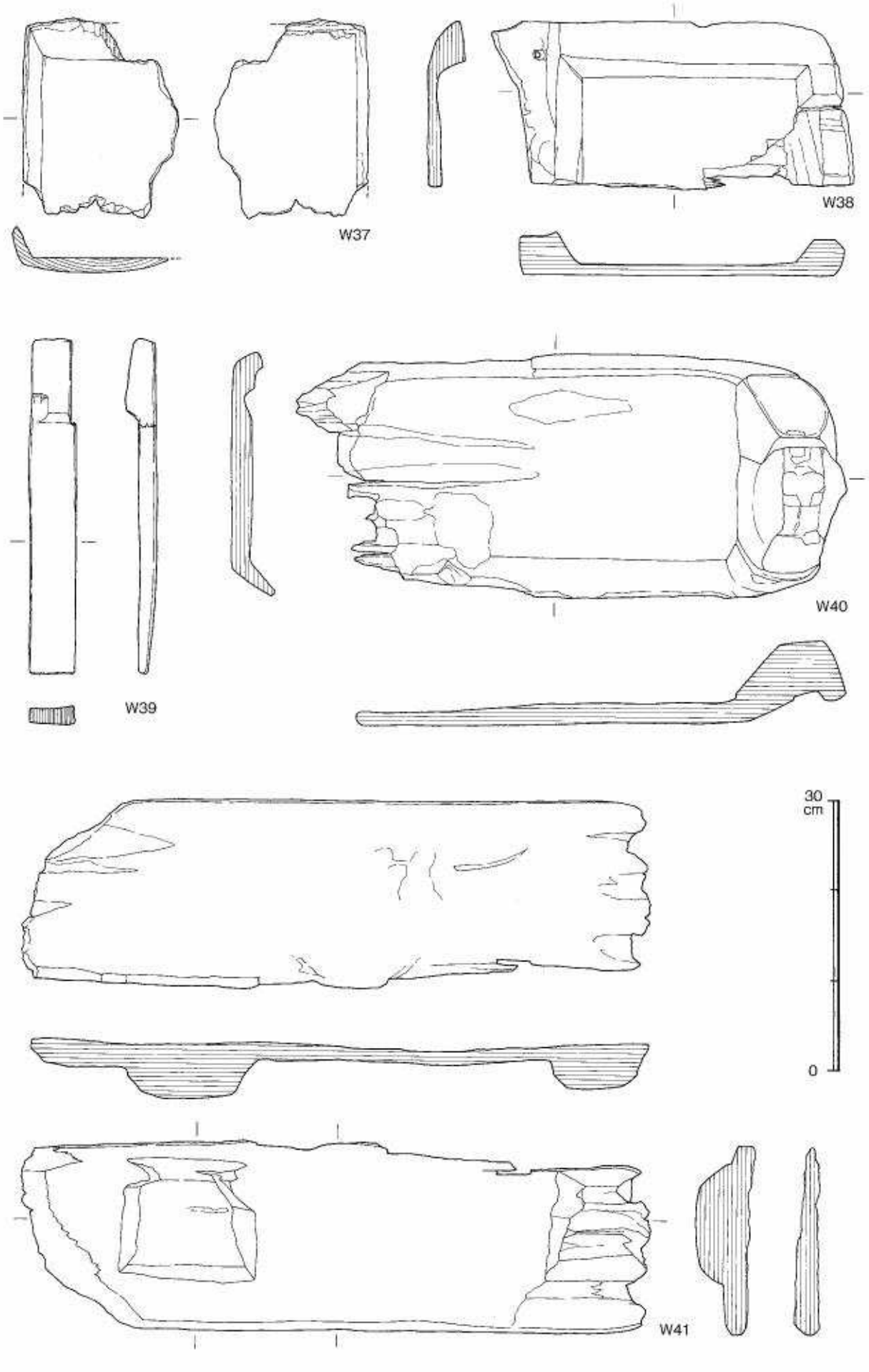

W10
W11
W12
W13
W14
W15
W16
W17
W18
W19
W20
W21
W22
W23
W24
W25
W26
W27
W28
0
20cm

出土木製品（2）

図版78　横田遺跡出土遺物（33）

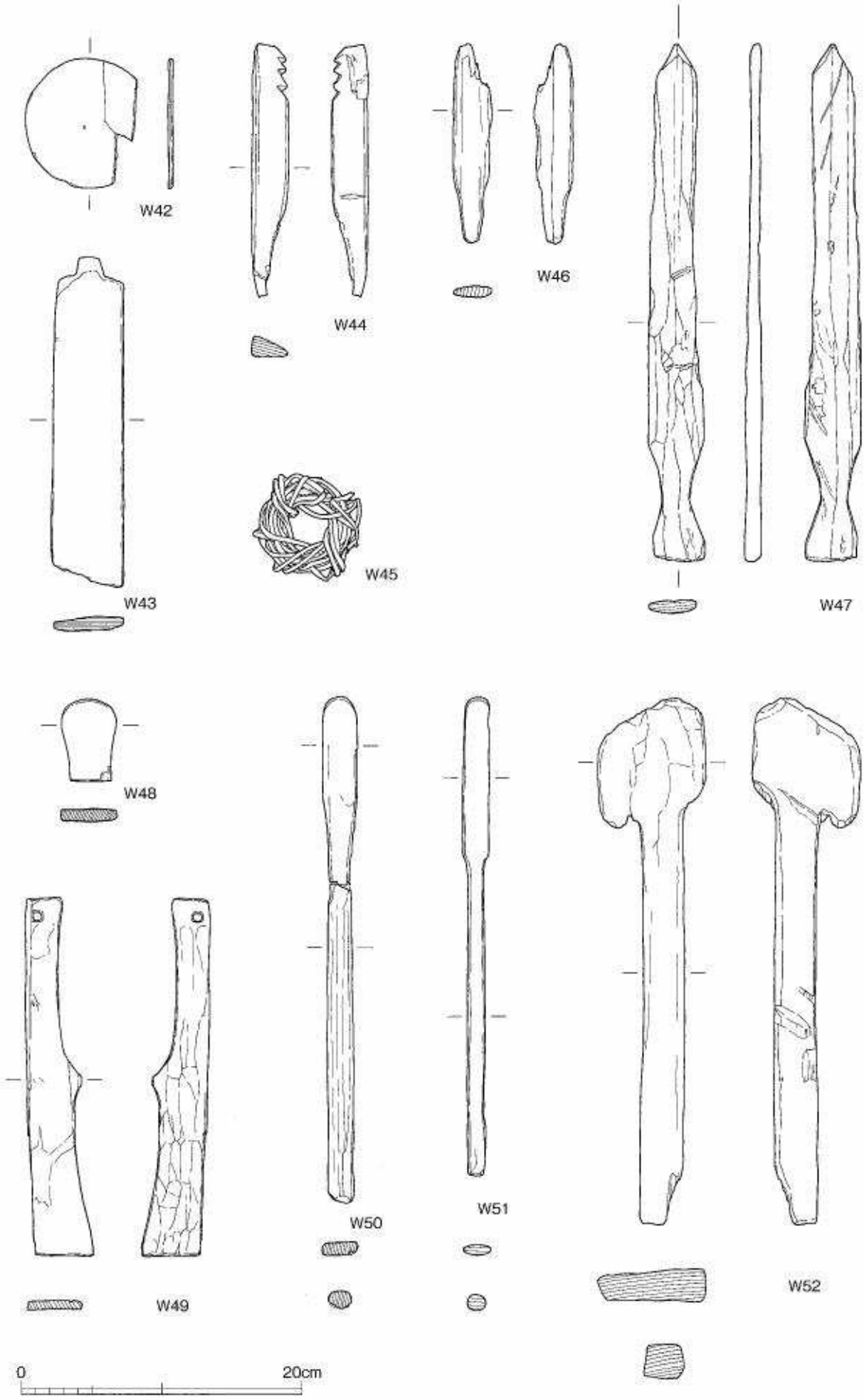


出土木製品（3）

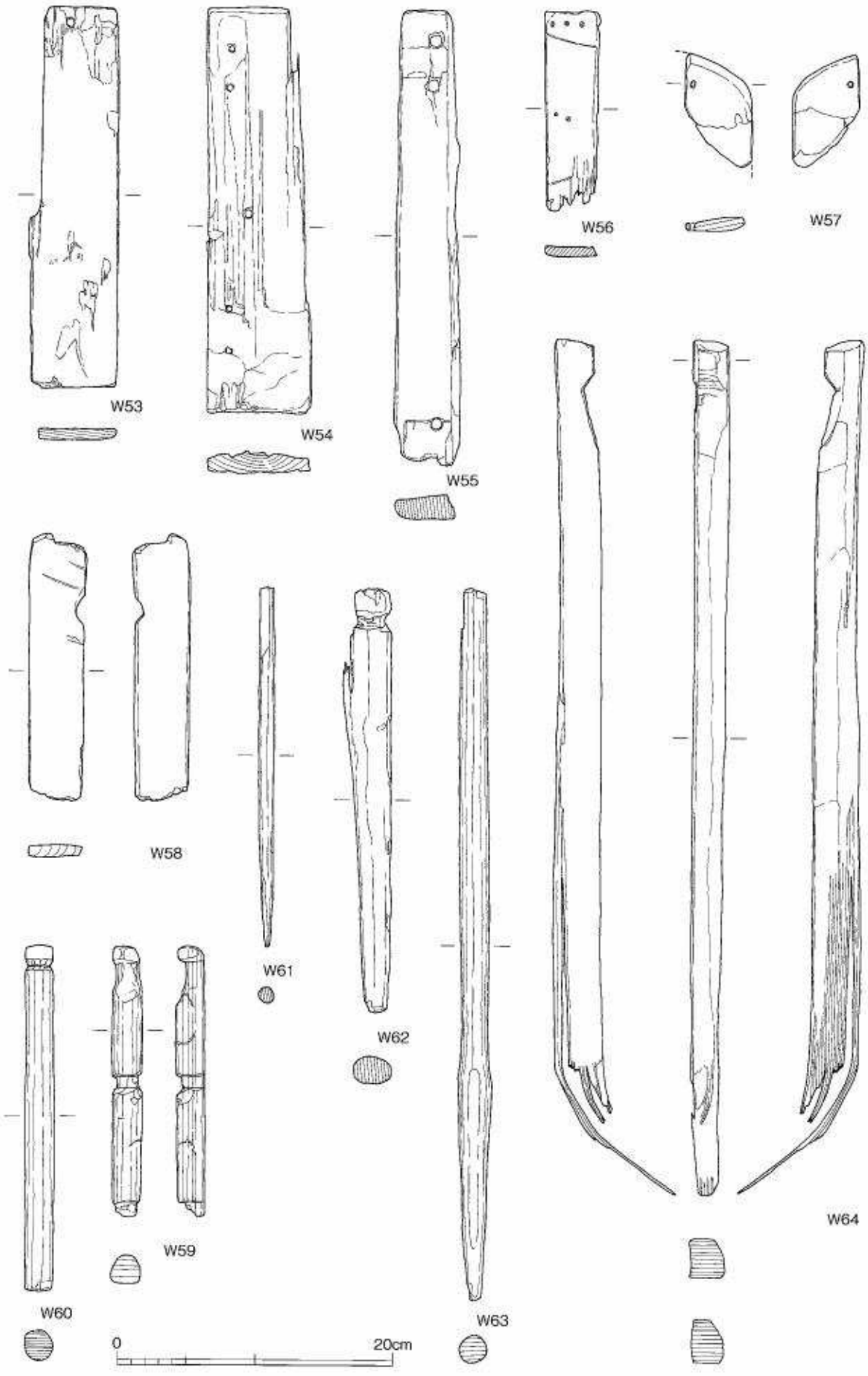


出土木製品（4）

図版80　横田遺跡出土遺物（35）

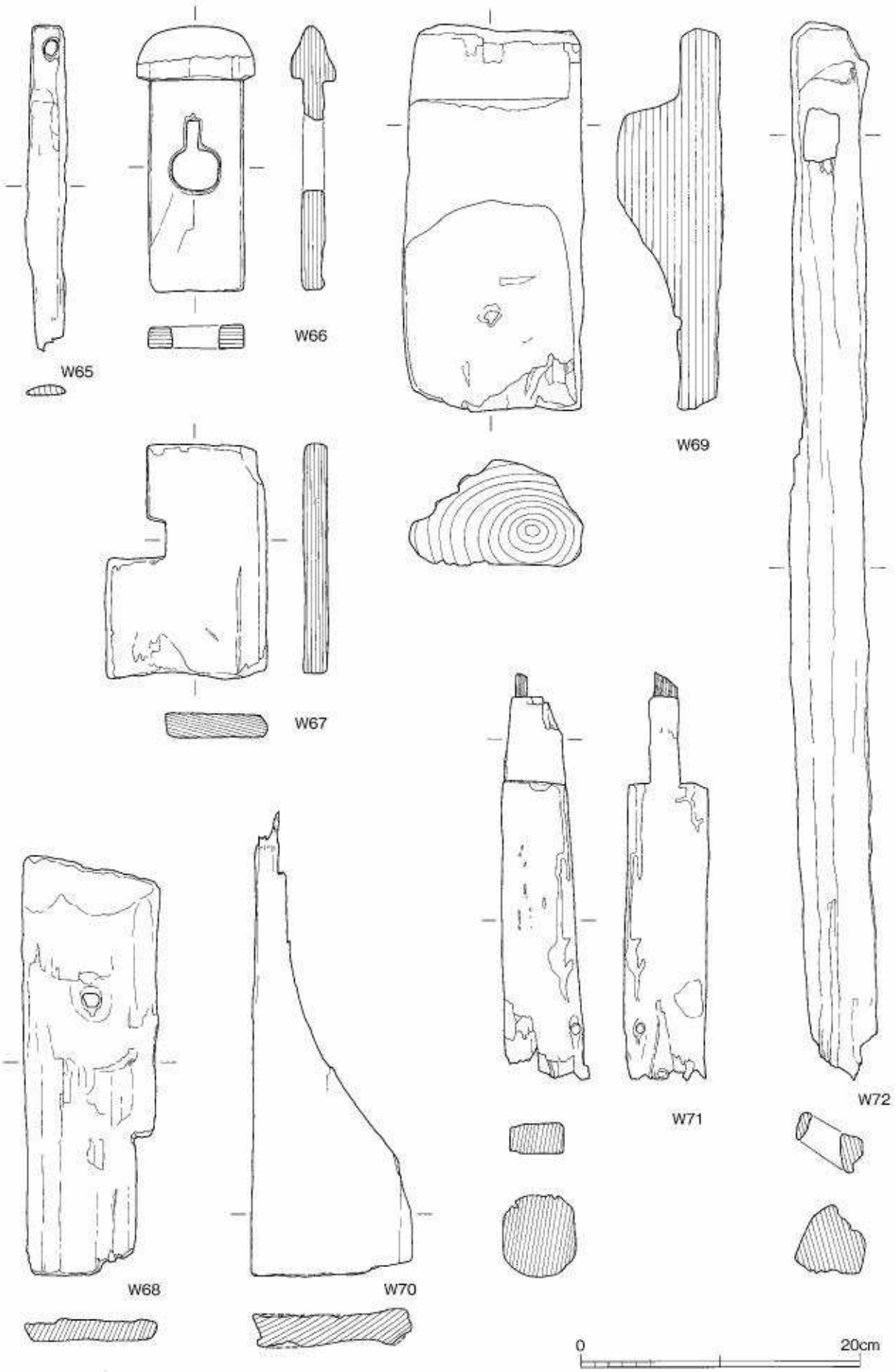


出土木製品（5）

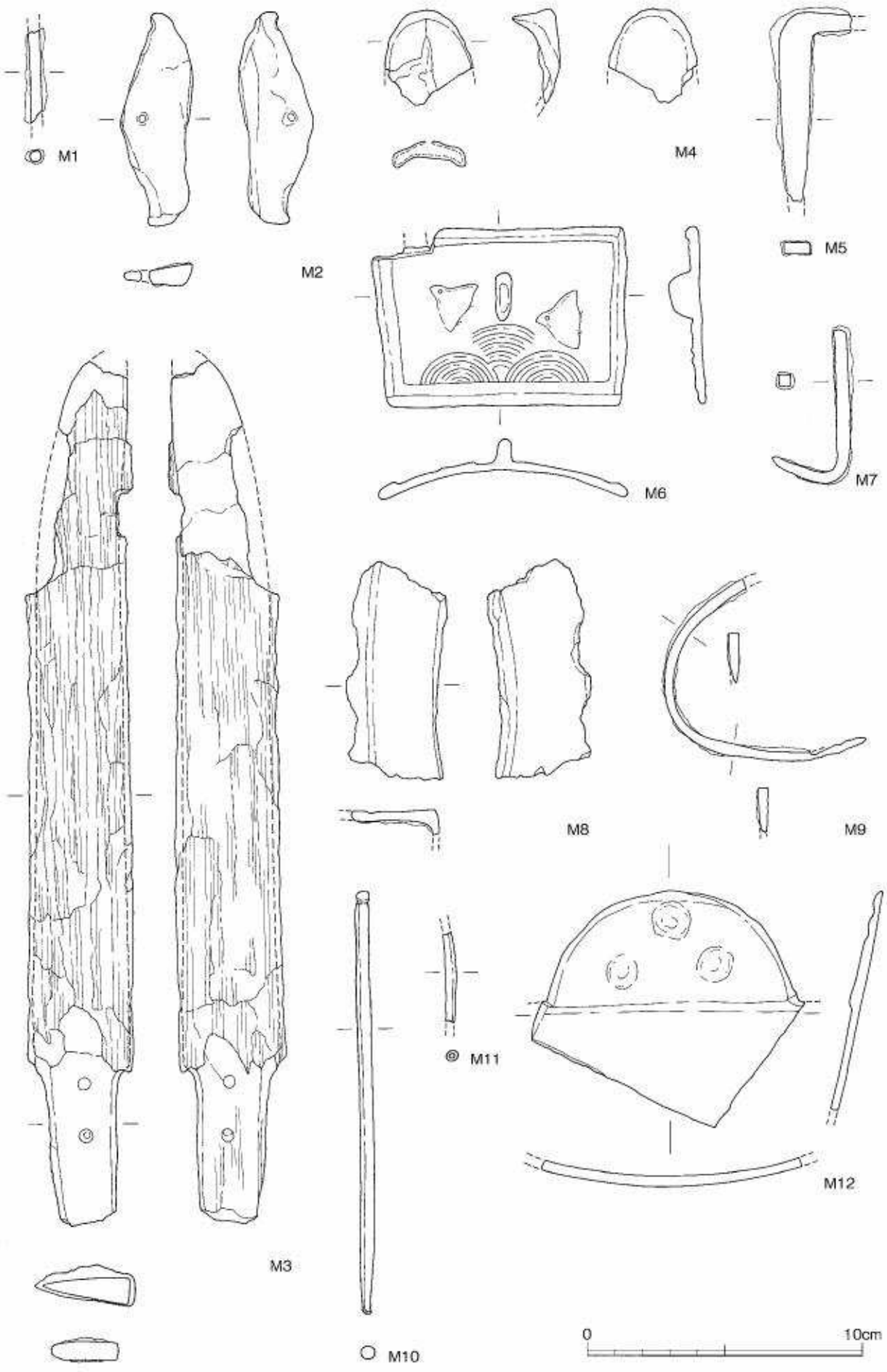


出土木製品（6）

図版82　横田遺跡出土遺物（37）

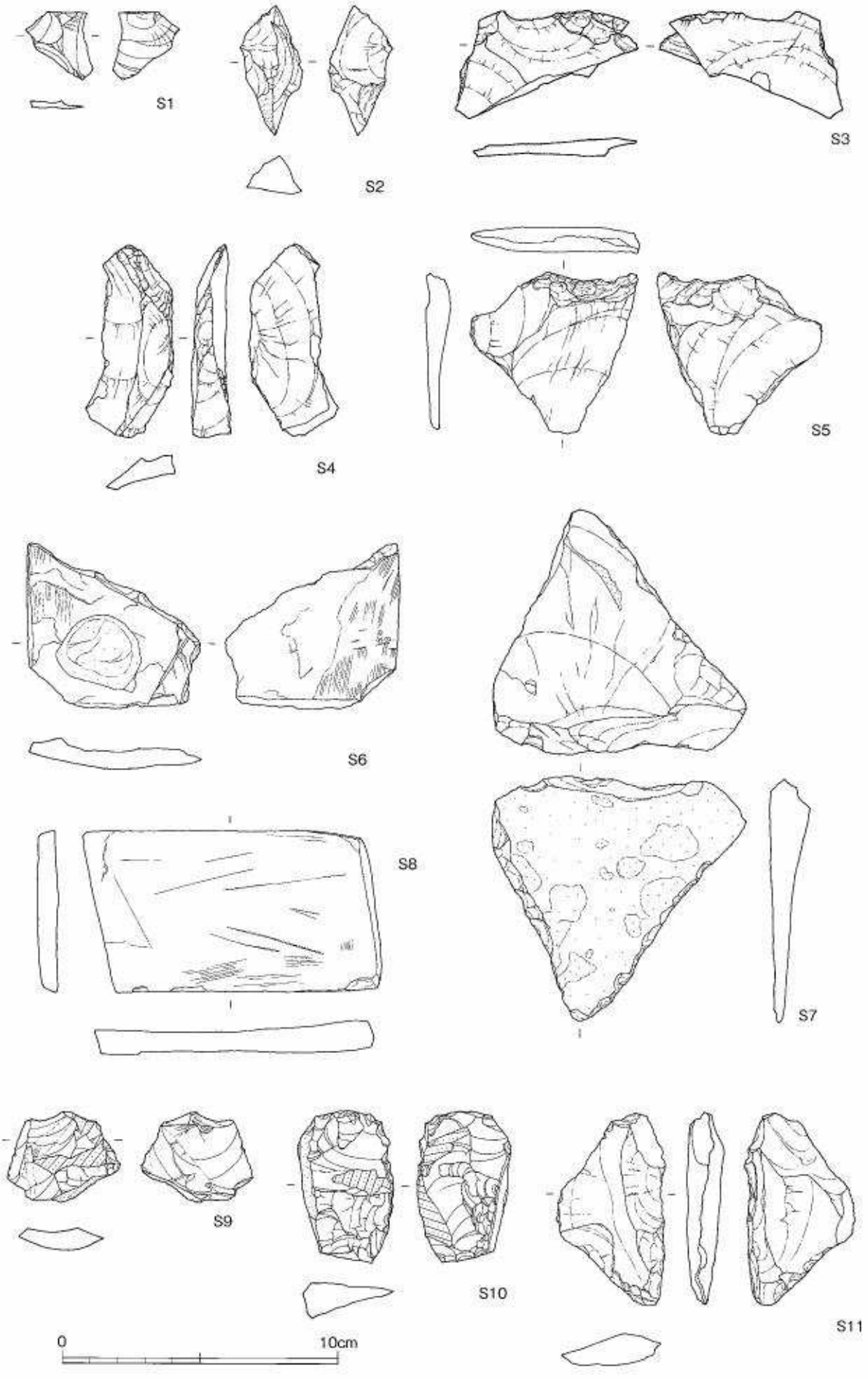


出土木製品（7）

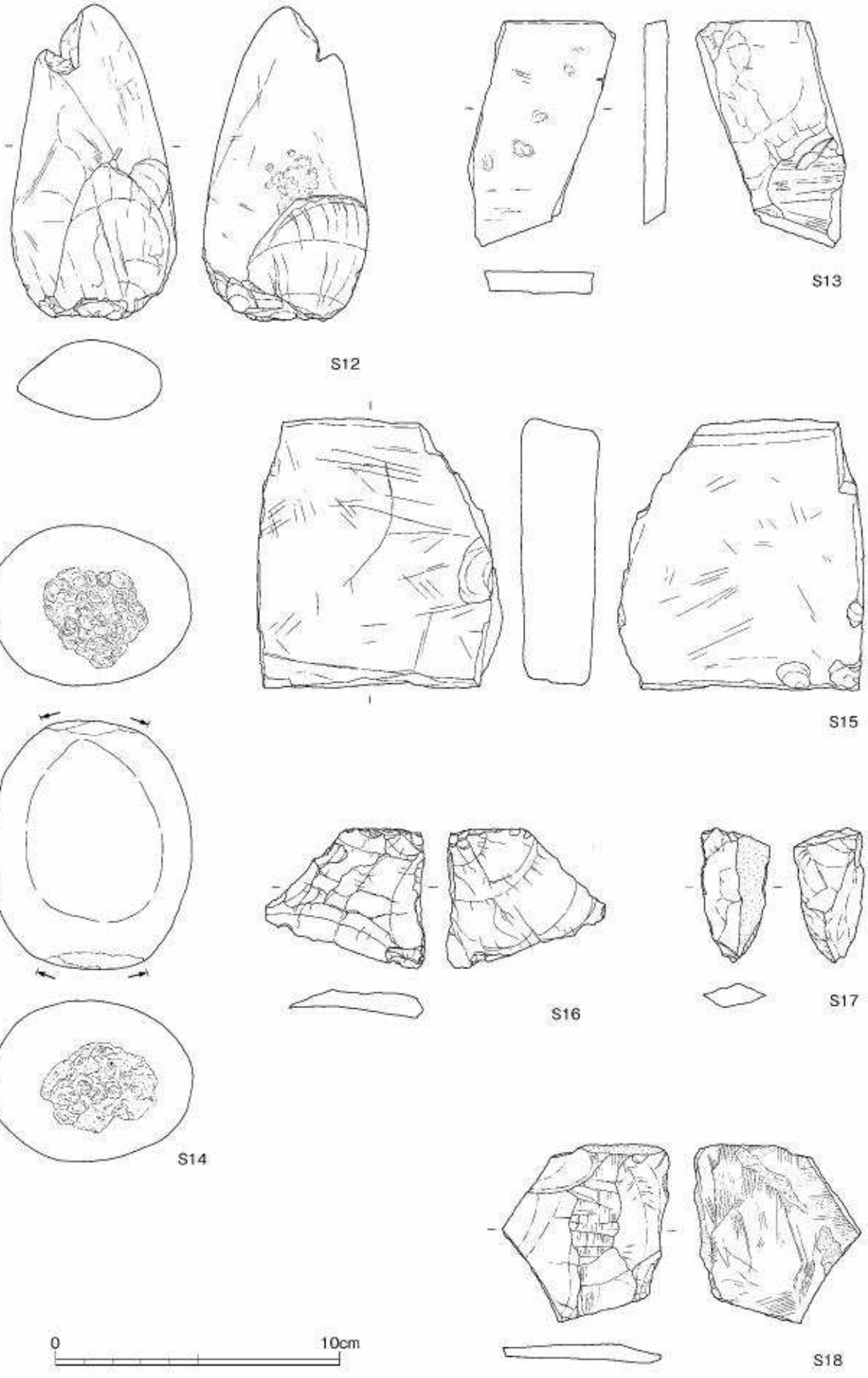


出土金属製品

図版84　横田遺跡出土遺物（39）

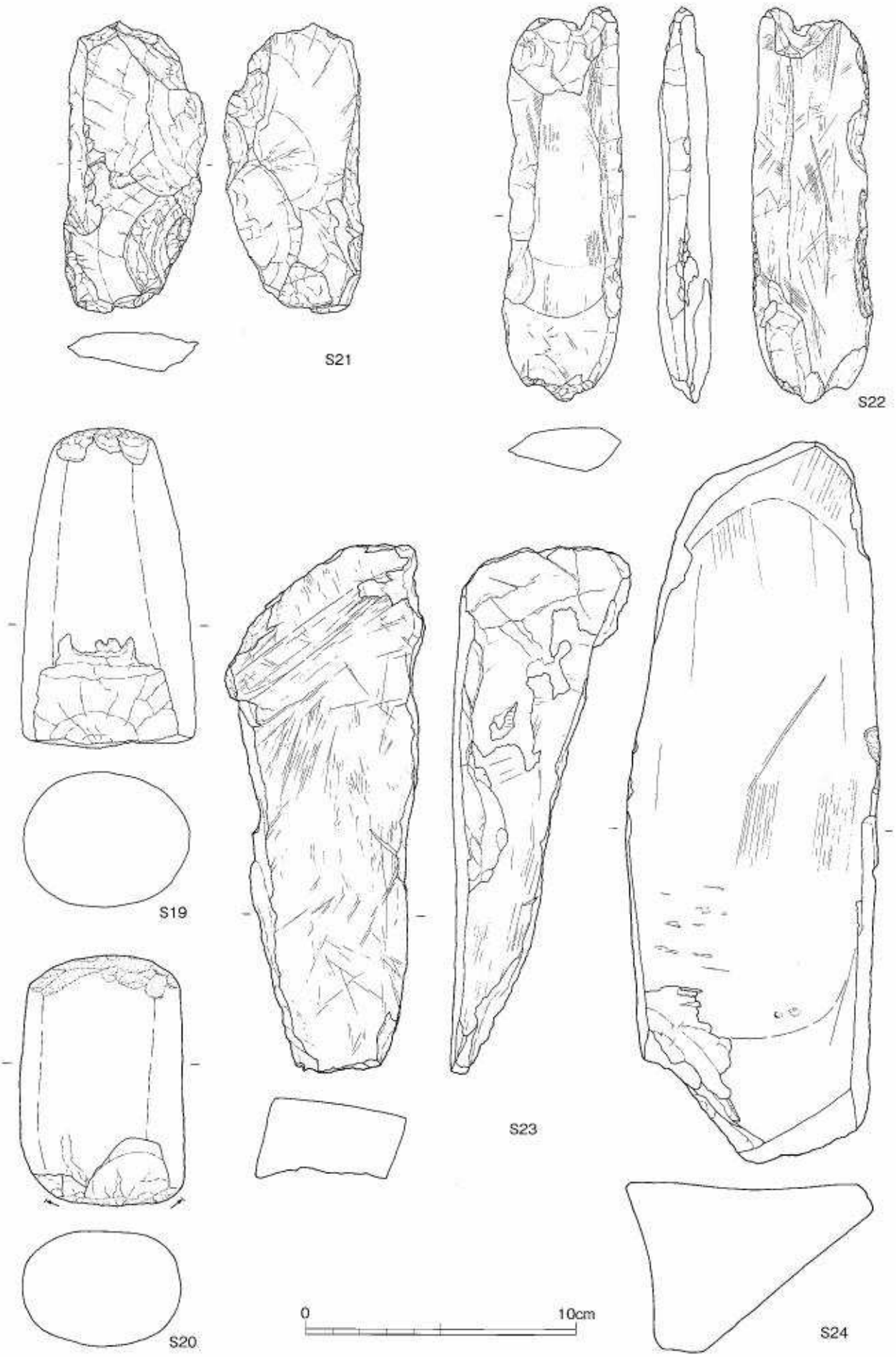


出土石器（1）



出土石器（2）

図版86　横田遺跡出土遺物（41）

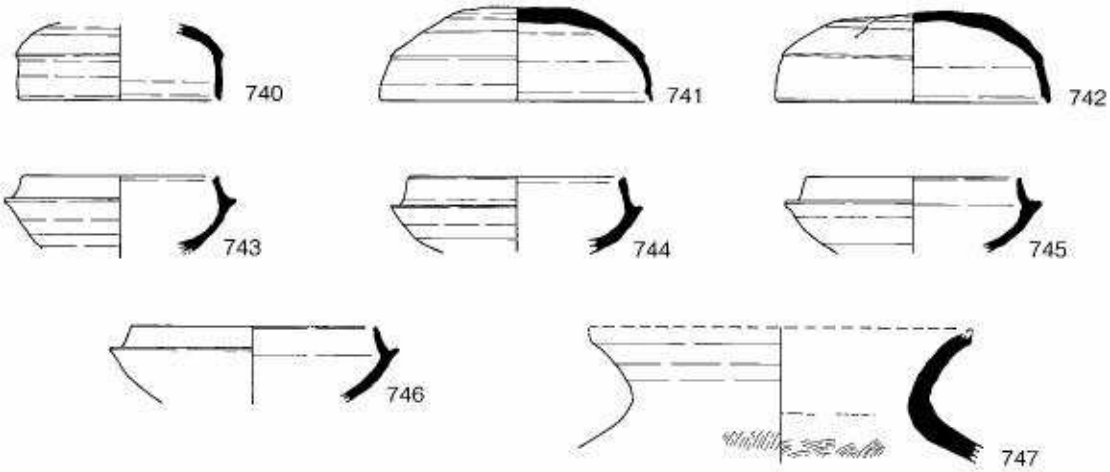


出土石器（3）

1号墳

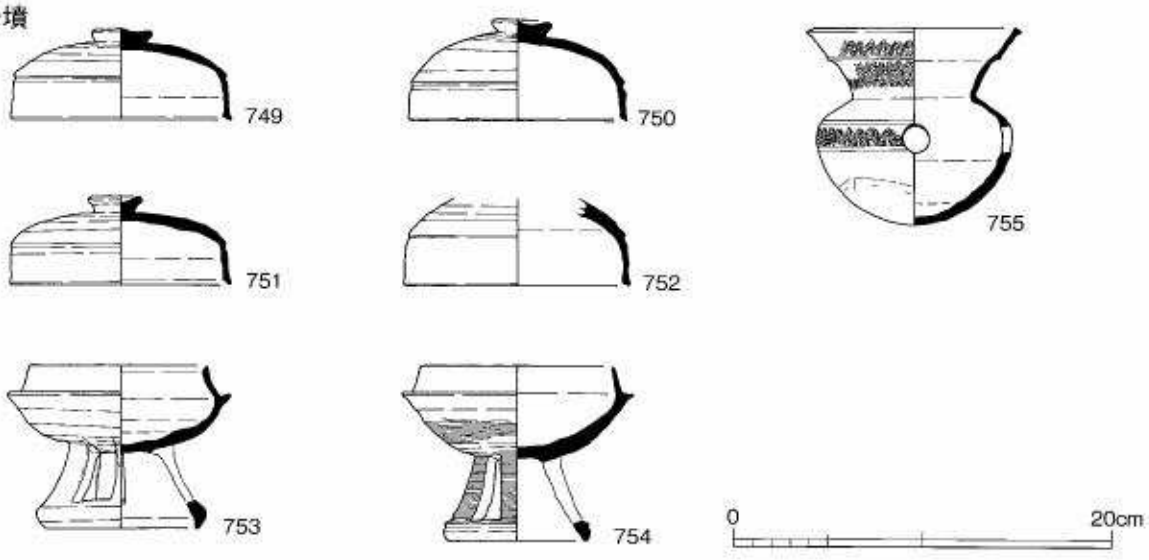
2号墳

3号墳



4号墳

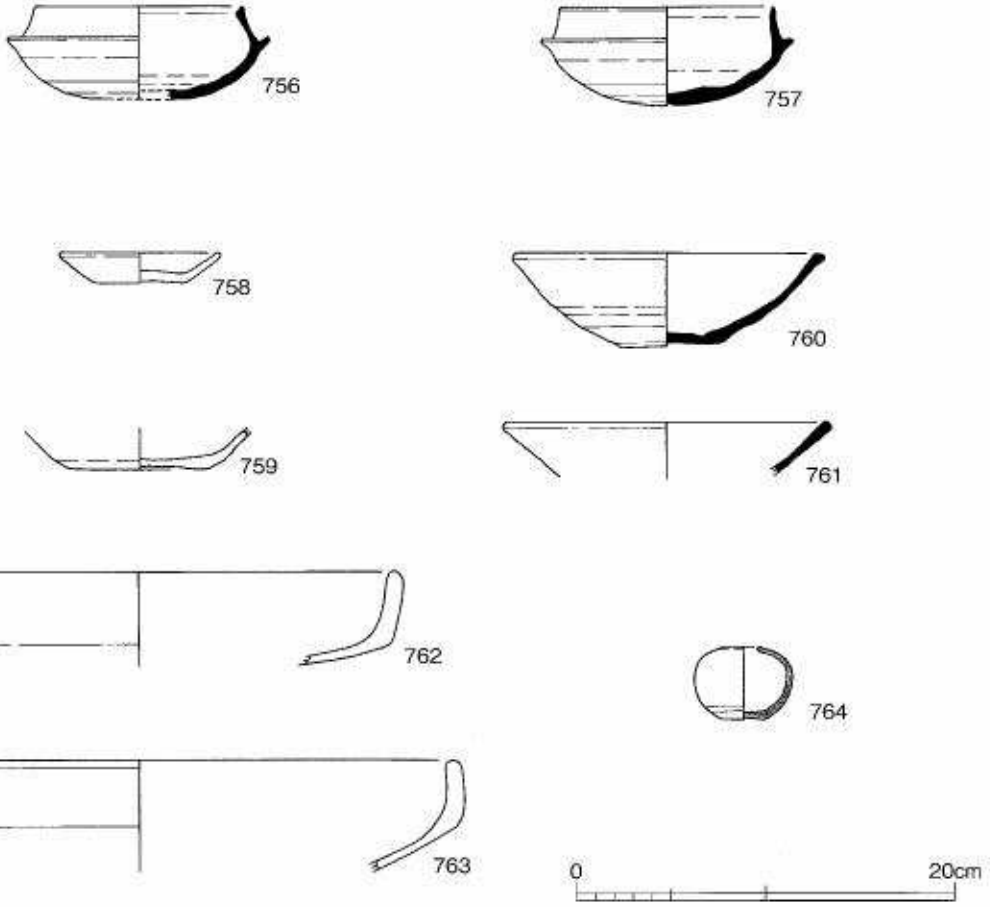
6号墳



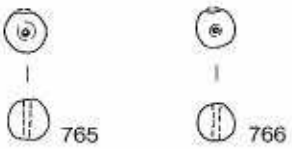
1～6号墳出土土器

図版88　横田北古墳群出土遺物（2）

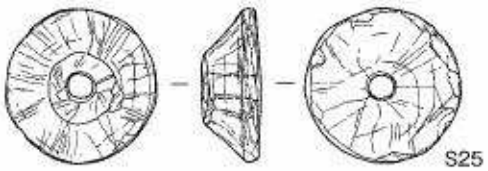
遊離遺物



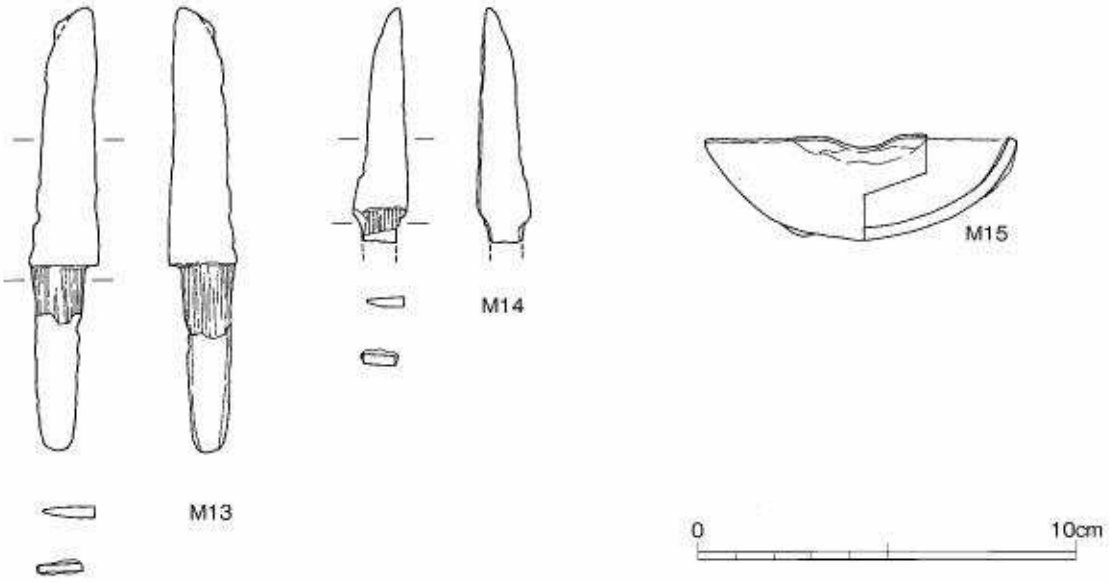
土製品



紡錘車



金属器



遊離遺物・紡錘車・金属器・土製品